

東方一撃男

つじかみーん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンパンマン×東方Projectの小説です。

サイタマが幻想入りして幻想郷でヒーロー活動するというものです。サイタマの順位は原作と同じです。

またオリジナル要素が含まれております。

サイタマ以外のキャラも出すつもりですので宜しく願います。

作者は文章力がないためその部分を理解していただけるとありがたいです。

連載再開しますが気まぐれ投稿になります。

目次

序章

一撃目：ハゲマントという名のヒーロー

二撃目：幻想入り

三撃目：博麗の巫女

四撃目：文々。新聞

五撃目：紅い霧の原因を探りに

紅魔郷編

六撃目：妖精と勝負

七撃目：それぞれの戦い

八撃目：それぞれの決着

九撃目：(見た目が)幼き主

十撃目：悪魔の妹

妖々夢編

十一撃目：終わりのない冬

十二撃目：冥界に行くようです

54

十三撃目：閃光のフラッシュ

十四撃目：幻想郷に来た理由

十五撃目：亡霊

十六撃目：西行妖

十七撃目：桜満開にしますか？しませ

んか？

永夜抄編

32

28

23

14

9

4

1

37

43

49

59

64

69

74

79

十八撃目：孤高のサイボーグ — 84

十九撃目：動き出す者達 — 89

二十撃目：再会果たす師弟 — 93

二十一撃目：ハクタク — 98

二十二撃目：竹林に兎がいるようです — 102

二十三撃目：今宵は兎鍋だ！ — 106

二十四撃目：お二人は月の都出身のよ — 111

うで — 115

二十五撃目：忘れてたこと — 121

花映塚編

二十六撃目：四季折々の花々 — 157

二十七撃目：四季のフラワーマスタ — 152

二十八撃目：師弟はフラワーマスタ — 125

の家に居るようです — 130

二十九撃目：死神と屋台で — 135

三十撃目：閻魔、参る — 139

三十一撃目：割と平和な気もする — 143

143

風神録編

三十二撃目：ヒーローは支持されるも — 148

の？ — 152

三十三撃目：妖怪の山へ — 157

三十四撃目：鬼でも竜でもいける男 — 152

157

三十五撃目：現世の現人神 — 161

三十六撃目：乱入者 — 166

三十七撃目：神様、参る — 171

三十八撃目：気合いがあれば大抵どう

にかなる — 176

三十九撃目：神との決着 — 181

地霊殿編

四十撃目：温泉に浸かろう — 186

四十一撃目：いざ地下の世界へ

192

四十二撃目：山の四天王は旧都にいる

四十三撃目：鬼にとって此処にいるの — 199

は楽しいことです — 204

四十四撃目：山の四天王 vs 最強の男

四十五撃目：鬼との決着 — 209

四十六撃目：地霊殿に行こうか

218

四十七撃目：お憐という名のペット

224

四十八撃目：八咫鳥の力を持つ地獄鴉

230

星蓮船編

四十九撃目：新たな弟子 — 237

五十撃目：天翔る舟 — 243

五十一撃目：役立たずの巫女 | 251

五十二撃目：いざ、魔界へ | 256

五十三撃目：魔界の王 | 263

五十四撃目：魔界の王 vs 最強の男

270

五十五撃目：決着の時 | 276

五十六撃目：命蓮寺という名の妖怪寺

五十七撃目：音速の忍者（笑） | 284

289

五十八撃目：諦めの悪い忍者 | 294

番外編 part 1

五十九撃目：射命丸文の強引すぎる

(?) 取材 | 300

神霊廟編

六十撃目：再び1人に | 306

六十一撃目：墓場にいるもの | 310

六十二撃目：亡霊と豪族 | 317

六十三撃目：決着：？（亡霊と豪族と

の） | 321

六十四撃目：古の聖人 | 325

六十五撃目：妖怪狸の親分 | 332

六十六撃目：しつこすぎる忍者

336

心綺楼編

六十七撃目：幻想郷格闘大会。…で、希

望のお面はどうするの!? | 341

六十八撃目：開幕！幻想格闘大会！

348

六十九撃目：白熱した戦い | 353

七十撃目：盛り上がってきたねえ〜！

：多分 | 358

七十一撃目：特別試合。人間代表の魔

法使い vs 趣味でヒーローをやってる者

| 365

七十二撃目：まさかの展開と2回目の

特別試合 | 370

七十三撃目：幻想格闘大会準決勝 霊

長類を超えた阿闍梨 vs 趣味でヒーロー | 416

をやってる者 | 377

七十四撃目：終幕 | 383

七十五撃目：希望のお面 | 388

輝針城編

七十六撃目：下剋上日和 | 393

七十七撃目：群衆束ねる超能力者

398

七十八撃目：反逆の天邪鬼。いわば R

e s i s t a n c e | 404

七十九撃目：一寸法師の末裔。

409

八十撃目：弾幕(?) アマノジャク！

深秘録編

八十一撃目：片腕有角の仙人 | 422

八十二撃目：オカルトボール | 427

八十三撃目：秘封倶楽部初代会長（自

称） | 432

八十四撃目：拘束された会長 | 438

八十五撃目：フブキ組のアジト

444

八十六撃目：超能力者の姉 | 449

八十七撃目：極度のシスコン。いわゆ

る過保護 | 455

番外編 part 2

八十八撃目：月に行くようです。前編

八十九撃目：月に行くようです。後編

| 466

紺珠伝編

九十撃目：月から来た兎 | 474

九十一撃目：夢の支配者 | 480

九十二撃目：月の賢者 | 486

九十三撃目：地獄の妖精 | 491

九十四撃目：道を聞き出そう | 496

九十五撃目：無名の存在の神霊

501

九十六撃目：地獄の女神 | 507

九十七撃目：異変の解決と迫られる決

断 | 511

幻想郷に一生を決めた者達編

九十八撃目：サイタマ、決断の時

516

九十九撃目：元S級の格闘家 | 521

百撃目：いつもと変わらない（はずの）

日常 | 528

百一撃目：地上最強（？）の男

535

百二撃目：男4人による雑談 | 541

夏日和編

百三撃目：いざ、常夏の島へ | 546

百四撃目：常夏島で満喫 | 552

百五撃目：それぞれの満喫 | 557

百六撃目：サマーアイランドで起きた

殺人事件？ | 563

潜入！謎の骨格塔編

百七撃目：緊急集会 | 570

百八撃目：幻想郷住人と元ヒーローの

進撃① | 576

百九撃目：幻想郷住人と元ヒーローの

進撃② | 581

百十撃目：上級怪人、現る① | 586

百十一撃目：上級怪人、現る②

591

百十二撃目：崩れた骨格塔 | 597

百十三撃目：怪人との決着① | 606

百十四撃目：怪人との決着② | 612

百十五撃目：竜崎との決着 | 619

激震！ヒーロー協会編

百十六撃目：やはりヒーローは支持さ

れる。 | 624

百十七撃目：流れ込むヒーロー達

630

百十八撃目：危うし!? ヒーロー協会

636

百十九撃目：師弟…再び再開果たす

642

百二十撃目：再び、地下の世界へ

647

百二十一撃目：山の四天王 vs S級

ヒーロー | 655

百二十二撃目：再び地霊殿へ | 661

百二十三撃目：しょーもない姉妹喧嘩

| 666

サグメの幻想郷訪問編

百二十四撃目：今日も平和? | 671

百二十五撃目：サグメ散歩① | 675

百二十六撃目：サグメ散歩② | 680

百二十七撃目：叱られサグメ | 685

百二十八撃目：再び月の都に | 690

百二十九撃目：依姫 vs サイタマ

百三十撃目：豊姫と依姫、幻想郷に行く。
701

番外編 part 3

百三十一撃目：歯なしにならない日和

(前編) 708

百三十二撃目：歯なしにならない日和

(中編) 714

百三十三撃目：歯なしにならない日和

(後編) 722

S級ヒーロー、幻想郷に参る!!編

百三十四撃目：竜の血を引く者、再び幻想郷に参る。

729

百三十五撃目：新人のS級 734

百三十六撃目：結局勝負に繋がる(笑)

742

百三十七撃目：色々大変ですがお気に

示さず 748

三月精編

百三十八撃目：光の三妖精 755

百三十九撃目：三妖精の観察日和(?)

761

百四十撃目：妖精日和だね、うん

768

百四十一撃目：リベンジ悲願の⑨妖精

775

百四十二撃目：蛙に喰われた人々

780

百四十三撃目：人質の小人 ——

787

未来編

百四十四撃目：間違えて未来へ

792

百四十五撃目：しばらくいるしかない

798

百四十六撃目：ついに幻想郷へ

803

百四十七撃目：執念深い忍者 ——

808

百四十八撃目：年齢無視服装の演説

814

百四十九撃目：帰ろう、未来日本へ

819

幻想郷に一生を過ごす者とヒーロー再び

編

百五十撃目：漆黒のサイボーグ

824

百五十一撃目：駆動騎士の散歩①

829

百五十二撃目：駆動騎士の散歩②

833

百五十三撃目：駆動騎士の散歩③

838

百五十四撃目：駆動騎士の散歩④（戦闘

あり)

842

社

880

百五十五撃目：駆動騎士の散歩⑤

886

百六十二撃目：鈴奈の修行？

848

百六十三撃目：鈴奈の奮闘と先代の巫

百五十六撃目：駆動騎士の散歩⑥

890

女の思い出話(?)

853

百六十四撃目：初めての妖怪退治

百五十七撃目：駆動騎士のその後

897

百六十五撃目：鈴奈：努力報われた!?

857

番外編 part 4

903

百五十八撃目：寺子屋日和

百六十六撃目：博麗の巫女後継者vs

百五十九撃目：弟子入り経由

908

漆黒の殺戮兵器

百六十撃目：妹紅の変化

書籍の方、登場編

次世代！博麗の巫女編

百六十七撃目：摩訶不思議な骨董品屋

百六十一撃目：朝から騒がしい博麗神

913

店主

百六十八撃目：偉大なる稗田家九代目

連載について

945

当主

百七十四撃目：遅すぎる初詣

951

百六十九撃目：人里の貸本屋の店番少

百七十五撃目：強すぎるが故の孤独

女

960

ヒーローよ、永遠に編

天空璋編

百七十撃目：ヒーロー協会にはもう登

百七十六撃目：一年越しの更新

録しない

927

968

百七十一撃目：さらば…大切な弟子、

百七十七撃目：異常気象

976

ジェノスよ

932

百七十八撃目：真夏の蝶々妖精

百七十二撃目：幻想入りを振り返る

983

940

百七十九撃目：サムライは風と共に

新作来るまでの日和編

990

百七十三撃目：謝罪のお言葉及び再び

百八十撃目：浮世の関を超える山姥 V

神風なる劍豪	996
百八十一撃目+ α :魔法の森のお地蔵様	1003
百八十二撃目:世にも奇妙なバツクダン	1010
百八十三撃目:ヒーローとバツクダン	1017
サーズと新聞記者	

序章

一撃目：ハゲマントという名のヒーロー

この世界では毎日のように怪人が現れる。その度にヒーローが駆けつけて怪人を倒す。ついさつきも怪人が倒された。その時：

「また…ワンパンで終わっちゃった…クソツタレエエエエエ！」

ハゲの男が叫んだ。黄色いスーツに赤い手袋、白いマントにハゲ頭の男、その名はA級39位のヒーロー…ハゲマントことサイタマだった。

「今日の怪人は強いと聞いてたのになあ…」

サイタマはため息をつきながらうなだれる。彼がさつき倒した怪人は災害レベルだった。しかしワンパンチで終わってしまった。あまりに期待外れだったことになだれていたのだ。

「やっぱりなんかギャップを感じるわ…」

サイタマは元々趣味でヒーローをやっていた。しかし残念忍者に自身の知名度の低さを知らされ、サイボーグの弟子とともにヒーロー名簿に登録した。登録時サイタマはC級だったが、功績を上げ今はA級ヒーローである(弟子はS級で登録された)。最初は

インチキと言われてた彼も今はヒーローとして見られるようになり道行く人に声を掛けられることが多くなった。が、本人は不服だった。理由はヒーローネームである。

「どいつもこいつもヒーローネームで呼びやがって…ジエノスみたいにまともなヒーローネームはなかったのかよ…」

サイタマのヒーローネームはハゲマントである。見た目を理由に付けられたのだが本人は気に入っておらずこの名で呼ばれるのを嫌ってる。しけしー度付けられたヒーローネームは変えられることはないため仕方が無く我慢している。（なお弟子であるジエノスのネームは鬼サイボーグ）

「今日は何にしようかな…」

サイタマが今日の晩飯について考えてたその時一本の電話が掛かった。

「もしもしサイタマだ」

「ハゲマント君か？協会本部まで来てくれないか？」

声の主はヒーロー協会の職員だった。サイタマに用があるらしい。

「俺に用でもあるのか？」

「あるから電話したんだ。大至急協会本部まで来てくれ！」

「へいへい…わかったよ」

電話を切りサイタマはヒーロー協会まで行った。

ヒーロー協会本部。

「来てくれたか、ハゲマント君」

「で、俺になんの用なんだ」

「早速だが説明するよ。君に調査してもらいたい所がある」

職員はサイタマに説明した。

「博麗…神社？」

サイタマは聞き返した。

「ああ、そこで不可解なことが起きてるんだ。だから君に調査してほしいんだ」

「そんなもんB級かC級に頼めよ」

「彼処は危険なんだ。だからA級の君に頼んだんだ。それと暇なんだろう？」

「わかった。行けばいいんだろ」

サイタマは席を立ち博麗神社に向かった。

「頼んだぞ…ハゲマント君…」

二撃目：幻想入り

「ここが博麗神社か」

サイタマは博麗神社についた。服装はヒーロー時に活動する服装だった。

「にしてもボロボロだな」

博麗神社は古くからある神社である。噂によると神隠しにあうと言われているがサイタマはその事は信じておらずそのまま調査した。

「異常はなしつと。さて買い物してから帰るか」

サイタマが帰ろうとした時：

「ちよつと待ちなさい」

神社の方から声が聞こえた。サイタマが振り返ると、傘を差し、紫色の(?)服を来た女性がいた。

「あなたがハゲマン、いやサイタマさんね？」

その女は言いかえた。理由はサイタマが怒りを表してからだ。

「確かにそうだが…あんたは？」

「私は八雲紫。この神社の管理者よ」

「そりやどうも。…で、俺に何の用だ」

「あなたを幻想郷に招待しようと思ってるね」

「ゲンソウキョウ？」

「ええ、私は幻想郷も管理してるのよ」

「そうか（なんかめんどうなことになりそうだな…）」

サイタマは興味なさそうに返す。なんか胡散臭いからだ。

「あら？興味ないのかしら？」

「興味がないって言うよりなんか胡散臭いだよ。あんたが言ってることが」

「ならいいわ。でもどのみちあなたは幻想郷に連れていくから」

「勝手に決めつけんなよ俺は帰るからな」

サイタマは帰ろうとする。すると足元が不思議な浮遊感に襲われた。

「ちよつと待て！俺は行く気はな…」

サイタマはそのまま紫が出したスキマに吸い込まれてしまった。

「あなたの實力なら異変を解決できるよね？サイタマさん」

「……（こ）は何処だ？」

サイタマは辺りを見回す。草木が生い茂っており、風が気持ちいい。俺は紫とか言う女に無理矢理幻想郷とかいう地に連れてこられたようだ。…深く考えても仕方がない。

ちよつと行つてみるか。

サイタマはそのまま進んだ。森を抜けると人里に出た。

「ここには人がいっぱいいるな。町みたいなところか？てかなんで和服を着てるのだろうか。」

確かにこの人里には和服を着ている者が多かつた。ヒーロースーツを着ていたサイタマにとつては非常に珍しかつた。

「そーいや昼飯食べてなかつたな…あの店で済ますか。」

サイタマは目に付いた蕎麦屋で食事を済ませた。すると外から大きな音がした。

「なんだ？」

外に出てみると瓦礫の山があつた。運良くサイタマのいた蕎麦屋には被害が及ばなかつた。すると奥から声が上がつた。サイタマはそつちに向かつた。

「うわー！」

「せ、先生ー！」

突き飛ばされた帽子らしき物を被り青い服装をした女性に数人の子供が集まつた。そして前には鬼のような怪物がいた。

「お前達は早く逃げろー早くー！」

女はそう言うとき子供たちは逃げていった。しかしその時怪物が手を伸ばし女を掴み

かかろうとした。

「ここが私の運命か……！」

と次の瞬間、謎の浮遊感に襲われた。地面に着くとそこには禿げた男が立っていた。「自分の命までを犠牲にして子供を逃がすとはいいい先生だな」

と言われた。私は少し照れた。

その時怪物が低い声で禿げた男に言った。

「なんだ貴様は……？」

その男はこう答えた。

「俺は趣味でヒーローをやってるものだ」

私と怪物は唾然した。

「しゅ……趣味で？」

「うん」

男は速攻答える。すると

「貴様あ！ふざけるなあ！私と勝負する気があるのか!? 私は人間に恨みを持ち生まれた者だ！今此処で人間を滅ぼす！なのになんだそれは!? 趣味でヒーローだと!? ふざけるのも大概にしろ！貴様も人間なんだろ!? 人間は滅ぼすべきだあ……!?!」

男は怪物に向かって拳を繰り出した。その怪物は体に穴が空き、ポロポロになった。

私は声が出なかった。そして男は

「またワンパンで終わってしまった…」

と去ろうとした時…

「待ってくれ！」

「ん？」

「私は寺子屋で教師をしている上白沢慧音という者だ！

ぜひ君の名前を聞かせてほしい！」

「サイタマだけど」

「サイタマ君！私の家まで来てくれ！お礼がしたい！」

「えー…わかった」

この時サイタマは思った。なんかめんどくさそうになりそうだな…と

三撃目：博麗の巫女

「君は外の世界から来たのか!？」

「うん」

慧音は驚いた。サイタマは外の世界の者だということに。

「それで何故此処に来たんだ？」

「紫とかいう奴に無理矢理連れてこられた。それだけ」

「あーあのスキマ妖怪か…」

「ん？知ってんのか？」

「ああ、アイツは結構気まぐれだからな…遊びで外の世界の者を連れてきてる噂もある」

「なんだよそれ…」

サイタマは呆れた。しかしもしかしたら自分も遊びで連れてこられたこともありえると思った。

「しかしあの怪物を一撃で倒すとは…そこまで強くなるまでなにかやったのか？」

「ああ、やったよ。聞きたいか？」

私は頷いた。サイタマ君の強さの秘訣を聞けると

「あれは3年前のことだった…俺は就職活動で行き詰まったがある出来事でヒーローになろうという夢を思い出し強くなるために就職活動を辞めてトレーニングをした…その内容こそが俺を強くした秘訣だ！」

私は期待した。何故か心臓が止まらない。

「腕立て伏せ100回上体起こし100回スクワット100回そしてランニング10kmこれを毎日やる!!もちろん一日三食キッチンと食べる!朝はバナナだけでもいい!極めつけは精神を鍛えるために夏も冬もエアコンを使わないこと!それだけだ!これが俺を強くした秘訣の内容だ！」

「…は？」

私は唾然した。内容があまりにも普通だったことに

「サイタマ君…本気で言ってるのか？」

「うん。本気だけど？」

「どうもふざけてるとしか思えないのだが…」

「それ弟子からも言われた」

「…わかった。もういい…それより博麗の巫女のところに挨拶に行ったのか？」

「博麗の巫女?誰だソイツ」

「博麗霊夢。博麗神社の巫女だ」

「あーあの神社か。んじや挨拶しに行くわ」

「わかった。あ、あとこれ地図な」

サイタマは慧音から地図を貰い博麗神社まで向かった。

く博麗神社く

「此処が博麗神社か」

サイタマは博麗神社に着いた。外の世界にあつたのよりも若干綺麗だった。

「おーい霊夢！居るのかー？」

戸を叩く。すると大きなリボンをつけた巫女が現れた。

「うるさいわねえ…昼寝の邪魔しないでくれ…ってアンタ人里に現れた怪物を倒した外

来人でしょ」

「俺のこと知ってんのか」

「当たり前よ。逆に知らないほうが可笑しいわよ」

「そうか」

サイタマは思った。もう俺のこと知れ渡っているのかと

「んで、私に何の用？」

「慧音が挨拶してこいつて言うから来た。それだけ」

「あらそう、とりあえず上がりなさい」

「おう」

サイタマは霊夢に言われるがままに神社の中に入っていった。
「で何故ここに来たのよ」

サイタマは霊夢から出されたお茶を飲みながら答えた

「紫とかいうスキマ妖怪に無理矢理連れてこられた」

「あー紫からねえ…てかアンタ名前は？」

話変わるの早すぎだろ。とサイタマは思った。そして自己紹介(?)をした

「俺は趣味でヒーローをやってるサイタマだ」

「趣味でヒーロー…？結構変わってるね。アンタ」

「そうか？」

「趣味でやる時点で変わってるわよ」

「ふーん」

俺はやる気の無さそうに返した。すると霊夢が

「面白いや紫がアンタに家を作るってあげるとか言ってたわよ」

「え？マジで？ありがてえわ！」

「それを言うなら紫に言いなさいよ」

「それもそうだな」

「とりあえず家が出来るまで此処の神社に住んでもいいわよ」

「おう、サンキュー」

「その代わり食事とかはアンタがやってよね」

「わかった。弟子が来る前は1人で暮らしてたから慣れてる」

「なら話が早いわ。宜しく頼むわね」

「おう」

こうしてサイタマは家が出来るまで霊夢の神社で住むことになった。

四撃目：文々。新聞

幻想郷に来て数日がたった。博麗神社に一通の手紙が来た。

「サイタマ起きなさい。アンタ宛に手紙が来てるわよ」

「え？！俺宛に？！」

霊夢に言われて起きたサイタマ。現在彼は博麗神社に住み込んでいた。家が完成するまで。

「えーと何何…？」

サイタマは手紙の内容を読み始めた。霊夢も後ろから覗く。

「サイタマさんへ あなたの家が完成したから写真の場所まで来てね P. S. 永遠の

17歳☆八雲ゆかりん☆」

ふざけてんのか。とサイタマと霊夢は思った。

「ま、けど家完成したって言うし、今まで世話になったわ」

「5日しかいなかっただけだね」

そう言っつてサイタマは霊夢に別れを告げて博麗神社を出た。

（とある森の中）

サイタマは写真を頼りに自分の家を探していた。

「ここら辺のはずだが…まさかあれか？」

見た先には真つ白で真四角の建物があった。しかし少しでっばてる部分があった。

「ここが俺の家か」

サイタマは中に入った。すると…

「えっ？」

俺は驚いた。家の中がかつて自分が住んでいたZ市の廃工場の管理室を改装して暮らしていた部屋と全くそっくりだったからだ。サイタマが若かった頃住んでいたアパートから追い出されて行きつけの呉服屋の主人から紹介されて住んでいた場所だ。しかし怪人協会の事件の件で壊されてしまい、今は友人の紹介でヒーローズマンションに住んでいた。あまりの懐かしさにサイタマは床に寝転がって

懐かしいなあ…と心から思った。次の瞬間…天井に大きな音が起きた。

「な…なんだ!？」

俺はすぐさまに天井を見た。穴が空いていた。そして瓦礫をどかしてみると女がいた。たが少し違った。耳が尖っており羽が生えていた。

「あややや…あつ！私は清く正しき…つえ？」

バコッ!!

「天井弁償しろ」

自己紹介してきた女の顔に衝撃が走った。理由はサイタマが怒りの拳を放ったからだ。

「いついきなり殴ることないじゃないですか!」

「うるせえ!!いきなり天井壊してきたお前の方がどうかしてるわ!!」

「そ、それはスピードが抑えられなくて…アハハ…ハ…」

「笑いごとじゃねえよ…今すぐ天井を直せ」

「い…今すぐは無理ですよ!あつ!知り合いの妖怪がいるのでその方に頼んで直してもらいますからねっ?ねっ?」

「わかった。…で、アンタ誰?」

開き直るの早っ!と私は思った。

「私は清く正しき射命丸文と申します。鴉天狗の妖怪であり新聞記者をやっております」

「新聞記者?妖怪が?」

「はい!天狗達はネタを探しに飛び回り新聞を配布しているんです。あつ!あとこれ私が配布してる新聞です!」

俺は文という奴から新聞を受け取った。

「文々。新聞…?」

「はい！私の配る新聞は大スクープネタ満載です！あとこれはあなたのことが書かれた記事です！」

俺はその記事を見た。内容は…

『謎の男、人里で暴れてた怪物を一撃で撃破！一体彼は何者なのか!?そして博麗霊夢との関係は…!?!』

と書かれていた。

「本当に俺のことが書かれていたんだな」

「はい！あと霊夢さんとの関係は…「俺は単に家が出来るまで霊夢のところに住み込んでただけだ。怪しい関係は持ってない」で！ですけど

何か関係があるので…ごめんなさい…」

文は話を途中で辞めた。理由はまたサイタマの拳を喰らう可能性があるからだ

「そーいやまだ教えてなかったわ。俺はサイタマだ。宜しく」

「サイタマさん！私と契約してこの文文。新聞を受け取ってくださいますか？あ、天井のことは弁償しますのー！」

「それなら受け取ってやってもいいぜ。その代わりこの天井を3日以内に直せ。もし直さなかったらこの契約破棄するからな！」

「わ、わかりました！それでは！」
文はそう言つて飛んでいつてた。そしてサイタマは思った。
今日は鶏鍋にするか。と

紅魔郷編

五撃目：紅い霧の原因を探りに

幻想郷に来て更に月日が経った。サイタマはベランダでサボテンに水やりをしていた。天井に閑しては射命丸文が知り合いの妖怪に頼んで本当に3日以内に直った。

「本当に3日以内に直すとはなあ…余程契約を破棄されなくなかったんだな」

サイタマは文が配布する文文。新聞を貰うという契約をしていた。天井に3日以内に直さなかつたら契約を破棄すると言ったがそれは取り消しとなった。しかしサイタマは水やりをしながら思っていた。

「此処に来てもあんまり変わらない気がするなあ…」

確かにそうだ。サイタマは散歩がてらに怪物等と遭遇することが多かった。しかし全てワンパンチで終わつてたためつまらなかつた。強い怪物と戦って苦戦の故に勝つたがそれは夢であり、実際は弱かつた（サイタマレベルで）。それに関してもそうだった。

「そーいや人里で買い物してたら紅い霧がなんとか…って話してた奴がいたけど何なんだろうな」

数日前サイタマは人里で買い物をしていた。服に関しては壊滅的な私服だった（その時は毛という字が大量にプリントされたシャツと短パン）その途中で紅い霧の話が耳にはいった。

「これが霊夢が言つてた異変つていうやつかな。確かめてみるか」

サイタマは水やりをやめてヒーロースーツに着替えて外に出た。しかしある事に気づいた。

「とは言つても…どうすればいいのか…」

手掛かりが一つもないのだ。サイタマが元の世界にいた頃はニユースや弟子のジェノスからの情報で怪人を倒しに行つてた。しかしそれがないたため何処を調べればいいのかわからないのだ。しかしある事に気づいた。

「そーいやあの鴉天狗の新聞を見ればわかるな」

サイタマは今日配られた文々。新聞を思い出しそのに何かしら情報があるのでないかと思ひ家に帰ろうとした時

「待てーそこのハゲ頭！」

何処からもなく声があった。サイタマを声の主の方に顔を向けると其処には水色の髪と薄緑色の髪をした少女2人がいた。普通の少女ではなく羽があり飛んでいた（水色の方は氷の羽で薄緑色の方は透けた羽）

「人を頭で呼ぶんじゃねえよ。てか誰だ」

「あたいはチルノ！最強の妖精だ！」

「チ：チルノちゃん：辞めた方がいいと思うけど…」

「大ちゃんは黙ってて！あたいがあのハゲを倒すんだから！だから勝負だ！」

「いきなりだなおい…」

この時俺は呆れてた。チルノとかいう妖精に勝手に勝負を挑まれて大ちゃんとかいう妖精が止めにかかっている。けど止めれる気はなさそうだしちよっと相手してやるか

「いいぜ相手にしてやっても」

「よし！最強のあたいにひれ伏すがいい！」

「勝負する前に1つ聞きたいことがある」

「なんだ？」

「大ちゃんって誰だ」

すると薄緑色の髪の少女が

「私のことです。大妖精と言います…宜しくお願いします。」

「おう。宜しく。俺はサイタマだ」

「サイタマ！早速あたいと勝負しろ！」

「その代わり手加減すんなよ」

サイタマはチルノと勝負することになった。大妖精は心配そうに見守る。しかしこの時サイタマはある事を思い出した。

「（そーういや家の鍵閉めたっけ……？）」と

六撃目：妖精と勝負

「んで、何で勝負すんだ？」

サイタマはチルノに尋ねる。大妖精は依然と見守ってる。

「それは…競争だ！」

「…は？」

サイタマと大妖精は呆れる。

「ルールは彼処に見える紅い家の横を通って向こう岸まで早く着いた方が勝ちだ！」

「わかった」

サイタマは納得する。しかし大妖精は…

「サイタマさん…本当にいいんですか？チルノちゃんはずごく負けず嫌いですけど…」

「大丈夫大丈夫。」

しかし不安である。

「それじゃあ…よーい…ドン！」

チルノとサイタマは同時にスタートした。気がつくとチルノが勝ってるように見える。

「なんだ！大したことないじゃん！やっぱり最強のあたには勝てないのよ！これで私のか「おせーよ」えっ!？」

チルノは愕然した。何故ならゴールと決めた向こう岸にサイタマがいたからだ。サイタマは寝そべっており欠伸をしていた。しかも鼻をほじりながら。

「お前の実力はそれだけか？」

その一言がチルノの怒りに触れた

「ならば弾幕で勝負だ！」

「だ…弾幕？」

サイタマは弾幕のことを全く知らなかった。というより霊夢から弾幕のことを話されてたが全く聞いてなかったからである

「いくぞ！アイシクルフォー！」

無数の氷の弾幕がサイタマを襲う

「なんか涼しい…」

相変わらず呑気だった。距離が近くなったと同時に

「連続・普通のパンチ」

サイタマが放った連続パンチで弾幕を全て落とした。

「これで終わりでもいいか？」

しかしチルノは

「まだだ！」

チルノは諦めずにまた弾幕を放つ。前発全てサイタマに命中した。

「今度こそあたいの勝ちだ！」

と思っていた。しかし其処にサイタマはいなかった。すると大妖精が

「チルノちゃん！後ろ！」

「え？」

チルノは後ろを振り向く。そこにはサイタマがいた

「お前いつの間に!？」

「これで終わりにするからな」

サイタマはチルノの頭にチョップした。チルノは垂直に落下し地面にめり込んでし

まった。

「最強っていうのは口だけだったか」

サイタマはがっかりする。その同時に

「あーヤベエー！紅い霧の原因探るの忘れてた。…さつき競争した時に通った紅い家が怪しいな。行ってみるか」

サイタマは紅い家まで走って向かった。とその同時に

「チルノちゃ〜ん…大丈夫…?」

大妖精が地面にめり込んだチルノを剥がそうとしていた。

く紅魔館く

紅い家のこと紅魔館の前では既に誰かがいた

「ここが異変の原因らしいからな…けど霊夢のやつ紅い霧が出てから行くって…その前に私が解決してやるぜ!」

自信満々に言っていたのはほうきに股がり魔女の格好をしていた女だった。霧雨魔理沙だ。

「ここには門番がいるって聞いたがあれだな。ってか寝てるし…」

紅魔館の門の前にいたのは中国衣装をした門番紅美鈴がいた。しかし彼女は居眠りしていた。

「これなら潜入するチャンスだか…窓から行こう」

そういつて魔理沙は窓から潜入した

「なんだあれ?」

サイタマはその様子を見ていた。普通の人間なら見えないのだがサイタマは視力が異常にいい為見えた。

「先客か?俺も急がねえとな」

サイタマは急いで紅魔館に向かった

七撃目：それぞれの戦い

（魔理沙 side）

魔理沙は紅魔館の窓から潜入し、本が多くある部屋に着いた。

「すげー数の本だな……ここからなら私が興味ありそうなのが見つかりそうだな」

と、関心していると

「誰よ」

魔理沙は声が出した方に向けた。其処には紫と白のパジャマみたいな服を着た女と悪魔らしき少女がいた

「パチュリー様の大図書館に無断で侵入した不届き者め！私が成敗してk」「小悪魔、黙りなさい。」……はい」

小悪魔が魔理沙に向かって宣戦布告らしきものをしたがパチュリーに止められた。

「あなた人間のようね。名前は？」

「私は霧雨魔理沙！普通の魔法使いだ！」

「魔法使いね……差というものを教えてあげるわね」

と言うと魔理沙に向かって属性魔法を放った。

「んな?」

魔理沙は咄嗟に動いたが反応が遅れたため避けきれずに当たってしまった。

「私は生まれながらの魔法使いなのよ。貴女とは違うのよ、魔理沙」

「流石パチュリー様の魔法!痺れま「だから貴女は黙ってなさい小悪魔」すみません…」
小悪魔の賞賛はまたしても止められた。と同時に魔理沙が本の山から出てきてマスタースパーク放つ。

「人間だからといって油断すると怪我するぜ!」

「あらそう…私も舐められたものね」

そう言つて2人は本気を出した

くサイタマ side く

サイタマはやつと門までついた

「結構遠かったな…けど本当に空が紅くなつてるとはな」

走っている時には気づかなかつたが空が紅くなつていた。

「やつぱりここだったのか」

サイタマは門を開けようとするが手を止めた。理由は門番の紅美鈴に気づいたからだ。しかし彼女は未だに寝てた。

「まさか寝てるとはな…本当に門番なのか?」

サイタマは美鈴を起こさないように門から入らずレンガの壁から入った。そして扉を開ける

「おーい！誰か居ないのかー？」

サイタマは誰か居ないか尋ねる。すると

「ようこそ、紅魔館へ」

階段から声が出たためそっちに向けた。其処にはメイドがいた。

「私は十六夜咲夜。此処紅魔館のメイド長を務めております。貴方は？」

「俺は趣味でヒーローをやってるサイタマだ。」

「趣味で？珍しいわね」

「そうか？…あ、そういや最近空が紅い霧に包まれる噂聞いたがお前らがやってんのか？」

「それは…私に勝てたら教えてあげるわ」

咲夜はそういうとサイタマに向かってナイフを投げた。しかしサイタマは動かなかった。時間が止まってたからだ

「私は時間を操れるの。貴方は何も出来ないまま死ぬのよ。解除」

時間が再び動いた。と同時に無数のナイフがサイタマに襲う。

「まさかこの紅魔館に来るのは無謀にも程が「超能力とは違うんだな」…!？」

咲夜が振り向いた。其処にはサイタマがいた。

時が動いた同時に動けるとでも言うの!?

咲夜は動揺した。しかしサイタマは

「(これって超能力と同じなのか?けどフブキとタツマキはこれ出来なかつたよな)」
すると

「くっ!」

咲夜は再び時を止める。がサイタマは居なくなっていた。

一体何処に!?

「普通のパンチ」

後ろに回り込んでたサイタマが咲夜に普通のパンチを放つ。その衝撃で咲夜は吹っ飛び壁に当たる

「大したことないな」

すると崩れた壁から出来た瓦礫から咲夜が出てきた。無傷、ではなく頭から血が流れていた。彼女は目つきが鋭くなっていた。

「此処からは本気で行かせてもらおうわよ」

「がっかりさせんじゃねえぞ(コイツ頑丈だな。ちょっと期待してもいいかも)」

サイタマは咲夜と激突した。

八撃目：それぞれの決着

「貴方をナメていたわ」

「そうか」

咲夜は本気になっており、スピードが一段と上がっていた。サイタマは相変わらず緊張感がなかった。

「この男より速く動かなければまた追いつかれる……」

咲夜はサイタマに向かい無数のナイフを投げた。時間が止まっているためサイタマの目の前で止まる。

「（またこれか、コイツこれ使わないと勝てないのか？）」

サイタマは心の中でそう思っていた。しかし動けない。動けるのは咲夜だけである

「この能力は人間に恐れられ忌み嫌われた。貴方などに私のことがわかるはずがない。私を理解してくれるのは……お嬢様だけ！ 解除！」

時間が動き無数のナイフがサイタマを襲う。それと同時に砂埃が起きた。何故か。

「これで終わりのようね」

とつかの間ナイフが咲夜に向かって来た。

「なっ!?!」

咲夜はすぐさまに時間を止めて避けた。しかし驚くべき光景だった。

「何故こんなにもナイフが!?!サイタマに向けて投げたはず……!」

それは投げたはずの無数のナイフが彼女の方に向いてたからだ。時間が動き出しナイフが動き咲夜を襲う。彼女自身には当たらなかったものの身動きがとれなくなっていた。そこに

「随分と面白れえ能力を持つてんじゃねえか、だがこの幻想郷にはお前の能力を遥かに越す者がいるらしいぜ?」

サイタマが現れた。しかもほぼ無傷で

「貴方は串刺しになつたはず!なのにな何故!?!」

「ああ、あれか」

サイタマは咲夜に説明した。サイタマは時間が動いたと同時に自分も動いた。ある程度なら避けられたが数本は腕などを当たった。その後彼は床に刺さったナイフを咲夜に向けて投げた。ありえない速さで。その結果がこれだった。

「貴様……!」

咲夜は殺意を放つ。しかしにサイタマには効果が薄かった。そこで彼は咲夜に大し思いがけないことを言った。

「お前この時間操る能力使わないと勝てないんだろ」

凶星だった。咲夜は動揺してしまった。しかし直ぐに立て直し

「そんな訳ないわよ！貴方ごときならこの能力使わなくても勝てるわよ！」

「じゃあなんでそれ使ったんだ？」

「またもや凶星。咲夜は言い返すことが出来なかった。」

「お前はその能力を使わないと俺には勝てない。しかし使っても勝てなかった。つまり俺には絶対勝てないことだ。」

咲夜は黙り続けたままだった。

「じゃ、俺の勝ちでいいな」

彼女はこくりと頷く。

「勝つたら教えてくるれるんだろ？この異変のことを」

「その前に貴方に聞きたいことがある」

「なんだ」

「何故とどめをささない…貴方はヒーローなんでしょ？」

咲夜は問いたです。するとサイタマは

「お前人間なんだろ？人間は殺さねえよ」

「フツ…ヒーロー失格に近いわね」

「別に何でも言えよ。俺にとってヒーローは本気の趣味だからな」

「やっぱり貴方は変わってるわね…それと真実を知りたいのならばお嬢様の所に行きな
きゃ」

「お嬢様？誰のことだ？」

「レミリア・スカーレット。この紅魔館の主よ」

「そうかありがと「待ちなさい！」…えっ？」

突然声がしたためサイタマと咲夜は向けた。其処には紅美鈴がいた。

「紅魔館に勝手に入った不届き者！私が成敗してくれ「時間がねえんだ。後からにして
くれ」ぐへえ！」

サイタマは美鈴を殴り気絶させた。

「んじや俺行くわ」

「ええ、気をつけなさい。お嬢様は一筋縄ではいかないわよ」

「寧ろありがてえわ」

サイタマはレミリアのいる所まで走っていった。

〈大図書館〉

「はあ…はあ…やっぱり生まれながらの魔法使いとは比べものにはならねえ…が勝てた
ぜー！」

魔理沙はガッツポーズをした。前にはパチュリーが気を失って倒れていた。しかも本に埋もれて。苦戦はしたもののなんとか勝てた。

「さて、この異変の元凶を探さないとな。」

「魔理沙は大図書館から出て元凶となるものを探しに行った。魔理沙が出たのと同時に

「パチュリー様ア…しつかりして下さいさ…い…」

小悪魔がパチュリーに声をかけていた。

その頃…霊夢はというと

「さて…行こうかしらね」

今更ながらも出発した。紅魔館に向けて

九撃目：（見た目が）幼き主

「咲夜とパチエがやられた？なんの冗談よ」

吸血鬼の少女が報告に来たメイドに尋ねる。

「はい、パチュリー様も咲夜さんも酷い重症のことで。しかし命に別状はないみたいで
す」

「うむ…しかしあの2人を倒すつてことは只者じゃないつてことね。…で、侵入者の特
徴は？」

「1人は魔法使いの格好をしており、もう1人はヒーローと名乗るハゲの男です」

「ヒーロー？何よそれ」

彼女はヒーローのことを知らなかった。

「はい、ヒーローは外の世界でいう正義の味方のことで悪事を働く者を懲らしめる者の
ことです。その男は外来人かと思われます」

「成程…その2人は私がいる場所まで目指してることね」

「おそらく」

「わかったわ、後は私がなんとかしておくわ」

「わかりました。では、お気をつけて」

メイドは去る。すると彼女は不気味な笑みで

「ヒーローと名乗る者…期待してもいいかもね」

咲夜を倒した程の強さだから退屈しのぎにはなると思った。彼女こそがこの紅魔館の主であり、異変の元凶であるレミリア・スカーレットだった。

く 魔理沙 side

「えっ…と…何処にいるんだ？」

魔理沙は異変の元凶となるレミリアを探していた。

「そこら辺にいたメイドからの話だとレミリアがやったって言ってたな。…ん？誰だアイツ？」

魔理沙が目にしたのはハゲた男、サイタマだった。しかも何かを持つてる。

「アイツって…霊夢が言ってた外来人か？」

魔理沙も一応サイタマのことを知っていた。しかし名前は知らない。

「まさかアイツも異変を解決しに来たのか？なら急がないとな」

魔理沙は不思議に思いながらもサイタマの後を着いていった。

く サイタマ side

「この道であってんのか？」

「はい…けど苦しいです…」

「あつ、悪い、緩めるわ」

サイタマはそこから辺にいたメイドを捕まえてレミリアのいる場所を聞き出した。しかしそのメイドは首を締められていた。そして…

「此処か」

「はい、もういいですか？」

「いいぞ。ありがとな」

メイドはスタコラサツサと逃げてった。

「さて、入るか…」

サイタマはドアノブを握り開けた。しかしその時力加減を間違えてしまいドアごと外れてしまった。

「あ…ヤベエ…」

サイタマは心の底から（すまん…）と謝った。その様子を魔理沙が見ていた。

「アイツどんだけ力があるんだよ…」

魔理沙は驚きを隠せなかった。だが直ぐに冷静になり後を追う。

「随分と手荒い入り方ね（本当にこの男が咲夜を倒したのか？見た目弱そうなんだが…）」

レミリアは呆れる。そして心の中ではサイタマに対して疑問を抱いていた。

「悪い…力加減間違えて…な」

サイタマは冷や汗をかきながら苦笑いで言った。

「まあいいわ。後で使いの者に直しておくから。…それで貴方がヒーローをやってる外人ね」

「ああ、そうだ。けど名前言っておくわ。俺はサイタマだ。お前が紅い霧を発生させたのか？」

「サイタマね…いかにも私がやったのよ」

「やっぱりそうか…」

サイタマは納得した。

「で、なんでこんなことしたんだ？」

「私たち吸血鬼は太陽の光に弱くてね。遮断するためによ。まあ…貴方には関係のない大あたりだ気になってしようがないんだよ」…!？」

レミリアは愕然した。何故ならサイタマが目の前に現れたからだ。そして普通のパンチを繰り出す。レミリアは吹き飛ばされ壁に激突する。

「自分の好都合で起こすんじゃないやねえよ。霊夢なら怒るぞこれ」

サイタマは何故か霊夢を例えて言った。そこに

「アンタすげえな！どんだけ強いんだ？」

魔理沙が駆けつけた。

「誰？」

「私は霧雨魔理沙だ！普通の魔法使いだ！」

「俺はサイタマ。趣味でヒーローをやってる者だ」

「趣味で!?なんでそんなに強いんだよ!？」

「ああ、それはな「ちよつと待ちなさあああい!」ん?」

サイタマと魔理沙はレミアアの方に向く。多少傷ついてるがまだまだ動けるようだ。

「サイタマ！貴方吸血鬼を馬鹿にしてるでしょ！」

「いやしてねえけど」

「いきなり殴れば馬鹿にしてるのと同じだと思うが」

魔理沙は呆れながら言う。

「私は500年生きる吸血鬼なのよ！貴方みたいな人間と違うの!」

「そうか」

サイタマは興味なさそうに答える。それを見ていた魔理沙は

「(コイツやる気あるのか…?)」

サイタマに対して疑問を抱いた。

「もういいわ！私を力を見せてあげるわ！」

「わかった」

サイタマはゆるーく構えた。魔理沙も戦闘態勢になった。しかしこの時サイタマはこう思ってた

「(なんかタツマキっぽいな…子供みたいなこと口煩いのが)」

そして横から魔理沙が小さい声で

「ボソツ サイタマ、お前本気で挑むのか？」

「ボソツ アイツの実力を見てからだ。」

「なにボソボソと話してるのよ。さっさと始めるわよ！」

「おう、じゃあ…やろうか!!」

サイタマと魔理沙は知らぬ間に協力してレミアに挑もうとした。

その頃霊夢は…

「ここが異変の元凶ね。魔理沙とサイタマはもういるのかしら？」

霊夢は紅魔館に入った

十撃目：悪魔の妹

「私を怒らせたことを…後悔するのね！」

レミリアはそう言い弾幕を放つ。魔理沙も弾幕を放つが避けられる。しかしサイタマはというと…

「サイタマ！アンタスペルカード使えないのか!？」

「俺はずっと打撃だけだ。あとスペルカードってなんだ」

「それ自体知らねえのかよ！」

魔理沙は唾然する。サイタマ自身も霊夢からスペルカードのことを教えられてたが興味のないことには物覚えが悪いためハッキリと覚えてなかった…いや単に聞いてなかっただけか

「と…とりあえずなんかしてくれよ！」

「わかった」

サイタマはそう言うのとレミリアが放った弾幕を

「連続・普通のパンチ」

で全て跳ね返した。

「はあ!？」

魔理沙とレミリアは愕然した。がレミリアは直ぐに冷静さを取り戻しサイタマが返した弾幕を避けた。しかし全て避けられる訳でなく数発当たった。これが更に怒りに触れてしまった。

「この私を馬鹿にしやがって! あんたら絶対許さない!」

もはや子供に近かった(というより子供か)

「あれくらいで怒るのかよ…カルシウム足りねえな」

サイタマは呆れる。すると後ろから声がした。

「ねえ…だれ? フランのねるじかんをうばわないで…?」

そこには子供がいた。ただの子供じゃない、背中にカラフルな羽があった。

「あら、フラン起きたのね」

「フラン?」

レミリアは起きてきた子供に対して言う。魔理沙とサイタマは首を傾げる。今さっき起きてきた子供はレミリアの妹であり、悪魔の妹と呼ばれるフランドール・スカーレットだった。

「おねえさま…なんのさわぎ?」

「いいとこに来たはフラン。あの2人が遊んでくれるそうよ」

「えっ！ほんとに!？」

「ええ、本当よ」

「やったー！おねえさまといっしょにやればいいの？」

「当たり前よ。だって貴方は私の大切な妹なのだから」

「うん！じゃあいくよー！」

フランは楽しそうに弾幕を放つ。魔理沙は弾幕で対抗し、サイタマは連続・普通のパ
ンチで跳ね返す。これを見たフランは

「ふたりともすごい！おねえさまありがとう！」

「お礼はむしろあの2人に言うべきよ」

姉妹2人は楽しそうに会話をしていた（？）しかしレミリアは心の中では密かに思っ
ていた。

「(サイタマ…予想以上の強さね。人間とは思えない…早く決着をつけないと)」

レミリアはフランに対して

「フラン、あれをやるわよ」

「あれってなに〜?…あ!あれのこと?」

「ええ…行くわよ!

「うん！」

レミリアとフランは頷くと槍らしき物を出した

「神槍スピア・ザ・グングニル！」

「禁忌レーザーアテイン！」

2人は無数の弾幕を放つ。するとそれが何故か融合しレーザーみたいなものになった。

「「!?!」」

魔理沙とサイタマ、更には放った本人達も驚いた。

「ヤベエ…私のじゃ止められそうになぜ。」

「じゃあ俺が止めてやるよ」

「サイタマ!?!」

サイタマはそう言うと言った。そこにはレミリアとフランが放った弾幕が合わさってできたレーザーが迫っていた。

レミリアから見れば死ににいつてるとしか見えなかった。(フランはというと首を傾げてた。)

「これがお前らの切り札か。ならばこっちも切り札を使わせてもらうぜ」

彼はそう言うと言った。いつも以上に

「無駄よ！貴方がどんなに強くてもフランと融合した弾幕を止められるはずがないわ！」

レミリアは言う。しかしサイタマは聞いてなかった。

「必殺マジシリーズ……マジ殴り!!」

サイタマはマジのパンチを繰り出した。その衝撃で融合されたレーザーを跳ね返した。跳ね返された方向はレミリアとフランのいる場所だった。

「「あばぶ!!」」

魔理沙、レミリア、フランは驚きを隠せなかった。レミリアとフランは避けようとするが避けきれず当たってしまった。

「うわああああ!!」

悲痛な叫びをあげる。と、その衝撃で紅魔館が崩壊した。それと同時に紅い霧が消えて朝日が昇った。

「まさか終わってたとはねえ……」

今更来た霊夢が言う。

「なんだ、今来たのか。霊夢。」

「霊夢遅えよ!何やってたんだよ」

「ごめんなさいね。魔理沙、…それとサイタマ、アンタ無茶過ぎない?」

「そうか?」

「当たり前よ、レミリアとその妹の弾幕をパンチで跳ね返すなんて」

「けどそれはすごかったぜ！」

霊夢は呆れ、魔理沙は興奮してた。

「あれ？あの2人は？」

魔理沙は言った。そういうえばレミリアとフランの姿が見当たらない。が、直ぐに見つかった。2人は偶然出来た壁に寄れかかって眠っていた。壁が日光を遮断していたため2人は無事だ。

「まつ、とりあえず異変解決だな」

「ええ、そうね」

「けど霊夢、次は遅れるなよ？」

「わかってるわよ」

3人は話し合ってる。それを遠くから

「今回の特ダネはこれですね！」

写真を取りその様子を見ていたのは射命丸文だった。が、3人は気づいてなかった。こうして紅魔の紅い霧の異変は幕を閉じた。

妖々夢編

十一撃目：終わりのない冬

暦は5月。この季節は春なのだが幻想郷に春はなかった。何故ならまだ雪が積もっているからである。サイタマは幻想郷に来て数ヶ月が経っていた。常識が通用しない世界ではあるが次第に慣れていった。

「この前のこと大きく書かれているな」

サイタマは文文。新聞を見る。大きく書かれていたのは紅魔の紅い霧についてだった。

『ヒーローと名乗る者、異変を解決!』

と書かれていた。が写真を見ると何故か魔理沙の方が目立っている。異変の解決後、紅魔館だけでなく近くの名所等に被害があったらしく復興の手伝いをされていた。その後博麗神社で宴会があったがレミリアとフランのことを考えて夜に行った。フランはあの戦い（遊び）でサイタマのことを気に入り、宴会の途中でありながらもサイタマと遊んだ。

「てか、寒っ!」

あまりに寒いのかサイタマは電気ストーブを出す。幻想郷は明治に近い場所である。そのため近代的な暮らしをしているのはサイタマだけである。

「てか5月なのになんで雪積もってんだ？」

奇跡的なことにサイタマがいた世界と幻想郷は時間の進む速さが同じで幻想郷が5月であれば元の世界も5月だ。しかし幻想郷ではまだ雪が積もっている。

「ひよつとして異変なのか？調べてみるか」

サイタマはジャージ姿からヒーロースーツに着替え外に出たがやはり手掛かりがなかった。

「さて…どうするか」

その時

「サイタマ！」

「サイタマさくらん！」

俺に対して声がしたので見てみたらチルノと大妖精だった。

「お前らか、何の用だ？」

「フフフ…聞いて驚くなよ？その異変の原因がわかったのだ！」

「マジで？」

サイタマはチルノの話に興味を持つ。しかし大妖精は心配そうに見る。

「この異変の原因は…レテイだ！」

「レ…レテイ…？」

サイタマは誰だと思った。レテイとはレテイ・ホワイトロックのことであり冬に現れる妖怪である。

「チルノちゃん…レテイさんは別に関係ないと思うけど…」

「大ちゃん！騙されたら駄目だよ！異変を起こす奴は許さないからね！」

「そのレテイって奴はあれか？」

「…えっ？」

チルノと大妖精はサイタマの指さす方を見る。そこにはレテイがいた。

「ほんとだ！あたい行ってくる！」

「ちよつとチルノちゃん!？」

チルノはレテイに向かって飛んでいった。大妖精は頭を抱えておりサイタマは呆れていた。

「おいレテイ！」

「あらチルノちゃんじゃない。どうしたの？」

レテイは優しく話す。チルノにとっては母親的な存在である。種族違うのに。

「レテイ！お前がこの異変の原因か？」

「え？」

チルノはストレートに聞いた。それを見ていたサイタマと大妖精は呆れてた

「チルノ：「チルノちゃん：」」

戸惑うレテイ。

「えつと：…何のことかなあ：？私そのこと知らないよ？」

「嘘つくな！そんなこと出来るのはレテイだけだ！」

「だからね、チルノちゃん？私は単に冬がいつもより長かったから出てきただけで私は関係ないのよ？」

「え？…そうなの？」

チルノは納得した。バカなのに理解力があつた。チルノに納得したのかレテイは帰っていった。

「レテイじゃなかったら：…誰がやったんだろ：…」

チルノ、大妖精、サイタマは悩む。

く博麗神社く

「霊夢！これ絶対異変だぞ！」

「寒いからヤダ。気が向いたら行く」

「わかつた、絶対に遅れるなよ！」

「はいはいわかったからさっさと行ってなさい」

魔理沙は異変を原因を探りにほうきに跨り飛んでいった。霊夢はというと

「寒い…」

コタツから出る気がなかった。

十二撃目：冥界に行くようです

「ん？なんだあれ」

サイタマは何かに気付いた。チルノと大妖精は依然と考えてる。上空に怪しげな渦があつたのだ。

「よし、行ってみるか」

サイタマは助走を付けてジャンプし、怪しげな渦に向かって飛んでいった。それに気付いたのかチルノは

「待てー！あたかも付いて行く！」

「あつ、待つてよ！チルノちゃん！」

チルノの後を大妖精が急いで付いて行く。その様子を遠くから魔理沙が双眼鏡で見ている。

「あれ、絶対にサイタマだな。あとは…チルノとチルノといつも一緒にいる妖精か。私も急がないとな」

魔理沙はサイタマたちの後を付いて行く。しかしこの時魔理沙は思った。

「(サイタマって本当に人間なのか?)」

サイタマの身体能力は人間を遥かに超えている。またしてもレミリアとフランが放った融合弾幕をパンチではね返したのを見ていたため疑ってしまうのも仕方が無い。今はその事を気にして居る場合じゃないと思つた魔理沙は急いで後を追つた。

「冥界」

「着いたか？」

「着いたみたいだな」

「あの～その前に頭を抜いて下さい…」

大妖精に言われるとサイタマとチルノは頭を抜いた。(サイタマは自力で抜けたがチルノは大妖精に引つ張つてもらつた)

辺りを見回すと薄暗く、夜桜らしき景色が写つた。

「やつぱりここが異変の原因だつたんだな。行くか」

サイタマは階段を昇つた。それにチルノと大妖精は付いて行く。が

「サイタマ！もつとゆつくり走れ！」

「サイタマさん早すぎます！」

しかしサイタマは

「お前らが遅いだけだろ。あとなんで付いてきた。」

それにチルノと大妖精は

「あたかも異変を解決したいからだ！」

「私はチルノちゃんが心配だったからです」

「そうか」

サイタマは納得した。その時

「なんですか貴方は」

階段の手前から声がしたので見た。其処には緑の服を着て白色の髪で黒いリボンをつけており、腰には剣を付けた女がいた。

「誰だ」

サイタマとチルノは尋ねる。

「私は魂魄妖夢と言います。貴方は」

「あたいはチルノ！最k「いや貴女じゃないです」え!？」

チルノは自己紹介しようとしたが妖夢に止められてしまった。

「じゃあ、俺のことか。サイタマだ、趣味でヒーローをやってる者だ」

サイタマは自己紹介をする。すると妖夢は

「やはりそうでした…か！」

妖夢はいきなり剣をとりサイタマに向かって切りつけた。しかし普通に避けられた。

「おいおいいきなり切りつけるとか無礼だろ！」

「そうだそうだ！」

「いやチルノちゃん狙われてないから…」

反発したチルノに大妖精がツツコム。

「私はサイタマさんの噂を聞いてますので試しただけです。だから…貴様に勝つ！」
妖夢は口調が変わりサイタマを斬撃を浴びせる。しかしサイタマは避け続ける。

「おい、やめろよ！」

「はああああああ！」

しかし妖夢は聞く耳を持たない。

「だからやめろって言ってるんだろ」

サイタマは隙を見て妖夢の肩を叩く。妖夢はバランスを崩して転んでしまった。

「どうだ！参ったか！」

「チルノちゃん何もしてないでしょ…」

大妖精はまたチルノにツツコム。その時、

「貴様あ！もう許さんぞ！」

妖夢はブチ切れた。サイタマの攻撃で怒りに触れてしまったらしい。更に斬撃をサイタマに浴びさせる。とその時、

ガキン！

妖夢の剣がはね返った。

「誰だ！」

妖夢は尋ねる。其処には髪が長く白いマントらしきものと黒い服を着ており、剣を
持っている男がいた。

「同じ剣使いとして俺が勝負に受けて立つ！」

「ほう…望むところだ」

妖夢はあつさりを受け入れた。と、サイタマが男に対し、

「お前ってまさか…」

「怪人協会以降だな、サイタマ」

男はサイタマの名を知っていた。サイタマ自身もその男のことを一応知っていた。

十三撃目：閃光のフラッシュ

「お前は…確か…前髪ジャーマだっけ？」

「閃光のフラッシュユだ！いい加減名前を覚えろ…！」

「そうだった、悪いな。フラッシュユ。」

サイタマは笑いながら謝る。

閃光のフラッシュユ…サイタマの弟子であるジェノスと同じS級ヒーローである。高速のヒーローと呼ばれており、純粋な戦闘の場においてはS級の中でも一級品である。

「まさかお前がここにいるとはな。なんでだ？」

サイタマは尋ねる。それに対してフラッシュユは

「理由はあとだ。今はあの剣士と一戦してからだ」

フラッシュユは愛刀の瞬殺丸を妖夢に向ける。

「よほど剣技に自身があるようだな…だが私に勝てぬ！」

妖夢はそう言い、フラッシュユに切りかかる。しかし、

「甘い」

フラッシュユは妖夢の後ろに回り込んでいた。

「なっ!？」

流石に動揺してしまう。しかし妖夢はフラッシュの斬撃をはね返す。それを見ていたサイタマとチルノは

「アイツ結構速いな、ソニックと同レベルか？」

「いくら速くてもあたいには勝てないな！」

「チルノちゃん、殺されるよ？」

大妖精はチルノに対して毒舌で言った。

「大ちゃんひどい……」

流石のチルノも傷ついた。その頃フラッシュと妖夢は

「（このフラッシュという者……本当に人間なのか？速度が尋常じゃない……このままだと負けてしまう……!）」

「（妖夢という者……なかなかの才能だ。まさか俺のスピードについてこれるとは……しかし斬撃が無茶苦茶な気もするが……気のせいなのか?）」

その時、フラッシュの瞬殺丸が飛ばされて地面に刺さってしまった。

「しまった!」

フラッシュは瞬殺丸を取りに行こうとする。

「隙あり!」

妖夢は追い討ちをかけるように切りかかる。が、

「閃光拳」

顔に衝撃が走った。妖夢は地面を擦りながら飛ばされてしまった。

「貴様…何を！」

「俺が剣術だけ使えると思っていたのか？」

フラツシユは隙を見て瞬殺丸を取りに行った。そこにサイタマが

「フラツシユ！お前体術できるのか!？」

「一応な」

彼は笑いながらサイタマに言った。すると

「貴様…！」

妖夢が立ち上がって向かってきた。傷だらけで血が出ておりボロボロだった。しかしまだ動ける。

「私を怒らせたようだな…今の攻撃で」

「そうか」

フラツシユは言い返す。

「貴様には私の恐ろしさを教える必要があるようだな」

そう言うのと妖夢は剣を振った。すると弾幕が現れてフラツシユに向かって撃った。

「なに!？」

動揺してしまっただが全て弾き返す。しかし妖夢は

「まだまだ!」

更に弾幕を放つ。しかしこれも弾き返された。ついに妖夢は限界が来たのか

「貴様あ……余程私を怒らせたいうようだな……」

この時サイタマは思った

「(既に怒ってんじゃねえか)」と

妖夢はすかさずフラッシュに斬撃を与える。しかし一向に当たらない。

「(何故だ! 何故当たらない! 私は的確に当ててるはず! なのに何故!)」

妖夢は怒りで吾を忘れてしまい斬撃がおかしくなっていた。そこへ

「これで終わりだ、閃光斬!」

フラッシュが得意の閃光斬で妖夢の剣を叩き割る。妖夢はふらついてしまった。剣を折られたシヨックなのだろうか。

「どうした? まだやるのか?」

しかし妖夢は倒れてしまった。おそらくサイタマとフラッシュでの戦闘が蓄積された疲労で倒れたのであろう

「この勝負、フラッシュの勝ちだな」

サイタマは珍しく拍手しながら言った。

十四撃目：幻想郷に来た理由

「まだだ…まだ終わってない…!」

「ん?」

サイタマと閃光のフラッシュは振り返る。其処には妖夢がいた。右手には剣が持っていた。

「成程…二刀流か」

フラッシュは再び瞬殺丸を向ける。なお、妖夢は二刀流である。が、先程の戦いで一本は折れてしまっているため一刀流である。

「私は人間と幽霊のハーフだ…貴様ら人間とは違う…」

「そうか…しかしその状態で戦うつもりか?」

フラッシュは尋ねる。現地点で妖夢の状態は全身傷だらけで多量出血しておりまさに生きてるのがわからない状態だった。

「嫌い…しん「めんどくさいから寝てる」…!?!」

突然サイタマが乱入し、普通のパンチを放つ。その衝撃で妖夢は飛ばされ後ろにあった岩にめり込んでしまった。

「サイタマ…邪魔をするな」

「悪い…しつこかったもんで」

サイタマは苦笑いしながら謝った。

「で、どうやってここに来たんだ？」

サイタマは尋ねる。

「ああその事か」

フラツシユは幻想入りした理由を答えた。

「閃光のフラツシユが幻想入りする数日前」

「サイタマ！俺だ！居ないのか？」

フラツシユはドアを叩く。しかしサイタマは出てこない。彼は今ヒーローズマンシヨンにいた。サイタマが此処に引越したと聞いたからだ。サイタマは元々乙市の廃工場の管理室を改装して住んでいた。しかし怪人協会の事件で壊れてしまい、フラツシユと同じS級でありサイタマの友人であるキングの紹介で最近引越して来たのとである。

「やはり居ないのか？」

しかし考えても時間が過ぎるばかり。

「仕方が無い。協会の奴に聞いてみるか」

フラッシュは協会本部まで行った。数分後…

「博麗神社か…聞いたことのない場所だな」

彼は博麗神社の前にいた。協会の職員からの話によると「ハゲマントは博麗神社に調査しに行った。」と聞かれたからだ。一瞬ハゲマントは誰だ？と思つたが直ぐにサイタマのヒーローネームだと気づいた。

「しかしサイタマの姿がない…」

「サイタマさんなら幻想郷に居るわよ」

フラッシュは後ろから女性の声が聞こえたので振り向いた。其処には八雲紫がいた。

「貴様、今の話は本当か？」

「ええ、本当よ。私が連れていったもの」

紫は答える（しかしサイタマ自身は無理矢理連れてこられと言つてたが）

「それと…貴方は閃光のフラッシュさんね」

「俺のことを知ってるのか。貴様の名前は？」

「私は八雲紫。幻想郷とここの神社の管理人よ。興味があるなら幻想郷に連れて連れてってあげるけどどう？」

「俺はサイタマに用がある。其処に連れてってくれ」

「わかつたわ」

するとフラッシュの足元にスキマが現れた。

「!?」

「ごめんなさいね、これが唯一の手段だから」

フラッシュは動揺してしまった。そして吸い込まれてしまった。

「S級ヒーローの実力、見せてもらおうわね」

紫は不気味な顔で笑った。

「成程、わかった」

「サイタマ…隣にいる奴は誰だ…?」

「コイツは魔理沙…って魔理沙!?!」

「やっど追いついたぜ、サイタマ」

サイタマの隣にいつの間にか霧雨魔理沙がいた。

「お前いついたんだ!?!」

「ついさつき来たばかりだ。けど妖夢の姿が凄い無残だったが何かしたのか?」

その質問に答えたのはフラッシュだった。

「俺と勝負してああなったのだ。トドメをさしたのはサイタマだな」

「ああ、そういうことか」

魔理沙は納得する。そこで私はあることに気づいた。

「そういやチルノといつも一緒にいる妖精は何処にいるんだ？」

「え？チルノと大妖精なら…あれ何処いった？」

サイタマは辺りを見回す。しかし見あらたない。

「けどま、いいか。じゃ急ごうぜ」

「ああ、そうだな」

サイタマとフラッシュは先に進む。この時魔理沙は

「本当にそれでいいのかよ…」

と呆れていた。しかしサイタマたちについていく。

十五撃目：亡霊

「フラツシユ、今回の異変で何か知ってることない？」

サイタマは尋ねる。それに対してフラツシユは

「わからないな。だが一つ気になることがある」

「なんだ？」

「実はだな……ここ冥界で桜の花びらが何処かに吸い込まれているように見えることが何回かあった。」

「そうか……え？」

サイタマは疑問に思った。自分は幻想入りした時は知らない森の中にいた。フラツシユも自分と同じ場所にいたと思っていたからだ。そこに魔理沙が

「ちよつと待て、アンタもサイタマと同じ外来人だろ？何でそんな事を……」

「俺は冥界で目が覚めたからだ」

「はあ!？」

サイタマと魔理沙は驚く。何故ならフラツシユが幻想入りして目覚めた場所冥界だと聞いたからだ。

「いや嘘だろ!？」

「本当のことだ。俺は八雲紫に幻想郷に連れてこられた。そして目覚めた所がここ冥界だった。そこで俺は幽霊たちに斬撃を浴びせていた。その途中に桜の花びらが何かに吸い込まれてくように見えた。俺はそれを探るためにあとついていったら…サイタマ、お前を見つけたわけだ」

「成程な。…ん?」

サイタマは何かに気づいた。

「どうした?」

フラツシユと魔理沙が聞く。

「お前が言ったのってあれか?」

サイタマは指を指す。其処には大木に桜の花びらが吸い込まれていた。

「間違いない、あれだ…!」

フラツシユはあの幻象がわかった。すぐさまに其処に向かっていった。サイタマと魔理沙も後を追う。

その大木に1人の女性がいた。今回の異変の元凶である西行寺幽々子だ。人間ではなく亡霊である。

「この西行妖…満開になった姿を見てみたいわ♪」

幽々子は後ろにある大木、西行妖を見た。そこに

「お前が異変の元凶か？後貴様名前は？」

「私は西行寺幽々子。確かにそうだけど…貴方は？」

幽々子はあつさり認めた。

「俺は閃光のフラッシュ。高速のヒーローだ。」

「ヒーロー？貴方外の世界の人？」

「その通りだ。何故この事をするか言え。」

「ふふふ…私に勝てたらの話ね♪」

「成程な…いざ！尋常に勝負」

フラッシュは愛刀の瞬殺丸を抜き、幽々子に向かつて

「閃光斬！その首討ち取ったり！」

しかし、幽々子にそれは通じず飛ばされてしまった。

「俺の閃光斬が効かないだと…!?!」

フラッシュは動揺してしまった。これまでに閃光斬が通用しなかったのはサイタマだけである。しかし幽々子で2人目になった。

「貴方のスピード…高速のヒーローに相應しい速さね。だけど私には見えるの。それと剣術の腕前も妖夢より凄いのは認めるわ。だけど折れてしまつては何も出来ないで

「しよ?。」

フラツシユは瞬殺丸を見る。

「!？」

目を疑った。それは折れていたからである。

「瞬殺丸が……」

フラツシユは項垂れてしまった。大切にしてきた愛刀が折れたからである。しかし直ぐに立ち直り、

「西行寺幽々子…俺が剣術しか使えないと思つたら大間違いだ」

「？」

幽々子は首を傾げる。他になにかあるの?と疑問に思つたからだ。

「(深呼吸をして) 閃光拳!」

フラツシユは幽々子に向かって閃光拳を放った。しかしこれも

「言つたでしょ? 貴方の姿は見えてるって」

またしても跳ね返された。しかし

「これならどうだ! 流影脚!」

フラツシユは脚技を繰り出した。

「あら? さつきのよりも速く動けるの?」

幽々子は期待した。しかし

「ふーん…まるで蛇みたいね。だけど私には見えるわ！」

これも通じなかった。

「くっつ！俺の速さを通じぬだと…!?だがまだこれがある！…風刃脚！」

フラッシュは風の刃を放った。しかし全て避けられてしまった。

「これで終わりよー！」

幽々子は無数の弾幕を放つ。

「なに!？」

フラッシュはすぐさまに動いた。しかし反応に遅れたため避けきれず全発当たってしまった。

「…!？」

フラッシュはその場で倒れてしまった。

「期待してたけど…結構期待ハズレね…まあいいわ、少しは楽しめたしね♪…だけど…この前に新聞に載ってたサイタマのことが気になるわね」

幽々子はサイタマに興味を持った。フラッシュ以上に楽しませてくれると思って。

十六撃目：西行妖

「サイタマ…一つ聞きたいことがある」

「なんだ？」

「フラツシユって奴…本当に人間なのか？速さが人間とは思えないのだが…」

「そうか？気にすんなよ」

「いや、気にするわ」

サイタマと魔理沙は会話を弾みながら西行妖まで目指していた。そして

「よし、着いた！ってフラツシユ!？」

サイタマは驚いた。それは閃光のフラツシユが倒れていたからである。

「サ…サイタマ…気をつける…奴は…強い」

「てか、お前S級なんだろ!?!勝てなかつたのか!？」

「ああ…A級のお前に頼るのもあれだが…西行寺幽々子を倒して…くれ」

フラツシユは喋るので精一杯だった。それにサイタマは

「わかった」

承諾した。しかしこの会話を聞いてた魔理沙は

「さつきからS級やA級ってなんだ？」

何故かこの事に疑問をもっていた。

「貴方がサイタマね？」

幽々子が尋ねた。

「ああ、俺がサイタマだ。お前がこの異変の元凶か？」

「ええ、そうよ。勝てたら教えて真相をあげるわ」

「わかった。手加減なしで行くぞ」

サイタマは構えた。とその時

「マスタースパーク!!!」

魔理沙が突然マスタースパークを放った。

「へっ！弾幕はパワーだけ！…あ、サイタマのこと忘れてた…」

しかし

「魔理沙！いきなり放つなよ！服が燃えるところじゃねえか！」

サイタマは当たる寸前に避けていた。

「わ…悪い。けどあれで幽々子を倒せたと思うぜ」

魔理沙は申し訳なきように謝る。しかしこれで幽々子を倒せた。…と思っていた。

が

「勝手に勝負に勝った気になるのは困るわよ？」

其処には幽々子がいた。しかも無傷で

「何い!？」

魔理沙は動揺してしまう。

「じゃ、次は俺だな」

サイタマはそう言うと幽々子に向かって飛んだ

「普通のパンチ」

「それで私を倒せると思って…る!？」

幽々子は愕然した。サイタマのパンチが思った以上に強かったからである。そして

飛ばされて西行妖にぶつかった。

「中々の威力ね…貴方をなめてたわ…」

「結構丈夫だな。まだいけるだろ？」

「ええ、勿論。」

サイタマと幽々子の一騎打ちらしき空気になった。其処へ

「やっつと、追いついた…」

「「霊…霊夢!？」」

「あら、やっつと来たのね。博麗の巫女」

「だ…誰だ？」

サイタマと魔理沙は驚き、幽々子はようやく来たかの顔で言い、フラッシュは誰なのか知らなかった。

「やつと来たか。霊夢。少しはダメージ与えておいたぞ」

「ありがと。けど少しっていうレベルじゃないけど…」

幽々子は限りになく瀕死状態だった。亡霊なのに。しかしサイタマから見れば少し程度のレベルだった

「まあ、いいわ。これで楽にはなったし」

霊夢は構える。しかしそこに

「待て！一つ聞きたいことがある」

其処にはフラッシュがいた。動かない体をなんとか動かして近づいてきた。

「桜の木には死体が埋まっているのは本当なのか？」

フラッシュは尋ねる。と、幽々子が

「ええ、本当よ。けどこの西行妖だけだけどね」

幽々子は答える。それにフラッシュは

「そうか。…サイタマ、ちよつといいか？」

フラッシュはサイタマの耳元で

「あの木を掘ってみたいと思わないか？」

十七撃目：桜満開にしますか？しませんか？

「え？」

サイタマは驚いた。何故ならフラッシュユが自分に対して何かを誘うように行ってきたからである。そして…

「……………へへへ…じゃあ掘りに行くか！」

サイタマは西行妖まで走っていった。しかし不気味な笑みを浮かべて。ダークマター編でゲリユガンシユプが教えた出口の方向と逆の方向に進もうとした時と同じ顔だった。

「サイタマ!?!」

流石に霊夢、魔理沙、驚いた。しかし一番驚いたのは幽々子だった。

「ちよつと何してるの!?!やめなさい!」

幽々子はサイタマに向かって弾幕を放つ。しかし

「連続・普通のパンチ」

全て叩き落とされてしまった。そして

「……………辺でいいかな」

サイタマは西行妖の根本で止まり掘り始めた。人間とは思えない速さで。

「すげー!」

「サイタマ…」

魔理沙は目を輝かせ、霊夢は呆れていた。しかし幽々子は

「待って!私が悪かった!幻想郷の春を返すから!だからやめて!!!」

幽々子は慌てて言った。しかしサイタマは聞く耳を持たない。すると

「おっ!なんかあつたぞ」

サイタマは掘り出した物を見せた。それは幽々子とそっくりな女性だった。

「え?」

サイタマは幽々子と幽々子そっくりの女性を見比べた。

「お前…死んでたの?」

「今更!」

サイタマの発言に魔理沙がツツコンだ。サイタマは今まで幽々子を人間として見てたらしい。そこに

「その西行妖には沢山死体があるから掘り出してほしくなかったのよ…」

幽々子が悲しそうに答える。

「そうだったのか…悪いな」

サイタマは謝る。それに対して幽々子は

「けど…貴方の勝負よかったわ。それと教えてあげるわ。私は単にこの西行妖の満開の姿を見たかった。それだけよ」

「けどお前のおかげで5月になった今でも冬のまんまだったんだぞ」

「それは悪かったわ。けどこれで春になるでしょ?」

「まあ…確かにそうだが…で、どうやんの?」

サイタマは尋ねる。それに対し幽々子は

「こうやるのよ…」

幽々子は眩い光を放った。その光はサイタマ、霊夢、魔理沙、フラッシュを巻き込んで

「「え?…ちよつと待て…ああああ!!」」

4人は光に包まれてしまった。それから数時間後…

「ここは…何処だ?」

「私の神社よ」

「え?マジで?」

気がつくくと4人は博麗神社にいた。そして

「おっ、桜だ」

見てみると桜が満開だった。幻想郷に春が戻ったのだ。

〈数日後〉

桜の木の元で宴会が行われた。

「はあ…また参拝者が減る…」

「いつものことだろ? 霊夢」

ため息をつく霊夢に対して魔理沙は当たり前のように言った。

「で、あと2人は?」

「ああ、川辺にいたぜ」

「まさかA級の俺と一緒にいるのは珍しいぜ」

「俺もだ。しかしお前の実力はS級に等しい」

サイタマとフラッシュは川辺にいた。

「けどフラッシュ、お前この後どうするんだ?」

この質問に対しフラッシュは

「この地で活動することにした」

「え? お前S級だろ? 此処にいていいのか?」

「俺も以外にもS級はいる。1人いなくなっても問題はないだろう」

「確かにそうだな」

サイタマはフラツシユは笑いながら会話を弾んだ。その様子を…
射命丸文が見ており、気づかれないように写真を撮った。

こうして終わらない冬の異変が解決し、幻想郷に平和が戻った…はず

永夜抄編

十八撃目：孤高のサイボーグ

とある森の中

ここに一人の人間がいた。しかし所々変わってる部分がある。

「ここが幻想郷か？」

彼は言う。どうやら幻想入りを果たした外来人のようだ。

「ここにサイタマ先生がいると八雲紫が言ってたが本当なのか？」

彼は紫とサイタマの名を知っていた。

「とりあえず探索するか」

彼は森の中を進んだ。先生を探すために。その男の名は：S級ヒーローでありサイタマの弟子である、サイボーグの青年「ジェノス」だった。

数日前

「此処が博麗神社か」

ジェノスは博麗神社前にいた。協会の職員がサイタマは博麗神社に調査に行つたと

聞いたからだ。

「しかし…先生の姿が見当たらない…」

ジェノスは博麗神社を汲まなく見る。しかしサイタマはいなかった。

「先生は何処に…」

「貴方の先生なら幻想郷にいるわよ」

突然後ろから声がしたので見た。そこには八雲紫がいた。

「なんだ貴様は？サイタマ先生のことを知ってるのか」

ジェノスは右手を紫に向けて問う。

「ええ、知ってるわよ。けどその物騒なのを向けなくてくれるかしら？それと…貴方は

鬼サイボーグことジェノスさんね」

ジェノスは右手を下ろす。

「そうだ。先生はその幻想郷という地にいるのか？」

「そうよ。貴方も行く？」

「ああ、先生が居るならば弟子の俺が行かない筈が無い。」

「わかったわ…」

紫はスキマを開いた。ジェノスの足元に

「!?」

ジエノスは驚く。そして吸い込まれていった。

「サイタマさんの弟子…実力を見せてもらおうわよ。ジエノスさん…」

ジエノスは悩んでいた。

「しかし…どうすれば「ブーン」…ん？」

ジエノスは何かに気づいた。

「何かが近づいてくる…」

音のする方に向けた、其処には

「蟲？」

其処には大量の蟲がジエノスに向かって来たのだ。ジエノスは右手を向けて

「焼却」

炎を放った。蟲達は消滅する。

「何故蟲が…？」

「ちよつと私の可愛い蟲達に何してくれてるの？」

上空から声がしたため向けた。其処には触覚の生えた少年がいた。

「貴様がやったのか？」

「ええそうよ。私はリグル・ナイトバグ、蛍の妖怪よ。あと女だからね」

「それならなんでその格好をしている」

「これしかないの！後よくも可愛い蟲達を殺してくれたわね！」

「襲ってきた蟲が悪い」

「んな!？」

リグルはつまつてしまった。確かに襲わせたのは自分だからだ。

「…と、とにかく！蟲達の仇は私がとる！で、あと貴方名前は？」

「俺はジエノスだ。正義活動をしているサイボーグだ。したがって、お前を排除する」

「ふーん、だから手から火が出たのね。やってみるならやってみなさい！」

リグルは更に大量の蟲を呼び寄せた。

「成程…蟲を操れるのか。博士にメンテナンスしてもらっておいで正解だったな」

ジエノスは構え、リグル及び蟲達に挑む

その頃サイタマは自身の家にいた。しかし1人ではなく、フラッシュもいた

「サイタマ、月の照らしが変だと思わないか？」

「そうか？」

フラッシュにサイタマに問う。

「お前わかるのか？」

「月の照らし具合を見ればわかることだ。しかしここ最近妖怪の様子がおかしいと思

う。これが異変なのか？」

「そうだったら行くしかないな」

「そうだな、サイタマ」

サイタマはヒーロースーツに着替え、フラッシュは瞬殺丸を持って家からでた。

その頃霊夢は

「紫、アンタが来るなんて珍しいね」

「ちよつと月の様子がおかしいからね。だから貴女の元に来たのよ」

「なんで私なのよ……」

「貴女は博麗の巫女なんでしょ？だから……月の欠片探すの手伝ってね♪」

「ハイハイ……わかったわよ。手伝えばいいいんでしょ」

「お願いね。妖怪たちにとって深刻な事態だから」

霊夢は紫に言われるがままに神社を出た。異変とは知らずに

十九撃目：動き出す者達

「ジエノス side」

「蟲はしぶといな」

「当たり前よ、蟲を甘く見ないでほしいね」

ジエノスとリグルは依然と戦っている。しかしどちらが有利かというところとジエノスの方である。何故ならリグルの攻撃が効かないからである。しかし、

「お前は蟲で自分を守っているようだが：お前自身は攻撃してこないのか？」

リグルは蟲を前に出しジエノスの攻撃を防いでいた。

「それは秘密ね。」

その発言にジエノスは呆れる。

「なら仕方が無い。蟲が尽きるまで排除するしかなさそうだな」

「無駄よ、蟲は無限に湧き出るから尽きることはないのよ」

2人の戦闘はまだ終わりそうでなかった。

「魔理沙 side」

一方魔理沙はアリス・マーガロイドという魔法使いの家にいた。

「アリス！これは絶対異変だと思う。私に協力してくれないか？」

「勿論よ、魔理沙の頼み事は断らないからね」

「ありがとう、頼むぜ！」

魔理沙とアリスは家から出て異変となる場所に向かった。

〈レミリアアside〉

レミリアは咲夜にある事を聞いていた。

「咲夜」

「何でしょうか、お嬢様」

「ここ最近妖怪たちの様子がおかしいみたいだけど本当なの？」

「はい、おそらく月の照らし具合がいつもより暗いのが原因かと」

「ふーん…ならば行くわよ。霊夢達より異変の場所に行くのよ！」

「はい、お嬢様」

レミリアと咲夜も異変の場所に向かった。

〈幽々子side〉

幽々子と妖夢は白玉楼の縁側で話をしていた。

「ねえ、妖夢」

「何でしようか、幽々子様」

「妖怪達の様子が変なのは本当なの？」

「はい、噂によりますと月が原因だそうです。」

「そう…ならば行くこうかしら♪」

「は…はい」

幽々子と妖夢も異変の場所に向かった。

くサイタマ side く

サイタマとフラッシュは異変の場所へと向かっていた。が

「サイタマ、今回の異変の場所わかるのか？」

「わからん」

サイタマはキツパリと答えた。

「お前…」

この答えにフラッシュは呆れる。とその時、

ドカーン！

突然大きな音がした。

「あの音の場所が異変の場所か？」

「おそらくそうだろう」

サイタマとフラッシュは音の場所に向かった。

〈霊夢 side〉

霊夢と紫は異変の場所へと向かっていった。

「紫、ここの道で合ってるでしょうね？」

「さあ？」

「さあつて……！」

おそらく紫の気まぐれルートで進んでたらしい。その時、見覚えのある影が見えた。

「あれは……魔理沙とアリス？」

前には魔理沙とアリスがいた。更に

「紅魔館の主とメイド、幽々子と妖夢もいるわよ」

レミリアと咲夜、幽々子と妖夢もいた。

「アイツらも異変解決しに来たのね……急がないと」

霊夢と紫は急いで行った。

二十撃目：再会果たす師弟

「サイタマ：何か見えるか？」

「ああ、誰かが戦ってる」

サイタマとフラツシユは音のした方向に向かっていている。サイタマは視力が異常にいい為、どういふ状況が見えた。

「誰だかわかるか？」

「1人は緑髪で変な角が生えてる奴と、もう1人は：ジェノスだ」

「何!? ウソじゃないのか？」

「いや本当だ。間違いなくあれはジェノスだ」

フラツシユは驚く。理由はジェノスがいたからである。

「サイタマ：どうする？」

「とりあえず様子を見「参りました！私の負けです！」ん？」

サイタマとフラツシユは見る。其処には謝ってるリグルと仁王立ちしてるジェノスがいた。その後リグルは退散した。

「やはり蟲はしぶとかったな」

ジエノスは去ろうとする。と、

「ジエノス？」

サイタマはジエノスに声をかける。

「せ…先生!？」

恩師及び師匠の登場で彼は驚く。

「それに閃光のフラッシュユ！」

そして同じ階級のヒーローにも気づく。

「久しぶりだな。鬼サイボーグ」

サイタマとジエノスは再会を果たす。(おまけに閃光のフラッシュユ)

「てか何でここにいるんだ？」

「八雲紫が先生が此処にいると言ってたので」

「そうか」

サイタマとフラッシュユは納得する。と、そこに

「サイタマー」

声があったので向いた。其処には魔理沙がいた。

「よっ、魔理沙……………隣誰？」

魔理沙の隣にいる者が紹介する

「私はアリス・マーガロイド、七色の人形使いであり魔理沙の…」

「魔理沙の?」

サイタマ、フラッシュは興味を示す

「妻です（顔を赤めながら）」

「はあ!」

「ちよ!アリス!」

サイタマとフラッシュは驚き、魔理沙は慌てる。

「魔理沙お前結婚してたのか!」

「し、してねえよ!」

「確か女同士は結婚できないはず…」

「だからしてないって!」

「何言ってるの魔理沙? 私達は結婚したはずよ?」

「勝手に決めるな! てかなんでそうなった!」

サイタマ、フラッシュ、魔理沙、アリスはごちゃごちゃと騒いでいた。そこにジエノスがサイタマに

「先生、奴らは無視して行きましょう。それと異変が起きてるって本当ですか?」

「本当だが…コイツらほつといていいのか?」

「俺は構いません。早く行きましょう」

「…わかった」

サイタマとジェノスは進んだ。それに気づいたのか

「「ま、待て！」」

フラツシユ、魔理沙、アリスは後を追った。

その頃霊夢達は

「まさか亡霊のアンタまで来るとはね…」

「あら？悪かったかしら？」

霊夢は普段冥界から出ない幽々子が居ることに少々驚きを見せてた。

「それと…なんでレミリアまでいんのよ…」

「別にいいじゃないの、私も異変解決してみたいのだから」

それにレミリアまでもがいることに少々呆れてる。

「けどいいじゃない、霊夢。大人数の方が戦力も増えるし」

「紫、アンタねえ…」

霊夢は更に呆れる。そこに

「色々とすみません…」

妖夢と咲夜は謝る。

「なんでアンタらが謝るのよ」

霊夢は指摘する。

「けど皆さんの為に頑張ります！」

「一応、私もね」

「あーはいはい」

こうして霊夢、紫、レミリア、咲夜、幽々子、妖夢は異変となる場所に向かった。

二十一撃目：ハクタク

「サイタマ……一つ聞きたいことがある」

「え？」

魔理沙はサイタマに質問をする。

「隣にいるの誰？」

「弟子のジエノス」

「そうか……弟子なんていたのか」

魔理沙は納得する。とその時

「君達ちよつと止まりたまえ」

前には角が生えてた女がいた。何処の誰かに似ている。

「人里の人間達には近づけさせ……って、サイタマ君!？」

その者はサイタマを知っていた。思い出せて頂こう……慧音である。

「先生、知り合いですか？」

「いや知らん」

それもその筈。サイタマが初めて慧音と会った時は学帽子らしき物を被っており、青

色の服装をしていた。しかし見た目が全く違うため知らないのも当たり前である。

「えっ—と…どちら様ですか？」

サイタマは珍しく敬語で尋ねた。

「サイタマ君！私だ！慧音だ！君が此処に来た時に会ったろ！」

「いや俺が知ってる慧音はそんな感じじゃなかったぞ」

「え？…ああ！」

慧音は思い出した。サイタマに自分はワーハクタクだと言っておくことを忘れてた。

その為ハクタク姿の自分をサイタマが知るはずもなかった。

「で、本当に慧音なのか？」

「本当です…私は満月の夜にハクタクになるのです。その事を伝えるの忘れててごめん

なさい…」

慧音は忘れられてたせいなのか元気がなかった。しかしサイタマは

「いいよ別に。気にしてないから。それと異変の元凶わかる？」

「異変…月のことについてのことか？ならば永遠亭に行くといい。しかし其処に繋ぐ竹

林は非常に迷いやすいから気をつけた方がいい。」

「わかった」

サイタマ達は永遠亭に向かうために竹林に入ろうとした。

「ちよつと待て。 霊夢に連絡する」

サイタマはスマホを取り出し霊夢に電話を掛けた。

「サイタマ、確か幻想郷は繋がらないはずでは…」

「いやなんか繋がなんか繋がるようにしてくれた」

「成程…」

フラツシユはサイタマの言われたことに納得した。そしてサイタマは霊夢に電話をした

「もしもし…」

その頃霊夢達は

「あ、ちよつと待って電話来た」

霊夢は携帯電話を取り出すと

「もしもし誰？」

「俺だ、サイタマだ」

「サイタマ？私に何の用なの？」

「異変の原因となる場所がわかった」

「本当!?!なら教えてよ」

「ああ、慧音から聞いたが永遠亭が怪しいって、じゃあ切るからな」
ピツ！と、電話が切れた

「永遠亭……ね」

「てか霊夢、携帯電話持ってたの？」

紫が尋ねる。それに対して霊夢は

「ええ、霖之助さんからただで貰った」

この時紫は霖之助？ああ、森近霖之助のことか、と納得した。

森近霖之助……香霖堂の亭主で、人間と妖怪のハーフである。商売というより趣味でやってるらしい

「とりあえず永遠亭という場所に行けばいいのよね。急ぎましょ」

レミリアはそう言い永遠亭に向かった。それに霊夢達もついていく。

二十二撃目：竹林に兎がいるようです

サイタマ、ジェノス、フラツシユ、魔理沙、アリスは永遠亭に向かっていた。その途中に竹林を見つけた。

「これが慧音が言ってた竹林か？」

「おそらくそうだろう。こここの竹林は複雑と聞いている」

「えーマジかよ」

サイタマと魔理沙は嘆く。

「しかし因幡てゐという兎を見つければ出れると噂がある」

「閃光のフラツシユ：貴様何故そこまで知ってる」

ジェノスは問いたです。それに対しフラツシユは

「人里の者から話を聞いた。それだけだ」

「成程、先生急ぎま…つてあれ？」

ジェノスは振り返る。サイタマが居なかったのだ。

「あ、サイタマなら先に行っただわよ」

アリスが呆れて言う。見てみるとサイタマの姿があつた。

「やはりそうだったのか…先生待ってください！」

ジェノスはサイタマの追う。フラツシユ、魔理沙、アリスも追う。

一方霊夢、紫、レミリア、咲夜、幽々子、妖夢達も同じく永遠亭に向かっていた。そして

「霊夢、あれじゃないかしら？」

紫が指さした先には木造建築らしき屋敷があつた。おそらく永遠亭であろう。

「サイタマ達は…まだ来てないみたいだし…先に私が解決させましょうか。」

「霊夢待ちなさい！」

紫は止めるが霊夢は無視して行く。これに対しレミリアは

「霊夢に言つても無駄みたいだったわね…私達も行くわよ」

紫、レミリア、咲夜、幽々子、妖夢は仕方が無く霊夢の後を追う。

その頃サイタマ達は竹林の中を進んでいた。

「先生！早すぎます！もう少しゆっくりと！」

「まさかこの俺の速さでも追いつけないというのか…」

「魔理沙くおんぶして〜」

「アリス！それだけは勘弁してくれ！」

ジェノス達は必死にサイタマの後を追う。と、その時
ピュン！

レーザーみたいなものがこちらに向かって来た。それに気づいたかサイタマは普通のパンチで撃ち落とす。が、立ち続けに打ってきた。今度はジェノスはそれを撃ち落とすし、残った分はフラツシユの斬撃、魔理沙とアリスの弾幕で撃ち落とされた。そして「まさか私の弾を撃ち落とすとは…お見事です。」

茂みから突然現れた。見た目は紫色の髪でブレザーみたいな服を着た女がいた。頭にはうさぎの耳があった。

「私は鈴仙・優曇華院・イナバと申します。貴方は？」

「俺は趣味でヒーローをしているサイタマだ。お前が異変の元凶か？」

「やはり異変を解決しに来ましたか…私に勝てたら教えてあげます！」

鈴仙はそう言うのと弾幕を放ってきた。しかしサイタマは避けてジェノスが撃ち落とす。

「これが師弟のやり方か」

フラツシユは関心する。

「魔理沙、私たちの夫婦愛を見せましょ」

「うん、絶対ヤダ。あと夫婦じゃないから」
魔理沙はキツパリと断る。と、その時

「今だウサ！皆の者、やってしまえ！」

二十三撃目：今宵は兎鍋だ!

突然茂みから声がした。全員が動きを止めて声が出た方に向ける。すると無数の兎が現れた。

「な、なんだ!?!」

「この竹林には兎が沢山いると聞いたが…まさかこんなにいるとは…!」

サイタマとフラツシユは動揺する。

「くっ! 数が多すぎる!」

「何がなんでも魔理沙は守る!」

「そういう事はいいから手を止めるなアリス!」

ジェノスは必死に兎達に攻撃する。魔理沙とアリスもそうだった。

「これってまさか!」

鈴仙は気づきた。誰が出たのかが

「危なかったウサね。鈴仙」

「てゐか!」

鈴仙は茂みから出てきた兎に言った。それは因幡てゐという兎だった。

因幡てゐ…長年生きた兎が妖怪化した者で人に幸福にする能力を持っている。

「てゐ！なんでアンタが！」

「いやーちよつと散歩してたら鈴仙が其処の連中と戦つてる所を見たもんでね。協力しただけウサ」

ここで鈴仙は思った。なにか企んでないかのことに。てゐは悪戯好きである。鈴仙自身も何度が引つかかったことがある。その為協力するも何かしらするのではないかと思つたのだ。

「てゐ…何もしないよね？」

「当たり前ウサ。」

てゐは普通に答える。ますます怪しい。

「ま、これでアイツらも倒れ「誰が倒れたつて？」え？」

てゐは声が出した方向に向けた。其処には無数の兎達が倒れていた。ジェノスとフラツシユ、魔理沙、アリスにより。

「な…なんでウサ!?!」

「当たり前だ。兎に負けるほど弱くはない」

「鬼サイボーグと同じく。初戦コイツらの災害レベルは狼くらいだろう」

ジェノスとフラツシユは余裕の雰囲気を出していた。が、しかし

「てか…アリス、お前何かしたか?」

「魔理沙を守った。…それだけ…よ」

「お前ボロボロじゃねーか!大丈夫か!」

「大丈夫だ…問題ない」

「イヤイヤ大ありだから!」

魔理沙の言う通りアリスはボロボロだった。何故か。理由は簡単だ、兎の攻撃をアリスが庇ったからである。何しろ魔理沙Loveである。魔理沙になにかあれば守ると思ってるからである。

「所でサイタマは?」

魔理沙は尋ねる。

「ああ、先生なら…先生?」

ジェノスは振り向いた。其処にはサイタマがいた。しかし様子がおかしい。

「鬼サイボーグ、サイタマの様子がおかしいが…どうしたんだ?」

「確か先生は正々堂々と戦うのが好ましい方だ。だが今回は奇襲を受けた。それに対して怒りを表したのだろう」

正解だった。サイタマは怒りを表していた。てゐの奇襲が原因で

「随分と卑怯なことしてくれるじゃねえか、真面目に戦う気はないのか?」

怒りを表したサイタマに対し、鈴仙とてゐは怯えてしまっている。そしてサイタマは思いがけないことを言った。

「今日の宴会の料理は兎鍋だな！」

サイタマは何故か宴会の料理のことを言った。それにジエノス以外は呆れるが鈴仙とてゐは背筋が凍った。それは…

「ま、待つウサ！私より鈴仙の方がいいウサよ!？」

「ちよ！てゐ!?!何言ってるの!?!ああ、サイタマさん…異変の話しますので材料にするのは勘弁を…」

「え?マジで?わかった。回りの兎達で我慢するか。ジエノス、捕まえておいてくれ」
「わかりました」

ジエノスは回りで気絶している兎を集めた。それを見たのかフラッシュも協力した。

「じゃあ、話せ」

「わかりました…」

鈴仙は言われるがままに話した。

その頃霊夢達は永遠亭に着いた。

「さあ！出てきなさい！」

霊夢は怒鳴る。その様子を見た紫達は

「霊夢（さん） あんたって人は…」

呆れながら言う。（妖夢だけがさん付け）と、その時

「もう来たみたいですね。姫様」

「ええ、けど博麗の巫女だけではないみたいね」

前に女性2人が現れた。

二十四撃目：お二人は月の都出身のようで

「アンタらが主犯者ね。」

霊夢は単刀直入に言う。そこに紫が

「所で貴女方の名前は？」

名前を聞いた。そこに長く白い髪で赤と青の服を着た女が答えた。

「私は八意永琳。この永遠亭で薬剤師をしてる者よ。姫様の為に月をすり替えただけよ？」

「なんで変える必要があつたのよ」

霊夢は問いたです。これには十二単らしき着物を着たかぐや姫のような女が答えた。

「月からの使者の来るのを防ぐためよ。あ、私は蓬莱山輝夜。宜しくね」

輝夜は答える。しかしここで一つ疑問があつた。

「所で…さつき月の使者って言つてたけど…まさか月から来たの？」

「ええ、そのまさかよ」

輝夜と永琳は答える。それに対して霊夢は

「やっぱり…」

その頃サイタマ達は永遠亭に向かった。鈴仙とてゐを抱えて。

「本当にこつちであつてるのか？」

「あ、あつてるウサ…けど苦しいウサ！」

てゐはサイタマの間に答える。しかし首を締められてる。

「もし間違つてたら貴様諸共鍋のぐ「やめろジエノス」…はい」

ジエノスは脅すがサイタマに注意されてやめた。

「しかし、本当にあつてるのか？」

フラツシユは疑問に思いながら同行してた。しかしこの2人は…

「魔理沙くおんぶして〜疲れた」

「だからそれはヤダ」

魔理沙とアリスは「ごちゃごちゃ騒いでた（？）」そうしてる内に永遠亭の前に着いた。

「ここが永遠亭か」

「はい、そうです…」

鈴仙は項垂れながら答える。

「しかし奥が騒がしいですよ、先生」

「え？あ、本当だ」

永遠亭の奥から爆破音が聞こえる。おそらく霊夢達が戦つてゐるのだろう。「まさか霊夢とかがいるのか？俺らも急ぐか！」

「はい！（ああ）つて先生（サイタマ）!?!」

ジェノスとフラツシユは驚きをあげる。それはサイタマが…

「普通のパンチ」

サイタマは扉にパンチをする。すると竹でできた扉は飛んでいった。

「よし、行くか！つてどうした、そんな顔して？」

サイタマは尋ねる。そこにジェノスとフラツシユは

「先生！普通は開けるべきです！なのに何故パンチしたのですか！」

「いや、めんどくさかったから…アハハ」

「サイタマ…そっちの方がめんどくさいと思うが…」

ジェノスは常識的に言い、フラツシユは呆れながら言った。それに対しサイタマは苦笑いで答える。しかしこの飛ばされた扉である人物が怒るのは誰も想定しないであろう…

そして先に永遠亭に居る霊夢達は輝夜と永琳との戦いを繰り広げていた。

「くっ！厳しいものね…！」

「霊夢、気をつかないでね。止めたら敗北が見えてくるわ」

「わかっているわよそれくらい！」

霊夢と紫は跳ね返すのが精一杯だった。レミリア、咲夜、幽々子、妖夢も一緒だった。

「これが月人の実力よ！」

「けど姫様…何かに向かってる音がしますが…」

「え？」

二十五撃目：忘れてたこと

輝夜は永琳の言う方向に向けた。見てみると竹でできた扉がこちらに飛んできたのだ。

「え？え？え……」

当然慌てる。そして…

「ぐはっ！」

「ひ、姫様！」

輝夜はその扉にぶつかってしまった。永琳はすぐ様に駆け寄る。それを見ていた霊夢は

「こんなことをするのは…」

と同時に

「いや…すまん」

サイタマは申し訳なきように謝る。後ろにはジェノス、フラツシユ、魔理沙、アリスもいた。

「やっぱりアンタだったのね。サイタマ」

「ああ……てかさっきの爆発音は霊夢だったのか」

「私だけじゃないわよ。ほら、他にもいるから」

霊夢はその方向にお祓い棒を指す。其処にはレミリア、咲夜、紫、幽々子、妖夢が戦っていた。

「まさか冥界にいた奴もいるとはな」

フラッシュは幽々子と妖夢がいることに気づく。

「紅魔館の主やメイドもいるってのも珍しいぜ」

横から魔理沙も言う。その時、弾幕が漏れてこつちに降ってきた。

「ヤベエ……」

魔理沙はすぐ様にミニ八卦路を取り出す。その時、ジェノスが横から

「焼却」

右手を突き出し火炎放射を放つ。弾幕は消えてなくなった。それを見た魔理沙は「すげえ……っってお前人間じゃないのか!？」

驚きを隠せなかった。それはジェノスを普通の人間だと認識してたからだ。

「俺はサイボーグだ。普通の人間とは違う」

「サイボーグか……」

魔理沙は納得する。そこにサイタマが

「てかジェノス、パーツでも変えたのか？」

「はい、博士に頼んでもらい変えて「ちよつとアンタら!!」ん？」

ジェノスは振り向く。其処には怒りを露にした輝夜がいた。

「誰よ！私に向かつて扉ぶつけたのは！名乗り出なさい！」

「姫様落ち着いて下さい……」

永琳はなんとか落ち着かせようとするが輝夜は聞く耳を持たない。この質問に答えたのはフラツシユだった。

「サイタマがやった」

一同はサイタマの方に向く。

「フラツシユ！なんでばらした!？」

サイタマは動揺する。

「成程よくわかったわ……けどよりによってあんなハゲにぶつけられるとはね……」

「人を頭で呼ぶんじゃねえ！俺はサイタマだ！」

頭のことを言われたのか怒りを露にしていた。

「サイタマ……私を怒らせたことを後悔しなさい……」

輝夜はそう言うとう宙に浮き両手を広げた。

「神宝 蓬萊の玉の枝 夢色の郷」

すると輝夜から七色の丸弾が放たれた。そして七体の使い魔が現れて米粒弾を放たれた。

「サイタマ！なんとかしなさいよ！」

霊夢、レミリアがサイタマに向かって言う。

「なんで俺のせいになるんだよ！」

サイタマは反発する。

「貴方が怒らせたからこうなったのでしょう……」

紫は呆れながら言う。

「と、とりあえずなんとかしてください！」

妖夢も言う。

「けどあんなのどうやって消す……はっ！」

サイタマは何かを思い出した。

「俺の記憶が正しければ……しまった！」

サイタマは絶望感に見舞われてた。そして前に出た。

「先生！無理はしないでください！」

「サイタマ！死ぬつもりか!?!」

ジェノスとフラッシュは止めにかかるが彼は聞く耳を持たない。

「貴方のことは噂に聞いてるけど……これを消すのは不可能に近いわよ！」

輝夜は優勝を確信した。サイタマは強いことを知ってる。けど所詮はただの人間にすぎないと思っっている。横にいた永琳も勝ち目はないと思っっていた。

「さあ、貴方の負けよ！」

「今日が……人里の……最後の……」

サイタマは連続・普通のパンチを放ちながら

「特売日じゃねえーか!!!」

そのパンチは輝夜が放った弾幕を全て跳ね返した。

「はあ!？」

誰もが驚きを隠せなかった。そしてその弾幕は輝夜に命中した。

「嘘……でしょ?」

輝夜は信じられなかった。弾幕をパンチで跳ね返したことに。そして気を失ってしまった。

「ひ……姫様!」

永琳はすぐ様に輝夜の元に駆け寄る。そしてサイタマは

「くそつたれええええええええ!!!」
悲痛な叫び声が響き渡った

花映塚編

二十六撃目：四季折々の花々

「先生、この前の異変のことが書かれています」

「そうか」

ジェノスはサイタマに新聞を渡す。見出しには

『ヒーローサイタマ、異変解決！』と書かれていた。写真は何故かまた魔理沙が目立っており、肝心のサイタマは半分しか写ってなかった。この事に不満を持ったジェノスは提供者の射命丸文に抗議をかけようとしたがサイタマに止められた。

「先生が異変を解決したはずなのに何故この白黒の魔女が目立つのかが俺にはわかりません」

「魔理沙は結構目立ちがりやだから仕方がないだろ。俺は気にはしないんだけど。」

サイタマ自身は全く気にしてはなかった。しかし自分が半分しか写ってない事は気にしてた。

つい先日起きた月がすり替えたれたことについての真相はこうだった。サイタマが跳ね返した弾幕に当たり気を失っていた輝夜はなんとか意識を取り戻しこの事を話し

た。月の都にいた頃蓬萊の薬を使用した事がバレてしまいその薬を作成した永琳と共に追放されて迷いの竹林で永遠亭を建て住んだ。月からの使者を妨げる為に永琳に頼み偽の月とすり替えたのだ。しかしそれを異変と思つた妖怪達が霊夢の所に行つて異変解決を頼み、霊夢は渋々言いながら異変の場所へと向かつた。魔理沙、レミリア、幽々子はその噂を聞きつけてその場所に向かつた。一方サイタマとフラツシユはいつもより暗いと思ひ異変解決へと向かつた。ジェノスはその時に幻想郷に来たため異変のことなど知らなかつた。

「しかしその後は疲れたなー」

「確かにそうですね」

サイタマが言うその後とは永遠亭の修復作業のことである。あの時の勝負で永遠亭が半壊してしまい修復作業を手伝わされてしまったのである。あの時の勝負で永遠亭

「先生、話変わりますがいいでしょうか？」

「なんだ」

ジェノスはいきなり話の内容を変えた。それにサイタマは呆れる。

「最近季節はずれの花が咲いてると聞いてますが先生はご存知ですか？」

「いや覚えてないな…確か散歩の途中に向日葵を見かけたな」

サイタマは自分の興味ない事には記憶が乏しいためハッキリと覚えてはいない。

「それは本当ですか」

「多分な。見かけた時は一面向日葵だらけだったしな」

その時ジエノスはサイタマに

「その場所に向かいましたよう！」

「え？」

サイタマはキョトンとする。ジエノスが誘うのが珍しかったからである。そして

「じゃ、行くか！」

「はい！」

サイタマはヒーロースーツに着替えてジエノスと共に外に出た。

く博麗神社く

霊夢と魔理沙は縁側で話をしていた。

「霊夢、最近季節はずれの花が咲いてるがどう思う？」

「別にどうも思わないわよ」

魔理沙の質問に霊夢は興味なさそうに答える。其処に

「異変解決に行かないのか？」

前に閃光のフラッシュが現れた。此処に用があるらしく来たのだ。

「確かアンタって…光線のスラッシュユだったけ？」

「閃光のフラッシュユだ。覚えにくいなら閃光のはつけなくてもいい」

「わ、わかった」

魔理沙はフラッシュユから正式な名前を聞いてなかったためハッキリと覚えてなかった。そこに霊夢が

「で、なんの用よ」

「挨拶をしに来た。それだけだ」

「あ、そう」

挨拶をし終えた後フラッシュユは座り込み剣を磨いた。

「あれ？確か幽々子折られなかったけ？」

「ああ、確かにこの瞬殺丸は西行寺幽々子に折られた。しかしその後お詫びとして直してくれたのだ」

フラッシュユは瞬殺丸を眺めながら言った。

「そ…：そうか」

魔理沙はちよつとだけ引いていた。

「ま、とりあえずゆつくりしてなさい」

霊夢はフラッシュユに対して言った。

二十七撃目：四季のフラワーマスター

「先生、ここですか」

「うん」

サイタマとジェノスは向日葵のある場所に着いた。見渡す限り向日葵だらけだった。

「確かに今は春のはず…なのに何故向日葵が…？」

「これも異変なんだろうな（笑）」

ジェノスは考え込む。しかしサイタマは相変わらず呑気だった。

「しかし先生、もし異変ならば何かしら元凶があるはずですよ」

「けどそれがないんだよな。」

確かにそうだ。今回も手掛かりがなかった。

「此処に来るまでに春以外に咲く花もありましたからね」

「ああ、確かにな。けどこれくらいは異変に入らない気がするな」

「言われてみればそんな気がしますね」

深く考えても仕方がないと思ったのか2人は向日葵畑に足を踏み入れた。と、その時

「無断で入らないでくれる？」

声がしたのでそちらに顔を向けた。其処には日傘らしきものを指し、緑色の髪をした女がいた。その時ジェノスは右手を向けて戦闘態勢になっていたがサイタマに止められた。

「誰だ」

「私は風見幽香。この太陽の畑の管理者よ」

「太陽の畑？」

疑問に思ったサイタマの耳元でジェノスが

「おそらくこの向日葵畑の事だと思えます」

「そうか」

サイタマは納得する。

「…貴方、外来人ね」

幽香が尋ねる。

「そうだけど知ってんのか？」

「当たり前よ。貴方の活躍を新聞で見ただから」

「俺ってそんなに知れ渡ってたのか」

サイタマは少し驚き、嬉しかった。確かにサイタマは幻想郷に来てから異変を解決したりしてた。その事を新聞に報道されて知名度が上がっていた。人里に行くたびに名

前をかけられる程だ。

「それと…私と勝負しない？」

「いいけどお前強いのか？」

「私は長年幻想郷で生きる妖怪。甘く見たら怪我するわよ？」

「なら期待してもいいって事だな？」

サイタマは目つきが変わった。

「そうと決まればやりましょうね。場所を変えて」

幽香はそう言うところ場所を変えた。当たり前一面木に囲まれていた。

「言っとくけど本気じゃなくていいんだよな」

「何言ってるの？本気で決まってるじゃない」

「そうか……!？」

サイタマは唾然した。目の前に幽香が現れたからだ。

「貴方…隙だらけね♪」

幽香はそう言うところサイタマをぶっ飛ばした。

「先生!!」

ジェノスは声をかける。しかし返事はなかった。

「けどこの程度で倒れないわよね？」

幽香が言ったことはあっていた。其処にはサイタマがいたからだ。ほぼ無傷で。

「貴方…私の攻撃を受けたのに平気なのね」

「当たり前だ。伊達に体を鍛えてないからな」

サイタマはそう言うと言力を込めて

「俺も本気で行くぞ」

サイタマは連続・普通のパンチを放つ。これに幽香も連続でパンチを放つ。互いにぶつかりあつて衝撃が発生した。その衝撃は余りに激しく周りの木や草に被害が及ぶ程だった。それにジエノスは

「まさかサイタマ先生の攻撃に対抗するとは…風見幽香は只者ではない。仮に奴が怪人だとしたら災害レベルは鬼か竜であろう…しかし先生が負けるはずがない」

その衝撃はやみ、2人は

「貴方、人間の割には中々のものね♪」

「こつちもだ。こんなに強い奴は久しぶりだ…!」

サイタマは興奮していた。久しぶりに自分と対等に戦える者と会ったからだ。

「けど、今日はこれくらいしときましよう」

幽香は思いがけないことを言った

「え?なんでだ?」

「まさか戦闘放棄するつもりか」

サイタマとジエノスは尋ねる。それに幽香は

「もしかしたらただけど…私の向日葵たちに被害が及ぶかもしれないからね」

「それもそうだな」

サイタマは納得する。ジエノスはやや不満だった。

「もし良かったら私の家まで来ない？ 貴方達のことを聞きたいの」

「おう、いいぜ。行くぞジエノス」

サイタマは幽香について行った。

「ん？ ジエノスどうした？」

サイタマはジエノスに声をかける。

「いえ、なんでもありません。行きましょう」

ジエノスもサイタマ達について行った。

二十八撃目：師弟はフラワーマスターの家に居るよう
す

「趣味でその強さ…驚きだわ…！」

幽香は驚く。

「そんなに驚くことか？」

サイタマは呆れる。そこにジエノスが

「先生、むしろその強さで趣味でヒーローをしてると言いけることが驚きです」

「お前もかよ…」

更に呆れた。弟子からもこう言われたことに。現在サイタマとジエノスは幽香の家に来ていた。

「ところで…そこまで強くなれた秘訣とかはあるの？」

「ああ、あるぜ」

「ならば聞きたいわね」

幽香はサイタマの強さの秘訣に興味を抱く。そしてジエノスは何処から取り出したのかノートとペンを用意する。

「俺がここまで強くなれたのは…」

サイタマは幽香とジェノスに説明する。あの強さの秘訣を

「……………本当なの？」

「うん、本当」

「正直信じられないけど…貴方が言うならば信じようかしら♪」

幽香はサイタマが強くなれた秘訣を信じた。だがこのサイボーグの男は

「先生！それは前にも言いましたよね!? 本当のことを教えて下さい！」

ジェノスはサイタマに問い詰める。この強さの秘訣を全くと云っていいほど信じてないからだ。しかしサイタマは

「だからこれ以上ないって」

「そうよ、彼が言う事を信じなさい」

何故か幽香はサイタマの味方に入った。しかしジェノスは

「信じることは出来ません！ 第一先生はその普通すぎるトレーニングで強くなれたのですか！」

「あつ、確かにそうよね…」

幽香はジェノスの言ったことに共感した。てかこの女はどっちの味方なのだろうか。

「それは……………俺自身もわからん！」

サイタマは単刀直入に答えた。

「……は？」

ジェノスと幽香は唾然する。と次の瞬間、

「先生……ふざけるのも程々にして下さい!!」

ジェノスはサイタマに向かって

「俺は先生みたいに強くなる為に弟子入りしたのです！だから本当のことを教えて下さい!!」

ジェノスは涙ぐむいでサイタマに言った。

「ちよつとジェノス君！落ち着いて！」

幽香はジェノスをなだめようとする。しかし効果はなかった。その時、

「幽香いるの?」

ドアから突然声があったので3人はその方向に顔を向ける。そこには金髪でリボンをつけた少女がいた。横には人形らしきものが浮いている。

「あらメデイスンじゃない。どうしたの?」

幽香はメデイスンという少女に声をかける。

「なんか騒がしいから気になったから来た。それと彼処にいるのは誰?」

メデイスンはサイタマとジェノスのところに指をさす。

「えっーと…趣味で正義活動をしている方とそのお弟子さんよ」
「いや名前で言えよ」

幽香の大雑把すぎる説明にサイタマがツツコム。

「ふーん、そうだ幽香、これから話したいことあるけどいい？」

「いいわよ。貴方達はどうする？」

「俺らはいいいよ。する事あるし」

「先生が行かないのなら俺も行かない」

サイタマとジエノスは断る。

「そう…わかったわ」

「悪いな。時間あつて暇な時にまた来るわ」

「ええ、また来てね。それと…今度は被害の少ない所でやりましょうね」

「ああ」

サイタマと幽香は再戦の約束をした。いつになるかはわからないが。

「じゃあな」

サイタマは手を振る。それに幽香とメデイスンも手を振る。

〈帰り道〉

「先生…本当のことを教えて下さい」

「まだ諦めてなかったのかよ…」

ジェノスはまた問い詰める。サイタマは呆れる。

「だからこれ以外ないって。けど1つだけ言えることがある」

「それはなんですか？教えて下さい！」

ジェノスは興味を抱く。

「それは…努力は必ず報われる」

サイタマは1つだけ言えることを言った。これにジェノスは

「努力は必ず報われる…か」

と呟いた。

二十九撃目：死神と屋台で

「暇だ…」

サイタマは呟く。彼は今とある森を散歩していた。理由はあまりにも暇だからである。

「けど夜になると結構涼しくなるな」

確かに風が冷たくて涼しい。だが夜になると幻想郷にいる怪物等が活発に活動する。その為夜に外出するのは危険である。しかしサイタマには関係のないことだった。それは…

「ここにいる奴らも俺が元々いた世界の怪人と変わらないんだな…」

サイタマは項垂れる。散歩の途中で何度か怪物達に襲われた。しかし全てワンパンチで終わってしまったからである。

「なんだあれ？屋台か？」

サイタマは何かに気づいた。それは紅い提灯の屋台があつたからである。

「ちよつと入ってみるか」

サイタマは暖簾を幕って入った。すると

「いらつしやいませー!」

と、店主が元気な声で言ってきた。

「オススメとかある?」

「オススメは八目鰻です!それと私はミスティア・ローレライと言います!」

「そうか。じゃあ、それ頼むわ」

「わかりました!」

と、ミスチーはさつき焼き上げたばかりの八目鰻の蒲焼を出した。

「……………うめえ……!」

サイタマは驚いた。あまりにも美味しかったからである。

「でしょ!あの射命丸文さんも認めるほどですから!」

ミスチーは自慢するように言った。

「あの烏天狗の認めるのか…じゃあ、焼きト「お前さん、それは言ったらダメだよ」…ん?」

サイタマは隣から声がしたので顔を向けた。其処には赤紫(?)色の髪をした女がいた。その横には大鎌があった。

「誰?」

「率直に聞くねえ、あたいは小野塚小町。死神さ」

「死神……？なんでここにいるんだ？」

「ちよつと気分転換でね……それと焼き鳥はないからね」

小町は言う。

「いや、屋台といえは焼き鳥だろ。ない方がおかしいぞ」

「いや、ある方がおかしいんですよ！」

サイタマと小町の会話に突然ミスチーが乱入した。

「え、なんで？」

「ああ、この屋台の店主は夜雀だからね……焼き鳥を撲滅する為に八目鰻を提供してんだって」

「小町さんの言う通りです！私は屋台＝焼き鳥という概念を無くすためにしてるのです！」

「なんだよそれ……けど美味かったぜ」

サイタマは呆れながらも八目鰻の美味しさを賞賛する。とそこに小町が

「お前さんって確か趣味でヒーローやってるサイタマだろ？」

「え？知ってるのか？」

「当たり前だよ、こんだけ新聞に載ってて知らない奴はほとんどいないからね」

と、小町はサイタマに新聞を見せる。それはサイタマが異変を解決した記事があつ

た。

「俺ってこんなに知れ渡ってたのか」

サイタマは心の中で思った。と、その様子を見ていた影が1つあった。

「見つけましたよ。小町」

三十撃目：閻魔、参る

「ジエノスにな、お前寝てんのかって聞いたら「俺ですか？寝てませんよ！先生の強さを
知る為に寝る必要はありませんので！」って言ってきたんだぞ。おかしいと思わないか
？」

「おかしいね。けど本当かい？そりゃ」

「本当だよ」

サイタマと小町は会話をしていた。サイタマは愚痴を言っていた。サイタマが愚痴を言うことはほとんどない。しかし酒を飲んだせいなのか普段言えないことを言っているの
であろう。

「こつちから聞きたいけどサイタマはなんでヒーローになろうと思つたんだい？」

小町は唐突に話を変えてきた。それにサイタマは

「俺がヒーローになつたキツカケ？就職活動に行き詰まつた時に怪人に襲われてたガ
キを助けたことだ。それから三年間死ぬ気で鍛えて今に来てるかな？」

「三年間でそこまで強くなれるのか!？」

「ああ、俺自身もここまで強くなれるとは思ってなかったけどな」

「お前さん自身も思っていないのか…それはそれですご」「小町!」ん?え、映姫様!」

小町は驚く。それは映姫と名乗る上司が来たからである。

「またサボってたのですか!おかげで三途の川には沢山の霊がたまってるのですよ!」

映姫は怒っていた。

「す、すみません!今すぐ行きます!」

小町は大鎌を持って慌てて屋台から出た。

「あ!小町さん!お勘定まだ終わってませんよ!」

ミスチーが慌てて追いかける。

「アイツ、サボってたのかよ…」

その様子を見ていたサイタマは呆れる。とそこに

「貴方は誰ですか?」

「え?俺?趣味でヒーローをやってるサイタマだ」

「しゅ…趣味で…!」

映姫は愕然する。そして立ち直り

「貴方!ヒーローを馬鹿にしてるでしょ!」

「いや、してないけど」

「ならば何故、ヒーローを趣味というのですか!」

「誰に言われようがヒーローは本気の趣味だ」

「それが許せないのですよ！」

「は、なんでだよ！」

流石にサイタマも反発した。

「もういいです！そこに正座しなさい！ヒーローというものを教えてあげます！」

「え……マジかよ……」

サイタマは渋々と正座をし、映姫から話という名の説教を受ける。映姫の説教は非常に長く、長い話を嫌うサイタマにとっては鬼門だ。

「逃げ出そう……」

サイタマは心の中で思った。

〜数時間後〜

「映姫様〜今終わり……映姫様？」

仕事が終わる映姫のところに来た小町は奇妙な光景をみた。それは誰もいないのに映姫が説教してるからである。

「いいですか！ヒーローというのはか弱き市民を守り、悪を倒す為にいるのですよ！な

のをそれを趣味でやってるのは大変おかしいものです！私がヒーローという立場の大切さを教え「映姫様…？誰と話してるのですか？」小町！まだ話は終わって…って、いない！」

映姫は驚く。サイタマがいなかったからである。映姫はすぐさまに辺りを見渡す。「いた！私のありがたき説教の途中で逃げ出すとは…許しません！」

映姫が指を指した先にサイタマがいた。そして追いかける。しかし…

「はあ…はあ…なんて速さですか…」

映姫はばてて倒れてしまった。それはサイタマに追いつけなかったからである。サイタマの身体能力は人間を遥かに超えており、普通に追いかけることは無謀に近い。

「映姫様！しっかり！」

小町が映姫を持ち上げる。そして映姫はなんとか立てた。

「大丈夫ですか？」

「だ…大丈夫です…」

けどまだ疲れてた。

「サイタマ…どんな鍛え方したんだろうね…」

小町は心の中で思った。

三十一 撃目：割と平和な気もする

「結局異変の元凶ってなんだったんだろうな」

「おそらく…今回はなにもない気がしますね」

「いや…絶対なんかあるだろ」

「博麗霊夢が異変を解決に行っていないことから異変ではないと思います」

「そうか…」

サイタマとジェノスは会話をしながら博麗神社に向かっていた。

「けど春なのに季節はずれの花が咲くのも悪くはない気もするな」

「そうですね」

そして博麗神社に着く。とそこに角の生えた少女が向かって来た。

「アンタが趣味でヒーローやってる外来人とその弟子かい？」

「そうだけど誰？」

「私は伊吹萃香だ。霊夢の神社で居候してる鬼だよ」

萃香は自己紹介をする。

「鬼っているのか…！」

サイタマは驚く。

「先生、鬼は幻想郷の中でも最強の妖怪と恐れています」

ジェノスがサイタマの耳元で囁く。とそこに霊夢が来た。

「あら、サイタマ来てたのね。それと…どちら様？」

霊夢はサイタマの隣にいるサイボーグの男を尋ねる。

「俺はサイタマ先生と共に正義活動をしているジェノスだ」

「ジェノス…ね、わかったわ」

霊夢は承知する。

「博麗霊夢、貴様に聞きたいことがある。今回の異変に関しては解決しに行かないのか

？」

「あーそのこと？なんか解決する気にならないのよね」

「貴様…それで博麗の巫女なのか？」

ジェノスは右手を霊夢の顔に向ける。が、しかし

「ジェノスやめろ」

「はい」

サイタマに止められて右手を下ろす。

「アンタの弟子ってこんな感じなの？」

霊夢は呆れる。

「あ、まあ……ジエノスは態度でかいからな……」

サイタマは苦笑いで答える。確かにジエノスはサイタマとクセーノ博士以外の人物に対しては非常に無礼であり、態度がでかい。例え年上の相手に敬語を使わない程である。とはいえ、サイタマも態度でかいが

「てか、桜の咲く時期ってこんなに長かったけ？」

「なんか知らないけどいつもより長い気がするのよね。おかげで後片付けが大変な
よ」

「後片付けって……なんの？」

「……宴会の片付けよ」

霊夢はため息をつく。ここ最近3日に1度は宴会が行われており、その度に準備する必要がある。その為宴会が終わった後の片付けがかなりめんどうなのである。

「お疲れさん」

「アンタねえ……」

霊夢は自分の苦勞を知らないサイタマを睨む。

「サイタマー！」

「ん？」

鳥居の方から声がしたのでサイタマは顔を向ける。其処には小町と映姫がいた。

「小町か。…と、このチビ誰？」

「四季映姫です！一度会いましたよね！」

「あー確か小町の上司だったな…てかこんなガキが上司なんてお前も大変だな」

サイタマは笑いながら言う。が、これが映姫の怒りに触れてしまい…

「誰がガキですか！」

「いやどつからどう見てもガキだろ！」

「見た目で判断しないで下さい！」

「先生…おそらくあのクソガキ（タツマキ）と同じと考えた方がいいでしょう」

ジェノスは耳元で言う。

「サイタマ…一応歳上だからね…ま、映姫様は子供っぽいけどね」

小町は答える。てかフォローしてないでしょこれ

「小町まで！こうなったら全員説教です！」

「は!?!お前の話って長すぎるんだよ！」

「そうだ貴様！先生は長い話を好まない方だ！話すなら20文字以内でまとめろ！」

「20文字は流石に無理です！……小町、貴女もですよ？」

コツソリと逃げ出そうとする小町も見逃すわけにはいかなかった。

「なんで私まで!？」

小町は項垂れる。その結果、サイタマと小町は映姫に説教をされた。それと何故かヒーローのことも話された。その様子を霊夢は呆れながら見ていた。

風神録編

三十二撃目：ヒーローは支持されるもの？

「先生…また届きました」

ジェノスが玄関にあつた小包を置く。

「またかよ。これで50個目だぞ」

サイタマは呆れる。

「ここ最近物資が届きますね」

「なんでだろうな」

2人が幻想郷に来て半年がたつていた（ジェノスは違うが）。そして最近物資が届くようになった。多い時には10個も届いたことがあつた。

「単に目の前にいた怪物とかを倒してただけなのにな」

「おそらく…先生は人里の人間達から支持されてるみたいですね」

確かにそうである。サイタマは散歩がてらに怪物等に遭遇する事がよくあつた。本人は目の前に現れた怪物を倒していっただけである。またジェノスと一緒に人里に買い物に行った時も遭遇することがあり協力して倒していた。それを見た者達から感謝

されており、物資が送られるようになったのである。

「ま、ヒーローは悪い奴らを倒したり人助けをしたりするのが役目だから……つてジェノスなにしてんの？」

そこにはジェノスが目にも見えない程の速さでノートにメモをしていた

「先生が言ったことをメモしておこうかと！」

「俺なんか言ったか!？」

サイタマはツツコム。この時ジェノスは心の中でこう思っていた。

「(先生が此処に来てから人里の間達から感謝されるようになり、幻想郷を守る人代表になつている。しかしこれだけの支持があれば先生の人気に嫉妬する奴も現れるかもしれない……しかしこの事は黙っておこう)」

考え込むジェノスを気にしたのかサイタマが声をかける

「ん? どうした?」

「いえ! なんでもありません。それと先生、山の頂上に神社ができた事をご存知ですか?」

「え? 神社?」

「はい、守矢神社という神社が最近突然できたとのことですよ」

「そうか……なら行ってみようぜ」

「はいー」

サイタマとジエノスは身支度を整えて外に出て守矢神社まで向かった。

く博麗神社く

「暇」

「お前は毎日暇だろ…」

霊夢の発言に魔理沙が呆れる。

「てか思ってたけどサイタマには物資が来てなんで博麗の巫女である私には何も届かないの？不公平だと思わない？」

「いやサイタマは人里で暴れてた怪物とかも退治してるからそれが影響なんだろうな…」

あ、後これ新聞」

魔理沙は霊夢に新聞を見せる。そこには

『ヒーローサイタマ、人間の里で暴れてた怪物を撃破！まさに幻想郷に現れた救世主！』

と書かれてた。

「私だって役に立つことやってるわよ！」

「霊夢、お前異変解決以外やったことあるのか？」

「うっ…」

霊夢は言葉が詰まってしまった。霊夢は異変解決くらいしかした事がない。またしても人里に行くことが殆どない。更にこの博麗神社は妖怪がうろちよろしてるため近づき難いためかその為信仰も低い。たが支持はされてる。が物資が届いたことは一回もない。

「なんかサイタマに嫉妬したくなってきたわ…」

「やめろ。あ、そういや妖怪の山に神社ができたって話だぜ」

「神社!?!まさか信仰を集めて私の神社を乗っ取るつもりじゃ…ぶつとばす!」

霊夢は神社を飛び出し妖怪の山まで向かった。魔理沙は呆れながらも後を追う。

三十三撃目：妖怪の山へ

「此処が妖怪の山です」

「随分と生い茂ってるな」

サイタマとジェノスは妖怪の山入口付近にいた。守矢神社に行くためだ。

「此処には多くの妖怪が潜んでいます。特に天狗の一種が」

「文も言ってたからな」

「はい、しかし此処を監視するのは白狼天狗という天狗の中でも下つ端扱いされてる者達です」

「下つ端って…」

「このことにサイタマは呆れる。

「とりあえず入ろうぜ」

「はい」

2人は進んだ。その様子を霊夢と魔理沙が見ていた。

「やっぱりあの2人も来てたのか」

「ゼツタイニブツトバシテヤル…ジンジャマルゴト…!」

「霊夢落ち着けよ……」

霊夢は我を忘れてしまつてる。そして2人も進む。

サイタマとジエノスは妖怪の山を突き進んでいた。木々が広がる神秘的な場所だった。

「すげー広いなここ。迷いそうだ」

「大丈夫です。事前に調べてありますので。神社のことを」

「道知らねーのかよ!?!」

ジエノスの発言にサイタマがツツコム。とそこに

「待て! 其処の侵入者め!」

声がしたので2人は顔を向ける。其処には大剣と盾を持ち、白狼らしき少女がいた。

「この妖怪の山に無断で入る不届き者め! 私が成敗してやる!」

「なんだあの頭がイカれた犬は……」

サイタマは小声で言う。しかしそれが聞こえたのか

「イカれた犬とはなんだ! そのハゲ頭め!」

白狼少女が言ったこれがサイタマの怒りに触れてしまった。

「ハゲって言うんじゃないか!」

「貴様! 先生にその態度はなんだ! そして名を名乗れ!」

「私は白狼天狗である犬走権だ！此処でお前達を成敗してやる！」

「ジエノス、白狼天狗って……」

「はい、天狗の中でも下つ端扱いされてる者です」

「ええい煩い！皆の者！其処にいる侵入者を排除せよ！」

権はそう言うとは何処に隠れてのか一斉に白狼天狗が現れた。

「ジエノス……やるぞ！」

「はい！」

サイタマとジエノスは構えた。

一方霊夢と魔理沙は

「迷いそうだな……」

「ツブスツブスツブスツブスツブス……」

「霊夢だから落ち着けて……」

霊夢はもう無意識に言ってるようにしか見えなかった。

「仕方が無い、霊夢はこのままにしておくか……」

魔理沙は呆れながらも霊夢の後を追う。

「あわわわ……」

椀は怯えたいいた。それは大勢の白狼天狗が倒れてたからである。

「大したことなかったな」

「やはり下つ端は下つ端か……」

そこには無傷のサイタマとジエノスがいた。

「くっ！」

椀は大剣を構えて切りかかろうとする。とその時、

「待て！」

目の前に何かが現れた。椀だけでなくサイタマも手を止める。そこには別の白狼天狗がいた。しかし見た目が少し違う。

「何故止めるのですか！ 奴らは侵入者ですよ！」

「貴様は彼等に此処に來た理由を聞いたのか？」

「いえ……」

今彼女が話しているのは白狼天狗内では格が上の白狼天狗である。椀は理由を聞かずに切りつけることがある。その為、上の者から注意されてしまうことが多い。

「貴様は何度言えばわかるのだ？」

「すみません…」

椀は落ち込みながら去っていった。

「すまない、私の部下が無礼な態度をとってしまつて」

「いいよ、慣れてるから」

「そうか…お主達の名前は？」

「俺はサイタマ、趣味でヒーローをやつてる者だ」

「俺はジェノス、サイタマ先生と共に正義活動をしている者だ」

「サイタマ殿とジェノス殿か…此処に來た理由とは…？」

白狼天狗は尋ねる。

「この山の頂上に神社が建つたつていうから來た」

「そうか…道なりについては川の辺にいる河童に聞くといい」

「河童？」

「ああ、奴らなら何か知つてるかもしれない」

「そうか、ありがとな」

サイタマは礼を言い、ジェノスと共に川に向かった。

三十四撃目：鬼でも竜でもいける男

「こんな所に工房があるとはな」

学ランを着て手にバットを持つ男が言う。

「幻想郷にいる河童を舐めてもらったら困るよ、盟友」

青い髪で帽子を被り、背中にリュックらしき物を背負った少女が言う。

「てか本当にお前河童なのか？俺が知ってるのと全然違うぞ」

「幻想郷に生息する河童は皆こんな感じだよ。でもすごいよ盟友、その金属の棒で里に出た怪物をやっつけるなんて」

「俺はヒーローになってからこれで怪人を倒してんだよ。あとこれはバットだ」

「同じことじゃないか、でも正直驚いたよ。後私は河城にとり、宜しくね」

「ああ、宜しく」

にとりと握手した男の名は、…S級15位の金属バットことバットだった。彼は博麗神社を調べてたところ八雲紫に無理矢理連れてこられてしまった。その後人里に行き暴れてた怪物を倒したところ、それを偶然見ていたにとりが自分の工房に招待したのだ。

「てか盟友はなんで此処に来たの？」

「博麗神社を調査してたら八雲紫とかいう変な女に無理矢理連れてこられてたんだよ」

「あーあのスキマ妖怪か…あの人は遊び半分で作ってるって聞くからねえ…」

「マジか…次会ったら怒羅殿シバき浴びせてやるか…」

「盟友…それは辞めた方が…」

にとりは止めようとするが…

「にとり、俺は鬼でも竜レベルの怪人だろうが怪物でもいけるから問題はねえ…！」

バットは殺気を放つ。

「いやそういう問題じゃなくて…」にとりーお客さんー！「え？お客さん？」

にとりはモブ河童に呼ばれて入口に向かう。バットも向かった。

「此処に河童がいんのか？」

「間違いありません。先ほど会った妖怪も此処にいますと言っていましたので」

工房の入口にはサイタマとジエノスがいた。とその時、

「はいはいどちら様々？」

にとりがドアを開ける。バットも顔を見せる。その時ジエノスが

「お前は金属バット！」

自分と同じ階級のヒーローがいる事を驚く。

「鬼サイボーグ!?…隣のハゲは誰だ?」

バットはジェノスの事は知っていた。しかしサイタマの事は知らなかった。

「サイタマだ、宜しくな」

「よ、宜しく…」

サイタマとバットは握手をする。この時バットはこう思っていた。

「確かこのハゲはA級だったよな…なんでS級の鬼サイボーグと一緒にいるんだ?」

「め…盟友?知り合い?」

横からにとりが話しかける。それに対しバットは

「鬼サイボーグとは同じ階級のヒーローだ。サイタマは違うけどな」

「そうだったのか…ん?まさか!」

にとりは何かに気づいたのかその場を一旦去り、また戻ってきた。新聞を持って

「間違いない!そこの頭寒そうな盟友!趣味でヒーローやってるサイタマさんでしょ

!」

「頭寒そうとは余計なお世話だ。確かにそうだ」

サイタマは怒るのを我慢して答えた。この時バットは後ろ向いて笑っていた。

「やっぱりそうか!」

にとりは驚く。まさか時の人に出会えると思つてなかつたからだ。

「隣にいる盟友はちよつと変だけど……」

にとりはジェノスに顔を向けた。

「俺はジェノス、サイタマ先生と正義活動をしているサイボーグだ」

「さ、サイボーグ!?!」

にとりはまた驚く。そしてジェノスの手を引つ張り工房の奥へと行つた。

「アイツ……ジェノスに何するつもりだ?」

「にとりは水の中のエンジンアと呼ばれてる程だ。鬼サイボーグの事を調べるつもりでいんだろ」

「そうか……あ、神社の道なり聞くの忘れてた……」

サイタマは思い出す。にとりにこの事を聞くことを忘れてたのだ。

「神社? 守矢神社のことか? 俺知ってるぞ」

バットが答える。

「マジか! 教えてくれ!」

「その変わり鬼サイボーグとの関係を教えろ」

「おう、いいぜ」

バットは守矢神社までの道なりを、サイタマはジェノスとの関係を教えた。

三十五撃目：現世の現人神

「この道であってんのか？」

サイタマは言う。これに対し金属バットは

「間違いねえ、さっきここ通った奴がいるからな」

「そうか」

会話をしていると後ろから

「先生！待って下さい！」

「盟友！置いてくなんてひどいぞ！」

ジェノス、にとりが追ってきた。

「てかジェノス、何されてたんだ？」

「河城にとりに身体を調べてられてただけです」

「まさか変な方じゃないよな…？」

サイタマはおそるおそる尋ねる。

「いえ、普通の方です」

「よかった…」

サイタマはホツとする。

「てか何でにとりまでいんだよ」

バットはにとりに対して言う。

「いやちよつとその神社が気になってね」

4人が話してる内にその神社が見えてきた。

「あれが守矢神社だ」

バットが指を指した先にあつたのは博麗神社より若干綺麗な神社だった。其処から緑色の髪をした巫女が現れた。

「初めてまして！私は東風谷早苗と言います！」

いきなり自己紹介してきたので戸惑う（にとりだけ）

「その頭寒そうな人と時代遅れの不良さん！信仰しに来たのですか？」

早苗はサイタマとバットに対して言う。しかし言い方が悪かったのか2人は…

「頭寒そうとか言うな…！」

「誰が不良だコラア！」

サイタマとバットは怒る。サイタマは頭のことを言われたからである。バットは確かに見た目は不良ではあるが一応ヒーローである。

「す、すみません！では名前を教えてくださいませんか？」

早苗は気を取り直して2人に言う。

「サイタマだ」

「俺は金属バットだ」

サイタマとバットは簡単すぎる自己紹介をする。

「サイタマさんとバットさんですね……それと後ろにいる方々は……？」

早苗はジェノスにとりの方に身体を向ける。

「俺はジェノスだ」

「私は河城にとりだよ、てか勝手に神社建てるのやめてくれないかな」

ジェノスにとりも自己紹介をする。にとりは早苗に対して不満(?)を言った。

「え?別にいいじゃないですか、ここ誰も使ってませんよね?」

「うっ……」

凶星だった。確かに妖怪の山の頂上は誰も使っていない。使われてない場所に建てるのは悪くはない。

「さて、話を戻しまして!信仰しに来たのですか?」

「いや違うけど」

「先生(サイタマ)と同じく、俺も違う」

サイタマ、ジェノス、バットは違うとハッキリ言う。

「私は単についてきただけだよ」

「じゃあ、にとりさんは信仰するのですね？」

「んなわけないだろ？ 勝手に建てた神社に信仰するもんか」

にとりは単刀直入に断る。この発言に早苗は心が折れてしまった。

「そ…そうですか…なら勝負しましょう！ 私が勝ったら守矢信者になって下さい！」

早苗はいきなり勝負に申し込めた。サイタマとバットは構えるが

「先生、ここは俺に任せて下さい。あんな雑魚は俺で十分です」

ジェノスに言われてサイタマは下がる。しかしバットはジェノスに向かって

「お前一人で大丈夫か？」

と言うがジェノスは

「心配しなくてもいい。金属バットも下がってる」

バットも下がる。無言で。

「雑魚とはひどいです！ 私の怖さを思い知らせてやります！」

雑魚と言われたのか早苗は反発する。

「雑魚は雑魚だ。先生に無礼な態度をとったのも加えてお前を排除する」

ジェノスは戦闘態勢をとる。

「そうですか…現人神に逆らったことを後悔するといいですよ！」

早苗は戦闘態勢をとる。この時サイタマ、バット、にとりはこう思ってた。

「「現人神ってなんだ？」」

三十六撃目：乱入者

辺りは静かになった。其処には早苗とジエノスがいた。

「貴方以後悔させてやりますよ、現人神を馬鹿にしたことを！」

「現人神だろうが巫女だろうが関係ない。お前を排除する」

両者共に戦闘態勢をとる。その様子をサイタマとバットは見ていた。

「そーいやあの河童は？」

サイタマは辺りを見渡す。にとりがいないからだ。

「にとりか？あのイカれた巫女と鬼サイボーグの戦闘に巻き込まれたくないとかで隠れたってよ」

バットは答える。と同時に鈍い音がした。どうやら始まったみたいだ：

その頃霊夢と魔理沙は：

「サツサツサツサツサツサツサツサツサツサツサツサツサツサツサツサツ」

「霊夢…殺す気にいるのかよ…」

魔理沙は気づいていた。霊夢はもうヤバいということに。と、その時

「彼処か!」

霊夢は何かに気づいた。煙が出ていたからだ。そしてその場所に向かった。

「霊夢待て……!」

魔理沙は慌てて後を追う。

その頃守矢神社では

「私の弾幕が効かない……!」

早苗はジェノスに向かって言う。

「当たり前だ、俺は貴様如きの攻撃などで倒される程の軟弱者ではない」

ジェノスは当たり前のように言う。戦闘状況とは言うどジェノスの方が断然有利である。何故なら弾幕が効かないからである。早苗はジェノスに向かって無数の弾幕を放っていた。しかしジェノスはことごとく避けて早苗に攻撃を当てていた。これが結果である。

「(こうなれば……あれを使うしかありません……)」

早苗は何か大技でも見せるつもりなのか構える。これにジェノスは腕を砲台のような形に変えてエネルギーを溜める。と、その時

「貴様かああああ!!」

突然大きな声が聞こえたのでその方向に早苗とジエノスは顔を向ける。サイタマとバットも顔を向けた。其処には霊夢がいた。しかしいつもと違う。

「お前か…私の神社を乗っ取るうとしてゐる巫女は」

「え？」

早苗は哑然する。

「とぼけても無駄だ、さあ答えよ…！」

霊夢は問いただす。早苗と顔の距離は約1c m程だ。

「あの…博麗霊夢さん？今はジエノスさんと勝負してるところなので…後からにしてみらえま…ヒイイ！」

「言わないってことは…そのつもりだったのかああああ！」

霊夢は早苗に向かって怒りの鉄拳を放った。

「うわああああ！」

早苗は情けない叫びを上げて飛ばされ、そこら辺にあつた岩にめり込んでしまった。と、同時に魔理沙が追いついた。

「霊夢…？」

「はっ！私何してたの？」

「覚えてねえのかよ！」

「どうやら霊夢はあまりの怒り狂いにより自身ですら覚えてなかったようだ。」

「邪魔が入ったか……まあいい」

ジェノスは呆れてしまったのか腕を元に戻した。そこに突然にとりが現れて「すごいぞ盟友！後でメカ作りに参考にさせてくれ！」

にとりは目を輝せて言った。ジェノスは断ろうとしたがサイタマを見て

「先生が許可してるからいいだろう」

「俺なんか言ったか!？」

この事にサイタマは呆れてツツコム。そして霊夢と魔理沙に気づいたのか

「あ、お前から来てたのか」

「よっ！サイタマ……って隣にいるの誰？」

「金属バットだ。宜しくな」

「変わった名前だな……」

魔理沙はそう思った。と、いきなりジェノスが

「何かがある……計り知れない気力を感じる……」

と言った。それにサイタマが

「え？なんかいるのか？」

「はい、この神社の近くに誰かがいます」

た。
ジェノスはサイタマに言う。これに霊夢達も興味を示す。と、その後ろから声がし

「それってあたしのことだろ？」

三十七撃目：神様、参る

後ろから声がしたためサイタマ達はそちらに身体を向ける。其処には青髪で赤い服を着た女がいた。背中には注連縄がある。

「なんだいきなり声かけやがって……誰だテメエは？」

バットが喧嘩を売るような姿勢で言った。

「あたしは八坂神奈子。神様だよ」

「神……？この神社のか？」

「いやそうじゃないけどね」

神奈子の発言にバットは首を傾げる。

「で、俺らに何の用だよ」

「あたしはアンタらに用があるじゃないかってね……そこ丸坊主に用があるんだよ」

神奈子はサイタマに指を指した。しかし言い方があれだったのか

「普通にハゲって言えよ……！」

「先生、それでは矛盾してます」

怒りを見せるサイタマにジェノスが小声で言う。

「悪かったね。で、名前は？」

神奈子は謝りながら名前を聞こうとする。

「趣味でヒーローをやってるサイタマだ」

「!?……やっぱりそうだったのかい！」

「え？」

神奈子は素早く動き、サイタマに近づく。

「趣味でヒーロー……アンタの噂は聞いてるよ！」

と、サイタマを殴り飛ばす。

「先生（サイタマ）！」

あまりの出来事にジエノス達は声を上げる。そこにバットが

「おい！テメエ！不意打ちはなしだろ!？」

「いや、単に試したただけだよ。……けどそう簡単にはやられそうにないね」

神奈子は笑いながらサイタマを飛ばした方に向く。と、次の瞬間、地面に衝撃が走る。

「随分と派手にやってるれるじゃねえか……！」

其処にはサイタマがいた。服が汚れてる程度であり、ダメージを受けた様子があまりない。

「フフツ……唯の人間だと舐めてたよ！」

「当たり前だ、伊達に鍛えてないからな！」

そう言うときサイタマは構える。神奈子は何処から出したのか御柱が現れ装備する。

「さあ、やろうか!!」

最強の男と神様の対決が始まった。と、その時

「待てー！私を忘れるなあー！」

突然神社の方から声がしたのでサイタマと神奈子は手を止める。其処には白と紫の服を着て、金髪で帽子を被った少女が屋根の上にいた。しかし帽子には目玉がついている。

「諏訪子、アンタが外に出るなんて珍しいね」

「お前ばかりに目立ってたらってたまるか！」

諏訪子はそう言うとき屋根から飛び降りてサイタマと神奈子がいる場所に着地した。

「誰だこのチビ」

サイタマは単刀直入に言う。

「チビって言うな！私は洩矢諏訪子だ！ここの神社の神様だ！」

「いやこんなガキンチョが神様なわけないだろwww」

サイタマはバカにするような言い方で言った。しかも笑いながら。

「おのれえ…子供扱いしよって…！成敗してやr」

諏訪子はサイタマに飛びかかろうとしたが神奈子に止められてしまった。

「サイタマ、諏訪子は確かに神様だよ。…まあ子供にか見えないけどね」

「神奈子！ フォローするように見えないぞ！」

「おっと、悪いね」

神奈子は笑いながら謝る。これが諏訪子を更に怒りに触れてしまった。

「本当に謝ってるのか貴様！ もう許さんぞ！ そのハゲ諸共消えてなくな…」

諏訪子の顔に衝撃が走る。それはバットが殴ったからである。金属バットで

「お前の相手は俺だ」

ついに諏訪子の怒りは頂点に達してしまった。

「いきなり殴るとは無礼だぞ！ お前から先に消してやる！」

「望むところだ！ テメエみたいな餓鬼に負けてたまるかよ！」

バットと諏訪子の対決が始まった。それを見ていたサイタマと神奈子は

「……………あたした達もやろうか」

「そうだな」

サイタマと神奈子の対決が始まった。（仕切り直しの意味で）

それを霊夢、魔理沙、ジェノス、にとりが巻き込まれない場所で見ている。

「ジェノス」

「なんだ」

「いくらサイタマでも神様には勝てないのじゃないか？」

「それはありえない。サイタマ先生に勝てる者などいない」

「確かにサイタマが負けるのは想像できないわね」

「同じく。あの盟友からは何かを感じる…！」

と、4人は会話をしていた。

三十八撃目：気合いがあれば大抵どうにかなる

「人間くせにやりおるわ！」

「当たり前だ！ 餓鬼に負けてたまるかよ！」

サイタマと神奈子と別の場所で諏訪子とバットが激戦を繰り広げていた。諏訪子は弾幕（たまに打撃）を放って攻撃し、バットは金属バットで弾幕を跳ね返したりしていた。と、その時

「よっしや！ まずは一本！」

バットの攻撃が諏訪子に命中した。だがこの攻撃で諏訪子は怒り狂ってしまった。

「おのれ…もう許さんぞ！」

この時はバットはマズイと思った。それは金属バットを諏訪子に当てた場所が悪かった。

「お前…！ 顔に当てるとか人として悪すぎるぞ！」

彼女はもう涙ぐるいで言っていた。余程痛かったのだろう。

「ヤベエな…」

バットは戸惑いながらもすぐに冷静さを戻す。

「もうお前の存在……いや全部消してやる！」

諏訪子は怒りで我を忘れてしまい弾幕を放つ。

「くらえ！ 崇符「ミシヤグジサマ」！」

諏訪子はそう言うのと密度の狭い米粒弾幕を放った。避け切れることは限りなく不可能に近い。

「くっ！仕方がねえ……」

バットは金属バットを構える。と、その時

「焼却」

突然ジェノスが横から入り込み、両手を前に向けて火炎放射を放つ。全範囲とは行かなかったがバット及び隠れて見ていた霊夢達には被害は及ばなかった。

「鬼サイボーグ……邪魔すんじゃねえよ」

バットはジェノスに向かってガンを飛ばしたが少々照れていた。

「悪いな」

ジェノスは謝る。しかし諏訪子がこれを許す訳がなかった。

「おい！2人でやるのは反則だぞ！」

諏訪子は怒りながら2人に言う。しかしジェノスは

「俺は単に弾幕を消すために出ただけだ。金属バットに協力する気などはない」

「だってよ」

ジエノスは協力する気はないと言って戻った。

「むー！こうなったら…蛙ども！来い！」

諏訪子は笛を吹いた。すると無数の蛙が集まった。

「な…なんだこの蛙は!?!気持ち悪い！」

バットも流石に引いた。

「気持ち悪いとはなんだ！皆！鳴け！」

諏訪子はバットに言いながらも蛙達に命令した。蛙達は言われるがままに鳴きはじめる。ゲゴゲゴと。

「あ？なんだよいきなり」

バットはどうやってことなかつた。

「そう言えるのも今の内だ！」

と、言ううと諏訪子は謎の念波を放つ。その念波はバットに当たる。すると

「なんだ…」

バットはふらついた。そう、催眠術の一種だ。

「さつきはよくも殴ってくれたな！これはお返しだ！」

諏訪子はバットに向かって打撃で攻撃した。時に弾幕を混ぜて。

「め、盟友！」

にとりかは飛び出そうとするが魔理沙に止められてしまった。

「(このままじゃヤベエ…こうなったら!)」

バットはそう思いながら金属バットで自分を殴った。

「自分で自分を殴った…だと?!」

諏訪子は驚き、手を止めて離れる。

「あースツキリしたぜ」

「な、なんで目覚めた?!」

「大抵気合いがあればなんとかなるんだよ…さつきはよくもボカスカと殴ってくれたなあー!」

バットは怒りを諏訪子にぶつけた。

「お…落ち着いてくれ…」

諏訪子はさつきのは何処に行ったのかくらい怯えてした。しかしバットが許すはずがない。

「安心しろ。俺は優しいからよお…一発ずつ!気合いを込めて!」

バットは渾身の一撃を諏訪子に放つ。

「(さつきのよりも痛い!何で!?何でなんだ!?)」

諏訪子は殴られながら考えた。しかしわからなかった。

「気合いの！怒羅厳シバキ！」

バットは必殺の怒羅厳シバキを放った。けど一発ずつ気合を込めて殴るのはなんだったのだろうか。

〈30分後〉

諏訪子は無残な姿で倒れていた。バットも疲れが見えていた。

「こんな餓鬼が神様だとはな…世の中変わったもんだ…な」

バットは倒れてしまった。

「盟友！しっかりしろ！」

にとりが咄嗟に出てバットを運ぶ。

三十九撃目：神との決着

「神様って……結構強いんだな」

サイタマは呟いた。辺りは無残な姿となっていた。それは神奈子と激戦したからである。神奈子は弾幕を放ったり打撃で攻撃してきた。サイタマはいつも通りに普通のパンチ、連続・普通のパンチで応戦した。しかし、その衝撃で木々等に被害が及んだ。そして今は……サイタマだけで神奈子の姿はなかった。はずだった。

「隙あり！」

後ろから声がした。神奈子だ。そしてサイタマの首を叩く。

「手応えあったようだね」

サイタマはその場で立ち止まってしまった。

「あたしはお前さんを唯の人間と見ていた。しかし、いざ戦ってみればサイタマ、お前さんは強かった。だが！神であるあたしには敵わないんだよ！」

「うるせえ」

「ん？」

神奈子はある意味勝利宣言をした時、サイタマが言った。

「もう終わりなのか?」

その発言が神奈子を奮い立たせた。

「この人間には…!本気を出したくなってきた!」

神奈子はサイタマに向かい、拳を放つ。だが、

「普通のパンチ」

サイタマの普通のパンチがヒットする。

「なっ!?!」

そのパンチはさっきのよりも格段に強くなっていた。

「(コイツ…!何処からこんな力が…!?)」

神奈子は動揺を隠せなかった。数時間前の時は御柱が壊れる程度で彼女自身にはあまり効いてなかったからだ。だがサイタマはパンチを放ち続ける。

「(このままではマズイ…!)」

危機感を感じた神奈子は反撃をしようとした。

「はあああああ!」

サイタマに向けて弾幕を放つ。至近距離であるため命中すれば致命傷どころでは済まない。しかし

「いない…!?!」

神奈子の前にはサイタマの姿がいなかった。その時、後ろから気配を感じた。
「後ろか！」

しかし反応に遅れてしまった。サイタマのパンチが当たり、飛ばされてしまった。
「おのれ……！」

神奈子は岩に当たってしまったがまだ立てる。

「随分と丈夫だな」

「当たり前だよ、これくらい丈夫じゃないと神様とは言えないからね」

「そうか」

サイタマは納得する。そして神奈子が

「あたしの奥義を……見せてやろう！」

彼女は構えた。

「奥義……風神様の神徳！」

その直後、無数の弾幕がサイタマを襲う。

「サイタマ！お前さんがどんなに強かろうがこれを消すのは不可能だよ！」

神奈子は勝利を確信したかのようにサイタマに言った。だがサイタマは構える。

「これがお前の奥義か。ならばこっちも奥義を見せてやるよ」

「必殺マジシリーズ……………マジ・連続パンチ！」

サイタマは目にも止まらぬ速さでパンチを放った。それは連続・普通のパンチよりも遥かに強くなっていた。そのパンチは神奈子が放った弾幕を跳ね返した。

「ガッ！」

その跳ね返された弾幕は全て命中した。しかし、

「まだ立てるのかよ……」

それは神奈子がまだ立っていたからである。

「仕方がねえ……もう一発はな……（パタン……）ん？」

サイタマは構えようとしたその時音がした。前を見てみると神奈子が倒れていた。

「……………これで勝負はついたな……けど周りがヤベエ……」

サイタマは辺りを見る。それはあまりに無残な光景だった。

「はっ！ ジェノスとかは無事「先生！ 大丈夫です！」 え？」

サイタマは後ろを見る、そこにはジェノスがいた。そして霊夢、魔理沙、にとりも無事だった。

「てか……バットは大丈夫なのか……？」

「安心しろ！ この盟友も大丈夫だ！」

しかしサイタマから見るとどうも無事には見えなかった。

「さてと…早苗から聞き出そうかしら♪」

「霊夢…顔がおかしいぞ…」

霊夢は不気味な笑みを浮かべながら未だ岩にめり込んでる早苗まで向かおうとしたが魔理沙に止められてしまった。この時、サイタマは思った。

「これって異変だったのか？」

地霊殿編

四十撃目：温泉に浸かろう

妖怪の山の木々は赤やオレンジに染まっており、まさに秋を感じさせる光景だった。その頂上の隅っこ側にハゲと機械仕掛けの男の影が。サイタマとジェノスだ。

「ジェノス……ここであつてるのか？」

「間違いありません。ここに埋蔵金が埋まっています」

ジェノスは地図を広げてサイタマに言う。この2人は妖怪の山に睡る埋蔵金を掘り当てに来たのだ。

「てかジェノス、あの神社って結局どうなったんだ？」

「守矢神社の事ですか？この山の妖怪達から許可がおりてこの頂上にあります。簡単に言いますと直ぐ隣ですが」

「あ！本当だ」

サイタマは横に向く。そこに守矢神社があつたのだ。あの時、八坂神奈子との激戦により神社は半壊、更に周りにまで大きな被害が及んだ。その為復旧工事を手伝わされてきた。そしてその後守矢神社で宴会が行われたのだがバットとフラッシュの喧嘩によ

り天井が崩壊。また手伝わされるハメとなってしまった。だがこの宴会によりサイタマと神奈子は仲良くなったのだ。

「神様と仲良くなれるとは…先生はやっぱり偉大です」

「気持ち悪いからやめい」

ジエノスは称賛するがサイタマは真つ向に否定した。

「ん？なんか手応えがあつたぞ」

「本当ですか！」

「間違いない、埋蔵金だ！」

サイタマは更に掘り進める。と、その時地響きが起きた。

「地震か!？」

ジエノスは戸惑う。そして…

ザパーン！突然穴から水が湧き出た。その上に…サイタマがいた。

「先生!!」

「大丈夫だ、なんともない。けどこの水熱かつたな」

サイタマは着地する。全く問題はなかった。

「これは……温泉ですね」

「マジか！埋蔵金よりいいんじゃないのか!？」

「まさかここに温泉があるなんて思ってもいませんでした」

「ジエノス、入ろうぜ！湯加減を確かめる為に！」

「はい！」

2人は温泉に浸かった。この後、湯加減は非常によかったらしい。

〜数日後〜

サイタマとジエノスは再び温泉へと向かった。しかし、

「なんでこんなにもいるの？」

「おそらく温泉がある事が知れ渡ったのでしょう……」

サイタマとジエノスが見た矢先には、大勢の人がいたからである。中には紅魔館や永遠亭の者達や冥界にいる者までいた。2人は仕方がなく隅っこに浸かった。

「先生が掘り当てた温泉に勝手に入るとは……先生、後で全員排除しておきますので安心して下さい。」

「何も言っただろ!!」

と、そこに

「お前達も来てたのか」

横に身に覚えのある男が浸かっていた。

「あ、フラツシユ。お前も来たのか」

「ああ、新聞を見てな」

「え、新聞に載ってたの？」

「知らなかったのか？これだ」

フラツシユは新聞を見せる。そこには

『妖怪の山から謎の間欠泉が！守矢の仕業か!?』と書かれていた。

「てか…何でアイツらがやった事になってんだ…？」

この記事にサイタマは呆れる。

「あの神社の隣で湧き出たのですから仕方がないでしょう」

これにジエノスが答える。

「てか…バットはいんのか？」

サイタマが尋ねる。バット自身も温泉の事は知ってる筈。

「あのリーゼントか？奴なら其処にはいる。何やら子供といるみたいだが…」

フラツシユはその方に指を指す。其処にはバットと諏訪子がいた。

「この前のお返しだ！」

諏訪子はバットをポカポカと叩く。

「温泉くらい普通に浸かれよ！ 餓鬼かテメエか！」

「子供扱いするなあ！」

子供扱いされたのか諏訪子は更にバットを叩く。それに切れたのかバットも抵抗をする。周りから見れば迷惑行為に近い。その様子をサイタマ達は生暖かい目で見守っていた。

「温泉を掘り当てたのがお前さんだったとはねえ、サイタマ」

と、そこに神奈子が来た。

「偶然だよ、偶然。それにこの温泉を俺だけにするつもりはないからな」

「お前さん、心が広いんだね。そういうところ、嫌いじゃないよ！」

「俺もお前のそういうところ嫌いじゃないぜ」

サイタマと神奈子は親友に近い程仲がよかった。

「まさか神様と仲がいいとはな」

「これだから先生は尊敬できる」

フラッシュとジェノスは小声で言った。

「ところでお前の所の巫女は？」

「早苗かい？……博麗の巫女と一緒にいるけどねえ……」

神奈子は苦笑いしながら親指を指す。其処には霊夢と早苗がいた。

「本当に私の神社を乗っ取ろうとしたのか？」

「す、すみません…信仰を集めるためにです…」

早苗は泣きながら答える。しかし霊夢は許す気が無いように見える。そこに魔理沙が

「霊夢…？もう許してやったらどうだ？」

「嫌い黙れ消え伏せろ…貴様は入ってくるではない」

「はい」

魔理沙は霊夢に言われるがままに場を離れた。と、同時にアリスに捕まってしまった。た。

しかし彼ら（彼女ら）は気づいてなかった。間欠泉から怪しい物が湧き出ていた事に

四十一撃目：いざ地下の世界へ

「霊鳥路空の暴走を止めろ……どうということだ？」

ジェノスは1人考え込んでいた。それは昨日の出来事である。ジェノスは暇を持って余す為に散歩に出た。霧の湖の近く歩いていた時の出来事だった。

「先生の言う通り、風が気持ちいい」

幻想郷の夜は風が非常に心地いい。それと怪物等が活発に活動する時間帯でもある。ジェノスは襲ってきた怪物等を容赦なく排除した。最後の1体を倒した時にその言葉が聞こえた。

「ん？なんだ？」

ジェノスは声の主を方に顔を向ける。其処にはドクロの顔をした亡霊がいた。しかしジェノスには気づいていない。その亡霊はこう言い続けた。

「霊鳥路空の暴走を止めろ……」と

「あの間欠泉と関係があるのか？」

ジェノスはつい先月サイタマが掘り当てた間欠泉と何か関係があるのではないかと想定した。しかしわからなかった。その時

「ジェノスどうした？」

考え込んでいたジェノスが気になったのかサイタマが声をかける。

「いえ、なんでもありません」

「そうか」

サイタマは座り込んでこう言った。

「悩み事があるなら俺に相談しろよ。ある程度ならのつてやるからな」

「先生……今の言葉、メモさせてもらいます！」

「何故!？」

サイタマは驚き、ジェノスは高速でノートに書いた。そして書き終えると

「先生、霊鳥路空の暴走を止めろ……って何の事かわかりますか？」

「霊鳥路空？何だそれ」

「昨日霧の湖ら辺を歩いていたら亡霊がその事を繰り返していましたので」

「俺もよくわからないな……けど一つ心当たりがある」

「本当ですか！」

「ああ、この前温泉の近くにデカイ穴があつてな、其処からお前が言う亡霊が出てきたん

だよ」

「そうだったんですか……！先生！其処に向かいましたよう！」

「わかった。行こう！」

「はい！」

話を終えるとサイタマはヒーロースーツに着替えてジェノスと共に家から出た。

博麗神社では……

「暇」

「お前なあ……」

霊夢は相変わらず暇だった。それに魔理沙は呆れている。

「面白いや霊鳥路空の暴走を止めろって知ってるか？」

「何よソレ、興味ない」

霊夢はキツパリと言う。

「あ、そーすか」

魔理沙は霊夢の余りの興味のなさに呆れてしまい神社から出た。

「しよーがない、私一人で行くか……」

魔理沙はほうきに跨りサイタマの家に向かった。

その頃サイタマとジェノスは温泉の近くの穴に来ていた。

「ここですか」

「うん」

サイタマとジェノスは穴を覗く。見るかぎりかなり深いということがわかる。

「じゃ…行くか」

「待って下さい、これを」

ジェノスはサイタマにある物を渡した。それは一つ目のロボだった。

「なんだこれ？」

「クセーノ博士が発明してくれたロボです。先生にとって役立つと思います」

「ありがとな、てかお前は どうするんだ？」

「俺はそのロボを使って先生をサポートします。ここにテントを建てて！」

「どっから出したんだそれ…」

サイタマは何処から出したのかわからないテントを張るジェノスに呆れた。

「じゃ、行ってくるわ」

「お気を付けて！」

サイタマはその穴に飛び込んだ。ロボもサイタマの後を追う。

一方魔理沙はサイタマの家の前にいた。

「サイタマー！いないのか？」

ドアを叩く。しかし反応がない。

「留守なのか？」

「旦那なら妖怪の山に行きやしたぜ」

「え？」

魔理沙は声のする方に顔を向けた。其処には和服を着た人物がいた。しかし色々とおかしい部分がある。

「えっ…と、誰？」

「俺は旦那に助けられた妖怪でっせ、嬢さんは何の御用で？」

「いや…サイタマに用があつてな…で、サイタマは妖怪の山に行つたて？」

「ええ、そうつすよ。ジェノス君と一緒に」

「そうか…ありがとな！」

「いえ、なんの！」

魔理沙はその妖怪にお礼を言い、妖怪の山に向かった。

その頃サイタマは…

「結構深いな…」

落ちながら思っていた。と、その時足に何か粘着のある物が当たった。

「何だこれ？」

よく見てみると蜘蛛の糸だった。

「誰のだ？」

「それ私のだよ」

サイタマは声のする方に顔を向けた。其処にはこげ茶色の服を着て、金髪で下の方が若干膨れている少女がいた。

「お前のか、てか誰？」

「私は黒谷ヤマメ。土蜘蛛の妖怪さ」

「そうか、けどこの糸すげーな」

サイタマは関心する。

「そりやそうだよ、私の糸は頑丈だから「ブチッ！」え？」

突然音がした。それはサイタマがヤマメの蜘蛛の糸をちぎったからである。

「悪い、急いでるもんでね。じゃあな」

サイタマはそのまま飛び降りた。それにヤマメは

「私の糸は鬼じゃないと引きちぎれない程の強度にしたのに！」

彼女は悔しがつていた。しかしそれがサイタマに届く筈がない。

「むー！私の能力の怖さを思い知らせてやる！」

彼女の能力は病気（主に感染症）を操る程度の能力である。その為人間からは嫌われている。しかし明るい性格の為地下に墮とされた妖怪達からは人気者である。そして蜘蛛の糸から飛び降り、サイタマを追いかける。

四十二撃目：山の四天王は旧都にいる

「着地……と」

サイタマは地面に足をついた。辺り見渡すが暗くて見えない。

「先生、明かりをつけましょうか」

「おう、頼む」

一つ目のロボがライトを照らした。このロボはジェノスが操作している。その時、サイタマの頭に何かが当たった。頭に当たった何かを持つ。それは桶だった。中には緑髪で白い服を見た少女が入っていた。

「なんで首もげないの？」

「いきなり怖い事言うなよ。誰だ」

「私はキスメ、釣瓶落しの妖怪だよ」

「へー…此処って変わった奴が結構いるんだな」

サイタマは関心する。

「アンタも変わってると思うよ」

「そうか？」

「だってぶつかったのに首もげなかったんだもん。普通の人間ならもげてたよ」

「ふーん…じゃあな」

「うん、バイバイ」

サイタマは先へと進む。キスメは珍しく手を降っていた。サイタマの事を気に入ったのだろう、そこにヤマメが着た。

「キスメちゃん！さっきの禿げた人來なかつた？」

「禿げた人…？あ、サイタマならあつちに行つたよ」

キスメはサイタマが行つた方向に指を指した。ヤマメは後を追う。

妖怪の山では…

「黒谷ヤマメ…キスメ…共に人間から嫌われて地下に墮とされた妖怪か…」

ジェノスはその様子を調べていた。隣にはいつの間にかとりがいた。

「盟友…！こんな凄い機械を持つてたのか！」

「外の世界の科学力を舐めないでほしい。俺は使いやすい機械しか使わないからな」

「うむ！でもなんで師匠と同じ携帯電話を使わないの？」

にとりは尋ねる。ジェノスが持つてる携帯電話がサイタマと違うからである。

「先生が持つてるのはスマートフォンだ。俺では反応がしないからこれ使つてるだけ」

だ」

「そうか…」

にとりは関心してこう思った。

あの盟友の携帯電話を借りて同じ物を作ってみよう！と

地下のとある橋：其処には橋姫、水橋パルスイがいた。彼女は非常に嫉妬深いのである。

「妬ましい…：妬ましい…：地上にいるもの達が妬ましい…」

パルスイは相変わらず妬ましいを連呼していた。と、その時、

ビュッ！

風みたいな感覚が触れた。

「な、何!？」

パルスイは振り向く。しかし誰もいない。

「誰だったの…？妬ましい…」

彼女はまた、妬ましいと連呼した。その風の正体はサイタマだった。

「さつき橋に誰かいた気もするけど気のせいなのか？」

サイタマは気にせずまた先へ進んだ。そして…

「すっげー賑やかだなー」

サイタマは足を止めた。其処には人里に似た雰囲気の町並みだった。どの店も明かりがついており、騒がしかった。

「へー地下にも町があつたんだな」

サイタマは眩きながら歩いていると

「おいアンタ、趣味でヒーローやつてるサイタマだろ？」

声が出たのでそちらに向ける。其処には和服を着た者がいた。だが頭には角が生えていた。

「え？知ってんのか？」

「当たり前だよ、お前さんは時の人だからね」

「俺つてここまで知られてたのか…」

サイタマは驚き少し嬉しかった。

「てかお前…頭から角生えてるけど鬼かなんかか？」

「そうだ、勇儀姐さんと地上から来たんだよ。ちよつと俺と力比べしないか？」

「おう、いいぜ」

サイタマと鬼は力比べをした。と同じ時間、その様子を見てる影があつた。

「あれが噂の外来人かい？」

金髪で赤い一本角が生え、杯を持った鬼が言う。

「ええ、間違いありません。しかしそんなにも強くない気もしますが……」

隣にいた鬼は疑わしそうに言う。

「見た目で判断するんじゃないよ。噂では一撃で怪物を倒したって言うからね」

「一撃で!?だとしたらいくら姐さんでも……」

「怯えてんじゃないよ!鬼の名が泣くよ?」

「すみません……」

「わかればいいよ。……けど……あの外来人の強さが気になるね……」

その鬼は怪しげな笑みを浮かべてサイタマの様子を見る。その鬼は伊吹萃香と同じ山の四天王であり、鬼の中でも最強と言われる星熊勇儀だった

四十三撃目：鬼にとって此処にいるのは楽しいのことで
す

く妖怪の山の頂上く

「やつと着いたぜ…」

魔理沙が今更ながらも温泉近くの穴に着いた。

「此処の奴らも言ってたからな。急がないと」

魔理沙はその穴に入っていった。同じ頃テントの中では…

「河城にとり…」

「ご、ごめん盟友…」

ジェノスはにとりを睨み、そして騒がしい声をする方に顔を向ける。其処にはにとりと同じ河童達がいた。おそらくネットワークで集まったのだろう。

「何故こんなにもいる」

「いや…ちよつとね…」

にとりは目を逸らしながら言う。それはそうである、現在テントの中には無数のモブ河童がいるからである。中には目を輝かせながらジェノスを見てるのもいた。

「とりあえず…許して下さい」

「ま、いいだろう」

ジエノスはにとりを許し、引き続きサイタマの様子を見る。にとりとモブ河童もそれを見る。

旧都では…

「いだだだだ！参った！参ったからやめてくれえ！」

1人の鬼が悲痛な叫びを上げて降参する。

「え？冗談だろ？」

サイタマは疑わしそうに言う。彼は今鬼と力比べをしていた。そして鬼から手を離す。

「萃香が鬼は妖怪の中でも強いって言ってたのにな…」

サイタマはがっかりする。と、其処に

「ならあたしが相手してやろうか？」

「え？」

声がしたのでそちらに向ける。其処には一本角の鬼がいた。星熊勇儀だ。

「お前が勇儀か？」

「お、知ってんのかい？」

「いや、さつき力比べした鬼から聞いた」

サイタマは先程力比べした鬼を持つ。

「そうか…で、アンタがサイタマかい？」

「そうだけど…お前強いのか？」

「舐めてもらつたら困るよ！あたしは山の四天王と呼ばれてたからね」

「山の？…あ、もしかして萃香と同じか？」

「そうだよ」

「そうか…どおりでだ」

サイタマは先日萃香と会つた時に山の四天王が揃つた写真を見せてもらつた事を思い出した。

「しかし、萃香と知り合ひであたしの同胞に勝つとはね…：氣に入ったよ！どう？あたしとやるかい？」

「やるよ、けどがっかりさせんじゃねえぞ」

サイタマは目つきが変わつた。しかし心の中では期待していた。

「お前さんこそ、がっかりさせないでほしいね」

両者は構えた。この戦い（というより力比べ）に大勢の妖怪が集まつてきた。

「え？此処ってどのくらいいるの？」

「数え切れない程いるね。こここの奴らは全員地下に墮とされた者達だよ」

「じゃあ、お前もか？」

「あたしはちよつと違うね」

「？」

サイタマは首を傾げる。

「あたしは単に地上にいる事に嫌気がしてね、自主的に此処に来たんだよ。今は此処での暮らしが楽しいがね」

「そうか」

サイタマは興味なさそうに返す。

「さてと…やろうか？」

「ああ、そうだな」

再度2人は構えて

「「やあ、やろうか！」」

サイタマと勇儀は激突した。

その頃サイタマを追っているヤマメはというと

「あれれ？いつもより静かなような…」

ヤマメはやつと旧都に着いた。しかしあまりの静かさに疑問をもった。

「もうちよつと奥に行ってみよう」

ヤマメは奥へと進んで行った。サイタマと勇儀が激戦を繰り広げるとは知らずに

四十四撃目：山の四天王 v s 最強の男

「結構静かだな…」

魔理沙も旧都に着いた。この静かさが不気味だ。

「ん？なんだあれ？」

魔理沙が目につけたのはヤマメだった。

「おい！アンタ！何処に向かってんだ？」

「わっ！人間!!」

ヤマメは驚く。後ろから呼びかければ誰もが驚く筈だ。

「脅かして悪かったな。私は霧雨魔理沙！普通の魔法使いだ！」

「私は黒谷ヤマメ、土蜘蛛の妖怪さ。ちよつとある人間を「ドゴーン！」何!!」

突然爆発音が聞こえた。奥からだ。

「何だ今の!?行ってみよう！」

「うん！」

魔理沙とヤマメは急いで奥へと進んだ。

その爆発音の元凶では…サイタマと勇儀の激戦だった。

「お前、今まで手抜きだったろ？」

「そういえお前さんもそうだったんだろ？」

サイタマと勇儀は互いに笑いながら言った。そして再開する。勇儀の拳がサイタマに当たる。勇儀は鬼の中でも最強と言われており、普通ならば当てるだけで重症程度には済まない。

「お前さんなら、これくらいでは死なないであろう!？」

その通りである。サイタマはこれくらいで死ぬ程弱くはない。飛ばされて壁に激突したがなんともなかった。

「結構重い拳だったな」

サイタマもお返しのもつりです少し強めの普通のパンチを放つ。が

「あつ…」

サイタマは思わず口を開けてしまった。それは…当てた場所が勇儀の顔だったからだ。勇儀は飛ばされ壁にめり込む。

「いや、すまん！決してわざとじゃないんだよ？ただ、偶然………あ」

サイタマは謝る。そして壁にめり込んでいた勇儀が出てくる。

「お前さんには本気で戦ってみたくなくなったよ……！」

勇儀は怒ってるより寧ろ喜んでいた。久しぶりに強き者と戦えたからなのであろう。

「そうか。（よかった……怒ってなくて）」

サイタマはホッと胸を撫で下ろす。そして心の中では安心した。

「あたしは本気でやるけどお前さんはどうする？サイタマ」

「お前が本気を出すなら……俺も本気で行くわ」

サイタマは本気を出した。しかし周りから見ればそうには見えない。しかし勇儀にはわかっていた。

「（この男からはヤバい気迫がある！）」と

妖怪の山の頂上では……

「すげえ！」

にとりがモニターを見ながら興奮していた。

「星熊勇儀……先生と同じ実力を持つてるとは……！」

ジェノスは驚く。2人＋大勢のモブ河童はその様子を見ていた。

「けど勇儀姐さんと互角に戦えるなんて盟友の師匠すごいよ！」

「当たり前だ、先生に勝てる者などいないからな」

興奮して言うにとりに対しジェノスは当然のように答える。そして再び様子を見る。

旧都のとある居酒屋…

「なんか騒がしいな」

とある男が席を立つ。少し汚れた白いコートを着、黒のタンクトップと灰色のジーンズを履いており顔肌は異様に白かった。

「ああ、勇儀さんと時の人の外来人と戦ってるって話しだぜ」

横にいた鬼がその外来人に関しての新聞を見せる。それにその男は

「まさか……」

突然男は店から出る。

「おい！どうしたって言うんだ!？」

男は鬼の言うてことを無視して音のする方に向かって走って行った。

「本当に居たんだな…サイタマ！」

そこ男はサイタマの事を知っていた。

四十五 撃目：鬼との決着

「音が近い……！」

「本当だ！」

魔理沙とヤマメは音のする方に近づいていた。そして2人が目にしたのは……

「サイタマ!!」

「勇儀さん!?!」

2人は驚く。それはサイタマと勇儀が空中で殴りあっていたからだ。

「ねえ……魔理沙……あのハゲの人って本当に人間なの?」

「一応……な」

魔理沙は苦笑いしながら答える。もう鬼と互角にやり合える地点で人間と信じる事は出来ない。と、その時

「やるねえ……これが本気かい?」

地面に着いた勇儀がサイタマに向かって言う。

「一応な」

サイタマは緊張感のない顔で言った。

「そうかい…なら、あたしの奥義を見せようか」

「え？マジで？」

サイタマは期待する。

「…と、その前に」

勇儀は一つの弾を放つ。サイタマはそれを普通のパンチで跳ね返そうとする。しかし

「重いなこれ」

その弾は非常に重かった。だがサイタマは力を入れて跳ね返す。

「な!?!」

勇儀はあまりに予想外だったのか、驚きながらも跳ね返ってきた弾を避ける。

「まさか…あたしの弾を跳ね返すとはね…だけどこの奥義は跳ね返せないよ!」

と、勇儀は言うとながった。

「？」

サイタマは首を傾げた。彼から見れば勇儀は謎の行動だったからだ。

「一步…」

勇儀は一步前を出す。サイタマは未だに理解してなかった。

「二歩…」

更にもう一步……この時はサイタマはやっと理解できた。

「3歩でなんかしてくるのかな？」と

「三步……目！」

三步間を前に出した。そして

「四天王奥義！三步必殺！」

勇儀の目の前から無数の弾幕が現れてサイタマを襲う。

「これがお前の奥義か……こっちも見せてやるぜ、俺の奥義をな」

サイタマは構える。これを遠くから見た魔理沙はわかつていた

「これ絶対マジシリーズだな」

「何それ？」

「サイタマの奥義っていうか……切り札っていうか……」

「信じてないの？」

「まあ……うん」

信じられるはずもない。しかし魔理沙は見てきた。サイタマのマジシリーズを、レミリアとフランの融合弾幕や神奈子が放った無数の弾幕をマジシリーズで跳ね返したシーンを。

「必殺マジシリーズ……マジ・連続パンチ！」

サイタマはマジ・連続パンチを放った。そして弾幕を勇儀に向かって跳ね返す。
「な!? あたしの奥義が!？」

勇儀は驚く。しかも予想外すぎて動けなかった。しかし弾幕は当たらなかつた。
「そうか…なら、これならどうだい!」

勇儀はサイタマに向かって行き、鬼の拳をしようとした。それにサイタマは
「マジシリーズ…マジ殴り!」

ここで予想もしなかつた事が起きた。それは…
「あ、ヤベエ…」

サイタマのマジ殴りが勇儀の顔に命中した事だ。そして飛ばされて壁に激突する。
「すまん! わざとじゃないよ? 偶然だからな!」

サイタマは謝ったが内容は無茶苦茶だった。
「サイタマ…」

勇儀がサイタマの目の前まで行く。そして…
「サイタマ! お前さん最高だよ! ハハハ!」

「え?」
勇儀はサイタマの肩を叩く。流石のサイタマも戸惑う。

「お前…大丈夫か?」

「大丈夫だよ……っって痛ッ！」

勇儀はサイタマに殴られた数ヶ所の痛みが今効いた。

「おいおい、大丈夫か!？」

サイタマは勇儀を肩にかける。

「大丈夫だよ……鬼はこれくらいどうっってことないよ」

「いや……そうには見えないけど」

サイタマは呆れながら勇儀を見る。だが大丈夫そうに見える。と、そこに

「サイタマ！」

突然男が前に現れる。サイタマの事を知っていた。

「ん？あ！ゾンビマン！」

「久しぶりだな」

サイタマは驚く。その男はS級8位のヒーロー、ゾンビマンだったからだ。

四十六撃目：地霊殿に行こうか

「お前も幻想郷に来てたのか？」

「ああ、目覚めたのは此処だがな」

「そうか…え？」

サイタマはゾンビマンの答えを聞いてふと思った。これってフラッシュと同じなんじゃ…と

「俺はお前が幻想郷にいるって八雲紫が言うから此処に来たんだよ」

「そうだったのか…」

ゾンビマンによるとサイタマに用があつてヒーローズマンションに来たものの留守で協会の職員に聞いた所、博麗神社に調査に行つたと聞き博麗神社行つた時に紫と出会い幻想郷に行つたのだ。しかし目覚めた所がこの旧都だったのだ。

「そこで俺は此処の妖怪に助けてもらっただよ…ってサイタマ、隣にいるのは誰だ？」

ゾンビマンは問う。サイタマの横に知らない魔女がいるからだ。

「お前いついたんだよ…」

サイタマの隣にいつの間にか魔理沙がいた

「さつきから。けどサイタマ、お前本当に人間か？なんか疑わしいんだけど」
「人間だ」

「サイタマは強さは尋常じゃないからな」

「ゾンビマンお前…」

と、その時

「先生、異変の元凶は地霊殿だそうです」

ジェノスが操作している一つ目のロボが話した。

「そうか」

「その声は鬼サイボーグか!？」

「…ゾンビマン!? 貴様も来てたのか!？」

ゾンビマンは驚く。そしてジェノスも驚いた。

「けど、とりあえず地霊殿行こうぜ」

「そうだな」

サイタマは地霊殿に向かう。魔理沙は後を追う。残ったゾンビマンと一つ目のロボ

は…

「鬼サイボーグ…お前は地上にいるのか?」

「そうだ。このロボを使ってサイタマ先生をサポートしている」

「そうか…じゃ俺もサイタマの後を追うわ」

ゾンビマンもサイタマ達の後を追った。

地上では…

「まさかゾンビマンまでいたとはな…」

ジェノスは呟いた。しかしにとりとモブ河童達は何故か見てなかった。この事をジェノスは呆れる。

「(コイツらはメカ以外には興味ないのか?)」と思っていた。

地霊殿前…

「此処が地霊殿か」

「なんか気味悪いな…」

「しかし何故此処にあるんだ?」

サイタマ、魔理沙、ゾンビマンは地霊殿の門の前にいた。

「じゃ行くか」

サイタマは問題無用と門を開けて行く。

「いやちよつと待て……」

魔理沙とゾンビマンは止めようとするがサイタマは無視した。2人も仕方が無くついでに行った。

「おーい！誰かいないのかー？」

サイタマとドアを開けて叫ぶ。

「だからサイタマちよつと」誰ですか？」え？」

3人の前に少女がいた。ピンク色の髪に水色の服を着ていた。そして赤い一つ目もあつた……

「いついたんだお前、てか誰だ」

サイタマは驚きながらも単刀直入に聞く。

「私は古明地さと……この地霊殿の主です」

「そうか……（本当にこのチビが主なのか？）」

「本当です。小さいことはよく言われます」

「え？（今俺が思った事だよな？）」

「そうです。私はさとり妖怪ですので貴方の心を読めるのです」

「この事にサイタマは驚く。そして

「その魔法使いさん、気持ち悪いと思ったでしょ？」

「ギクツ！」

さとりは魔理沙の心を読み取った。

「そして…貴方は…本当にそう思ってたのですか…!？」

ゾンビマンの心を読み取った時、さとりは驚いた。

「そうだ、別に気味悪いとは思ってねえよ。寧ろ会話が省けるから便利だと思うんだがな」

「あ！俺もそう思った！」

ゾンビマンの言った事にサイタマが同情する。

「本当にそう思っていただけなんて…嬉しいです…」

さとりは泣き始めた。今まで彼女はこの能力のせいで人間どころか妖怪にすら嫌われてしまい地下に逃げ込んだのだが、地下に墮とされた妖怪達からも嫌われてしまいこの地霊殿に閉じこもっていたのだ。自分を理解してくれるのは妹とペットだけと思っていた。しかし前にいる人間が私の事を気味悪いとは思ってなかった！

「泣くなよ…」

サイタマがさとりの頭を撫でる。

「とりあえず…私の部屋まで来てください…」

さとりはサイタマ達を自分の部屋に招待した。部屋に行く途中魔理沙が

「お前ら…なんとも思わないのか？」

「別に思わないが…なんで？」

「いや何でって…さとり妖怪は嫌われて者だぞ？」

「別に心読める位で気味悪いとか思わねーよ」

「サイタマと同じく、俺もそう思わない」

「やっぱりお前ら変わってるわ…」

魔理沙は呆れる。そしてさとりの部屋に着き、入る

四十七撃目：お燐という名のペット

「そうだったのです…！どおりで見た事のある格好でした…！」

さとりは目を輝かせながら言う。人気者であるサイタマ本人に会えたからである。

「うん（てか趣味でヒーローやってる俺をヒーロー図にしているのか？）」

サイタマは頷くが心の中では趣味でヒーローをやってる自分をヒーロー図にしているのかって思った。

「そんなことありません！趣味であってもヒーローは憧れの存在なのです！」

「あ、そう…」

さとりはその事を全くと言っていい程気にしてなかった。その事にサイタマは背筋が凍った。

「ところでゾンビマンさんもヒーローなのですか？」

「一応な」

ゾンビマンはそっけなく答える。

「そうですか…」

さとりはしゅんとする。ゾンビマンがあまりにも対応が冷たかったに違いない。

「ゾンビマンお前…」

魔理沙が問う。しかしゾンビマンは

「俺はいいんだよ。幻想郷内ではサイタマの方が知れ渡ってんだからよ」

「あーそすか…」

魔理沙はそつけなく答える。そして

「ところでこの地霊殿に何の御用で？」

「ジェノスが 霊鳥路空の暴走を止めろって耳にしたから気になったもんで来た」

「あ！それ私もだ！」

「俺はサイタマとこの白黒魔女に同行しただけだ」

サイタマと魔理沙は同じ事でゾンビマンは単に同行しただけだった。

「お空が!」

さとりは驚く。

「え？お空って誰？」

「いや普通にわかるだろ！霊鳥路空の事だよ！」

魔理沙がサイタマの耳元で言う。

「お前は知らなかったのか？」

「そういえばあの時…お燐が慌ててた事をしょっちゅう見かけました」

「お燐って誰だ」

サイタマは尋ねる。

「火焰猫燐の事です。火車の妖怪で私のペットです。見た目猫ですが」

「いや、火車の妖怪で見た目猫はおかしいだろ」

「サイタマ、年を経た猫は火車に変化するらしいぜ」

「マジか」

サイタマと魔理沙が会話をしていると

ニヤーン と猫の声がした。

「あれがお燐です」

「え？」

サイタマはその猫を見る。黒猫であり、耳にリボンが着いており尻尾が二尾である。

「魔理沙さんが言ったように長年生きた猫は尻尾が二尾に別れます。あ、言っただけです」

「あ、うん」

と、その時

「やっぱり猫の姿だとさとり様以外の人の会話がわからないや」

お燐が人間らしき姿に変わった。

「あ、アタイが火焰猫燐だよ。お燐と呼んどいてくれよ」

「俺はサイタマ。趣味でヒーローをやってる者だ」

サイタマは自己紹介する。

「おー！アンタがサイタマか！噂は聞いてるよ」

「私はきりさm」あ、アンタはいいよ」なんでだよ！」

魔理沙も使用としたが断られてしまった。

「それと…隣にいるお兄さんは…？」

「俺はゾンビマンだ」

「ゾンビ!?なのになんで普通にいられるの!?!」

「余計なお世話だ。俺は普通のゾンビと違うからな」

しかしお燐は興奮を隠せてなかった。

「お燐は死体を運ぶのが好きなので…恐らくゾンビマンさんの事で興奮してるのです」

さとりは相変わらず冷静(?)に答える。

「サイタマ！お空の暴走を止められるよね!?!」

「俺はそのつもりで来たんだが」

「なら話が早い！さー！こっちに来ておくれよ」

お燐はサイタマをある場所に案内する。

「サイタマが行くなら私m「あ、アンタらは来なくてもいいよ」だから何故!？」
魔理沙はまたもや断られてしまった。

「何でサイタマは良くて私はダメなのお!？」

「白黒魔女、落ち着け」

「そうですよ、此処はサイタマさんに任せておきましょう」

「うーす」

ゾンビマンとさとり止められてた仕方が無い。魔理沙は諦めた。

妖怪の山頂上では

「古明地さととり…一番の嫌われ者か」

ジェノスは様子を見ていた。モブ河童達にいじられながら。

「盟友!その体を参考にさせてくれ!」

「待て!私が先だぞ!」

「貴様ら煩い。集中ができない」

騒がしいモブ河童だったがジェノスの一言でピタリと止めた。

「火焰猫燐は…それ程危険はなさそうだな…」

「盟友、やっぱり地下が原因だったのかな」

横でにとりが言う。

「恐らくそうだろう。火焰猫燐が先生を信用しているから違くない」

「そうだね」

四十八撃目：八咫鳥の力を持つ地獄鴉

「此処ら辺なんか熱いな」

「そりやそうだよ、地霊殿は灼熱地獄に近い場所に建てたんだからさ」

サイタマとお燐は地霊殿の奥へ奥へと進んだ。

「てかさ何でお空の暴走を止めろって言ってたんだ？」

「それはね……」

お燐は語った。この事を地上の者に伝えようとした事を……

数ヶ月前……

「お姉さん誰？」

お空こと霊鳥路空はとある場所にいた。目の前には……八坂神奈子がいた。

「我は八坂神奈子。神である」

「神様がこんな地下に何の用なの？」

お空は尋ねる。

「お前に八咫鳥の力を授けるためにね」

「八咫鳥？何それ？」

「太陽の化身とも云われる鴉だ。地獄鴉であるお前に授ける為に来たのだ」

「なんか面白そう！その力頂戴！」

「話が早い…授けよう！お前に八咫鳥の力を！」

その後神奈子から八咫鳥の力をもらったお空は次第に暴走し始めた。この事に気づいたお燐は亡霊を使い地上の者達に伝えた。

「それで新聞でお兄さんの記事を見てこの人ならお空を止めれると思ったんだよ」

「そうか（てか神奈子こんな事してたのかよ…）」

サイタマは何とか話を理解した心の中では神奈子のやった事に少々呆れていた。

「とりあえずお空に勝てばいいって事だろ？」

「そんな感じだよ」

そして2人はお空のいる灼熱地獄へと来た。其処には…

「神様から貰ったこの太陽の化身の力を持つ核融合！私はまさに無敵！この力を使えば地上を簡単に征服できる！此処にニューお空、見参！」

1人叫んでるお空がいた。右手にな神奈子から授かったとされるのがある。

「なんだあのイカレた鳥は…あれがお空？」

「え…まあ…うん」

お燐は苦笑いしながら答えた。八咫鳥の力を得てからあんな風になってしまったら

しい。

「あ！お燐！それと…隣のお兄さんは誰？」

「サイタマだ。趣味でヒーローをしてる者で、お燐からお前の暴走を止めてほしいから来た」

「ヒーロー!?!まさか私を倒しに来たの!?!」

「それ以外なんか思いつくのか…?」

サイタマは呆れる。お空が予想以上にバカだったからだ。

「サイタマ、なるべく早く頼むよ」

「あ、うん。わかった」

と、その時

「喰らえ！」

お空の右手に付いている核融合から放射線のようなものが出た。サイタマはすかさず避ける。お燐を持って。

「予想以上にすごいな…」

サイタマはゾツとした。さっきいた場所が跡形も無くなっていたからだ。

「それ！もう一回放つ！」

お空はもう一回放つ。

「サイタマ！」

お燐は叫ぶ。しかしそこにサイタマはいなかった。と、その時「あぶねー…服が燃えるところだった」

サイタマは間一髪避けて無事だった。しかし一部汚れている。

「おのれえ…これで仕留める！」

お空は発射しようとする。その間にサイタマが

「それ！」

お空の核融合に向かって何かを投げた。それがすつぽりとはまった。

「うにゅ？」

お空は気付き中を見る。しかし暗くてわからなかったのか

「まあいいや！いくよ！」

お空は気にせず放つ。すると

ドカーン!!

「え!？」

お燐は驚く。それはお空が爆発したからである。いや詳しくは核融合が爆発したのである。そして黒焦げになったお空は落ちて倒れてしまった。

「サイタマ…何をしたんだい？」

「お空のなんか右手に付いてる変な物に石入れたただけだけど？」

「それで爆発するものなの!？」

「いや俺に聞くなよ。それより助けなくていいのか？」

「あ! そうだった! お空ー!」

お燐はお空の元に行った。

その後地霊殿に戻り意識を戻したお空から話を聞いたのだが山の神社の神様から貰ったこと以外全く覚えてなかった。仕方が無くサイタマは守矢神社に向かう事にした。

「結局守矢の仕業かよ…」

サイタマはブツブツと言いながら守矢神社に向かっていた。と、其処に、

「あ! サイタマさん! 信仰しに来てくれたのですか!？」

守矢神社の巫女である早苗が近づいてきた。

「いや俺は神奈子に用があつて来たんだよ」

「そうですか…それと神奈子様は今留守です」

「なんだよそれ…」

サイタマは項垂れる。時間の無駄だったと思いつながら帰った。

「(あの子誰だろう?)」

早苗は首を傾げた。それは…サイタマの背中に帽子を被った少女がしがみついていたからだ。

家に着いたサイタマはテーブルにあつた紙切れに目がついた。

「なんだこれ？」

サイタマは見ている。そこには

『拝啓 先生へ 俺は元の世界に帰らせていただきます。理由は俺には暴走サイボーグを倒さなければいけない事を思い出したからです。しかし先生は幻想郷でのヒーロー活動を引き続き頑張つて下さい。 ジェノスより』

「ジェノス…帰ったのか…」

「ねーねーその人とお兄さんはどういう関係なの?」

「ジェノスは俺の弟子…つてお前誰だ!?!」

「あ、きづいた?」

サイタマは驚く。後ろに見知らぬ少女がいたからだ。帽子を被っており、緑髪で黄色の服に黒のスカート。さとりにも似た青のサードアイがあつた。しかし目は瞑っている。

「私、古明地こいしです♪宜しくお願いします♪」

「よ、よろしく…」

サイタマとこいしは握手する。

「話はお姉ちゃん聞いてま〜す♪」

「え？もしかしてさとりの妹か!?」

「せいからい♪」

こいしは楽しそうに話す。

「で、なんで此処にいるんだ？お前の姉さんも心配してるぞ？」

「うんうん、大丈夫。お姉ちゃんはそのうちの気にしてないから大丈夫！」

「お前…お気楽すぎないか？」

フリーダムすぎるこいしにサイタマは呆れる。

「あ、それとお兄さんに話たいことがあるの」

「なんだ？」

「私を…弟子にして下さい！」

星蓮船編

四十九撃目：新たな弟子

「うん、絶対ダメ」

サイタマは断った。しかし

「ヤダ！お兄さんがダメって言ってもお姉ちゃんは良いって言ってもん！」

こいしは諦めてない。

「じゃあ、さとりで電話してみるわ」

サイタマはスマホを取り出し地霊殿に直接電話をかける。理由はさとり自身携帯電話を持ってないからである。

「もしもし？」

「おっ！サイタマか！何の用だい？」

電話に出たのはお燐だった。

「お燐か、さとりで用があるけど変わってもらってもいい？」

「さとり様に？わかったよ」

お燐はさとりを呼び、電話を変える。

「サイタマさん、どうかしましたか？」

「お前の妹が俺に弟子入りしたいって言うからさ、お前は良いのかって話」
「絶対ダメです」

「さとりも断った。」

「だってよ」

サイタマはその事をこいしに言ったが…

「ちよつと電話貸して！」

「こいしはサイタマから電話を取る。」

「お姉ちゃん！何でダメなの!?!」

「当たり前でしょ！私が心配するのよ！貴女が地霊殿に帰ってない事に！」

「いいじゃん別に！誰も心配してないんだからさ！」

もはや姉妹喧嘩に近かった。それとさとりはシスコンである。その為こいしが何日も帰って来ないと心配になる。

「良くないわよ！サイタマさんに迷惑かけるつもりでいるでしょ！」

「かけるつもりなんてないもん！私も強くなりたいもん！」

こうして電話での喧嘩は3時間にも及んだ。肝心のサイタマは呆れながら見ていた。漫画を読みながら。そして…

「お兄さんバイバイ！」

こいしは手を振って帰った。さとりの言った事に納得し、弟子入りするのをやめたそうだ。

「あー疲れた。充電しとかないとな」

サイタマはこいしとの付き合いいで疲労感があった。そして電池切れ間近のスマホを充電した。

数日後…

サイタマの家のドアの前に白い髪の見知らぬ女がいた。そして

「師匠！」

と叫んだ。サイタマがドアを開ける。

「マジで来やがったよコイツ…」

「私は藤原妹紅です！」

女は藤原妹紅と言うらしい

「名前はいいからとりあえず入れ」

サイタマは妹紅を中に入れる。

「で、俺に何の用だ」

サイタマは妹紅にお茶を差し出す。

「貴方に弟子入りがしたくて此処に来たのです！」

「お前なあ、俺は弟子なんて募集してないぞ」

「そこをなんとか！」

「…………理由を話せ」

「わかりました」

妹紅は弟子入りしたい理由をサイタマに話した。しかし余りに長すぎたのか

「馬鹿野郎！話が長い！20文字以内でまとめやがれ！」

「20文字以内で!?わ！わかりました！」

妹紅は戸惑ってしまったが何とか頭の中で整理をした。

「20文字以内にまとめました。師匠みたいに強くなる方法を教えて下さい！」

それに納得したのかサイタマは

「妹紅：お前は今何歳だ」

「え？」

「覚えてないならそれでいい。俺は今25だ。そして強くなる為にやったトレーニングを始めたのは3年前の22の時だ」

「3年前に!? 本当ですか!」

「ああ、俺は就職活動に行き詰まっていたごく普通の何の取り柄もないただの青年だった。しかしある時、怪人に襲われてた餓鬼を助けた事で子供の頃憧れていたヒーローをなろうと決心し、トレーニングを始めた。そのトレーニングがこれだ!」

サイタマは自身がやったトレーニングを妹紅に説明した。そして妹紅は

「つまり…努力は報われる。ことですね」

「おっ! 信用してくれるのか?」

「はい! 師匠の言う事は全て信用しますので!」

「ならそれでいい…そしてお前を」

「お前を…?」

「俺の弟子として認める!」

「ありがとうございます! 私、藤原妹紅! 師匠の為に頑張ります!」

「程々にな」

こうしてサイタマに新しい弟子、藤原妹紅ができた。

「暇」

「だからなあ…」

霊夢は相変わらず暇だった。

「霊夢…異変解決に行ったらどうだ？」

「サイタマがやってくれてるから行く気にならない」

「それでよく博麗の巫女でいられるな…」

魔理沙は呆れる。

「しよーがない、また私一人で行ってくるか…」

魔理沙は神社から出た。

五十撃目：天翔る舟

妹紅が弟子入りして3日が経った。

「今日は散歩日和だな」

「そうっすね」

2人は今、散歩をしていた。その最中に妹紅が

「面白いや師匠、舟のことご存知ですか？」

「舟？何の事だ？」

サイタマが疑問を持つ。

「最近、空飛ぶ舟を見かけるって噂があつたので……」

「そうか。………ひよつとしてあれか？」

「え？」

サイタマは指を指す。妹紅はその方向を見る。其処には

「あれです！あの舟です！」

妹紅が驚きながら言う。噂になつてゐる空飛ぶ舟とはその事だった。

「マジか！………行ってみるか」

「はいー………つてえ!？」

妹紅は驚く。え？今師匠何て言った？と心の中で思った。

「師匠……本気ですか？」

「え？本気だけど？」

サイタマは相変わらず呑気だった。しかし妹紅は

「いやいくら師匠でも無理かのでは……？」

「あー大丈夫。冥界にも行ったことあるから大丈夫」

サイタマは準備体操をしながら言う。確かにサイタマは助走をつけて飛び、冥界に繋がる渦に入ったことがある。

「わかりました……」

「よし、しっかりと捕まってるよ」

妹紅は言われるがままにサイタマにしがみつく。そしてサイタマは助走をつけて飛んだ。舟までに。その様子を魔理沙が見ていた。

「サイタマ……お前が人間とは思えない……てか、しがみついている奴は誰だ？」

魔理沙はサイタマの後を追う。

舟では…

「あれは何？」

尼と入道雲が舟に迫つて来るのを見る。と、其処に

「一輪、雲山、どうかしたのか？」

ネズミの少女が彼女に気になったのか来た。

「あ、ナズーリン、あれ何だかわかる？」

一輪は迫つてくる者を指を指す。

「んー頭光つてる人間と白い髪の人間だな」

ナズーリンは答える。

「そっかー、…ええ!？」

一輪は驚いく。その時、

「お、着いた」

「師匠…」

サイタマと妹紅が例の舟に着いた。妹紅は何故かぐつてりしてた。

「ん？お前からどうした？」

其処には呆然としてたナズーリンと一輪がいた。

「え？どうやって来たんだ？君達は…」

ナズーリンがおそるおそる質問する。

「助走して飛んだだけだけど？」

サイタマは普通に答える。

「師匠…それじゃあ嘘っぽいすよ」

妹紅が耳元で言う。妹紅自身はサイタマが助走して飛んだのは見ている。しかし信じてもらえるかが不安である。

「いや…流石にそれはu「サイタマー！」」

突然後ろから声がした。見てみると魔理沙がいた。

「魔理沙、お前も来たのか。てか霊夢は？」

「ちよつと気になったな。霊夢は行く気ないって」

「なんだよそれ…」

サイタマは呆れる。

「ちよつと待って下さい！」

突然一輪が割り込んで来た。サイタマ以外は驚く。

「え？…一輪…どうした？」

「サイタマって…趣味でヒーローをやってるあのサイタマさんですか!？」

「え？そうだけど？」

「やっぱり！」

一輪は驚きを隠せない。何故ならサイタマ本人と会えたからである。

「えつと…サイタマ君？それは本当なのか？」

「うん、本当」

「そうか…ちよつと一輪」

ナズーリンは一輪と小声で話した。

「何？ナズーリン」

「ここは彼に協力してもらわないか？」

「え？何で？」

「敵を一撃で葬る程の力を持つサイタマ君なら頼もしい味方になるかもしれんぞ」

「あ！それはありえる！」

「そうだろ？」

ナズーリンと一輪の会話は知らぬ間に盛り上がっていた。そして

「サイタマ君！ちと私達に協力してもらえぬか？」

ナズーリンはサイタマに協力してもらえる用言だったが…

「ナズーリン、サイタマさんいないけど」

「そんな訳が…っていない！」

ナズーリンは見回す。サイタマの姿がないからだ。

「サイタマ何処にいったんだ!？」

魔理沙も見回すがサイタマの姿が見当たらない。そこに妹紅が

「あ、師匠なら船の中を見に行つてくるって言つてたぞ」

「「はあ!？」」

3人は驚く。そして船の中に入ってサイタマを追う。妹紅もついていく。

舟内部の司令室らしき場所

「星蓮船！今日も異常なし！」

水兵の格好をした少女、村紗水蜜が機嫌よく言う。

「けどさっきナズと一輪が騒いでたけど何があつたんだろう?」

村紗は首を傾げる。

「この舟何処に向かつてんの?」

後ろから声がした。

「忘れたのですか? 魔界ですよ。聖を助けに行く為に……え?」

村紗は振り向く。其処にサイタマがいたからだ。

「えつと……どちら様ですか……?」

「俺？サイタマだけど」

「サイタマ……って、趣味でヒーローやってるサイタマさんですか!？」

村紗は驚く。てかこれ一輪と同じパターンじゃねえか。

「サイタマ（師匠）！」

其処にナズーリン、一輪、魔理沙、妹紅が入って来た。しかしいつペンに入ったのか崩れて倒れてしまった。

「お前ら何してんの？」

「「それはこっちのセリフだよー!」」

妹紅を除く3人が突っ込む。と、其処に

「どうかしたのですか？」

声が出た方に一同は向ける。其処には槍と宝塔を持ち、如何にも聖人っぽい人が現れた。

「あ、ご主人」

ナズーリンが言う。

「「ご、ご主人？」」

サイタマ、魔理沙、妹紅が尋ねる。

「私は寅丸星と申します。貴方がサイタマさんですよね」

「そうだけど」

「やはりそうでしたか……ちよつと頼み事がありますがいいでしょうか？」

「おう、いいぜ」

「あのですね…」

私達に協力してくれませんか？」

五十一 撃目：役立たずの巫女

博麗神社…

「暇」

霊夢はまだ寝転がっていた。そこに

「霊夢ー行かなくていいのー?」

この神社に居候している鬼、伊吹萃香が来た。

「いいじゃないの別に。異変解決はサイタマがやってくれてるからさ」

霊夢は寝返りを打ちながら言う。この事を萃香は呆れた。

「霊夢…最近博麗の巫女が役立たずのズボラ巫女だつて言われるけど本当なのかい?」

萃香の口から思いもよらぬ事を言われた。

「え? 萃香…今何て…?」

「何てつて…役立たずのズボラ巫女つて言ったけど?」

「ちよつと! 誰が言つてたの!?!」

「人里の連中が言つてたよ」

数日前、萃香は人里の居酒屋に来ていた。其処で種族の違う妖怪や仲のいい人間達と

宴会をやつてた所にその事が耳に入った。

「この前では私の評判が……！」

霊夢は絶望した。まさかこんな事が言われてるなんて……と

「萃香！神社を頼むわよ！」

「おー任しとけ」

霊夢は急いで神社から出て噂の空飛ぶ舟、星蓮船を探しに行った。

「アイツ結構極端だね」

萃香は霊夢を見送つた後、神社の中に入っていった。

同じ頃守矢神社……

「やる事がない」

早苗が寝転がっていた。もはや霊夢と同じだった。その様子を神奈子が見ていた。

「早苗、サイタマみたいに異変解決や人助けに行つたらどうだい？あと信仰集めも」

「めんどくさいから嫌です」

「それでも巫女かお前は……」

「だつて異変解決とか人助けとかは巫女の仕事じゃないじゃないですか」

早苗が口を膨らませて寝返りを打ちながら言う。神奈子は呆れ果てる。

「全く…どうしたものか…」

と、其処に

「おい！早苗！」

其処に諏訪子が入って来た。見た目子供だが神様である。

「なんですか〜諏訪子様〜」

「早苗！お前のせいで守矢神社の信仰が悪くなってるんだぞ！少しは自覚はもて！」

「何で私のせいなんですか！」

早苗は反発する。

「うるせー！お前が何もしないからだよ！」

「確かに。最近早苗は何もしてないからな…けど博麗神社も信仰が悪くなってるわよ？」

「何で霊夢さんの神社も知ってるんですか!?逆にチャンスですよね!？」

「そうだけどねえ…最近はやイタマを支持する者達が増えているからねえ…」

「はあ!？」

早苗と何故か諏訪子が驚く。そうである。現地点で一番支持されているのはサイタマだ。この幻想郷に来てから数々の異変を解決し、人助けもしているから多くの者達から

支持されている。ファンレターや物資までもが届く程だ。

「あのハゲ野郎が支持されてるなど許さん！」

「私も黙ってる訳にはいきません！では、行ってきます！」

早苗は守矢神社を飛び出し、霊夢と同じ噂の空飛ぶ舟、星蓮船を探しに向かった。

「無茶しなければいいんだけどねえ……」

「確かに、早苗はまだ未熟者だからな！」

2人は早苗を見送った後、また神社に入ってしまった。

星蓮船では……

「協力して……ほしい？」

サイタマは聞き返す。

「ええ、そうです。私達に協力してほしいのです。貴方程の実力者ならば魔界に行っても怖いものなしですので」

星は淡々と言う。ナズーリン、一輪、村紗は目を輝かせながらサイタマを見つめる。

サイタマは考え込む。

「師匠、奴らは全員妖怪ですよ？こんな奴らに協力するのですか？」

妹紅がサイタマの耳元で小さく言う。確かにこの星蓮船の乗員は全員妖怪である。もしかしてラスキをつけてサイタマに攻撃するかもしれない。が、しかし

「いいぜ、協力してやっても」

「本当ですか!?!ありがとうございます!」

星は感激し、サイタマの手を握る。

「師匠! いいのですか!?!」

「いいに決まってるんだろ。困ってる人を助けるのがヒーローなんだしよ」

「……………そうっすね」

妹紅は直ぐに納得した。サイタマが言う事は必ず聞くからだ。

「私も協力するぜ! サイタマに目立ってばかりにはいかなからな!」

魔理沙も協力してやるかの用に言った。

「魔理沙さんもありがとうございます!」

星は魔理沙の手も握る。と、その時外から声がした。

「其処の舟待てやコラア!!」

「其処の舟! 止まって下さい!」

五十二撃目：いぎ、魔界へ

「霊夢……隣誰だっけ？」

「早苗だよ！てか何でだ!?!」

サイタマと魔理沙が外に出て見る。其処には霊夢と早苗がいたからだ。何故か競争しあつてるかの用に近づいてきてる。

「てか何でアンタまでいんのよ!」

「霊夢さんとサイタマさんばかりに目立ってもらつては困るからです!」

2人は言い合いながらも星蓮船に着いた。そして中に入る。

「何でいるの?……この茶温いな」

サイタマがお茶を飲みながら霊夢と早苗に尋ねる。

「私は汚名返上の為に」

「私は守矢神社が偉大である事を証明させる為です」

2人は答える。

「つまり……私達に協力してくれる事でいいですか?」

「それでいいよ（それでいいです）」

星の言ったことに霊夢と早苗は適当に返事した。と、その時

「こちら星蓮船船長村紗！ただいま星蓮船は魔界に近づいています！」

村紗から伝達が入った。魔界に近づいているみたいだ。皆は準備をする。その時サイタマが星に

「てか、魔界ってそんなに危険なのか？」

「はい、非常に危険な場所です」

「そうか…来てよかった」

サイタマは目つきが変わった。強い奴らに会えると思っただろう。そして魔界に到着する。

「すっげー気味悪いとこだな…」

魔理沙が言う。

「何か人間は入って来るなオーラが半端ないのですが…」

早苗が不安そうに言う。

「とりあえず片っ端から倒せばいいんでしょ？」

霊夢は相変わらず冷酷だった。

「ところで…サイタマさんは？」

星がサイタマがいない事に気づいた。皆は辺りを見るが姿がない。まさか…と思っ

た瞬間、妹紅が

「師匠なら先に行つたよ」

「「「「「はあ!」」」」」

今すぐ舟の内部から出る。その目の先にサイタマがいた。

「じゃ、私も行くので」

妹紅は舟から飛び降りてサイタマを追う。

「私達も行きましょう!」

霊夢達もサイタマと妹紅の後を追う。が

「アイツ早すぎ…」

「やっぱりサイタマは人間じゃないだろ…」

「趣味でヒーローをやつてるとは思えない程の体力です…」

「師匠…やっぱり恐るべき人だ…」

霊夢達は妹紅には追いついたもののサイタマとの距離が一向に縮まらない。それはそうである。サイタマの身体能力は超人レベルに近いからである。ヒーロー協会の職員が「彼の肉体に神が宿っている」と言われた程だ。

「てか、アンタ…よくサイタマに弟子入りしようと思つたわね」

霊夢が妹紅に尋ねる。

「あの方に弟子入りすれば強くなれると思つてね」

「いやそれは流石にm「バコーン！」何だ!？」

突然大きな音が響いた為、急ぐ。音がした場所にサイタマがいた。

「師匠…何があつたのですか？」

「え？何つて…コイツがいきなり喧嘩売つてきたから殴つた」

一同はサイタマが指さす方に顔を向ける。そこには魔界に住む怪物なのだろうと死体があつた。体に大きな風穴が空いている。

「あの…サイタマさん？それつて本気で殴つたのですか？」

早苗がおそるおそる尋ねる。それに対しサイタマは

「いや普通に殴つただけだけど？」

サイタマは相変わらず大雑把に答える。

「いや本気なのかそうではないのかを知りたいのです」

早苗ではなく何故か星が言う。其処にナズーリンが耳元で

「いやご主人、これはどう考えても本気で殴つたとは思えないだろう」

「確かにそうですが…サイタマさん、どうなんですか？」

「あ、そういう事か。本気じゃないぞ」

「あ、そうですか！……え？」

え、今、なんて言った？…と誰もが（霊夢、魔理沙、早苗除く）思った。

「師匠！冗談つすよね!!」

妹紅がすかさずサイタマに言う。

「いや冗談じゃないけど？」

「……………ですよね」

「納得するの!?!」

妹紅が直ぐに納得した事に一同が驚く。

「じゃ、俺先に行くわ。妹紅行くぞ」

「はい！師匠！」

サイタマと妹紅は先へと進んで行った。取り残された者達は…

「という事は…サイタマは今まで本気を出してなかったことになるわね…」

「それで異変解決できるっておかしくないですか!?!」

「確かにおかしいですね…」

「いやサイタマは本気出した事あるぞ」

「「「「え?」」」」

魔理沙の発言に全員が興味を持つ。

「え? 本当なの?」

「ああ、神奈子と勇儀に対して本気で勝負したって言ってた」
「『『『マジで?!』』』』」

一同は更に驚く。

「どつちが勝ったのですか!?!」

「普通に考えてサイタマさんでしょ…」

興奮する一輪に対し村紗は当たり前かの用に答えて興奮を鎮めさせる。

「まあその後は仲良くなってた」

「鬼と仲良くなれるってどんだけ強いんだよ…サイタマ君は…」

「まさか神奈子様と仲が良いとは…」

一同はサイタマの強さを想像とは覆す程の強さに驚いている。確かにサイタマは神奈子と勇儀と非常に仲が良い。強き者同士だからだろうか。

「あ!早く行かないとサイタマに先が越される!」

「あ!待って下さい!霊夢さん!」

霊夢と早苗は先へと急ぐ。余程サイタマに負けたくないのだろうか。

「じゃ!私達も行くか!」

「そうですね!」

魔理沙達も後を追う。

魔界のとある場所…其処には1人の男がいた。長く伸びた白い髪で黒鉄の鎧を装着しており、顔には鉄のマスクをしていた。

「まさか私の配下を一撃で葬るとは…！素晴らしい！」

その男はサイタマを称賛する。その横には…

「貴様も見てたか？…わかるはずもないか」

男は薄く輝く結晶を見ながら嘲笑うかのように言う。その結晶の中には…

聖白蓮が封印されていた。

五十三撃目：魔界の王

サイタマと妹紅は次々と襲ってくる魔界の怪物達を倒しながら先へと進んでいた。どちらかと言うとサイタマが倒しており、妹紅はサポートにまわっているという状況である。

「キリがないっね、師匠」

「そうだな」

しかし、余りに数が多すぎる。それでも2人は倒し続ける。と、その時妹紅が1人の怪物を捕まえて：

「おいアンタ、この魔界に親玉みたいな奴はいるのか？ いるなら教えて。もし教えないのなら私の業火で灰になるか師匠の一撃を浴びせるからな」

「いー言いますからどうかご勘弁を！」

怪物は情けない声を上げて教えるを選択した。

「師匠、親玉の場所を聞き出しましたぜ」

妹紅がドヤ顔をしながらサイタマに言う。

「お前…脅しにか見えんぞそれ…」

サイタマは呆れながら言うが場所がわかったのでその場所に向かう。妹紅も後を追う。

一方霊夢達は

「霊夢…やりすぎじゃないか…?」

魔理沙が目にしたのは霊夢が容赦なく怪物達を排除している姿だった。霊夢は妖怪及び怪物達には非常に冷酷で容赦がない。

「この怪物達も妖怪と一緒にでしょ?」

「確かにそうだけど…」

「けど霊夢さん…酷すぎます」

「そうかしら♪」

早苗は背筋が凍った。それは霊夢が殺意のある笑顔を見せたからである。しかも顔には血がついていた。倒した怪物達の返り血である。

「さ、行きましょ♪」

「お、おう…」

霊夢は先に進む。魔理沙と早苗も後を追うが心の中では”この後絶対嫌な予感がす

る」と思っていた。残された聖を助ける組は

「ご主人、たとえ聖を助け出したとしても博麗の巫女が今後敵になりそうな気もするが……どう思いますか？」

「わかりません」

「ダメだコイツ……」

ナズーリンは呆れる。

「だけど私達も行きましょう」

「ご主人、アンタって人は……」

余りに楽観的すぎる星に不安を感じるナズーリンであつたが仕方がなく後をついていく。この事を思つてるのはナズーリンだけではない。一輪、村紗もそう思っていた。

その頃、サイタマと妹紅は魔界の奥地にいた。

「此処であつてんのか？」

「間違いないです。さつき捕まえた怪物が此処だと言つてましたので」

サイタマは辺りを見渡す。殺風景に近い場所だつた。しかしよく見てみると

「なんか結晶みたいな物がある」

「私には見えません」

サイタマは視力が桁外れにいい為見える。しかし妹紅はそれが見えない。

「もしかしたらあの結晶の場所に聖がいるかもしれない」

「じゃあ行くか」

行こうとしたその時、

「待て、強き者よ」

前方に白く長い髪の男が現れた。

「誰だお前は」

「私は零。この魔界に君臨する王だ。…で、お前達は？」

男は零と名乗った。

「俺は趣味でヒーローをやってるサイタマという者だ」

「サイタマ…か。この魔界に何のようだ？」

「聖とかいう奴を助けに来た」

「聖…ああ、あの僧侶か。奴なら結晶の中に封印されている」

零が指を指した方には、先程サイタマが見た結晶だった。

「封印ってどういう事だ？」

妹紅が尋ねる。

「聖は妖怪達を保護していた事が人間達にバレてしまつてこの魔界に封印された。それだけだ」

零は答える。しかし納得出来ない事が1つ。

「で、誰が封印したんだ？」

「私だ」

「はあ!？」

2人は驚く。聖は魔界に入ったと同時に封印されたと思つたからである。

「あのままほつといておけば無能の屑が集まる怪物達の餌食になるからな、私が保護と
いう名の封印をしたのだ」

「それで聖から何か聞いたのか？」

「ああ、聞いたさ」

零はサイタマと妹紅に話した。聖から聞いた事を。

聖白蓮には命蓮という弟がいた。彼は有名な高僧であり、白蓮も彼から術等を学んだ。しかし命蓮は白蓮よりも先に亡くなつてしまった。白蓮は弟の死の影響で死を恐れてしまい、僧侶にとつては外道である若返りの術と不老不死の体を手に入れた。白蓮はその後妖力を維持する為に妖怪達を保護した。その後妖怪達の過去を知り、妖怪を守

るようになった。この事が人間達にバレてしまい魔界に追放された。其処で零が気を失っている白蓮を見つけ、無能の怪物の餌食にならぬよう白蓮を封印したのだ。

「zzz」

「あ、すいません。師匠は長い話を嫌うお方なので」

妹紅が申し訳無さそうに謝る。

「そうか…」

零は目にも見えぬ速さでサイタマに近づき殴り飛ばす。サイタマは飛ばされる。

「師匠！」

妹紅は叫ぶ。しかし返事は来なかった。零は魔界の怪物の中でも桁外れの強さを持つ。その為当たれば重症程度では済まない。

「だが、これくらいで死ぬとは…非常に情けな…」

零の体に衝撃が走った。そして吹き飛ばされ白蓮が封印されている結晶に当たる。

「随分と荒い起こし方だな…おかげで目が覚めたぜ」

其処にはサイタマがいた。零に殴り飛ばされたのにも関わらず全く平気だった。

「サイタマ…お前は…私の力を封印する黒鉄の鎧を壊した…！」

零は何事も無かったかの用にいた。しかし黒鉄の鎧は粉々になっており、上半身は裸だった。なお白蓮が封印されている結晶は全くの無傷だった。

「そうか」

サイタマは普通に返事をかえす。

五十四撃目：魔界の王 v s 最強の男

「師匠！アイツヤバイですよ！」

妹紅は焦りながらサイタマに言う。何故なら零が一撃で倒れなかったからである。

「だが、黒鉄の鎧を壊したのはお前が初めてだ。サイタマ」

「そうか。けどお前、そんな重いのが着てたら戦いにくいだろう？」

「一応な」

サイタマと零は普通に会話していた。その様子を見ていた妹紅は…

「何で普通に話し合えるの？」と、小声で言った。

「さて…お前とは本気で戦いたくなつた…な！」

零は精神統一し、そして魔力を開放した。体から不気味なオーラが出ている。

「サイタマ…私は退屈という名の苦痛に悩まされていた。それは平等に戦える者がいなかったからだ。だがお前が私の最高幹部を倒した！それで私は確信した。お前となら私を楽しませてくれるとな！」

と、その時、再び零の体に衝撃が走る。サイタマが殴ったからだ。

「楽しませるか。馬鹿かお前は？」

「師匠……それは流石にマズイのでは……？」

妹紅がサイタマの肩を叩きながら言う。

「不意打ちとは随分と卑怯ではないのか？」

零は立ち上がり言う。

「俺は単に頑丈かどうか試しただけだ」

「そうか……すまなかった」

零は謝る。サイタマは全く気にしてなかった。

「けど今でも倒れないという事は……全力で戦ってもいいって事だな？」

「無論そちらの方が有り難い。ならば……全力で戦おうではないか！」

「ああ、そうだな！」

サイタマと零は激突した。妹紅は巻き込まれないよう比較的安全な場所に隠れて様子を見る事にした。

霊夢達は……

「ん？あれは……」

霊夢は何かに気づいた。

「誰かいるのか？」

「確かあれって……」

魔理沙と早苗も気づいた。其処には……サイタマの弟子である妹紅がいた。

「妹紅、何やってんの？」

「え？何って……師匠が此処の親玉と戦ってる所を見てるだけけど？」

「え？」

霊夢と早苗は妹紅の指さした方を見る。其処にはサイタマと零が激戦を繰り広げていた。

「師匠とやり合ってるのが、此処の親玉です」

霊夢達は呆然としていた。そして

「ちよつと乱入してくるわ」

「私もです」

「え？ちよつと待てよ！」

霊夢と早苗が向かっていくなか、魔理沙が止めようとする。

「何故止める（のですか）？」

「当たり前だろ！何かアイツヤバそうだしよ！」

「あ。ちなみに師匠、アイツに殴りましたが一撃で倒せなかったす」

妹紅から思いもよらぬ発言が出た。

「「マジで……？」」

霊夢、魔理沙、早苗は震えた。

「とりあえず霊夢さん、サイタマに援護するのはどうですか？」

「そんなみみつちい事はしたくない」

「わかりました」

早苗は霊夢の返事で納得し、サイタマと零が戦ってる場所に向かった。

「魔理沙さんは行かなくていいのですか？」

追いついた星が魔理沙に尋ねる。

「いや……私は行く気になれないぜ……」

魔理沙はいつも以上に震えていた。

「サイタマ……まさか覚醒した私と張り合えるとはな」

「お前も中々やるな」

2人は互角だった。しかし零の方が傷だらけである。

「だがまだ勝負はついてない。第2Rといこうか！」

零は力を貯める。その時

「夢想封印！」

突然零の周りに結界が発生した。

「何だこれは!？」

零は驚く。そしてカラフルな光弾が零にぶつかり爆発する。

「大したことなかったわね」

「霊夢！ やっぱりお前か！」

「まあね♪」

霊夢は勝ち誇ったかのような態度をとる。が

「誰だ…私とサイタマの勝負を邪魔した者は…!」

零は怒り狂っていた。不気味なオーラが更に激しくなり、目つきが変わっていた。

「あ、今の？ やったの霊夢だぞ」

「サイタマ！ 何でばらすのよ！」

サイタマはあっさりと霊夢がやったと言った。

「貴様か…!」

零は目にも見えぬ速さで霊夢に近づき横蹴りをする。

「ぐっ!」

霊夢は耐えるが吹っ飛ばされてしまった。

「霊夢さん！」

早苗が吹っ飛ばされた霊夢の所に行き、助け出す。

「私は魔界に君臨する王だ。力も実力も貴様ら人間とは違う。サイタマは別だかな」

零は嘲笑うかのように霊夢に言った。

「さて…邪魔が入ってしまったが再開しようか、サイタマ」

「そうだな」

サイタマと零は再び激突した。

五十五撃目：決着の時

「ところで魔理沙さん」

「なんだ？」

サイタマと零が激戦を繰り広げている中、比較的安全な場所でそれを見ていた所、星が魔理沙に尋ねた。

「サイタマさんって…負けた事あるのですか？」

「負けた事は1度もない。って弟子が言っていた」

「弟子って…妹紅さんの事ですか？」

星はサイタマの弟子である妹紅の名を上げる。

「いや妹紅じゃねえ…サイタマにはもう1人弟子がいる。妹紅よりも先に弟子入りした奴がな」

「師匠って確か1人だった筈じゃ…!？」

その話に妹紅が入ってくる。

「魔理沙さんはその人に会った事があるのですか!？」

「ある。いつもサイタマと一緒に行動してたからしょっちゅう見かけた」

「その人の名前は…？」

「ジェノスだ」

数ヶ月前の話…

「なあジェノス、サイタマって負けた事あるのか？」

サイタマの家に暇つぶしで来た魔理沙がジェノスに尋ねる。

「先生は1度も負けた事はない。寧ろ負ける方がおかしい」

ジェノスはアイロンをかけながら答える。

「だろうな（笑）」

魔理沙は笑いながら言った。

「あ、これがジェノスな」

魔理沙はジェノスの写真を見せる。

「(カッコイイ…)」

「(ゲームにいそう…)」

星と妹紅は心の中でそう思った。と、其処に

「アンタら随分と呑気でいられるわね……」

魔理沙達の会話に霊夢が入ってくる。しかし零の横蹴りでダメージを背負ったのか
早苗に肩を貸してもらっていた。

「霊夢……お前生きてたのか!？」

「当たり前よ!勝手に死んだ扱いにしてほしくないわ!」

「いやけどあの人の蹴りで霊夢さんを瀕死状態にさせましたからね……」

早苗の発言に霊夢以外は……

「……」「行かなくてよかった……」「……」

「お前ら……!」

サイタマと零は未だに激戦を繰り広げていた。零は目にも止まらぬ速さでパンチを繰り出したがサイタマはそれを全て受け止めた。

「サイタマ!それでこそ倒した時の達成感がある!」

「余計なお世話だ」

サイタマはスキを見て殴る。零は吹っ飛ばされたが何とか持ちこたえた。しかし体

に穴が空いている。

「無駄だサイタマ……！私は再生力は異常だ！」

直ぐに穴は塞がれた。

「すげえなお前。ゾンビマン見たいだな」

サイタマは賞賛したがそこまで驚いてはなかった。そして向かってきた零に

「連続・普通のパンチ」

零に連続パンチを浴びせる。零は粉々になったが直ぐに元に戻った。

しかしダメージは蓄積されている。

「これならどうだ!？」

零はエネルギー弾はサイタマに向けて放つ。しかしサイタマは普通に避ける。緊張感のない顔で。

「何故だ！何故当たらない！」

「当たり前だ。お前、見境がないだろ」

サイタマのパンチが零に当たり、吹っ飛ばされる。零はもはや限界を超えていた。

「私をここまで本気にさせるとは……！だがこれでお前は終わりだサイタマ！」

零は全エネルギーを捧げーつの魔力弾にした。

「私は最高傑作及び奥義！エナジーバースト！」

零はエナジーバーストを放った。

「このまま当たってみろ！ 貴様の体諸共吹き飛ばさずぞ！」

「これがお前の切り札か、ならばこっちも切り札を見せてやるよ」

サイタマは構える。そして

「必殺マジシリーズ…マジ殴り!!」

サイタマはマジのパンチを零が放ったエナジーバーストを殴った。そのエナジーバーストはそのまま返され零に直撃した。

「私は…負けたの…か？」

「まだ意識あるのかよ」

零はまだ意識はあった。しかし体はボロボロになっており使い物にならなかった。

「確かお前は再生力が異常とか言ってなかったか？」

「確かにそうだ…だがもう元には戻れない…」

「そうか…けどお前強かったぜ」

「その言葉をそのまま返そう…けどサイタマ、貴様は余裕があった…」

「…」

零は予想外過ぎる言葉にサイタマは沈黙する。

「まるで私は最初から敵わないように…な」

「…そうか」

「サイタマ…もしもの話だが…もしこの強さで人間に生まれ変わったのならば…またお前と戦いたい…」

「俺もそうしたいぜ」

サイタマは笑いながら言う。

「それと…聖の封印は解かれた筈だ…無能な屑が集まる怪物の餌食になる前に助け出せ」

「ああ、わかったよ」

「サイタマ…私は今まで多くの者達と戦ってきたが…本気を出せたのは…お前が初めてだ…ありがとう」

「こつちもだ」

サイタマ自身もボロス以降の本気でやりあえた相手だと思った。

「サイタマ……また会おう…！そして…熱き戦いをありがとう…！」

零は消えてなくなった。しかしサイタマには見えていた。零が涙を流し、笑みを浮かべていた事を。サイタマは封印の解かれた聖の元に向かった。

「えつと…無事みたいだな」

聖は傷一つもなかった、其処に

「師匠ー!」「サイタマ(さん)ー!」

妹紅達が来た。

「師匠!無事でしたか!」

「ああ、そして聖も無事だ」

サイタマは聖を星に渡す。

「聖!」

星は声をかけるが目を覚まさない。

「余程封印期間が長ったのだろう…その内目が覚めるさ」

ナズーリンは冷静に答える。

「サイタマ…もう人間辞めたらどうだ?」

「何でだよ」

「いや、魔界の親玉に勝ったんだろ!?!それでまだ人間でいるってのがおかしいと思うぜ
!?!」

「別におかしいと思わないけどな」

「いやおかしいわよ」

「おかしいです」

魔理沙が言ったことに霊夢と早苗も同調する。しかしサイタマは人間を辞める気は無い。

「とりあえず…舟に戻るか」

サイタマは舟に向かって走った。

「師匠！待って下さい！」

妹紅が追いかける。しかし追いつく筈がない。

「さて！私達も戻りますか！」

「そうだな」

霊夢達も舟に戻った。その後全員無事に魔界から脱出する事ができた。（重症おつた奴がいるが）

五十六撃目：命蓮寺という名の妖怪寺

「この前の事大きく書かれてまつせ、師匠」

「だろうな」

妹紅はサイタマに新聞を広げる。記事には魔界での出来事が書かれていた。

「てか、文はどうやってこの写真撮ったんだ？」

「聞くには烏天狗のライバル同士でありながらも互いに情報交換してるらしく、それだと思えます」

「そうか」

サイタマは納得する。

「けどまさか聞かれるとはな…」

あの事件後、烏天狗達に捕まってしまい、記者会見らしきものを無理矢理されてしまった。ヒーローである貴方が何故妖怪と手を組んだとの事を聞かれた。これに対しサイタマは

「害がなさそうだから協力してやった。第一妖怪と手を組む気は無いし、怪しい行動をすれば正義執行する。それだけだ」と言った。それがそのまま新聞に載ってしまった

が、誰もサイタマに対して敵意を持つことはなく、逆にサイタマを支持するものが増えたとも言える。らしい。

「てかあの舟はどうなつたんだ？」

サイタマは星達に乗っていた星蓮船に疑問を持つ。これに妹紅が答える。

「何か星蓮船を命蓮寺という寺に変えたそうです」

「寺か…何か持つてつてやろうぜ」

「わかりました！」

妹紅は立ち上がり、持つてく物を探そうとした時、

「てか師匠…何か持つてる物とかあるんすか？」

「あるよ」

サイタマはそう言うのとクローゼットを開ける。其処には山積みダンボール箱が大量にあつた。

「何すかこれ…？」

「人里の連中から貰つた物質とか色々」

サイタマが幻想郷に来てから数々の異変を解決し、多くの正義活動をしたため、人々から支持されるようになった。(。霊夢と早苗が嫉妬するくらい) その為沢山の物質が届くようになった。

「師匠…すごいっすね…」

「まあそんなにもいらんから霊夢とかにあげてるけどな」

「確かにこれだけあれがいらぬのも当然すね…」

「とりあえずこれとこれと…これ持つてくか」

サイタマは適当に選び家を出た。妹紅もついていく。

道中…

「てか師匠…」

「なんだ」

「何処で買ったんすかその服…」

妹紅はサイタマの服装を見ながら言う。ヒーロースーツではないからだ。

「あ、これ？安かったから買った」

「……………そうですか」

妹紅は納得した。サイタマはファッションに関しては壊滅的で、よく変な柄の服を着ている事が多い。しかし当の本人は全く気にしていない。ちなみに今の服装はOPP AIパーカーと長ズボンである。2人は会話をしている内に…

「あれが命蓮寺です」

「霊夢の所より綺麗だな」

その先には綺麗な木造建築の寺があった。門も立派である。2人は門に近づいたその時、

「おつはよーございまーす!!」

突然大声で挨拶をしてきた竹箒を持った少女が現れた。耳と尻尾が生えている。

「アンタ誰?」

サイタマは単刀直入に聞く。

「私は幽谷響子と言います! つい最近聖様に弟子入りをした山彦の妖怪です!」

「え? 聖いるの?」

「はい! 奥の方にあります! 私が案内しますのでついてきて下さい!」

サイタマと妹紅は響子に言われるがままについていく。その途中、

「響子ちゃん、誰だいその人達は?」

宙に浮いた少女が近づいてきた。背中には赤い釜のような羽と青いぐねぐねとした矢印の羽が生えていた。

「あ、ぬえさん! 今この方達に聖様のいる所に案内してるところです!」

「あ、そうかい。…と、アンタサイタマでしょ?」

「知ってるのか？」

「あれだけ新聞に載ってて知らない奴なんていないよ。あ、私は封獣ぬえ。鶴の妖怪で響子ちゃんよりも先に聖に弟子入りしてる者だよ」

「そうか、宜しくな」

サイタマは軽く挨拶をする。そして何故かぬえも同行した。その様子を隠れて見ている怪しい影が…

「見つけたぞ、サイタマ」

五十七撃目：音速の忍者（笑）

現在サイタマは本堂にいる。弟子の妹紅と一緒に。そして前には聖、ナズーリンがいる。そして何故かぬえもいる。

「ようこそ我が命蓮寺にお越しいただきありがとうございます」

聖は深くお辞儀をする。しかし横でナズーリンが、いやそこまでしなくても…と、冷たい目で見ていた。

「サイタマさんの活躍は弟子から聞いています」

「そういやお前つてずっと魔界に封印されてたもんな」

聖はここ数年間魔界に封印されてた為サイタマの活躍を知らなかったのだが弟子達がつとつといておいた新聞やこの前の事を聞いてサイタマの事を知ったのだ。

「ところで…どんな御用で？」

「新しく出来たと聞いたからちよつと差し入れを」

サイタマは隅に置いてあつた山積みのダンボールを前に出す。

「えつと…これは…？」

「人里の連中から貰った物資。1人で食うのもあれだからお前らにあげる事にした」

「そうですか、ありがとうございます」

聖は再度深くお辞儀をする。ナズーリンはもうどうにでもなれ…と思っていた。

一方外では…

「あの…どんな御用ですか…?」

村紗が酷く怯えた状態で尋ねる。前には髪が長く紫のマフラーをしており、黒い服を来ている男がいた。

「此処にサイタマらしき奴がいるってコイツが言ってたから来た」

その男の右手には響子が摘まれたいた。響子は今にも泣きそうである。

「とりあえず…響子ちゃんを離していただけませんか…? 離してくれたら教えますので…」

男は村紗に言われるがままに響子を離す。自由の身になった響子は村紗の後ろに隠れる。

「で、サイタマは何処にいる」

「本堂におります…」

「そうか」

と、その時村紗と響子に風が吹いた。後ろを見ると男がいた。「い……いつの間に!？」

2人は会話を驚きを隠せなかった。男は本堂にへと近づく。男の名は暗殺から用心棒まで何でもこなす自称最強の忍者、音速のソニックだった。

本堂では…

「ん?」

サイタマは何かに気づいた。

「どうかしましたか?」

聖が尋ねる。

「外に誰かい……ん?」

その時クナイがサイタマ目掛けて飛んできたが受け止めた。

「これって……まさか!」

サイタマは障子を開ける。前にはソニックがいた。

「久しぶりだな……サイタマ!」

「やっばりお前だったか……ソニック!」

サイタマは目付きが変わった。

「本当に幻想郷にいたとはな！」

ソニックは不器用な笑みを浮かべて言う。

「師匠：知り合いつすか？」

「いやただのストーカー」

妹紅に対し小さめの声で言った。

「てかソニック、お前つて確か：ジエノスに髪とマフラー切られなかつたっけ？」

サイタマは尋ねる。この前会つた時はマフラーはなく、髪が短つたからだ。

「ああ、これか。確かにあの鉄くずに切られた。だが幻想郷に来てからまた元に戻つたのだ」

「そうか」

サイタマは納得する。そして

「此処に来たからにはお前を倒す！」

ソニックは構える。と、横から

「師匠、此処は私に任せて下さい」

妹紅が構えながら言う。

「なんだお前は？俺はサイタマだけに用がある」

「師匠にその態度とは無礼だな」

「無礼なのはお前の方だろ。弱い癖によく言えたもんだ」

ソニックのこの発言で妹紅は

「見た目で判断するな…私を怒らせたことを後悔させてやる！そして…消し炭とかせ
！」

「消し炭になるのはお前の方だ。木屑野郎が」

妹紅とソニックの対決が始まった。その様子を見てた聖が

「あの…サイタマさん？妹紅さんに任せても大丈夫なのですか…？」

「大丈夫じゃね？」

サイタマは根拠のない風に答えた。

「サイタマ君…」

これにナズーリンは呆れる。

五十八撃目：諦めの悪い忍者

「ところでサイタマさんはヒーローになろうと思ったきつかけってなんですか?」

「きつかけ? 就職活躍中に怪人に襲われてた子供助けた時にヒーローになりたいという夢を思い出したから」

サイタマと聖は縁側で会話をしていた。その様子をナズーリンが哀れみな目で見ていた。

「サイタマ君?」

ナズーリンがサイタマの耳元で話す。

「なんだ?」

「趣味でヒーローというのは…本当?」

「本当だけど?」

ナズーリンはズリ落ちた。

「いやいやサイタマ君! 冗談だろ!」

すぐに立て直しサイタマに向かって言う。

「いや趣味でヒーローやってるのは本気だけど?」

「妹紅……お前大丈夫か？」

「大丈夫です！しかし全く攻撃が当たらないのです……！」

「当たらない？当てれないの間違いじゃないのか？木屑が」

前にソニックが現れる。

「貴様……！」

妹紅は再び立ち上がり構える。しかしサイタマに止められてしまった。

「師匠！何故止めるのですか！」

「お前、もうボロボロだろ？やめとけ」

サイタマが言う通り妹紅はボロボロであった。

「だけど私はまだ動けますので！」

「お前の技は寺を燃やす為や喧嘩の為にあるのか？」

「………わかりました」

妹紅は後ろに下がった。サイタマには逆らえないからである。しかし恨む事は絶対にしない。

「で、俺が狙いなんだろう？ソニック」

「その通りだ」

「お前はしつこいからな。本気で相手してやるよ」

サイタマは本気になった。しかし顔はギャグ風潮のままだった。

「それでこそお前を倒す甲斐がある！……お前を倒すためにあみ出した奥義を見せてやろう……」

「ああ、見せろ」

ソニックは構える。そして

「奥義！十影葬！」

ソニックは10人に分身し、サイタマに近づく。

「おおお……」

それを見ていた聖が目を輝かせる。しかしサイタマはいつも通りだった。

「ははは！サイタマ！これがお前の最期だ！」

ソニックは勝ち誇ったかのように言う。

「必殺マジシリーズ………マジ反復横飛び！」

サイタマは反復横飛びをした。残像はソニックの十倍だった。

「アバブ!?!」

ソニックは驚き、反復横飛びをしたサイタマにぶつかり飛ばされてしまった。分身も消えてしまった。

「また……これで……倒されるの……か！」

「お前は俺に勝てねえよ」

「だが…俺は！諦めん…ぞ」

ソニックは気絶してしまった。が次の瞬間

「あ！いねえ!!」

サイタマはふと見るとソニックの姿はなくなっていた。

「あの…師匠？」

「ん？どうした？」

「さっきのあれ…どうやって倒したんですか？」

「あ、あれ？反復横跳びしながら通っただけだけど？」

「いや反復横跳びだけであんな威力出るものですか？」

「さあな」

サイタマと妹紅が話してる横から

「あのサイタマさん！」

「何？」

「ソニックさんって…忍者ですか!？」

「ソニック？アイツ忍者だけど？」

「本当ですか！私、忍者を見たのは初めてでしたので…」

聖は興奮していた。幻想郷に忍者というのは存在しない。しかし忍者であるソニツクを見たのだ。

「ああ…始まってしまった…」

横で倒れていてナズーリンは起き、まるで絶望したかのように言った。

「私も忍者になりましょう！」

「そら始まったよ…」

ナズーリンは項垂れる。聖はとにかく周りや流行、自身が興味を持ったものに乗せられやすい。

「よし！弟子達に言っておきましょう！行きますよナズーリン！」

「それだけは勘弁してくれえ〜！」

聖は嫌がるナズーリンを無理矢理連れていった。サイタマと妹紅は哀れみな顔で見ている。

番外編 part 1

五十九撃目：射命丸文の強引すぎる（？）取材

幻想郷上空。青く広がる空を迅速に駆け回る少女が1人：その名は伝統の幻想ブン屋。射命丸文である。

「あーあ、何かネタないかなー」

文は飛びながら呟いた。どうやら新聞のネタを探してるらしい。彼女が提供する文。新聞に掲載する為のネタ探した。

「あややーあれはー！」

文は何かを見つけた。其処には趣味でヒーローをやっており、人妖関係なく最も支持されている外来人、サイタマだった。

「サイタマさん！」

文はサイタマの元に来た。

「えっと…どちら様でしたっけ？」

「射命丸文です！清く正しく射命丸文ですよお！」

「そんな奴いたっけ？」

サイタマは文の事を忘れていた。というより全く会ってなかったからである。「ひどいですよ〜」

文は泣きながら言う。

「すまん。で何の用？」

「えつとですね…新聞に掲載する為のネタを探してるのですよ。だからサイタマさんにネタを提供してもらおうかと」

「てかお前の新聞って9割どうでもいい事だろ」

「ほぼ全部じゃないですか！」

文は心が折れそうになったが何とか持ちこたえた。

「と、とりあえず！何かありますか!?!」

「それなら…他の奴に聞いたらどうだ？」

「え？」

「俺以外にも幻想入りした奴がいるからさ」

「わかりました！」

文は飛び立ち何処かへ行ってしまった。それを見送ったサイタマは

「さて、帰るか」

「今日は5体駆除したか…」

とある河原で男が1人いた。光速のヒーローと呼ばれてる閃光のフラッシュだ。

「最近怪物駆除の依頼が増えたな…!？」

フラッシュは後ろを向き愛刀の瞬殺丸を抜き、斬りつける。しかし斬れたのは岩だった。その下に文がいた。

「あやややや…」

「なんだ、あの時の記者か。何の用だ」

「ちよつと新聞のネタを探していまして…何をされてたのですか?」

「これを見ていただけだ」

フラッシュは紙キレを文に見せる。そこには

「怪物駆除依頼リスト…?」

「ああ、俺は人里の奴らからしよつちゅう怪物駆除の依頼が来るのだ」

「そーですかあ…」

「ま、暇なお前と違って俺は忙しいからな」

フラッシュは鼻で笑った。

「わ!私だって、新聞のネタ探して忙しいのですよ!それではさらば!」

文はまた飛び立ってしまった。

「アイツは何がしたかったんだ…?」

フラッシュは呆れていた。

「おい！お前！少しは手加減しろ！」

「手加減なんてするわけねーだろ！」

守矢神社。其処で金属バットと洩矢諏訪子が戦っていた。

「これはいい記事になりそうですね！」

文は上空で写真を撮りながら見ていた。その時、諏訪子とバットとの戦いで漏れた弾幕が文に向かって飛んできた。

「え？」

文は避けようとするが反応に遅れたか当たってしまった。

「うわああああああ!!」

文は墜落してしまった。

「あ？何か落ちなかつたか？」

バットは気づいた。が戦いの途中で手を止めたのか諏訪子が

「おい！手を止めるなりーゼント野郎！」

「人を頭で呼ぶんじゃねえよ！」

「うるせー！お前の名前なんかどうだっていいんだよバーカ！」

「んだろコラア！」

怒りが頂点に到達したバットが諏訪子を殴る。

「おのれえ……！」

諏訪子も負け時と反撃する。それを見ていた文は

「これ邪魔しない方が身の為だわ」

そう言つてその場から離れた。

「あーあ、明日の新聞どうしよ……」

文は項垂れる。新聞のネタになる記事は見かつたものの、途中で勝負に巻き込まれしまった。途中ハプニングが度々起きた。その為ちゃんとした写真が撮れなかったのだ。

「とりあえず残りの分だけでなんとかしますか〜」

文は自分の家へと帰った。その新聞は明日配られるのだが、内容があまりに酷かった

のは言うまでもない…

神霊廟編

六十撃目：再び1人に

「まさかな…」

サイタマは時分の家の床に寝転がって呟いた。普段なら弟子の妹紅がいるのだが今回はないなかった。

「アイツが独立するとはな」

その通りである。妹紅が独立したからである。彼女は常にサイタマと共に行動をしてきた。しかしほとんどサイタマの力に頼っていた為、自分は役に立ってないのではないのかと思っていた。その為弟子は辞めずに独立したのだ。元々一人暮らしには慣れてる為に大丈夫との事でサイタマも納得したのだ。と、その時

「相変わらず暇そうだな、サイタマ」

「お前ノックくらいしろよ…」

声がした。其処にはゾンビマンがいた。しかし無断で入ってきた為サイタマは少々呆れている。

「で、この大量のダンボールの箱はなんだ？」

ゾンビマンは大量のダンボールの箱に興味を示す。

「これ？人里の連中から貰った」

「なるほどな、外の世界じゃインチキと呼ばれてるお前も此処じゃヒーローか」

「今は外の世界でもヒーローと呼ばれてるわ」

「そうだったのか、悪かったな」

「いいよ別に。気にしてないから」

「やっぱりお前は変わっているな、サイタマ」

サイタマとゾンビマンは楽しい会話弾んでいた。その様子を見ていた影が2つ。

霊夢と早苗である。

「妬ましい……！」

「おいやめろ」

魔理沙が止めようとする。理由は霊夢と早苗が今にもサイタマの家に突撃しそうだからである。

「サイタマは沢山の物資を貰ってるのに我々は何も貰えない事を不公平だと思わないかね？魔理沙君（魔理沙さん）？」

「お前ら……」

サイタマに対する嫉妬感が強すぎる霊夢と早苗に呆れる。

「で、なんで冥界にいるお前までいるんだよ」

魔理沙は後ろにいる魂魄妖夢に存在に気づく。

「あの…サイタマさんの強さや人気の秘密が知りたくてですね…はい」

妖夢は控えめに答える。どうやらあの事件（詳しくは妖々夢編を）でサイタマに興味を持ったらしい。

「でも、あの巫女みたいにはなるなよ？」

「了解です」

妖夢は承諾した。

「其処の嬢ちゃんにわしらの事を変な風に教えるじゃないよ、魔理沙君（魔理沙さん）」

「お前らはいつかそんなキャラになったんだよ…」

キャラ崩壊している霊夢と早苗に魔理沙は呆れ果ててしまった。

「そうだサイタマ、神霊を知ってるか？」

ゾンビマンは尋ねる。

「神霊？何だそりゃ？」

「俺もよくわからないが最近命蓮寺で溢れているらしい」

「そうか…なら行ってみるか」

サイタマはヒーロースーツに着替えて命蓮寺まで向かった。ゾンビマンも後を追う。その事を聞いていた霊夢と早苗は…

「サイタマよりも先にそれを解決すれば…!」

「神霊というやらを上手く使えば…!」

霊夢と早苗は何か思いついたらしい。しかし顔がゲスい。

「我々も急がなくては!」

2人は命蓮寺へと向かった。

「魔理沙さんどうします?」

「霊夢と早苗2人は何しでかすかわからないからな…サイタマとゾンビマンが何とかしてくれそうだが…私らも行くか」

「そうしましょう!」

魔理沙と妖夢も命蓮寺に行く事にした。

六十一撃目：墓場にいるもの

「いつもと変わらないんだが」

「確かにな」

サイタマとゾンビマンは命蓮寺の門の前にいた。見た目からではいつもと変わらな
い命蓮寺であった。

「とりあえずこの山彦から墓場の場所聞き出すわ」

サイタマの右手には響子がいた。しかし今にも泣きそうである。

「可哀想だから離してやれ」

ゾンビマンに言われるがまま、手を離す。

「怖かったです……!」

響子は安心感と恐怖感に慎まれていた。

「で、此処に墓場あるの?」

「墓場ならあつちです!」

響子は墓場のある方に指を指す。サイタマとゾンビマンはそれを見る。其処には今
にも何が出そうな雰囲気、墓場があつた。

「ありがとな」

「次からは脅すの辞めてください！」

響子は怒った（つもりの）表情で言う。

「別に脅すつもりはねーよ」

「お前のは脅しにか見えないな」

「ゾンビマンお前……！」

サイタマはゾンビマンを睨みながらも墓場へと向かった。

その頃神霊廟の自機組は…

「墓場は何処じゃあああああ！」

霊夢と早苗が互いに競い合うように走っていた。しかも顔がヤバい。

「アイツら余程サイタマに手柄を取られたくないみたいだな…」

「けど魔理沙さん、私達も急がないと！」

「いいよ私は。のんびりスローライフで行けばいいんだし…けど神霊には興味あるけどね」

「（本当に霊夢さんと早苗さんを止めれるのかな…）」

妖夢は魔理沙のあまりのやる気の無さに不安を抱いた。

サイタマとゾンビマンは…

「神霊らしきものがないんだけど」

「確かにな。何も感じない」

墓場は見渡すが神霊らしきものはない。と、その時

「うゝらゝめゝしゝやゝゝ！」

突然墓の裏から紫色のダサイ傘を持った少女が現れた。

「ね、驚いた？ 驚いた!？」

その少女はサイタマとゾンビマンの驚いた姿を期待していた。が

「え…何コイツ？ 迷子?？」

「よくそんな趣味の悪いダサイ傘を持ち歩けるな」

2人の反応は薄かった。というより驚いてないのである。

「てか誰だ」

「わちきが多々良小傘。から傘お化けの妖怪です」

「妖怪…? もしかして聖の弟子?？」

「違います。わちきは単に此処に住み着いた聖さんとは無縁の妖怪です」

「サイタマ、命蓮寺には聖とは無縁の妖怪が数多く住み着いてるらしい」

ゾンビマンはサイタマに教える。

「それよりもなんで驚いてくれないのですか！」

小傘は2人に問い詰める。

「いやだって、今時そんなんじゃ驚くやついないだろ」

「けど響子ちゃんは驚いてくれたもん！」

「それはアイツが泣き虫で怖がりだからだろうが」

「ウツ！」

小傘は詰まってしまった。サイタマの言う通り、響子は泣き虫で怖がりである。夜1人でトイレに行けなったり、1人では眠れない程である。その為か聖を母親のように慕っている。

「むー」

小傘は頬を膨らませて睨む。

「サイタマ、確かに響子は泣き虫で怖がりだ。その為聖と一緒に寝てるらしい」

「てかなんで知ってるの？」

「俺は命蓮寺に住み込んでるからな」

「じゃあ弟子入りしたのか？」

「してはない。俺の容姿や特徴が聖に気に入られてしまっただけ……」

ゾンビマンは照れくさそうに言う。ゾンビマンは常人程の戦闘力はないものの、その異常な再生力で長期戦を得意とする。元々は進化の家のサンプルであるが逃げ出しヒーローになったという。その異常な再生力が聖に入られて命蓮寺に住み込んだ。その為かよく攻撃をされるが本人はよくある事で気にしてない。

「そうか……てか小傘、後ろにいるキョンシーは何？」

「え？……って、オワツ!?」

小傘は驚いた。↑いやアンタから傘お化けだろうが。後ろにキョンシーがいたからである。

「私は宮古芳香だーゾンビなのだー」

キョンシーは宮古芳香と名乗った。

「ゾンビマン良かったな、仲間がいて」

「キョンシーと一緒にするな」

サイタマは嬉しそうに言うがゾンビマンは否定した。

「お前らが青蛾が言ってた外来人かー？」

「青蛾って誰だ」

「私をキョンシーで蘇りてくれた仙人だー」

樂しげに話す芳香にサイタマは思わず引いた。

「てかなんでキョンシー?」

「ちよつと私の趣味でしてね」

後ろから声がした。其処には芳香が言う青蛾がいた。

「あんたが青蛾が」

「ええ、そうです。私が青蛾です。本当の名は霍青蛾と言います」

青蛾はそう言うのと深くお辞儀をする。サイタマとゾンビマンも礼をする。

「ところで今回の事で知つてることない?」

サイタマは単刀直入で尋ねる。

「あ、その事ですか。ならば彼処の洞窟からどうぞ」

青蛾が指を指した先には禍々しいオーラの洞窟があつた。

「え?ここに入るの?」

「そうですよ」

青蛾は笑顔で言う。それがサイタマの背筋を凍らせた。

「サイタマ、嫌でも行くぞ。俺も正直行きたくないんだからな」

「へいへい」

サイタマはゾンビマンに言われるがままに洞窟の中へと入っていった。

六十二 撃目：亡霊と豪族

「ここが異変の元凶か？」

「まさかこんな所に建物があるとは……！」

サイタマとゾンビマンの前には木造建築の建物があつた。と、その時

「誰だ！ 貴様達は！」

声のする方に向けると其処には緑の服を着た亡霊がいた。頭に何か被っている。

「誰？」

「私は蘇我屠自古！ 太子様を慕う者なり！」

亡霊は蘇我屠自古と名乗った。

「太子様って？」

「知らぬのか？ 太子様は豊聡耳神子の事だ」

「そうか」

サイタマは納得する。

「しかしお前達が此処に来たという事は太子様に用があるというのだな？ だが太子様に近づきはさせぬ！ 我が雷で灰と化せ！」

屠自古は両手から電気を放とうとした。と、其処へ

「屠自古やめるのだ！」

突然声がした。屠自古の横には白い和服みたいな物を着た少女がいた。頭には屠自古と同じ物を被っていた。

「布都か。お前も来たのか」

屠自古は電気を一旦消し、横にいる少女に言う。

「お主ばかりに目立ってもらうにはいけないからな！あ、我は物部布都じゃ。宜しく頼むぞ♪」

「お、おう」

少女は物部布都と名乗った。

「お主達は太子様に用があるようじゃが…近づきはさせぬ！」

布都は構える。屠自古も構えなおす。

「ゾンビマン、俺はその亡霊倒すからお前はそっちの奴を頼む」

「わかった」

サイタマは屠自古と、ゾンビマンは布都と対決する事となった。

「私は雷を操る者…時の人と呼ばれしサイタマ！私は容赦はせぬぞ！」

「おう、じゃあぶつ飛ばすわ」

「久しぶり復活だから少々体が鈍っていてな、準備体操のつもりでいかせてもらおうぞ！」
「俺も舐められたもんだな」

こうしてサイタマ v s 蘇我屠自古、ゾンビマン v s 物部布都の勝負が始まった。

一方霊夢達は…

「サイタマ（さん）は何処だ：」

霊夢と早苗は墓場にいた響子に問い詰める。

「あわわわ…」

響子は酷く怯えており、今にも泣きそうである。霊夢と早苗が怖いからである。

「霊夢、やめろ」

魔理沙は霊夢と早苗を止める。

「それではサイタマさんに先を越されてしまいますよ！」

早苗が反発する。と、其処に

「サイタマさんならあの洞窟に言ったわよ」

「何？」

霊夢と早苗は反応した。突如現れた青蛾が教えてくれたからだ。

「行くぞおおお！」

霊夢と早苗は迅速な速さで洞窟の中へと入っていった。魔理沙と妖夢も後を追う。

「あのー…青蛾さん？教えてもよかったですか？」

「大丈夫じゃない？けどサイタマさんなら太子様も認めてくれそうだから行っても意味はないと思いますけどね。フッフ」

青蛾はその場を去った。

六十三撃目：決着：？（亡霊と豪族との）

「貴様には息切れというものがあるのか!？」

屠自古は息を切らしていた。しかしサイタマは全く平気である。

「お前亡霊の癖に俺の拳当たるんだな」

確かにサイタマの攻撃は屠自古の体を通り抜ける事無く命中している。逆に屠自古の攻撃は全て避けられてしまっている。

「くっ！だが私を舐めるではない！」

屠自古は構える。そして

「雷矢、ガコウジトルネード！」

無数の雷の矢がサイタマに向かって飛んできた。

「連続・普通のパンチ」

サイタマは連続・普通のパンチを放ち雷の矢を全て撃ち落とす。

「嘘…だろ…!？」

屠自古は愕然してしまった。と、後ろからサイタマが

「これで終わりな」

屠自古の首元をチョップした。その衝撃で屠自古は気を失ってしまった。
「さて、ゾンビマンは終わったのか?」

「お主の体はどうなっておるのだ!」

布都の前には何事もなかったようにゾンビマンが立っていた。布都は何度もゾンビマンに弾幕等を当てたのだがゾンビマンの異常な再生力で永遠のループになっているのだ。

「どうした? 準備体操のつもりじゃなかったのか?」

ゾンビマンは挑発をかけるように言った。

「だがお主は我に当てられてないよな?」

しかしゾンビマンが有利とは言えない。何故ならゾンビマンの攻撃が布都に当たっていないからである。ゾンビマンの戦闘力は常人程ではない、武器である斧、剣、銃を使っているが全て避けられている。

「しかしお主は変わった物を所持しておるな♪」

「仕方がねえ…泥仕合になるが覚悟しておけよ」

「我は別に構わんぞ♪」

30分後…

「何故じゃ…お主に何千…いや何万回も弾幕を当てた筈じゃぞ…?」

布都は疲れ果てていた。

「だから言つたろ、泥仕合になる覚悟をしとけて。しかしあと100回程お前の攻撃が当たっていたら俺は動けなかつたかもな」

ゾンビマンはボロボロでありながらも立っていた。ボロボロの体は次第に元通りになった。

「さて、サイタマは終わってるのか?」

「ゾンビマン!」

「サイタマか、終わったのか?」

サイタマが駆け寄ってきた。

「ああ、今終わつ「ちよつと待てえええええ!」え?」

サイタマは振り向いた。其処には屠自古がいた。

「貴様…!何終わつたつもりでいる!まだ…まだ私の真の力を見せてなどない!」

「めんどくせえ…!」

そして屠自古の隣で布都も

「我もだ！我も真の力を見せてない！」

「これは長期戦になりそうだな…」

屠自古と布都は構える。そしてサイタマとゾンビマンも構える。

「行くぞ！我が真の力を！とくとご覧あれ！」

屠自古と布都の弾幕が合わさりサイタマとゾンビマンに向けて放とうとしたその時、

「お待ちなさい」

六十四撃目：古の聖人

どこからもなく声がした。その方向に一同は顔を向ける。其処には：屠自古と布都が言う太子様、豊聡耳神子がいた。

「貴女達は何をやっているのですか？」

「た、太子様！これは！その……」

「布都、貴様！太子様にわかるように話せ！」

「それを言うなら屠自古！お主もじゃ！」

屠自古と布都は神子に今はどういふ状況なのかをわかりやすく説明しようとするが周りから見れば言い合つてるようにしか見えない。

「もういいです。貴女達は其処の方々と戦っていたようですね。理由もなく」

「太子様！ちゃんと理由があります！」

「ならばその理由をわかりやすく言いなさい」

「……………」

2人は黙り込んでしまった。それを見たのか神子はサイタマに近づいた。

「貴方がサイタマさんですね」

「おっ！オレの事知ってんのか」

「勿論です。貴方の噂は耳に入ってますので」

神子は微笑みながらサイタマと話していた。

「もしや太子様は…」

「サイタマ殿の実力を認めているというのか…!?!」

屠自古と布都は驚いているがゾンビマンはそうでもない。神子は自分が認められた者にかあのを喋り方をしない。普段は威厳のある喋り方である。その為屠自古と布都に対してもあの喋り方をしたのはサイタマがいたからである。

「ところでこの神霊廟にどんな御用で？」

「あつ、そうだった。お前さあ、神霊の事でなんか知らない？」

サイタマは神霊の事を聞いた。

「貴様！太子様に何だその態度は！」

「屠自古、お前は黙っておれ」

「はい…」

屠自古がサイタマの態度を注意するが神子に止められてしまった。

「神霊の事ですか。その事を説明しますがよろしいでしょうか？」

「いいけど俺でもわかりやすく述べてくれ」

「わかりました」

神子はサイタマにでもわかるように神霊の事を話した。

「…というわけです。つて、サイタマさん？」

「悪い…俺長い話苦手なんだわ…」

サイタマは疲れていた。長い話が苦手である為聞いただけでも疲れたのだ。

「その事は早めに言っておいて下さいね」

「お…おう」

神子はクスツと笑って言う。サイタマは申し訳なさそうに謝る。それを見ていた屠自古と布都からは妬ましい光景だった。

「何故あの者が太子様に認められるのだ…」

「我らは長年太子様の元にいるの…」

「お前ら落ち着け」

屠自古と布都はサイタマを妬んだがゾンビマンに注意された。

「その神霊を消してほしいとの事です」

「おう、気になってしょうがないんだわ」

「わかりました。ついてきて下さい」

神子は出口へと向かった。サイタマは神子の後をついていく。と、其処で

「サイタマ!」

「あ、霊夢」

神霊廟に向かつてる霊夢達と会った。

「お前ら何してんの?」

「神霊の事が気になって此処に来たのよ」

「そうか」

霊夢は理由を話した。サイタマは納得する。

「サイタマさん、お友達ですか?」

「いや違うけど」

「そうですか…君達ちよつと退いてくれないか?」

神子は態度が変わった。

「ちよつと待て! なんでサイタマには敬語で私達にはそうじゃないんだよ!」

「我は我が認めた者にしかその喋り方はせぬ」

「そんなの不公平すぎます!」

「耳障りだ。其処をどけ」

「いえ、退くわけにはいきません！」

魔理沙、早苗、妖夢は反発し構える。

「そうか…それが君達の答えか」

神子も戦闘態勢をとった。が

「おい、神子。時間ねえんだわ。さっさと終わらせてくれ」

「あ、すみません、では行きましようか」

サイタマに止められて神子は霊夢達を退かして出口へ向かった。

「妬ましい…」

「お前ら…」

サイタマを妬む霊夢と早苗に対して呆れる魔理沙であった。そしてサイタマと神子は神霊廟に繋がる洞窟の入口にいた。と、其処に青蛾が来た。

「あら、太子様。お久しぶりです」

「青蛾、お久しぶりです」

「神子、あの邪仙とどんな関係なの？」

サイタマが神子と青蛾の関係が気になったので聞いた。

「ちよつとした事です♪」

「お、そうか…」

サイタマは青ざめた。これは気にしたら負けだと思った。

「けど神霊が見当たらないな」

サイタマは辺りを見渡すと神霊の姿はなかった。そして神子の耳元で

「なんかしたか？」

「秘密です♪」

「あ、そーすか」

神子は秘密と言って答えなかった。

「けど…これで解決だな！」

サイタマは言い切った。

「あつ、サイタマさん。後で貴方の事を聞かせてくれませんか？」

「おう、いいぞ」

「ありがとうございます」

「太子様、私も」

サイタマ、神子、青蛾はある意味楽しそうに話していた。

一方神霊廟に続く道では…

「お前ら何してんだ」

帰る途中だったゾンビマンが見たのは：絶望している霊夢と早苗、それを見て呆れる魔理沙と、必死に慰めようとしている妖夢の姿のだった：

「なんでいつもサイタマ（さん）が優遇されるのお!？」

霊夢と早苗の悲痛な叫びが響き渡った。

六十五撃目：妖怪狸の親分

「マミゾウ！急いで！」

「落ち着け、異変は逃げはせん」

ぬえは急いでいた。古き友人を連れて。その古き友人はニツ岩マミゾウという化け狸である。化け狸の中でも親分に近い存在である。喋り方は非常に年期のはいった人っぽい。

「しかしぬえ、わざわざ儂を佐渡から呼んだんじゃから余程大変な事態なんじやろうな？」

「本当なんだよ！だから早く！」

「儂の体の事も考えてくれ……」

ぬえとマミゾウは命蓮寺に着いた。

「聖！強力な助っ人を連れてきた……ってあれ!？」

其処には聖はいなかった。其処にいたのはサイタマと神子だった。

「あ、聖のこの妖怪じゃん」

「サイタマ……？なんでいるの？」

「サイタマさん、彼女は一体……？」

「聖の弟子の妖怪」

サイタマは神子にぬえの事を大雑把に説明する。

「で、君は何の用で此処に？」

「聖がなんか大変な事になってるって言うから……」

「ああ、その事か。既に終わったよ」

「ええ!？」

ぬえは驚いた。マミゾウを呼びに行ってる間にその異変は既に終わっていたのだ。

「ぬえ、俺はお主に無理矢理連れてこられた感が半端ないのじゃが……」

「ごめん……」

ぬえはマミゾウに謝る。と、横からサイタマが

「婆さん、誰だ？」

「農か？ 俺は二ツ岩マミゾウじゃ、宜しく頼むぞ」

「俺はサイタマ。趣味でヒーローをやってる者だ」

「おお！ お主がサイタマか！ お前さんの噂は佐渡でも流れておったぞ」

「佐渡？……婆さんアンタ外の世界から来たのか!？」

サイタマは驚く。マミゾウが外の世界の者だと知ったからだ。

「そうじゃ、お主と同じじゃ。ぬえに幻想郷とやらに連れてこられたがな」
マミゾウはぬえを睨む。

「アハハハ…」

ぬえは目を逸らしながら苦笑いをする。顔色がなんか悪い。

「ま、しかし…佐渡に戻るのは面倒臭いし、此処に住むことにするかのう」
「婆さん…それでいいのか？」

「儂は構わん」

マミゾウは幻想郷に住むことにした。と、そこへ

「あ、サイタマさん来てたのですか。ぬえちゃんも」

聖が帰ってきた。人里に用があつて行つてたらしい。

「ちよつとお邪魔してたわ、神子と一緒に」

「すまぬな、聖」

「いえいえ！構いませんよ」

勝手に敷地内に入つてたサイタマと神子だが、聖は全く気にしてはなかつた。

「えつと…ぬえちゃんの横にいるのは…？」

聖はぬえの横にいたマミゾウに目をつける。

「儂は二ツ岩マミゾウという者じゃ。宜しく頼むぞ」

「宜しく御願います！マミゾウさん♪」

聖はマミゾウと握手をする。

「聖つて…妖怪とすぐに仲良くなれるな…」

「確かにそうですね」

「まあ、聖は人と妖怪が共存できる事を望んでるからね。…あくまで妖怪の味方だけど」

「なんだよそれ…」

それにサイタマは呆れる。と、その時、サイタマに向かって何かが飛んできた。

「なんだこれ？」

サイタマはキャッチする。それはクナイだった。

「まさか…！ソニック！お前か!？」

「それ以外誰と面白い？サイタマ」

突然、木から影が現れてサイタマ達の前に現れた。

「今日こそお前をここで倒す！」

サイタマの自称ライバル及び最強の忍者、関節のパニト…音速のソニックだった。

六十六撃目：しつこすぎる忍者

「いい加減諦めろよ……」

「俺はお前に勝つまで諦めん！」

「もう好きにしろ……」

サイタマは完全に呆れ果てていた。ソニックに会ったのはこれで6回目である。6回共全部ソニックが仕掛けてきたのだがサイタマは全て返り討ちにしてある。

「第一お前に恨みを持つてる事を忘れるなよ……!」

「恨み? 何の事だ?」

ソニックの意外な発言にサイタマは考え込む。

「忘れたと言うのか……!? 信じられぬ! 俺は……! 俺は……! …………… お前に股間を殴られた事をだよ!!」

「「「え?」」」

サイタマ以外の者が驚く。当のサイタマは

「あ、あれか。あん時は……すまん」

サイタマは申し訳無さそうに謝る。しかしその時からすごく経つてゐる為今では遅い。

「今更申し訳無きように謝っても遅い！俺はあんな負け方は屈辱的だった……！」

ソニックは悔しそうに言う。確かにソニックはサイタマに股間を殴られて負けたのである。その負け方が屈辱的でサイタマをライバル視するようになった。その後もサイタマに勝負を仕掛けるがごとごとく返り討ちになっている。

「ところでサイタマさん……？」

「何？」

神子がサイタマの耳元で聞く。

「股間殴られるって……どれ程痛いのですか？」

「神子！お前は知らなくていい！」

「けど気になります！」

「だから気にしないでいいからな!？」

「お願いします！」

「お前……」

サイタマは仕方が無くどのくらい痛いのかを話した。

「納得です……！」

「もうこれ以上聞くなよ」

神子が納得したとの事でソニックの方に向ける。

「で、どうしたいんだ？」

「決まった事だ。お前を倒す！」

ソニックは目にも止まらぬ速さでサイタマに近づく。が

「またこれか？」

サイタマの発言にソニックは足を止める。

「いや、少し違う」

「？」

「俺はお前を倒す為に妖怪の山にこもり修行をした。天候が悪くも凶暴な怪物に襲われようが俺は一切休まずに行つた。今！new音速のソニックが誕生したのだ！」

「そうか」

ソニックは自分が生まれ変わったかのように言った。サイタマはそっけなく返す。

「じゃあ見せてみる」

「ああ、いいさ。これで後悔する事になるがな!!」

ソニックは素早く動き始めた。そして残像が現れる。

「特殊な歩行技術と超高速な身のこなしによって残像を発生させる奥義十影装改め、真・十影装！」

ソニックの残像が10人になった。しかし周りから見ると10人以上である。

「おおお……！」

そのソニックの姿に聖は見とれる。

「君、聖って……」

「いや……聖はね……流行とかに乗せられやすいって……ナズさんが言ってたから……ね」

「どうりであの様な顔になったのか」

「まあ……魔界にいた時間がすごく長かったらしいから仕方が無いか」

「しかし、ソニックとやらは人間とは思えぬ速さじゃな」

神子、聖、ぬえ、マミゾウはその様子を見ていた。

「サイタマ！これで終わり………のお?!」

ソニックの顔に衝撃が走った。サイタマが殴ったからである。

「またこれかよ。目が慣れてるから無駄だっつーの」

サイタマは反射神経が非常に良い為残像が発生させたソニックの姿に見えたのだ。

「俺に……勝ち星というのは……あるの……か？」

ソニックは気絶してしまった。というより気を失ったか。

「死んだようじゃな」

「いや殺してねーから!!」

マミゾウのそっけない発言にサイタマがツツコム。

「サイタマ……！」

「まだ息あんのかよ」

ソニックが再び立ち上がった。

「俺は……絶対に……諦めない……！次会った時がお前の最期だ！サイタマ！」

ソニックは遺言を残り去っていった。

「アイツも諦め悪いな」

心綺楼編

六十七撃目・幻想郷格闘大会。…で、希望のお面はどうするの!?

「どうするかなこれ」

サイタマは悩んでいた。前には数え切れない程のダンボール箱がある。と、その時ピンポン、とインターホンが鳴った。サイタマは玄関に向かう。

「新聞はお断りですよ」

「誰が新聞売りですか」

「あ、お前か」

ドアの前には神子がいた。

「ちよつとサイタマさんに相談したい事がありましたて…」

「とりあえず上がれ」

「すみません」

神子はサイタマの家の中に入る。

「で、相談したい事はなんだ？」

サイタマは神子に茶を差し出す。

「それはですね…」

神子は相談したい事を話す。

「秦こころ？誰だソイツ」

「お面の付喪神です。彼女は表情を表すのが苦手でお面で表情を表してるのです」

「ソイツがどうしたって言うんだ」

「希望のお面が無くなってしまい暴れてしまってるのです」

「ソイツの暴走を止めればいいのか？」

「そうです、だからこれに出場して下さい」

神子は紙をサイタマに見せる。

「何だこれ？格闘大会みたいなのやつか？」

「はい、決勝まで進めばこころと戦う事が出来るのです」

「よく暴走してる奴を待たせる事ができるな…」

サイタマは疑問に思う。しかしここである事に気づいた。

「…という事はここらと闘うまでに強い奴らと戦えるという事か？」

「対戦相手によつて変わりますけどね」

「わかった。出場してみるか」

「ありがとうございます！」

神子は深くお辞儀する。

「で、神子が出るのか？」

「私は出ません。代わりにサイタマさんの専属マネージャーとなります」

「別にせんでもいいのに…」

サイタマは仕方が無く神子を専属マネージャーとした。本当は必要ないが。

そして月日は流れ大会当日となった。2人は会場に来ていた。

「時間が経つのは早いなあ」

サイタマは呟く。彼の服装はヒーロー時に着るスーツだ。

「サイタマさん、これが出場者表です」

神子はサイタマに出場者が書かれた紙を見せる。

出場者

博麗霊夢（ラストワード：夢想天生）

霧雨魔理沙（ラストワード：サンクレイザー）

雲居一輪&雲山（ラストワード：華麗なる親父時代）

聖白蓮（ラストワード：アーンギラサヴェエダ）

物部布都（ラストワード：大火の改新）

河城にとり（ラストワード：スーパースコープ3D）

古明地こいし（ラストワード：ブランブリーローズガーデン）

ニツ岩ミミゾウ（ラストワード：八百八狸囃子）

秦ころも（ラストワード：仮面喪心舞 暗黒能楽）

サイタマ（ラストワード：マジシリーズメドレー）

「成程」

「私は観客席に行きますのでサイタマさんは控え室に行ってください」

「おう、わかった」

神子は観客席に、サイタマは控え室へと行った。

控え室

サイタマは椅子に腰掛け、トーナメント表を見る。

トーナメント表はこんな感じだった。

Aブロック 博麗霊夢 v s 霧雨魔理沙

Bブロック 雲居一輪 & 雲山 v s 聖白蓮

Cブロック 物部布都 v s 河城にとり

Dブロック 古明地こいし v s 二ツ岩マミゾウ

シード サイタマ

決勝 秦ころろ

「こんなのでいいのか？」

サイタマは疑問に思う。組み合わせが適当な気がするからだ。そして自分がシード枠だという事に疑問を抱く。と、その時ドアの向こうから声が

「サイタマ様、選手入場の時間ですのでステージの方まで来てください」

この大会の関係者からの声だ。

「じゃあ、行くか」

サイタマは控え室から出てステージへと向かった。

観客席では

「すごい人だな…」

神子は席に腰掛けて言う。観客者が非常に多く席は取れないかと思っていたが何とか取れた。

「しかし…」

神子は振り返る、其処には…サイタマを応援する者達でいっぱいだった。そこで神子は隣にいた者に聞く。

「君、サイタマさんってそんなにも人気なのか？」

「ええ、そうですよ。サイタマ君は色んな異変や事件を解決してますので多くの人達から支持されてるんですよ」

「そうか…」

神子は納得した。しかしサイタマがここまで人気だとは思ってなかった。

「けどサイタマさんが負ける筈はないか」

神子の言った事が聞こえたのか後ろの者が

「お前さん！サイタマ君が負ける筈ないだろ!？」

「そうだ！サイタマは幻想郷の救世主だ！」

「彼がいるこそ平和に暮らせるのですよ！」

「あ…はい、そうですよね…」

神子はサイタマを支持する者達に推されてしまった。

「(本当に人気あるんだな…サイタマさんって)」

と心の中で思った。

六十八撃目：開幕！幻想格闘大会！

「皆様！長々くお待たせしました！まもなく幻想格闘大会の開幕です！」

ステージの真ん中でそう言ったのは射命丸文だ。隣には犬走椋がいる。

「実況及び司会は私、射命丸文がお送りします！そして！」

「解説は私、犬走椋がお送りします！」

「さあそれでは、出場者の登場です！」

文が言うのと、ゲートから出場者が出てきた。

「まずはこの方！博麗の巫女であり、異変の事はお任せあれ！人間の味方！博麗霊夢！」

しかし言われ方があれだったのか霊夢は不機嫌そうな顔をする。

「異変は全部サイタマに取られてるのね…ま、これを機に汚名返上しますかな」

「続いては、人間代表の魔法使い！初戦でいきなりの友人との対決！手加減なしでいけ

るか?!霧雨魔理沙！」

「弾幕はパワーだぜ！」

魔理沙はミニ八卦路を持ってポーズを決めた。

「魔理沙”あ”あ”あ”あ”！」

観客席にいたアリスは大声を上げて魔理沙に声援(?)を送る。しかし周りから見ればドン引きレベルである。

「命蓮寺住職の聖白蓮の弟子が参戦！入道雲、雲山とのコンビネーションは發揮出来るのか!?雲居一輪&雲山！」

「雲山との絆を見せてあげましょうぞ！」

一輪は雲山と共にポーズをとる。

「だがしかし！その住職も参戦だ！人妖関係なく誰にでも優しい！人と妖怪が仲良く暮らせるのが望み！だそうです！聖白蓮！」

「これを機に、人と妖怪の交流が深められればいいのですがね…」

聖は照れながら言う。横から一輪が

「姐さん！絶対に深められますよ！」

と小声で言った。

「古の豪族が復活！現代人にその力を見せつけよ！物部布都！」

「我の力に震え上げるがいい！」

その様子を観客席で見ていた屠自古は

「すっげー心配だ…」

まるで期待してないかのように言う。

「妖怪の山を拠点に活動しているエンジニア!機械の力を見せてくれるか!?河城にとり
!」

「盟友!覚悟を!」

観客席では金属バットが

「にとり!無理すんじゃねえぞ!」

若干注意がけて言う。

「まさかの地下にいる妖怪が参戦!しかし彼女のお姉さんと違い心は読めませんのでご
安心を!無意識で相手を翻弄させる!古明地こいし!」

「さあ!楽しんじゃおーつと!」

こいしは笑顔で言う。観客席では

「こいし様…楽しそうで何よりです」

お燐こと火焰猫燐が安心したかのように言う。

「外の世界である佐渡からやって来た化け狸の総大将!得意の変げ術で惑わせれるか!?

二ツ岩マミゾウ!」

「さて、化け狸の実力を見せてやるか」

観客席では

「マミゾウ!頑張れ!」

封獣ぬえが声援を送る。

「ここまでAブロックからDブロックまでの出場者を発表しました！続く2人はシード枠と決勝枠の方です！まずは決勝枠からどうぞ！」

ゲートからピンク色の髪で緑の服、笑いと悲しみの顔があるスカートを履いており、周りには色々な種類のお面がある少女が出てきた。

「付喪神が遂に参戦だ！希望のお面を探し回ってるそうですが途中で暴れたりしないでしようか？お面の付喪神！秦ころ！」

「フオフオフオ！皆の者！覚悟しろ！」

ころころは何処から出したのか薙刀を振り回して言う。

「今回の大本命と言えるでしょう！シード枠の登場です！どうぞ！」

ゲートから遂にサイタマが現れた。サイタマが姿を表したと同時に観客席から大きな声援が響き渡る。

「突如幻想郷に現れ、数々の異変や事件を解決し、人妖関係なく支持されてる男！趣味でヒーローをやってる者！サイタマ！」

「俺はサイタマ、趣味でヒーローをやってる者だ」

サイタマは何故か自己紹介をした。しかしそれが観客者を興奮させた。観客席では神子が拍手している。と、一部の観客から

「あれって、豊聡耳神子様じゃないのか？」

「なんでサイトマ君を応援するんだ？」

数人が疑問に思った。

「以上！全ての選手の紹介が終わりました！これより始めます！まずはAブロック！博麗霊夢 vs 霧雨魔理沙！」

ステージ上には霊夢と魔理沙が立った。

「まさかいきなり魔理沙と戦う事となるとはね…」

「私も予想外だったぜ。けど遠慮なしで頼むぜ！」

「当たり前でしょ」

霊夢はヤレヤレな顔で言う。

「両者構えて…始め！」

こうして霊夢と魔理沙の勝負が始まった。

六十九撃目：白熱した戦い

「霊夢、手加減してるんじゃないのか？」

「する訳ないでしょ！」

霊夢と魔理沙の白熱とした勝負が繰り広げている。観客席からは声援が飛び交う。特にアリスの声援が。

「魔理沙”あ”あ”あ”あ”あ！」

しかし、アリスの声援はドン引きレベルの為、周りにいる人は引いている。

「霊夢選手！魔理沙選手！両者譲らぬ戦いです！」

「けど霊夢さんに有利に見えます」

実況の文は興奮しているが柊は冷静に解説をした。

控え室では…

「緊張してきた…」

「一輪、落ち着きなさい」

一輪は緊張していた。だが聖が落ち着かせる。

「姐さんはよく冷静でいられますね…」

「ええ、深呼吸して精神統一してますので大丈夫です」

「流石です…」

控え室でも緊張の空気に包まれていた。各選手は準備等をしていた。しかし、この男は…

「くがー」

サイタマは緊張のある控え室にも関わらず寝ていた。

「サイタマ殿はよくこの状況で寝ておれるな…」

「儂らにとつては羨ましいものじゃ」

布都とマミゾウはサイタマの様子を見ていた。と、その時

「勝負あり！勝者は博麗の巫女、博麗霊夢！」

「お互いいい勝負でしたよ」

放送がかかった。勝敗についてののだ。ステージの状況はガッツポーズをして霊夢と倒れてる魔理沙だった。接戦を繰り広げた2人だったが、最後に霊夢の夢想天生が決まったのが勝負の決め手だ。霊夢に対して声援が届いたが

「私の魔理沙に何て事するのよ！」

アリスは一人ブーイングをしていたが、隣にいた神綺に止められてしまった。
「第2試合まで少し時間を下さいませ」

文がそう言った理由は崩れたステージを治す為にだ。

控え室

「あーあー一回戦負けか…」

魔理沙は椅子に腰掛け呟く。

「惜しかったな、魔理沙」

「あと少しだったんだよな……って魅魔様!?!」

「久しぶりだな、魔理沙」

魔理沙は驚いた。其処には旧作のキャラであり、師匠である魅魔がいたからだ。

「なんで旧作のアンタがいるの!?!」

「いいじゃないか別に!あと久しぶりの師匠に対してなんだその態度は!」

「す、すみません!」

魅魔は魔理沙の頬を抓る。魔理沙は必死に謝る。立場上魅魔の方が上の為、魔理沙は

逆らう事はできない。

「で、何の用で来たんですか」

「いやあくちよつとね、弟子の様子を見にただけさ…けど惜しかったね！あと少しで
霊夢倒せるところだったのにね」

「はい、そうです…」

「ま、気にすんなよ！次回また出ればいいんだからさ！それと…このサイタマって誰だ
い？」

魅魔はトーナメント表を見て、シード枠であるサイタマに目がいった。

「外人です。人間とは思えない程の強さを持つてる奴です」

「へーそうなのかい。彼の試合が見てみたいね」

「準決勝まで待てますか？」

「待つに決まってるでしょ、その為に来たんだからさ」

魅魔は観客席へと行った。

「さて、私も行くか」

魔理沙も魅魔を追うように観客席へと行った。

「お待たせ致しました！これより雲居一輪&雲山 v s 聖白蓮の試合を始めます！」

ステージ上に一輪と聖が立つ。

「姐さん、今回は容赦なく挑ませてもらいますよ」

「ええ、遠慮なく来なさい。ただし、こちらも本気で行かせてもらいますよ?」

聖は笑顔を見せるが何か禍々しいオーラが見える。一輪は怯えるものの構える。

「では、開始!」

七十撃目：盛り上がってきたねえ～!…多分

「姐さん！申し訳ないけどやらせていただきますー！」

一輪は雲山を呼び出し、聖に拳を浴びせようとする。が

「あらら…私も舐められたものね」

聖は咄嗟に動き、一輪に目掛けて蹴りを入れた。

「ゴツ!？」

一輪はあまりに唐突だった為避ける事が出来ず飛ばされてしまった。そして気を失った。

「しょ、勝負あり！開始僅か一分で決着が着きました！勝者は聖白蓮！」

聖はガッツポーズをした後、気絶している一輪を抱えて退場した。

「アイツ結構強いんだな」

偶然その試合を見ていたサイタマが呟く。

続くCブロックでは物部布都と河城にとりの勝負。結果はにとりが大差で勝った。

「盟友！見てくれたか!？」

にとりは観客席に向かって言う。布都は以前と気を失ったままである。そして観客席では

「よっしやあー!」

バットが喜びをあげ、

「あんの馬鹿!」

屠自古が絶望したかのように頭を抱えて言う。

「ステージの方が少し崩れましたので少々時間を下さいます」

ステージは再び復旧作業へといった。

「落ち着け…落ち着くんじゃ儂…」

通路ではマミゾウは緊張を解すために自己暗示をかけていた。其処にサイタマが来た。

「おい、婆さん大丈夫か？」

「マミゾウじゃ!ちゃんど名前て呼ばんかい!それと確かに儂は婆さんじゃがお主よりも長年生きとる妖怪じゃぞ!」

「そこは否定しねえのかよ…」

サイタマはマミゾウが婆さんだという事に否定しない事に呆れる。と、其処に「ねえねえ2人で何してるの〜?」

「こいしがやって来た。」

「あ、ちよつと話をな」

「ふーん…:けと何でそんなにも落ち着いていられるの?」

「誰に言ってるの?」

「お主に言つとるんじゃないぞ!」

サイタマはこいしに問いかけに誰に言ってるのかわからなかったがマミゾウから自分に言ってる事に気づいた。確かにサイタマはこの緊張感のある場所にも関わらず選手の中でも一番落ち着いている。というより緊張感がないだけか。

「普通に落ち着けるだろ?」

「それはお主だけじゃ!」

「そーだよ、お兄さんだけだよ?」

「そうか、けど頑張れよ」

「うん！わかった！」

「儂も頑張るかなつと」

マミゾウとこいしはステージの方に向かっていった。

「長らくお待たせ致しました、まもなくDブロックの試合は始めます！」

ステージ上にはこいしとマミゾウがいた。

「地下の妖怪というから…掴み所がないな…けど年期は儂の方が上の筈…」

マミゾウは顔を顰めて言う。それを気にしたかこいしが

「顔怖いよお〜？楽しんでいこうよ♪」

こいしは相変わらず楽しそうである。

「それが出来たら苦労はせんわい…」

マミゾウはため息をつきながらも構える。こうして2人の試合は接戦となった。こいしが優勢と思われていたがマミゾウがやられる寸前にラストワードは発動させ、こいしを戦闘不能にしたのだ。したがって勝者はマミゾウである。動けなくなったこいしは大会関係者に病室に運ばれた。

「ちとやすぎたかのお…」

マミゾウは頬をかきながら苦笑いで言う。そして退場する。

「えーこれでAからDまで全ての試合が終わりました。次はそれぞれのブロックの勝者同士で対決となります」

文が説明した後モニターに表示された。

2回戦第一試合、博麗霊夢 v s 聖白蓮

第二試合、河城にとり v s ニツ岩マミゾウ

「簡単に申しますとAブロック勝者とBブロック勝者、Cブロック勝者とDブロックの勝者同士で対決となります。それでは試合を始める前に、皆さん?サイタマさんの試合を見たいと思いませんか?」

文は思いもよらぬ事を言った。サイタマはトーナメント上準決勝まで出番がない。しかし文はサイタマをそこまで待たせる訳にはいかぬと提案したのだ。

「見たい方は大きな声でお願いします!」

観客席からは大きな声が響き渡った。

「見たいという事です!わかりました!では特別試合を開始致します!サイタマさんと戦える幸運の方は……………霧雨魔理沙さんです!」

「え?」

「魔理沙！よかったじゃないか！」

魔理沙は自分自身でも予想外だった。魅魔は魔理沙の肩を叩いて喜ぶが魔理沙は不安だった。

「（確かサイタマって…神奈子や勇儀に勝ったんだよな…あ、私、人生終わったな）」

魔理沙は人生の終止符だと思った。魔理沙はサイタマの数々の戦いを見てきた。全てサイタマが圧倒的な強さで勝利をしている。まさか自分と闘う事になるとは…と思った。

「では魔理沙さん、スタンバイの方をお願いしますー！」

しかしもう後戻りは出来ない。仕方が無く魔理沙はステージの方へと行った。

「見せてくれよ…サイタマよ」

魅魔は不気味な笑みを浮かべて言う。隣から神綺が

「魅魔、表情悪いわよ？」

「え？そうか？」

魅魔は笑いながら言う。

一方控え室では…

「「当たらなくてよかった…」」

一輪、布都、こいしがホッと息をついた。と、その時、

「サイタマ様、魔理沙様が既にスタンバイしておりますので来てください」

大会関係者から連絡だ。

「じゃあ、行くか!」

サイタマはステージへと向かって行った。

七十一撃目：特別試合。人間代表の魔法使い V S 趣味でヒーローをやつてる者

「来るぞ…大本命が！」

「まさかこんな早く見れるとは…！」

観客席はどよめいていた。

「会場の雰囲気が変わった…！」

「え？何で？」

2 回戦進出者も雰囲気が変わった事に気づいた。にとり以外は

「では入場していただきましょう！本来なら準決勝まで出番はない筈の彼！しかし、この大会を見ている皆様の要望にお答えまして急遽特別試合をする事になりました！シード枠で人妖関係なく支持されており趣味でヒーローをやつてる者、サイタマ！」

サイタマは声援を浴びせられながらステージに向かった。しかし彼は全く緊張していなかった。

「対するは…1 回戦で霊夢選手に敗れてしまったがサイタマ選手と戦える事になった幸運の方！人間代表の魔法使い、霧雨魔理沙！」

魔理沙は酷く緊張している。というよりサイタマと勝負する事になり絶望している。

「けどやるしかねえなこれは……!」

魔理沙は覚悟を決めた。観客席では魅魔とアリスが見守っている。あと神綺も。

「サイタマ」

「ん?どした」

「負傷を負わせる訳には行かないが…全力でやらせてもらうぜ……!」

「そうか」

魔理沙は構える。サイタマはゆるーく構えた。

「では…特別試合…開始!」

レフェリーが合図をとったと同時に魔理沙は動いた。

「お、何かしてくるのか?」

サイタマは興味を抱く。

「悪いが許してくれ!マスタースパーク!!」

魔理沙はミニ八卦炉をサイタマに向けて、マスタースパークを放った。会場は眩い光に包まれる。その光が消え、ステージを見ると

「な、何という事だ!ステージ上には魔理沙選手だけだああ!?!」

何とステージ上には魔理沙だけだった。

「これは…夢なのか？」

魔理沙は疑った。しかし観客席では魅魔とアリスが声援を送る。

「まさか！まさかの！シード枠のサイタマ選手が敗れたというのか!？」

観客席では…

「嘘だろ!？」

「絶対ありえねえ！」

誰もが疑った。が、この男は

「サイタマはあの程度でやられる奴じゃねえよ」

この男が発した言葉に誰もが興味を抱く。男の名は金属バットである。彼はにとり
を応援する為に来たのだ。しかし彼はサイタマが戦う姿を見た事はない。

「え？何でわかるんだ？」

「サイタマの弟子から聞いたんだが、サイタマはあの白黒魔女が放つ光線を喰らっても
全く平気らしい。もしくは…避けたかだ」

バットの言った事は本当だった。

「あぶね…服燃えるところだった…」

ステージ上にはサイタマがいたのだ。

「なんと！なんと！サイタマ選手は全くの無傷だあ!!」

文の言う通りサイタマは無傷だった。魔理沙のマスタースパークを放たれたと同時に空高く避けたのだ。しかし滞空時間が長かった為負けたと勘違いされていた。

「何硬直してんだよ魔理沙、続きやろうぜ」

「私のマスタースパークを避けるとは…」

魔理沙は硬直をといた。そして

「ラストワード！サングレィ!?!」

ラストワードのサングレィザーをしようとした魔理沙の顔に衝撃が走った。何故ならサイタマが魔理沙が気づかぬ内に近づき、普通のパンチをしたからだ。魔理沙は飛ばされて気を失った。

「勝負あり！勝者はサイタマ！パンチ一発で魔理沙選手を失神させました！趣味でやってる強さとは思えません！」

サイタマは息をつき、退場した。彼に声援が送られながら。観客席で神子は

「サイタマさん…とても趣味でやってる強さとは思えません…」

と、言った。

控え室。

先程の試合を見ていた者は驚きを隠せなかった。何故ならサイタマは一発で魔理沙を倒したからである。しかし敗北した者達はサイタマと戦う事はないので安心し、魔理沙を気の毒だと思った。しかし2回戦進出者はまだ隠せていない。が、よく考えてみればサイタマと戦えるのは1人。つまり準決勝進出者である。霊夢、聖、にとり、マミゾウの内1人がサイタマと必ず戦う事になる。

「皆様、お待たせ致しました。まもなく2回戦のスタートです！最初は博麗霊夢vs聖白蓮！」

ステージ上に霊夢と聖が姿を表した。

「妖怪と仲良く暮らすのが望みなんてふざけたもんね」

「別にいいじゃないですか。これはあくまで私が望む事なのですから」

聖は微笑んで答える。

「まあいいわ。けどサイタマと戦うのは私よ！」

「いえ、サイタマさんと戦うのは私ですよ、霊夢さん」

緊張した空気が流れる。

「両者構えて！……………試合開始！」

七十二撃目：まさかの展開と2回目の特別試合

霊夢と聖の試合が始まった。聖は構え出す。何やら強者のオーラを漂わせる。しかし霊夢は怯える事なく聖に向かう。

「そんな時代遅れの構え、通用するバカなんていないわよ！」

霊夢が聖と至近距離になったその時、

「なっ!?!」

突然聖が膝蹴りをする。そして左腕を掴む。

「引つかかったという事は…霊夢さんは馬鹿と認定してもいいって事ですね？」

聖は微笑みながら言う。霊夢は外そうとするがとれない。そして聖が追い討ちをかける。

「ちよつと待って!………と、見せかけて夢想封印!」

霊夢は聖を油断させて夢想封印を放つ。しかし避けられてしまい、

「はっ!」

聖は霊夢の体に拳を入れた。霊夢は足をずりながら飛ばされたがステージの端で止まった。

「まさか…私が…アンタみたいな奴に負けるなんて…ありえない…!」
霊夢は倒れてしまった。

「しよ、勝負あり!何という事か!博麗霊夢が敗れる!勝者は聖白蓮!!」
あまりの予想外に文も驚く。

「もう少し手こずるかと思つてましたが…こんなにも早く決着がつくなんて思つてませんでした。後一回勝てばサイタマさんと戦う事が出来ますね」

聖自身も予想外だったらしい。一方観客席では萃香が

「あちゃー霊夢負けちゃったか(笑)。確かアイツ全く修行みたいなやつしてなかったから仕方が無いか!………紫どうした?」

萃香は隣にいる紫が気になったのか声をかける。

「こりやあ…ーから鍛え直すしかないわね…」

「まさかの鍛え直し!?!」

紫からまず口に出さない事を言つた事に萃香は驚く。

「八雲紫…それには同意見や…私も付き合おうぞ」

「お前誰だよ!!」

紫の横で見知らぬ女性が紫の意見に同調した。見た目は黒と赤の霊夢と同じ服装をしており、長い髪をしていた。

「あ、私、先代の巫女と申します」

「何で現世にいらんだよ!!」

女性は先代の巫女と名乗った。本来ならこの世にいないのだが、霊夢の事が気になり無理矢理蘇ったのだ。

「まあまあ萃香さん、そう気にせずに」

「気にするわ!」

萃香と先代の巫女の言い合いに紫は思わずクスツと笑った。

控え室では

「霊夢負けたのか」

サイタマが弁当を食いながら言う。

「お主はよくこの状況で飯が食えるな…」

「マミゾウが呆れながら言う。」

「そういや次はお前らだぞ。行かなくていいのか?」

「それもそうじゃな」

「マミゾウはステージへと向かった。」

続く第二試合の勝者はニツ岩マミゾウだった。試合状況は…どちらも譲り合い無し
の熱戦だった。しかしマミゾウのラストワードが決まったのが勝因である。その結果、
3回戦は聖vsマミゾウとなった。

「えーそれでは…3回戦を始める前にまた特別試合を行います。サイタマさんと戦うの
は…博麗霊夢さんです!!」

またもやサイタマの特別試合が始まった。今回選ばれたのは2回戦で敗北した霊夢
である。ステージ上に霊夢とサイタマが立つ。

「それでは…開始!」

レフェリーの合図で霊夢が動き出す。サイタマは立ったままである。

「動く気がないのなら、場外に出してあげる!」

霊夢はサイタマを場外に出そうとした。しかし、

「悪いけど、それはお断りだわ」

サイタマは返り討ちにした。霊夢は飛ばされるが何とか耐えきった。

「おのれ…!」

霊夢は目つきが変わり、再度サイタマに向かう。が

「同じパターンは通用しねえよ」

また振り返りにあった。だが霊夢は諦めずに向かう。サイタマはその度に跳ね返す。だが飽きたのかサイタマが

「今度はこつちから行かせてもらうぜ」

サイタマは目にも見えぬ速さで霊夢に向かって

「連続・普通のパンチ」

霊夢に向かって連続・普通のパンチを放つ。霊夢はもろに喰らってしまい、倒れてしまった。が

「まだだ…」

「いい加減諦めろよ」

サイタマはすかさず追い討ちをかける。もはや一方的になってしまった。しかし隙を見つけた霊夢が反撃する。

「夢想封印！」

サイタマは当たってしまったが服が汚れる程度でほぼ無傷だった。

「すまんがまだマジシリーズを使う気ないんだわ」

サイタマは再度連続・普通のパンチを放つ。霊夢は避けるで精一杯だった。しかし最後の一発が当たってしまい、倒れる。

「勝負あり！圧倒的な強さです！サイタマ！しかし本人はこれでも本気でないといいます！という事は準決勝に本気になると信じましょう！」

文は興奮していた。そしてサイタマは去ろうとした時に、

「霊夢、お前は努力は報われなかったか？俺は元は普通の弱い人間だったよ、けど血を滲むようなトレーニングを休まずに3年間続けた結果、この強さを手に入れた。だからな、霊夢：努力は必ず報われる。覚えておけ」

サイタマはそう言ってステージから退場した。観客席では

「サイタマさん……感動しました！」

神子が涙を流しながら言った。

「えー皆様、サイタマさんの名言を言って心を打たれた方もいると思いますが引き続き第3回戦を開始いたします！」

ステージ上に聖とマミゾウが立つ。

「試合開始！」

「悪いがお主の行動はお見通しじゃ！聖！」

マミゾウは聖の行動を見切ったかのように言い、近づく。が

「あら、そう思ってるのですか？」

「なに!？」

聖はマミゾウが思ってたのと違う行動に出た。

「まさか！儂が近づいたと同時に行動パターンを変えたというのか!？」

マミゾウは驚きを隠せない。

「油断してると痛い目にあいますよ」

「え?.....ぐっ!!」

聖はマミゾウの顔に拳を入れた。しかしマミゾウは反応に遅れた為避ける事が出来ずにそのまま倒れて気を失った。

「勝負あり！またもや一発で仕留めました!」

聖は礼をし、その場を去った。マミゾウを抱えて。

「えーこれにより！準決勝の試合は聖白蓮さんとサイタマさんの試合となりました!」

3 回戦までが終了し、勝ち進んだのは聖だった。その結果、準決勝でサイタマと戦う事になった。

七十三撃目：幻想格闘大会準決勝 霊長類を超えた阿闍梨VS趣味でヒーローをやってる者

「皆様お待たせ致しました！まもなく準決勝です！まずは一回戦から勝ち進んだ命蓮寺の住職、聖白蓮！」

聖はステージ上に上がり、周りに礼をする。

「対するは！シード枠であり、特別試合で圧倒的な強さを見せてくれたこの方！サイタマ！」

サイタマは手を振りながらステージへと上がった。

「皆様も待ちきれないでしょう、では…準決勝を開始します！」

「両者構えて…開始！」

レフェリーの合図で試合が始まった。この時、聖は不思議に思った。

「（あれ？全く動かない…）」

それはサイタマは腕を組んだまま動いてないからだ。聖は徐々にサイタマとの距離を縮める。

「サイタマさん…自分が強いからって私を舐めていませんか？」

「別にそのつもりはねえよ」

「そうですか…なら遠慮なくやらせてもらいますね！」

聖は拳を振り上げてサイタマを殴る。が

「いない!？」

しかしサイタマがいなかった。

「!？」

聖は何かを感じ後ろを向く。そこにサイタマがいたからだ。

「普通のパンチ」

サイタマは普通のパンチを繰り出す。しかし避けられてしまった。聖はパンチを繰り出す。サイタマはそれを受け止める。聖は外そうとするがガツチリと掴まれていてとれない。

「よっと」

サイタマは聖を地面に叩きつけた。が、聖は地面に当たる寸前に避けた。

「やりますね…流石です」

「お前も中々の才能だな」

両者は互いに褒め合い、激突した。

「凄い！凄すぎる！両者全く譲る気がありません！」

文は興奮しながら実況をしている。今はどのような状況かと言うと………サイタマと聖が殴り合っているのである。とはいえ、両者は受け止めたり、避けている。だが拳同士がぶつかり合ったりもする。と、その時

「よっ」

サイタマは聖を殴り飛ばす。壁にぶつかった聖に更に追い討ちをかける。がしかし聖も隙を見てサイタマを吹き飛ばす。この時サイタマは思い出した。

「これボロスの時と一緒だな」

サイタマはダークマター編でボロスとやり合った時と同じ状況だったのだ。しかし思い出している暇ではない。聖が追い討ちをかけてるのだ。

「油断大敵ですよ！サイタマさん！」

聖はサイタマを上空に飛ばし、そして地面へと突き落とした。地面に叩きつけられたサイタマの上から聖が追い討ちをかける。が、サイタマは当たる寸前に避けて聖の後ろに回り込み

「連続・普通のパンチ」

連続・普通のパンチを放つ。聖は全発命中し、よろけてしまった。サイタマは普通の

パンチをする。聖は飛ばされ壁にめり込んだた。

「これで終わりかな」

と、その時聖が動いた。しかし様子がおかしい。

「キシシシシ…」

聖は歯を見せて笑う。目は狂ったかのような風になっていた。

「な…なんだ？」

サイタマは不信に思う。と、その時聖が後ろに回り込み

「ビヤツハー！」

サイタマは殴り飛ばす、そして追い討ちをかける。サイタマは反撃する事が出来ず受け続ける。

「これで終わりだあああ！」

聖はサイタマをステージの方向に蹴り飛ばす。サイタマは地面にめり込んでしまった。だが聖の猛攻は終わった訳では無い。

「まだまだあ!!」

聖は動けないサイタマに対し容赦なく叩きのめす。周りから見ればリンチに近い。これに耐えれなかったのか

「サイタマさん！」

神子が観客席から飛び出そうとするが隣りいた者に止められてしまった。と、その時「ストップ！ストップ！」

聖はレフェリーに止められる。

「な、何という事だ！サイタマ選手、聖選手の猛攻にダウンしてしまった！あと少しレフェリーが止めに来るのが遅ければ命に危機があったでしょう！この勝負、聖白蓮のしよ」

「勝手に終わらすんじゃねえよ」え!?」

文は驚きを上げる。しかし驚くのは文だけでない。聖やレフェリー、観客全員も驚きを上げる。何故ならサイタマが立っていたからである。

「なんと！サイタマ選手、立ち上がった!!試合は続行です！」

「まさか…あれだけやってまだ立てるといのですか…!?!」

「当たり前だ、俺はお前よりも強い奴とやり合った事がある。そんな時も俺はさつきと同じ状況になった。だがその時俺は本気を出してなかった。したがって…俺は本気でやらせてもらうぞ」

会場全員が驚く。それはサイタマが今までのやり合いで本気を出してないと言っていたからだ。

「そうですか…なら、貴方の本気を見せて下さい！」

「おうわかった」

サイタマは返すと立ち位置を意識始めた。

「此処か？ いやもう少し奥か？」

周りから見れば謎の行動に近い。聖も首を傾げる。

「よし！ 此処だな」

サイタマは決まったのかその場所で止まる。

「何をするのですか？」

「見せてやるよ、俺の必殺技をな」

そう言うとサイタマは瓦礫に手を突っ込み

「必殺マジシリーズ……………」

マジ卓袱台返し!!」

七十四撃目：終幕

サイタマは瓦礫を持ち上げた。その衝撃で聖は浮く。

「瓦礫をひっくり返した……随分と派手な技ですね！」

聖は何事も無く瓦礫を砕く。

「瓦礫を利用して死角をつくり、私に攻撃しようなど無駄で……待てよ？今何秒たった……？……地面が見えない!?あの人はどれだけ飛ばしたというのか……!?!」

と、その時、後ろからサイタマが

「マジ・連続パンチ」

連続のパンチを放つ。連続・普通のパンチよりも遥かに重く早いパンチだ。感覚の狂った聖は避ける事が出来ずにそのまま当たってしまった。そして浮いている大きめの瓦礫にぶつかる。

「くっ……！反撃するしかありませんね……！」

聖はサイタマに向かって連続パンチを放つ。これに対しサイタマは

「連続・マジ殴り」

普通のパンチの強化版であるマジ殴りを連続で繰り出した。互いの連続パンチがぶ

つかり合う。だが聖は圧されている。

「まさか……！殴り合いに負けるだど!?こうなれば……動きで翻弄するしかない！回避！」

聖は隙を見て避けて上空へと逃げる。がしかし

「!?」

聖は瓦礫にぶつかり顔が埋まってしまった。

「天井が逆さ!?違う！私の感覚が狂っていた！」

瓦礫は全て本物の地面に落ちた。サイタマは着地する。聖は顔が埋まったまま瓦礫ごと落ちてしまつて。

「おい、聖、まだいけるだろ？」

聖はようやく顔が抜けた。

「当たり前です」

聖は血だらけになりながらもまだ動ける。そしてサイタマに向かい、自身の魔法で強化した拳をくらわせようとする。

「マジ頭突き」

サイタマは本気の頭突きをした。普通ならば聖が勝つのだがサイタマは超人レベルの人間である。したがって魔法で強化した聖の拳にも関わらずそれを跳ね返した。

「なん……だ……と!?」

聖は地面をずりながら倒れる。が、また立ち上がる。

「こうなれば……私のラストワードを見せるしかないようですね」

「おう、見せてみる」

「ラストワード……アーニングラサヴェーダ！」

聖は突進しサイタマを弾き飛ばす。そして追い討ちをかけるかのようにレーザーをサイタマに集中照射させるかのように放つ。そのレーザーは……サイタマに命中し、爆発した。その爆発は見るものを圧倒させた。実況の文も唾然したが

「聖選手のラストワードが炸裂!!これにサイタマ選手はひとたまりもないのか!？」

流石の実況魂、ぶれること無く実況をした。

「これで……決着が付きましたかな？」

聖は微笑む。と、その時、突然振動が響いた。地面にヒビが入った場所に……サイタマがいた。

「まだ終わってねーよ……!」

「なんと!サイタマ選手!まだ生き残っていたあ!!」

「嘘……で……しょ!？」

聖は膝をついてしまった。サイタマがまだ動けたからである。しかしサイタマのヒーロースーツは所々破けており、マントはボロボロだった。

「随分と派手なラストワードじゃねえか……俺もラストワードを見せてやるぜ」
「そうですか、ならば……!?!」

聖の目の前にサイタマが現れた。聖は拳を放つが避けられてしまう。サイタマは後ろに回り込む。そして

「マジシリーズメドレーの終止符……HEROパンチ!」

サイタマはマジ殴りの最終形態のHEROパンチを放つ。聖は避けようとしたが足が動かなかった。

「このパンチは俺の3年間の努力が積み重なったものだ! 最初から力のあるものにはわからないであろう力だ! 昔は弱かった俺でも努力でここまで強くなれた! 努力は報われたかのようなパンチ! それが………HEROパンチだ!!」

サイタマのHEROパンチは聖に命中し、吹っ飛ばした。そして壁にめり込み聖は気絶してしまった。そしてサイタマは拳を上げて

「会場のお前らにも言っておく! たとえどんなに弱い奴でも努力をすれば必ず強くなれる! 努力を舐めるな! 努力は……必ず報われる!」

サイタマの自身の経験上だからこそ言えた事だ。

「勝負あり! この激戦のゆえ、勝利したのは……サイタマ!! そして彼の言葉に私! 心を打たれて涙が止まりません!」

「文さん！私もです！」

文と権は泣きながら抱き合う。観客席の人達や出場者達も涙を流す（ただし金属バツトは泣いてない）。その中でも

「サ、イ、タ、マ、さ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ん、ん、ん、ん！」

神子は誰よりも泣き感動した。

「皆様、大変申し訳ありませんがステージの復旧に時間がかかりそうなので、決勝は…ステージが治り次第、再開します！」

聖とサイタマの激戦でステージは完全に崩壊してしまった。その為完全に治るまで決勝戦ができないのだ。

「よかった…久しぶりに本気で戦え…た」

サイタマは倒れてしまった。

その様子を見ていた秦ころろは…

「あわわわわ…」

酷く怯えていた。

七十五撃目：希望のお面

幻想郷格闘大会。その時、事件は起きた。それは…秦ところが辞退したのである。理由はおそらく…準決勝でサイタマと聖の激戦が原因とされる。もしかしたら自分は聖と同じ目に合うのではないかと危機感を感じたところは辞退したのである。その結果サイタマの優勝になるのだが、観客からは大きなブーイングが起きた。しかし豊聡耳神子の説得で解決した。その後、表彰式が行われたのだが其処にはサイタマの姿がなかった。その為代わりに神子がトロフィーを授かったのだ。サイタマ本人はと言うと

「まさか貴方みたいな人でも入院するのね」

「前にもこんな事があつたからな」

永遠亭。サイタマはベッドに横たわっていた。準決勝の激戦で大きな怪我をしてしまい永琳と鈴仙から集中治療を受けた。入院してから3日が経つのだがサイタマの怪我は1週間も経たないうちに治った。しかし包帯は巻かれている。

「けど今日まで安静しておくのよ」

「わかった」

永琳は部屋から出る。サイタマは文文。新聞を広げる。其処には幻想郷格闘大会の事が書かれていた。

「まさか辞退するとはな…」

そう呟くと、ドアをノックする音がした。サイタマは「入れ」と言う。

「サイタマさん大丈夫ですか？」

「あ、神子か」

神子が見舞いに来てくれた。手には優勝トロフィーと御見舞の品があった。

「結果的には俺が優勝したってことか？」

「はい、こころが辞退した為結果的にはです。後これ、優勝トロフィーです」

神子は優勝トロフィーを渡す。

「随分と豪華だな…」

サイタマはトロフィーを眺める。その時、再びドアをノックする音がした。

「師匠、大丈夫ですか？」

「あ、妹紅」

藤原妹紅も見舞いに来てくれた。サイタマの事が心配の為、来たのだ。手には御見舞

の品がある。

「お弟子さんですか？」

「一応な」

「あ、私は品届けにきただけです。師匠が無事で安心しましたので」

「そうか、それよりも頑張ってるか？」

「勿論です。けど師匠と対決するのは後免です」

そう言つて妹紅は帰つた。神子がサイタマに

「ここに渡す希望のお面があるのですが：一緒に来てくれませんか？」

「いいけど永琳から今日まで安静って言われてるから」

「サイタマさんの都合がいい時にお願ひします」

「なら明日でいいか？」

「わかりました」

サイタマと神子はここに希望のお面を渡す事を約束した。

翌日。

「ここにいる場所わかるのか？」

「ええ」

サイタマと神子はこころのいる場所に向かっていた。(その時の服装↓神子はいつも通り。サイタマは壊滅的な私服)

「いました」

神子は指を指す。其処にこころがいた。

「こころ」

「わー！神子か！それと……!!？」

こころは一瞬ビクツとした。そして木に隠れてしまった。サイタマに気づいたからである。

「おい、俺は何もしねーぞ」

「そ、そうなのか？」

こころは恐る恐る出てくる。

「こころ、君に希望のお面を持ってきてやった」

「ホントか！」

神子はこころに希望のお面を渡した。

「おーこれが希望のお面か！気に入ったぞ！ありがとな!!」

こころは嬉しそうに去っていった。

「嬉しそうで何よりです」

「てかあのお面…お前にそっくりだったけど何で？」

「あの、それはですね…」

神子は説明した。元々は別のにするつもりだったのだが、屠自古と布都が「太子様の顔だと希望に溢れている」と言われ、神子の顔にしたのだ。

「という訳です。…あ、もう帰るのですか？」

「ああ、今日は人里の店で特売してるからな」

サイタマはチラシを広げて言う。

「あの…サイタマさん。よければ神霊廟でお召になりませんか？」

「え？いいのか？」

「構いませんよ。サイタマさんとは友達に近いですので」

「お前が良いって言うなら行くわ。けど…早くしねえと特売が終わっちゃう！」

サイタマは急いで人里へと向かっていった。

「確か物資が沢山あると聞いてたのですが…」

疑問に思いながらも神子は神霊廟に帰った。

輝針城編

七十六撃目：下尅上日和

「暇だ」

サイタマは自分の家の床に寝転がっていた。そして新聞を広げる。そこには…

『逆さまの城現る！一体誰のものなのか!』

「城? どういう事だ?」

サイタマは首を傾げる。しかし思い当たる事があつた。

「そーいや最近妖怪とか怪物の様子がおかしいな」

サイタマは着替えた外に後出た。行先に多くの妖怪や怪物と会つた。様子がおかしかつたがサイタマはワンパンチで終わらした。其処に1体の妖怪が現れて様子がおかしい事を教えてくれた。

「最近下尅上が流行つてんすよ」

「下尅上? …弱い奴が強い奴に勝つことか?」

「ええ、そうです。しかし旦那は強いっすね〜!」

「まあな」

「それと、逆さまの城は彼処です」

妖怪は指を指した方向に逆さまの城がある事を教えてくれた。サイタマはその方向に向かう。

博麗神社

「霊夢！これ絶対異変だぜ！妖怪の様子がおかしい！」

「よしキタ！」

霊夢は起き上がり支度をした。其処に

「私も同行いたしますわ」

「あ、咲夜」

紅魔館のメイド長である十六夜咲夜が来た。

「お嬢様から行けと言われましたので」

「そうか、人数が多い程有利だもんな！」

魔理沙は自信あるかのように言った。その時霊夢はある事に気がつく。

「まさかだと思うけど…サイタマは行ってないよね…？」

霊夢は不安そうに言う。今までの異変は全てサイタマが解決している。その為また

手柄が取られるのではないかと思つたのだ。

「そういえばサイタマさんなら途中で会いましたけど」

咲夜は博麗神社に向かう途中にサイタマと会つていた。

「やつぱり！急がないと！」

その事を聞いた霊夢は慌てて外に出た。

「お、おい！霊夢！待てよ！」

魔理沙は急いで霊夢の後を追う。咲夜はヤレヤレ顔をして魔理沙の後を追つた。

サイタマは逆さまの城のある場所に向かつていた。と、その時

「ちよつと待ちなさい」

声が出た。声のする方に向けると其処には川があつた。

「誰もいないな」

「いえ、いますよ」

「え？」

突然川から女性が現れた。しかし所々おかしい。

「私はわかさぎ姫。人魚です」

女性はわかさぎ姫と名乗った。

「人魚……？」

「はい、そうです。しかし話は置いて……最強と呼ばれてるサイタマさん！貴方に勝つて人魚は強いという事を証明させてあげます！」

わかさぎ姫は自信満々に言う。

「そう言われても……どう戦えっていうんだ？」

サイタマは戸惑う。川にいるわかさぎ姫とどう戦えばいいとの事に。

「私は水にいると力が増すのです！」

理由を話した。それに納得したのか

「そうか、なら俺が勝ったらお前の肉くれ」

「望むところで……え？」

わかさぎ姫は聞き返した。「今この人なんて……？」と思った。

「いや、人魚の肉食うと不老不死になるって聞いたからさ。本当かどうか気になってな」

サイタマは人里の本屋で妖怪の事が書かれた本に人魚の事が書かれた事を思い出したからだ。

「えつと……その……ごめんなさい!!」

わかさぎ姫は川に潜り逃げた。泣きながら。

「逃げた…結局何だったんだアイツは？」
サイタマは呆れるものの先へと進んだ。

その頃とある場所…

「貴女、首が浮くなんて珍しい怪人ね」

黒い服を着た者が言う。

「私はろくろ首の妖怪だ。少し違うがな」

首が隠れる程の襟の高いマントを着、青い服に赤のスカートを履いた者が言う。

「妖怪…此処は本当に変わってるわね…」

「そういうお前も変わってるがな」

黒い服を着た者は周りにあった石や岩を宙に浮かせていたからだ。

「はやく、サイタマに合わないかね…」

その者はサイタマの事を知っていた。

七十七撃目：群衆束ねる超能力者

「まさか…この私が…負けるなど…」

ろくろ首の妖怪は倒れていた。負けたのである。

「妖怪って…こんなにも強いのね」

黒い服を着た者は腕を組みながら言う。

「しかし、お前のその奇妙な能力はなんだ…？」

「これは超能力よ」

「超能力か…」

ろくろ首の妖怪は力尽きたのか気を失った。

「中々いい勝負だったわよ、赤蛮奇」

黒い服を着た者はサイタマを探しにいった。先程戦ったろくろ首の妖怪、赤蛮奇に礼を言つて。そして黒い服を着た者の正体は…B級1位の地獄のフブキである。彼女は部下と共に幻想入りした。しかし今はフブキー人である。

「早く土地を見つけてくれればいいんだけど…」

ため息をつきながら呟いたその時

「フブキ?」

「サイタマ!」

フブキは振り返った。其処にはサイタマがいた。

「お前一人なの?」

「いえ、部下と一緒に来たのよ。マツゲ達には土地を見つけて来てって言うておいたけどね」

話によるとフブキは部下に土地を見つけてこいと命令し、偶然拾った新聞を見て逆さまの城の事が気になり単独で向かった所、赤蛮奇と遭遇し勝負になった。勝負を終えた時にサイタマと会ったのだ。

「貴方もその城に向かつてるの?」

「気になってな。後その道のりだけどあの脇道進めばいいって」

サイタマが指を指さした方向に脇道があった。薄暗く禍々しい雰囲気、脇道だった。

「本当にあつてるの?」

「うん、さつき会った妖怪に道を聞いたから」

「そう…なら行きましょう」

サイタマとフブキは怪しい脇道へと向かった。

一方その頃霊夢達は…

「ちよつと！3人同時とかなしでしょ！」

「先に仕掛けてきたのはアンタでしょ」

霊夢、魔理沙、咲夜は竹林で出会した狼の妖怪、今泉影狼と勝負していた。

「まさか人間がこんなにも強いだなんて…人間怖いわー」

「いやお前が弱いだけだと思っけど…」

「私は満月の夜に真の力を発揮できるのよ！」

影狼は言う。狼人である為、満月の夜だと力が増幅するのだ。しかし今は真昼間である。その為弱い。

「けど満月の夜だと貴女は毛深くなるって聞きましたけど…」

「それ気にしてるから言わないで！」

咲夜の言ったことに影狼は傷ついてしまった。影狼は満月の夜だと毛深くなる事1番気にしている。

「けど！今回はひとまず撤退します！ま、満月の夜になったら…覚えてて下さい！」

影狼は捨て台詞を残して逃げていった。

「結局なんだったんだ？」

魔理沙は首を傾げる。

「霊夢さん、急がないとサイタマさんに手柄取られますわよ？」

「そんなのわかつてるわよ！」

霊夢達は急いで逆さまの城へと向かっていた。

とある場所

「姉さん、この道であつてるの？」

「間違いないわ。輝針城への道のりは此処であつてるわ」

女性2人が会話しながら逆さまの城、輝針城に向かっていた。その正体は琵琶の付喪神である九十九弁々と琴の付喪神である九十九八橋だった。しかし2人に血縁関係はなく、同じ時期に付喪神になったので姉妹役をしている（弁々が姉役で八橋が妹役）。2人は道具による世界征服を企んでおり、輝針城に向かっていたのだ。と、そこに

「誰だ？アイツら」

「とりあえず聞いてみましょ」

サイタマとフブキが向かってきた。弁々と八橋の前に立ち、

「お前らさ、逆さまの城の道知らない？」

「え？輝針城の事？あっちだけど…」

「そうかサンキュー」

道を教えてもらうとサイタマとフブキはその方向に進んだ。が

「ちよつと待ちなさい！」

弁々がサイタマとフブキに呼びかける。

「姉さん！道教えたんだから私達も急ぎましようよ！」

八橋が弁々の肩を叩きながら言う。

「落ち着いて八橋、よくご覧なさい。あれは最強と呼ばれてるサイタマさんよ。隣の人
は知らないけど」

「あのサイタマさん!?これはいい機会なんじゃ…」

「そうよ、これは滅多にないチャンスよ」

弁々と八橋は小声で会話した後構えた。

「私達は琵琶と琴の付喪神の姉妹（血は繋がってないが）、九十九姉妹だ！最強と呼ばれ
てるサイタマさん！道具で世界征服の1歩として貴方を倒します！」

と、言つて弁々が前に出てサイタマを襲う。

「お前ら馬鹿か？道具で世界征服とか」

サイタマは弁々を殴り飛ばした。飛ばされた後、弁々は地面に頭から刺さってしまった

た。

「姉さん!？」

八橋は突き刺さった弁々を助け出そうとするが深く刺さっているのか抜けない。その時、八橋の目つきが変わった。

「姉さんの敵！私がとる！」

八橋はサイタマに襲いかかる。

「地獄嵐！」

横からフブキが自身の得意技である地獄嵐をした。八橋はそれをもろにくらってしまい無残な姿で気を失った。

「サイタマ、早く行きましょう」

「そうだな」

サイタマとフブキは再び輝針城へと向かった。

七十八撃目：叛逆の天邪鬼。いわばResistance

「なんだこれ…」

霊夢が呟く。彼女の目に映ったのは…地面に頭から刺さっている九十九弁々と気を失っている八橋だった。

「おい、大丈夫かー？」

魔理沙が八橋を叩く。叩かれた衝撃なのか目を覚ます。

「えっと…貴女は？」

「霧雨魔理沙だ。誰か通らなかつたか？」

「確か…サイタマさんと黒い服を着た女の人を通つていきました」

八橋は気を失っていたが覚えていた。しかしフブキの名前は知らない。

「わかりました。ありが…霊夢さん？」

咲夜が礼を言おうとした時に霊夢に気づいた。なんか顔色が悪く震えていた。

「ああ、ああ…また先越される！」

「おい！霊夢待て！」

「お、落ち着いて！」

霊夢は大急ぎで輝針城へ向かった。魔理沙と咲夜が慌てて追いかける。八橋はそれを見送った。

「あの人達も輝針城目指してるのかな？…あ！姉さん助けないと！」

八橋は未だに地面に刺さってる弁々を助ける。

輝針城内。

「すっげー歩きづらい…」

「仕方ないでしょ、逆さまなもの」

サイタマとフブキは城内にいた。しかし逆さまの為歩きにくい。と、其処へ

「よくぞ来たな、強き者よ」

突然少女が現れた。白い服を着ており（スカートには矢印の模様）、髪は黒色だが所々に白や赤が混ざっている。そして小さな角2本に赤い瞳。

「誰だお前」

「私は鬼人正邪！天邪鬼の妖怪さ」

少女は鬼人正邪と名乗った。

「貴方が異変起こした主なの？」

フブキが尋ねる。それに正邪は

「その通り！強き者を倒し、弱き者が制する世界を作るためにな！」

どうやら正邪は下剋上するつもりのようなのだ。

「つまりお前は小物妖怪って考えていいんだな」

「その言い方やめろ！確かにあつてるけど！だが！異変を起こしたのは私だけではないのだよ、明智君」

正邪は反発するが自身は小物妖怪である為認めるしかなかった。しかしサイタマとフブキに異変を起こしたのは自分一人ではないと言った。

「誰が明智だ」

「サイタマ、ネタとして受け入れなさい」

サイタマは名前を間違えられた事に怒るがフブキにネタと言われた事に納得（？）する。

「じゃあもう一人って誰だ、教えてろ」

「誰が教えるものか！」

正邪はあつかんべーした。教える気はないらしい。

「じゃあ、俺が勝ったら教えてろ」

「ああ、いいぜ。最強と言われてるお前に勝てたらどんなに嬉しいものか、ヒツヒツヒツ！」

サイタマと正邪の勝負が始まった。

一方霊夢、魔理沙、咲夜も輝針城内にいた。しかし迷っている。

「元凶は何処にいんのよ！」

「霊夢、落ち着けて……」

霊夢は苛立っている。

「サイタマさんもいるから絶対何処かに……」

その時、ドゴーンと音がした。

「絶対彼処だ!!!」

霊夢、魔理沙、咲夜は音のした方に向かった。

音のした所ではサイタマと正邪が戦っていた。しかし戦況はサイタマの方が圧倒的に有利である。正邪は「何でもひっくり返す程度の能力」で、それを利用して攻撃をし

ていたのだが、サイタマは全く動揺せずに避けて普通のパンチを当てていった。たまにフブキの援護も入っていた。

「まだだ……！」

正邪が瓦礫の中から出たきた。ボロボロだがまだ動ける。小物妖怪のくせに。

「まだ息あんのかよ」

「サイタマ、次で決めましょう」

サイタマとフブキは構える。

「私みたいな弱い奴の気持ちが強き者のお前ら等にわかる筈もない……！私は……強き者が制する世界が理不尽だと思つた……！それで弱き者が制する世界にしてやろうと思つたんだよ!!その為にある小人に犠牲になつてもらうんだよ!!」

正邪が最後の力を振り絞って攻撃しようとしたその時！

「マスタースパーク!!」

七十九撃目：一寸法師の末裔。

突然光線が飛んできた。サイタマとフブキは慌てて避ける。しかしコイツは「え？ちよつと何？」

正邪は理解してなかった。しかし光線が目前までに来てやつと理解できた。「のああああ!!」

正邪はその光線に当たってドーン!となった。

「よし!決まったぜ!」

其処に魔理沙が現れた。後ろには霊夢と咲夜もいる。

「危ねーだろ!服燃えるところだったじゃねーか!」

「すまんすまん」

怒鳴るサイタマに魔理沙は申し訳なきように謝る。

「サイタマ、あの子達は?」

「霊夢と魔理沙、あとは…誰だっけ?」

「十六夜咲夜です。以前お会いしましたよね?」

サイタマは咲夜の事を忘れていた。というより会ってなかったからである。

「十六夜…咲夜? ……あ! 紅魔館のメイドか!」

「思い出してくれましたか…!」

咲夜はサイタマが自分の事を思い出してくれた事に涙が出た。なんですか。

「えーと…サイタマの隣にいるのは誰?」

「私はフブキよ。宜しくね」

「おう、宜しくな」

フブキは魔理沙と握手する。そして霊夢と咲夜にも。

「さて、居場所を聞き出すか」

サイタマは瓦礫に埋まっている正邪に聞き出した。もう1人の黒幕を

「おい、もう1人何処にいるか教えろ」

「右に進めばわかる…」

正邪は力を振り絞って行き方を教える。しかしこの天邪鬼、右に行けとは嘘であり、本当は左に行けばもう1人の黒幕がいるのだ。正邪は「そのまま右に進んでカラクリの餌食になるがいい!」と心の中で思った。しかし

「じゃあ左に行くか」

サイタマは左に行くと言ったのだ。正邪は驚く。

「サイタマ? この子は右って言ってるわよ?」

疑問に思ったフブキが言う。

「フブキ、お前もコイツの能力見ただろ？」

「!!」

フブキは思い出した。

「それなら逆の事を言ってるかもしれないわね…」

「だから左に行くんだよ」

サイタマは左に進んで行った。フブキも後を追う。

「さて、私達も行くこう」

霊夢、魔理沙、咲夜も後を追う。1人残された正邪は

「なんで騙されないんだよー!!」

苦痛の叫びを上げた。

「正邪遅いなー」

輝針城の1番広い部屋で小人が正邪の帰りを待っていた。少名針妙丸である。

「まさか侵入者にやられてないよね…」

針妙丸な不安に思っていたその時

「ここか！」

サイタマが障子を開ける。

「だ、誰だ！」

針妙丸は針を構える。が、しかし

「で、あの天邪鬼が言つてたもう一人は何処にいるんだ？」

サイタマは気づいてなかつた。

「確かにね……」

「何処かに身を潜めてるかもしれないわね」

「逃げたとか？」

「魔理沙さん、それはないです」

サイタマだけでない。フブキ、霊夢、魔理沙、咲夜も針妙丸の存在に気づいてない。

「おーい！ここだ！気づけ！」

針妙丸は必死に声をかける。しかし気づかない。だがこの男は気づいた。

「なんだコイツ？」

「わー離せー！」

サイタマは針妙丸を掴む。針妙丸はジタバタと暴れる。

「サイタマ、いたの？」

「うん、コイツ」

サイタマはフブキに針妙丸を見せる。

「まさかこんな小人があ的那天鬼と異変を起こしていたのね」

「そうだ！正邪と一緒に弱き者が制する世界にするのだ」

針妙丸はフブキに針を向ける。

「けど無駄だぜ。私達は正邪を倒してきたからな」

「正邪が倒された!?嘘だ！」

魔理沙は正邪を倒してきたというが針妙丸は信じない。

「それと正邪が言ってたけどお前を利用してたってよ」

「え？」

サイタマの発言に一同（フブキ以外）が興味を引く。

「利用だったけ？確か正邪が何かしでかす際に”ある小人に犠牲になってもらった”って言ってたからな」

「その小人って…」

「コイツの事だろ」

サイタマは針妙丸を指さす。まず小人は針妙丸以外思いつかない。

「私は…利用されてたの…?」

針妙丸は項垂れた。今まで正邪と共に協力しあっていた。しかしサイタマにより本当の事を聞かされた。

「で、コイツどうする?」

「利用されてたという事は針妙丸さんは無実って事ですよね」

「そうなるな……よし!俺が保護するわ」

サイタマはそう言うのと針妙丸を掴み、肩に乗せた。

「え?なんで?」

「なんでって……お前は正邪に利用するされてたんだろ?無実のお前を倒そうとは思わねーよ」

「あ、ありがとうございます!」

針妙丸はお辞儀した。こうして異変は解決(?)した。

翌日

「師匠!宜しく願います!」

「お前を弟子にした覚えはない」

サイタマは針妙丸と暮らすことになった。

「てかお前って前より小さくなってないか？」

「えっとそれは……」

針妙丸は何故小さくなったのか説明した。それは打ち出の小槌の代償である。それで針妙丸は元々小さい体が更に小さくなったのだ。

「で、どうすんの？」

「正邪を懲らしめる！です！」

針妙丸は胸を張って言った。自分を利用した正邪が許せないのである。

「そうか、けどお前だけじゃ危険だし俺も同行するわ」

「ありがとうございます！師匠！」

「その呼び方やめろ」

サイタマと針妙丸はあの異変でいつの間にか逃げた正邪を探す事にした。

八十撃目：弾幕(?) アマノジャク!

「はあ、はあ……」

正邪は逃げていた。息を切らしながら。

「畜生……なんで私が指名手配されてんだよ!」

正邪は自身の手配書を見た。手配書にはこう書かれてた。

「W a n t e d !! 鬼人 正邪 捕まえた者には褒美を与える」

「この手配書のせいで眠れやしねえ……!」

愚痴をこぼしながら逃げ続ける。しかし、何故こうなったかというと……

「まだ諦めねえぞ……!」

正邪は針妙丸を騙し、弱き者が制する世界を創ろうとしていた。しかしサイタマとフブキ、輝針城自機組(霊夢、魔理沙、咲夜)にその夢は打ち砕かれた。しかし彼女は諦

めておらず、隙を見て逃げ出し、打ち出の小槌の力が入っている道具を集めた。しかし、その様子を見ていた八雲紫が彼女を指名手配にしたのだ。それはまたたく間に広がり、褒美目当てで正邪を追うようになった。したがって正邪は逃亡者である。

「けど打ち出の小槌の力が入った道具があつてよかつたぜ！」

正邪は笑う。しかし笑っている場合ではない。後ろから追っ手が来てるのだ。早速正邪は道具を使い、追っ手から逃れる。

一方同じ頃、

「アイツ何処にいるんだ？」

「探せば見つかります！」

サイタマと針妙丸は正邪を追っていた（ちなみに針妙丸はサイタマの肩に乗っている）。と、其処に

「貴方達もあの天邪鬼探してるのかしら？」

目の前に白いジャケットに黒の服と赤いネクタイ、白のスカートで赤い髪の女性が話しかけてきた。

「誰？」

「私は堀川雷鼓。和太鼓の付喪神よ、今はドラム使ってるけどね」

女性は堀川雷鼓と名乗った。九十九弁々、八橋と同じ付喪神である。

「お前も正邪を追ってるのか？」

「そうよ。あの天邪鬼は物を粗末に使ってるって聞いたからね。あ、あとこれ」

雷鼓は追いかける理由を話した後、サイタマに一枚の紙切れを見せた。

「何だこれ？正邪の手配書か？」

「そうよ、その天邪鬼捕まえたら褒美が貰えるって言うから皆必死に追いかけてるわ」

雷鼓は去っていった。

「褒美ねえ……」

サイタマと針妙丸は息びったしに眩く。

「道具持ってて正解だった！」

正邪は未だ追っ手から逃げている。しかし道具のお陰で逃げ切れているのだ。

「おのれ……アイツら反則級の弾幕使いやがって……」

そう、追っ手は避ける事が不可能に近い弾幕を放ってるのだ。しかし正邪は道具を駆使して逃れている。というより正邪の持つてる道具も反則級か。

サイタマは埋まった正邪に対し言う。針妙丸は針で正邪を刺している。追っ手は呆気にとられている。しかし直ぐに立て直し、正邪を捕まえようとする。サイタマと針妙丸も巻き込まれてしまった。

翌日。

「疲れたな」

「はい…師匠」

サイタマと針妙丸はぐっつりとしていた。先日の正邪を捕まえるの件で疲れていたのだ。正邪が地面に埋まつてる横で取り合いとなり、多くの者が倒れていく中サイタマを含めた残り数人で激突した。結果はサイタマが勝利したものの、正邪はいつの間にか逃げていたのだ。しかしサイタマは疲れたのか遠くで見守っていた針妙丸を連れて帰ったのだ。

「結果的にあの天邪鬼はどうなったんだ？」

「今も逃げてるらしいです」

「そうか。けど俺は追う気ないし…」

「私はちゃんと正邪を懲らしめられたのでよかったです」

針妙丸は嬉しそうだった。それを見たサイタマは安心した。

「私はまだまだ逃げ切つてやるぜ！」

正邪は………未だ逃げていた。もう追っ手はいないのに。

深秘録編

八十一撃目：片腕有角の仙人

「師匠！起きてください！朝です！」

とある森の白い家。小人は寝ているハゲの男の布団に跨り叩く。一寸法師の末裔である少名針妙丸である。

「んが？」

ハゲの男は針妙丸に言われるがまま起きる。その男の正体は…趣味でヒーローをやっており、多くの人から人気が高いサイタマである。

「……もう朝か」

サイタマは欠伸をし、背伸びして周りを見渡す。と、その時何かに気づいた。

「え？誰？」

サイタマの目の前に見知らぬ女性がいたからだ、桃色の髪をしており、頭にはシニヨンキャップを着けている。右手全体包帯で巻かれており、左手には鎖が着いている。民族衣装みたいな服を着ており胸元には花の飾り、前掛けには茨の模様がある。

「はじめまして、サイタマさん。私は茨木華扇という名の仙人と申します」

女性は茨木華扇と名乗った。お辞儀してきたのでサイタマと針妙丸も返す。

「今仙人つて言つたよな？もしかして青蛾と同じ…」

「ソイツとは違います！」

華扇は青蛾とは違う仙人だと言い切る。

「私は仙人ですがまだ修行の身です。ですので…」

「？」

「私を、弟子にして下さい！」

「ヤダ」

「何ですか！」

華扇はテーブルを叩く。振動で湯呑み茶碗と針妙丸が宙に浮く。

「いや仙人は普通人に教える側だろ」

「私はまだ修行の身です！だからサイタマさんに教わろうかと！」

「俺より青蛾の方がいいと思うけど」

「邪仙なんかに教わりたくないです！」

サイタマは青蛾に教われというが華扇は真つ向に否定する。

「じゃあこの弟子の小人はなんですか！」

華扇は針妙丸を指さす。

「針妙丸は単に一緒に住んでるだけだ」

「師匠！私って弟子じゃありませんでしたっけ!？」

「お前を弟子にしたつもりはない」

「ガーン……」

針妙丸は驚くべき事実に関が刺さり落ち込む。

「じゃあ私を弟子に……」

「ヤダ」

華扇の弟子入り志願にサイタマは断りつづける。それが数時間経過した。その結果

……

「私は諦めませんよ！では！さらば！」

華扇は帰った。しかし弟子入り志願は諦めてない。

「なんか俺が仙人みたいじゃなか……」

「師匠は仙人です！」

「余計なお世話じゃ」

針妙丸の言う事をサイタマは否定する。

数日後…

人里では奇妙な噂が流れていた。

「顔が人間で体は犬の生物が走っていた」

「脚を売る老婆を見た」

等の奇妙な噂が瞬く間に広がり子供達を恐怖に陥れた。しかし一部の者達は…

「何それ？外の世界の作り話でしょ？」

「あ、そーすか…」

博麗神社の巫女、博麗霊夢はその奇妙な噂を熱弁する霧雨魔理沙に対しそつけない返事をする。

「けど霊夢、実際にあつたら面白いと思わないか？」

「私には迷惑」

「だろうなw」

たとえあつたとしても迷惑扱いする霊夢に魔理沙は笑う。

「そうだ霊夢、これ知ってるか？」

「何を？」

「えつとな……………」

オカルトボールの事をな」

八十二撃目：オカルトボール

「オカルトボール？興味ない」

「あ、そーすか…」

霊夢に興味ないと言われがっかりする魔理沙。

「けどあれ集めたら願いが叶うって聞いたけどなー」

「え？」

魔理沙の呟きに霊夢が喰いついた。

「(願いが叶う…？ということとは!?)」

霊夢は考え込んだ。なんか欲深い事を。

「へへへ…いやあ集めに行こうか！」

霊夢は神社を飛び出しオカルトボールを集めに行った。ゲスい顔をして。

「アイツ…なに思いついたんだ？」

魔理沙は呆れるものの自分もオカルトボールを探しに行った。その”オカルトボールを7つ集めたら願いが叶う”という噂は流れた。とある妖怪寺の住職とその弟子や地下に住むさとり妖怪(無意識の方の)、またしてや豪族もそれに興味を抱いた。おまけ

にお面の付喪神も。

とある場所…

「オカルトボール…なんか怪しいですね」

「ああ、あれは何処から来たのか」

「あれは得体のしれない物じゃ。幻想郷にあるものとは思えぬ」

「怪しいけど願いが叶うが本当ならば背を大きくしてほしい！」

ある4人はオカルトボールは怪しいと思っている。しかしこの男のは…

「ぬるい」

相変わらずの緊張感のなさである。

そこにいたのは…片腕有角の仙人、茨木華扇、聖徳道士、豊聡耳神子、佐渡の二ツ岩、二ツ岩マミゾウ、輝く針のリリパット、少名針妙丸、そして趣味でヒーローをやつてる最強の男、サイタマ。

「けどサイタマさん…緊張感なさすぎです」

「そうか？」

神子はこの緊張感の中にも関わらず茶を飲んでるサイタマを指摘する。

「で、何のようで呼んだの？」

「師匠……話聞いてなかったのですか……」

サイタマは自身の興味の無い事には物覚えが悪い。その為、オカルトボールの事を全く聞いてなかったのだ。

「オカルトボールの事じゃ」

「オカルトボール？」

サイタマが聞き返す。

「全て集めると願いが叶う怪しいボールの事です」

その説明は華扇が言う。

「そうか……そのオカルトボールって……これ？」

サイタマはヒーローズのポケットから紫のボールを出す。それを見た一同は驚く。

「な、なんで持つてるんですか!？」

「知らん間にあつた」

「サイタマ! 嘘つくならもつとまともな嘘をつけ!」

「俺嘘つけねえし」

「なら持つてる理由教えてくれませんか？」

「理由?えつと…」

サイタマは何故オカルトボールを持つてる事を話した。

数日前…

「師匠!?!」

「久しぶりだな、妹紅」

サイタマは上白沢慧音の家の前にいた。弟子の藤原妹紅が居候してるからだ。

「えつと…何故来たのですか…?」

「お前と勝負するため」

「嫌です!」

「安心しろ、本気でやらんから」

「師匠の本気の度合いがわかりません!」

サイタマは嫌がる妹紅を無理矢理外に連れ出す。その様子を慧音が生暖かい目で見送る。そして…

「おい、終わりかよ」

サイタマは呆れる。前には妹紅が気絶している。サイタマは単に突進してきた妹紅

にビンタしただけである。しかし妹紅はそれで倒れてしまい気絶したのだ。

「俺が教えたトレーニング法やってるのか？ サボったら意味ねーぞ」

サイタマは帰った。がっかりしながら。その翌日、サイタマのポケットに紫のボール、オカルトボールがあつたのだ。

「そのボール、捨てても気がつくとあるんだよな」

「つまり一生ついてくると考えていいですね…」

「なんかストーカーみたいでヤダ」

と、その時

「おい、これ…宙に浮いたぞ」

一同は驚く。突然オカルトボールが宙に浮いたのだ。そして何かに吸い込まれるように飛んでいった。

「もしかしたら何か見つかるかもしれません！ 追いかけましょう！」

神子、華扇、マミゾウ、針妙丸、サイタマはオカルトボールの後を追った。

八十三撃目：秘封倶楽部初代会長（自称）

とある森、其処に一人の少女がいた。赤い眼鏡をしており黒の帽子に黒のマント、白手袋をし董色のチエック柄でPコート状のベスト、同じチエック柄で少し長めのプリーツスカート履き、インナーには白の長袖スクールシャツを着ている。

「ついに…ついに！幻想入りを果たしたぞおおお！この！オカルトボールのおかげで！私は幻想郷に行けたのだ！」

彼女はオカルトボールのお陰だと叫んだ。その正体は…秘封倶楽部初代会長（自称だが）であり、オカルトボールを7つ集めると願いが叶う”という事を噂として流した自身を超能力者と名乗る宇佐見童子である。彼女はサイタマ、東風谷早苗、二ツ岩マミ、ゾウと同じ外の世界の人間である（マミ、ゾウは妖怪だが）。彼女は幻想郷の存在を知ると侵入を試みるが大結界に阻まれてごく短い時間しか滞在出来なかった。其処で彼女はパワーストーンの”オカルトボール”を使い中に入ろうとしたのだ。しかし幻想入りした途端に気絶してしまった。

「さて、調べると思いますか！」

と、その時何か飛んできた。

「オカルトボール!？」

オカルトボールが董子に向かって飛んできたのだ。オカルトボールは董子の手の上に落ちた。

「けど何で…?？」

頭脳派である董子は理解出来なかった。其処に

「お前か、オカルトボールを送り込んだのは」

木々の奥からサイタマが現れた。

「えっと…どちら様?？」

「俺は趣味でヒーローをやっているサイタマだ」

「サイタマ……つてあの!？」

董子は驚いた。

「何で幻想郷にいるの!？」

「え? お前外の世界人間なの?？」

「サイタマさんも!？」

2人は戸惑った。外の世界同士だったからであろう（世界観は若干違うが）。しかし外の世界にいた時に会った事は一度もない。

「お前! オカルトボール集めると願いが叶うって本当か!？」

「だ、誰!？」

董子はまた驚く。声はするのに姿が見えないからである。しかしよく見てみるとサイタマの肩に小人がいた。針妙丸である。

「小人!?!初めて見た!」

「離せー!」

董子は針妙丸を掴み見つめる。

「サイタマさん、この小人は?」

「少名針妙丸。一緒に暮らしてる。それだけ」

「色々と調べたいので持って帰っていいですか?」

「師匠ー!助けてー!」

目を輝かせる董子に対しジタバタしてサイタマに助けを求める針妙丸という地味に微笑ましい光景だった。

「絶対ダメ」

「ですよね」

サイタマに断られると董子は針妙丸を返した。と、其処に

「「やつと追いついた…」」

「遅かったなお前ら」

華扇、神子、マミゾウがやっとサイタマに追いついたのだ。

「サイタマさん…もう少し遅めにお願ひします…」

「儂の体の事も考えてくれ…」

「やっぱり私を弟子に…」

しかし3人とも疲れている。疲れなくせに。

「誰？」

「仙人、太子、化け狸」

「つまり…妖怪ですか？」

「うん」

サイタマは董子に紹介する。しかし大雑把すぎる。

「あの…サイタマ（サイタマさん）…「そーいやお前の名前聞いてなかったわ」無視い!」

サイタマは3人を無視した。まさに邪道！

「あ、私は宇佐見董子です」

「そうか」

董子は今更名前を教えた。

「ところでオカルトボール7つ集めると願ひが叶うって本当？」

「あ、あれですか？嘘です」

「「「「え？」「」」」」

董子の発言にサイタマ達は唾然した。その言葉に奮い立たされたか華扇、神子、マミゾウ、針妙丸が董子に近づいた。

「えつと………何？」

「「「紛らわしい嘘をつくなあ!!」「」」

「え？ちよつと……まー！」

董子に攻撃をし始めた。周りから見るとリンチに近い。

「本気で信じてたのかよ……」

サイタマは呆れて座り、その様子を見ていた。そしてそれは終わった。董子は無残な姿になっていた。4人は何故か顔を赤めている。

「お前ら……まさか本気で信じてたのか？あの噂を」

「「「それ言わないで!」「」」

どうやら本気で信じてたらしい。あまりの恥ずかしさに丸くなった。

一方「オカルトボールを7つ集めると願いが叶う」が嘘だと知らない者達は…

「オカルトボールよこせやゴリアー！」

未だオカルトボール争奪戦をやっていた。

八十四撃目：拘束された会長

「ん……う……は……？」

董子とはある大木に縛られていた。無残な姿で気を失った時に拘束されたのだ。しかし何故か傷は治っていた。

「やつと目を覚ましましたか」

「貴女は!？」

拘束されている董子の前には華扇がいた。しかし華扇1人ではなく、周りには神子、マミゾウ、針妙丸、サイタマもいた。

「ふっ……こんな縄など、私の超能力で!」

しかし解けない。縄を縛ったのはサイタマであり、非常に固くめちやくちやに結ばれているからである。

「な、何で!？」

董子は焦る。それを見ていた一同は

「超能力者とはなんだったのか……」

「あれはハツタリだったのか……」

「くだらない…」

「変態め…ざまあみろ」

しかしサイタマは

「超能力か…顔見知りかいたな」

サイタマの発言に全員顔を向ける。

「え？どういう事ですか？」

「フブキって俺と同じ外の世界の人間でな、ソイツも超能力使うんだよ。後これ写真」

サイタマはスマホを取り出しフブキの写真を見せる。

「綺麗…」

「見た目では信じられんな…」

「大きい…」

全員がフブキの写真を見てる中、拘束されている董子が

「その人に会わせて下さい！」

「ダメ、解いたら絶対なんかしでかすだろ」

「ぐ…!!」

凶星だった。もし縄を解けば董子は逃げだし何をしでかすかわからない。其処に神

子が

「第一その人は何処にいるのですか？」

「あ、ちよつと待つてろ」

サイタマはフブキに電話をかける。その様子を

「携帯電話か……」

「え、マミゾウさんも持つてるのですか？」

「ああ、一応な」

マミゾウは携帯電話を取り出す。しかしサイタマと違う機種だった。

「儂にはスマホは使いこなせぬ。だからサイタマの弟子である人造人間と同じのを使っ

ておる」

「そうでしたか………え？」

華扇は耳を疑った。「え、今弟子の人造人間」って……

「人造人間って誰の事？」

「お主、会った事ないのか？」

「いえ……妹紅さんしか見た事がないのです」

「サイタマから幻想郷にいると聞いたが……」

「ジェノスならとつくの前に帰ったぞ」

その話を聞いてたサイタマが入り込む。ジェノスは既に元の世界に帰っている。それを聞いた華扇はがっくりする。しかし電話中の筈のサイタマが何故話に入っていたのが気になったマミゾウが

「電話…終わったのか？」

「うん、今さっき」

「どうやらフブキとの電話は終わってたらしい。」

「あの…何処にいるって言ってました…？」

拘束されてる董子が言う。

「フブキなら幻想郷の何処かにアジト建ててるって」

「場所は…？」

「あ、聞いてなかった」

「意味ないじゃん！」

董子は頭を上げる。だが大木にぶつかり痛がる。

「探せば見つかるだろ」

「そういう問題じゃないと思います…」

フリーダムなサイタマに神子が少々呆れる。

「そーいや何で縛ってたんだっけ？」

「目的を聞くためですよ！」

「そうだっけ？じゃあ話せ、話したらフブキに会わせてやる」

「その人に会わせてもらえないなら全て話します！」

董子は態度が変わり、幻想入りした目的を話した。しかしサイタマから“長い”と言われてしまい、簡略で話した。

「成程な、よし、フブキに会いに行くぞ」

「ありがとうございます！」

董子は礼を言う。サイタマはめちやくちやに縛られてた縄を解く。自由の身になった董子は早速フブキのいる場所に向かう。しかしサイタマに止められた。

「何で止めるんですか！」

「お前一人だとなんかしでかすだろ」

「う……」

董子は言葉が詰まってしまった。サイタマは疑ってるらしく一緒に同行するのだ。しかし場所はわからない。

「建物の特徴は聞いてないのですか？」

「あ、確か……黒色って聞いた」

「黒色……ま、探しましょう！」

董子は張り切っている。それを見たサイタマはこう思った。

「コイツ…相手にしたら絶対疲れるな…」と

八十五撃目：フブキ組のアジト

「で、何でお前らまでいんの？」

サイタマは後ろを振り向く。童子だけでなく華扇、神子、マミゾウがおり、そして肩に針妙丸がいた。

「実物を見たいから」

「「同じく」」

全員一致だった。

「お前ら……」

サイタマは呆れるが気を取り直してフブキのアジトを探す。

「確か黒色の建物って言ってたから………あれか」

木々の奥に黒色の建物が見える。しかしまだ距離があり普通の人では見えない。しかしサイタマは視力が非常にいい為見えた。

「サイタマさん、あれですか？」

「あ、うん。あれ」

「どうやら神子も見えるらしい。」

「あ、確かに黒い建物があります」

華扇も見えた。しかしこの3人は

「全く見えない…」

「視力が良い奴が羨ましいのお…」

「師匠…デタラメじゃありませんよね…?」

董子、マミゾウ、針妙丸は見えなかった。

「じゃ、行くか」

サイタマ一行はアジトに向かって進んでいく。

フブキ組アジトでは…

「フブキ様、サイタマが来ました。例の少女を連れて」

双眼鏡で見ていた眉毛の濃い男が言う。B級2位のマツゲである。

「やっと来たのね」

フブキは待ちくたびれたかのように言う。

「しかしフブキ様、何やら関係の無い奴もいますが…」

フブキの横で岩のような顔をした大男が言う。フブキ、マツゲと同じB級であり3位

の山猿である。

「サイタマの知り合いなんかでしょ、まあいいわ」

フブキはアジトに戻っていった。マツゲ、山猿も戻る。

「悪いな、いきなり」

サイタマはソファに腰掛けて言う。

「いいわよ別に。で、まさか自分からフブキ組に加入に来たの？」

「んなわけねーだろ」

フブキはサイタマ自身がフブキ組に入りに来たのではないかと思ったがサイタマは否定する。

「で、貴女が宇佐見董子さんね」

「は、はい！そうです！」

董子は酷く緊張している。フブキ本人に会えたからである。

「あの…リラックスしてね…？」

「それが出来たら苦労はしません！」

今の状況、董子はとてもリラックスできない。今にも気を失いそうである。だが董子

以外は普通にくつろいでいた。

「ところで…フブキ組とは一体…？」

「あ、フブキ組の事ですか？フブキ組とは…私が束ねる派閥の事です。B級のほとんどがこのフブキ組に入っており、皆で協力しあつて支えているのです」

フブキは華扇にわかりやすく説明する。と、横からサイタマが

「本当は抜かされないように「ちよつと失礼！」むぐ!？」

何か言おうとしたサイタマにフブキが止めて別の部屋に連れ込む。皆が呆気にとられてる。

「サイタマ！本当の事言わないでよ！」

「だってそうじゃん、お前らのやつてる事ほぼ無理矢理じゃんか」

「それは私の順位を保つ為よ！」

「そこは認めるのかよ…」

サイタマは呆れる。そして2人は部屋から出る。

「あの…何の話を…？」

不思議に思つた華扇が尋ねる。

「特に何もありませんよ」

フブキは笑顔で言う。しかしそれが華扇の背筋を凍らせた。何故ならフブキの左脇

でサイタママが苦しそうな顔をしていたからである。それを見た針妙丸が飛びかかろうとするがマミゾウに止められてしまった。

「さ、董子さん。続けましょ」

「はい！聞きたい事山ほどありますので！」

董子はフブキに聞きたい事を沢山言うつもりだ。それにフブキは苦笑いをした。

一方外では…

「此処にフブキがいるのはわかってるのよ！」

緑髪で黒い服を着た少女に見える女性が言う。

「待つて下さい！此処を通すわけには行きません！」

フブキの部下数人が必死に止める。しかし

「邪魔よ、どきなさい」

緑髪の女性が手を前に出すとフブキの部下は宙に浮き、飛ばされて地面に叩きつけられた。

「さて、邪魔者は消えたし、フブキを連れ戻しましょ」

緑髪の女性はアジトの中に入っていった。

八十六撃目：超能力者の姉

「玄関なのに随分と広いわね」

見た目少女の女性は呟く。だが彼女は宙に浮いている。と、其処へ

「あ！タツマキ！」

「サイタマ!？」

不審に思ったサイタマが玄関に来たのだ。そしてまさかの再開を果たす。見た目少女の彼女の名はS級2位であり、地獄のフブキの姉である戦慄のタツマキである。

「何で此処にいんのよ！」

「そのセリフをそのまま返す」

タツマキは何故フブキのアジトにサイタマがいるのかと聞くがサイタマは何故タツマキが幻想郷にいるのかを聞く。

「私はフブキがいなくなつたから探してたら胡散臭い変なおばさんがフブキなら幻想郷に行つたって言ってたから来たのよ！」

タツマキは幻想入りした理由を話した。妹であるフブキが突然いなくなつたからだ。

「胡散臭い変なおばさん…?」

「八雲紫の事よ！」

「あ、彼奴か」

サイタマは最初誰と思つたが紫の事だと聞かされた納得した。

「で、その傷は何だ」

「その八雲紫っていう奴にやられたのよ！そしたら永遠亭とかいう場所で治してもらつた！それだけ！」

タツマキはまるで子供みたいな言い方で答える。タツマキは紫から妹は幻想郷にいると聞かされ幻想入りした。しかしその時に紫に対して”胡散臭い変なおばさん”と言つてしまいこてんぱんにやられてしまった。その後永遠亭で治してもらつて今に至る。

「とりあえず其処をどきなさい」

「なんでだよ」

「決まつてるじゃない！フブキを連れ戻す為よ！」

タツマキは手を前に出し、サイタマをどかそうとする。しかし

「何だこれ、筋肉が震える」

「何で浮かないのよ！」

タツマキは怒る。彼女の超能力はフブキよりも強力である。しかしサイタマは異常

に凶太い精神の持ち主である為、タツマキの超能力でも動じないのだ。
「むー！こうなったら！」

タツマキは更にパワーを強めた。

一方フブキ達は

「何だか騒がしいですね」

「玄関に何かいるのか？」

「師匠が行ったから問題はないと思う」

玄関から騒がしい音がする事に誰もが疑問に持つがサイタマが行った為そんなにも気にしてなかった。

「小人さんの言う通りサイタマが行ったから問題は「ドゴン!!」え？」

突然壁が壊れたのだ。誰もが動揺する。そして瓦礫の中から覇者サイタマが現れる。

「サイタマ!?!何してるの!?!」

「んな事タツマキに聞けよ！」

「タツマキ…?まさか!?!」

フブキはサイタマが壊した壁の穴を見る。其処には…タツマキがいた。

「見つけたわよ、フブキ」

タツマキは腕組みをしながら言う。

「お姉ちゃん……!」

フブキは顔をしかめる。

「「「お、お姉ちゃん!?!」」」

華扇、神子、マミゾウ、針妙丸はフブキとタツマキを見比べる。何処からどう見てもフブキが姉でタツマキが妹にしか見えない。

「何でいるのよ……!」

「アンタを連れ戻す為よ」

「私は幻想郷で活動するって決めたのよ……!」

「そんなの私が認めるわけないわよ!」

「そんなの………私が決めることよ!!」

フブキは得意の地獄嵐をする。

「おおお……!」

その様子を見てた童子が目を輝かせながら「超能力ってすげえ!」と思った（お前も超能力者だろうが）。が、しかし

「（やっぱり……当たり前のように効いてない……）」

フブキはわかっていた。タツマキに自分の超能力は通じない事に。

「これで諦めついたでしょ？ さあ、帰るわよ」

タツマキがフブキを連れ戻そうとした時、

「やめろよ、フブキの好きにやらせろよ」

サイタマがタツマキを腕を掴む。

「サイタマ…アンタは関係ないでしょ。どきなさい」

「何でどく必要があんだよ」

「アンタは関係ないでしょ！ どきなさい！」

「別にいいじゃん」

「よくないわよ！」

タツマキは超能力でサイタマをどかそうとする。しかしサイタマの異常に凶太い精神のせいでどかすことができない。

「もー！ 何でどけないのよ！」

「（それはサイタマの精神力が異常に凶太いからよ…）」

きれいなタツマキに対しフブキは冷静だった。

「それよりも何でフブキをそこまでして連れ戻したいんだよ」

「私の妹だからに決まってるでしょ！ それと！」

「それと？」

「フブキがないと心配なのよ！」

八十七撃目：極度のシスコン。いわゆる過保護

「「「「「え？」」」」」

誰もが耳を疑った。

「だってフブキがいないと…お姉ちゃん心配なんだもん！」

タツマキは言い続ける。しかし顔が赤くなっている。

「フブキ…タツマキってまさか…」

「そう…お姉ちゃんは極度のシスコンなのよ…」

フブキは溜息をつきながら言う。フブキの言う通り、タツマキは極度のシスコンである（いわゆる過保護）。ある事をきっかけに他人の助けを嫌うようになり唯一の肉親であるフブキに過保護になり、幼い頃フブキを虐めてた者達に超能力で容赦のない制裁をした程だ。

「話で聞いたところ…スカーレット姉妹や古明地姉妹もそんな感じだった気がします…」

「確かに…あの姉妹はな…」

タツマキだけでなくレミリア・スカーレットや古明地さとりも過保護である。妹に手

を出す者がいれば容赦ないらしい（というよりレミリアの妹であるフランドール・スカーレットは地下室から出る事はないし、さとの妹である古明地こいしとは会う事はほとんどないから意味なしか）。

「だからフブキ！一緒に帰るわよ！」

「だから私は此処で活動するって言ったでしょ！」

「何でアンタに決める権利があるのよ！決めるのは私よ！」

「何でもお姉ちゃんが決めないでよ！私には決める権利がある！」

「あるわけないでしょ!!」

こうしてタツマキとフブキによる姉妹喧嘩が始まった。サイタマ達は巻き込まれないよう比較的安全な場所に避難した。

5時間後…

「本当にそれでいいのね」

「だから言ったでしょ、私はもう決めた事なんだから」

タツマキは納得した。姉妹喧嘩は5時間にも及ぶものだった。辺りは無残な姿になっていた。フブキは傷だらけだが、タツマキは全くの無傷である。これがB級とS級

の差か。

「とりあえずこれ」

タツマキがフブキに向かって何かを投げた。

「お姉ちゃん……これは？」

「永遠亭の無料治療券。それ見せたらタダで治してもらえるから」

タツマキは照れながら言う。喧嘩はしたもののフブキの事を心配してくれてる。

「じゃあ、私は帰るから。ピンチになったら……私を呼んでね」

タツマキは帰った。

「「姉妹っていいものですね……」」

「お主ら……涙流しすぎじゃ……」

妹思いのタツマキに感動した華扇、神子、針妙丸にマミゾウは呆れる。

「フブキ、あれでよかったのか？」

「私はそれでいいのよ、けど……お姉ちゃんは私が呼ばなくても来てくれるけどね」

サイタマの間にフブキは照れくさいように言う。

それから数日後、サイタマは人里で買い物をしていた。壊滅的な服装で。と、其処に「サイタマきーん！」

「あ！お前！」

外の世界に帰ったはずの宇佐美董子がいたのだ。

「お前って外の世界に帰ったはずじゃ…」

「そうなんですけど…：なんか寝てる間だけ幻想郷に行けるようになったんです」
話によると董子は寝てる間だけ幻想郷にいられるらしい。

「って事は本体は外の世界にあるって事？」

「はい！あ、けどもう授業なので目を覚まします！それではまた！」

董子は手を振って帰った。

「アイツ学生だったのか」

サイタマはそう言うとうちの家に戻っていった。

博麗神社。

「あれって嘘だったのね…」

「けど私は楽しかったぜ」

霊夢と魔理沙が茶を飲みながら会話をしていた。

「で、あれはどうするんだ？」

「私に聞かないでよ」

魔理沙の目線には……落ち込んでる聖白蓮、雲居一輪、物部布都、古明地こいし、秦こころがいた。なんですか。と、其処に

「聖と一輪はいるか？」

「あ、ゾンビマン」

命蓮寺に居候しているゾンビマンが来た。聖と一輪を連れ戻しにきたらしい。

「何で落ち込んでるんだ？」

「オカルトボールの件でね」

「あ、あれか。騙された奴が悪いだけだろ」

この発言に

「うわ、鬼」と聖

「最低」と一輪

「人でなし」と布都

「イケメン」

「いやこころちゃん、イケメンは悪口じゃないよ？」

「じゃあ格好いい」

「言い方を変えてどうするの!？」

悪口を言わないところにこいしが突っ込む。

「好きだけ言え、聖、一輪帰るぞ」

悪口に全く気にしてないゾンビマンは聖と一輪を無理矢理連れて帰った。

「さて、我も太子様が心配してると思うし帰るか…」

布都も帰っていった。

「じゃあ、私達も帰ろっか」

「うん」

こいし、こころも帰った。

「結果的になんだったんだらうな」

「さあ?」

残った霊夢と魔理沙はオカルトボールの事がまだ気になってたらしい。

番外編 part 2

八十八撃目：月に行くようです。前編

とある場所：其処には4人の男がいた。

「まさかお前から誘いに来るとはな」

ハゲの男が言う。

「同じく。普段はそうには見えないのにな」

髪が長い剣士が隣のハゲの男に同情する。

「確かにな。けどこの工房の奴らは協調性なさそうだな」

顔が白くまきさにゾンビみたいな男が工房にいる者達を見る。

「お前らは俺をどんな目で俺を見てるんだよ……」

誘った本人である不良に見える男が怒りを見せる。その男達の正体は…

” 趣味でヒーローをやってる最強の男” サイタマ

” 光速の剣士” 閃光のフラッシュ

” 鬼や龍等が恐れる不良” 金属バット

” ある意味不死の戦士” ゾンビマンである。彼は今、バットと仲が良い河童の工房に

いた。

「よくぞ来てくれたぞ！盟友！」

と、其処に工房長“水の中のエンジニア”河城にとりが現れた。

「にとり、何の用で呼んだんだよ」

「それはな！月に行けるロケットが完成したのだ！」

「口、ロケット？」

「そうだ！これを見てくれ！」

にとりはモブ河童達に合図を出し、垂れ幕を開ける。其処にはいかにも近未来的なロケットがあった。

「わーすげー」サイタマが言う。

「俺らがいた世界にありそうだな」ゾンビマンが言う。

「強度的に大丈夫なのか？」フラッシュユが言う。

「安心しろ！強度はバッチリだ！一度試したからな！」

にとりは胸を張って言う。しかもドヤ顔で。

「なら安心できるな」バットが言う。

「さ！早く乗ってくれ！」

にとりに言われるがままに乗り込もうとする。その時サイタマが

「そういや今日手紙来てたんだわ。月の都から」

「「なに？」」

サイタマの発言に興味を持つ。

「手紙ってなんだ？」

「これ」

サイタマは今日届いた手紙を見せる。そこに書かれてたのは

『趣味でヒーローをやってるサイタマさんへ』

貴方の活躍は月の都でも噂になっていきます。サイタマさんの戦う姿に月の都の人々は皆興奮して盛り上がっています。そこで貴方を月のテーマパークにご招待します。また、何人か連れてきても構いませんので宜しく御願います。 差出人：綿月豊姫』

「月のテーマパークか…」

「だが綿月豊姫って誰だ…？」

「その連れが俺らって事か」

月のテーマパークの事や豊姫って誰だとの疑問があるが考えてる暇はないので口ケットに乗り込む事にした。

「盟友！準備はいいか？発射するぞ！」

にとりはロケットの発射準備をする。そして…

「3！2！1！……………発射！！」

にとりはカウントダウンをした後発射ボタンを押したと同時にロケットが発射された。

「盟友！お土産頼んだぞー！」

しかしにとりの声は聞こえるはずもない。

ロケット内部では…

「すげえーな」

「幻想郷にも宇宙があるんだな」

「だがこの重量には慣れないな」

「全員ロケット乗るのは初めてだしな」

4人は呑気に会話をしていた。そして

「着いたか？」

ロケットが着地した。どうやら着いたらしい。

「あ、そうだ。手紙と一緒にこれついてたわ」

サイタマは手紙と一緒に取った箱を取り出す。中には透明なスーツみたいな物が何故か4つあった。

「これ着るとなんの問題ないってよ」

「だが偶然よく4つあったな…」

4人は透明なスーツみたいな物を着て外に出る。と、其処に「お待ちしておりました、サイタマさん」

1匹の兎が現れた。

「誰?」

「私はレイセンと言います。綿月様のペットである玉兎です。サイタマさん及びお連れの方々を案内します」

レイセンはサイタマ達を月のテーマパークへの案内した。

八十九撃目：月に行くようです。後編

「ところでサイタマ…」

「なに？」

「肩に乗ってる人形はなんだ…？」

レイセンに月のテーマパークまで案内されてる時に、ゾンビマンがサイタマの肩に乗ってる人形が気になったので聞く。

「これか？………気にするな」

「気にして!!」

「「喋ったぞ?!」」

突然人形が喋ったので一同が驚く。

「てかお前…いつからいたの？」

「最初からいましたよ!」

人形の正体は小人の少名針妙丸である。しかしサイタマに忘れられてたので怒る。

「着きましたよ」

「あ、着いたのか」

「無視しないで！」

どうらや月のテーマパークに着いたみたいだ。しかし針妙丸は無視されたので落ち込む。

「随分と派手だな……」

全員揃えて言う。もはや外の世界にありそうな遊園地だったからだ。しかも屋台付きで。

「豊姫様！連れてきました！」

「レイセン、ご苦労様」

噴水みたいな所にいたのは……手紙の差出人である綿月豊姫である。

「ようこそお越しくださいました。サイタマさん、とお連れの方々」

豊姫は微笑みながら言う。

「随分と派手だな、ここ」

「ええ、外の世界の遊園地を参考にさせていただきましたので」

「（あ、やっぱり）」

豊姫の言った事にサイタマは「やっぱそうだったのか」って思った。後ろにいるフラッシュ、バット、ゾンビマンもそうだった。しかしサイタマの肩に乗ってる針妙丸だけは首を傾げてる。

「とりあえず楽しんできて下さい」

豊姫はそう言うのと去っていった。

「とりあえず、見てみるか」

「「そうだな」」

とりあえず、別行動にする事にした。

サイタマ side

「師匠！今度はあれがいいです！」

「落ち着け」

サイタマは針妙丸に振り回されていた。と、その時

「サイン下さい！」

「え？」

後ろを見るとウサ耳の子供がいた。月の都の住人であろう。

「え？俺の？」

「そうです！有名なサイタマさんのサインがあれば皆に自慢できますので！」

「そうか」

サイタマは子供から色紙を受け取り自身の名前を書いた。それを渡すと子供は嬉しそうに去っていった。しかしこれがサイタマを疲れさせるとは知らずに。

閃光のフラッシュ side

「随分と賑やかなところだな」

フラッシュは辺りを見渡しながら言う。と、

「あれは何だ？」

目に入ったのは「氷の彫刻削り体験」と書かれた看板が。其処には多くの人が氷を削り彫刻を作っていた。

「俺もやってみるか」

フラッシュはその氷削りに参加した。

金属バット side

「さて…どうするかな」

バットはベンチに座り込み、次は何をするか考えてた。

「よし！次はあれだな！」

どうやら決まったらしい。バットは其処へ向かう。

ゾンビマン side

「意外といけるな、これ」

ゾンビマンは屋台の食べ歩きをしていた。地上とほぼ同じ物なのでゾンビマンの口に合ったのだ。

「たこ焼き…いかん、ジーナスの事を思い出してしまった…！」

ゾンビマンは頭を抱えて言う。周りからみれば頭痛にしか見えない（というよりゾンビマンはかき氷を食べてた）

2時間後…

「何をされてたのですか？」

レイセンが尋ねる。

「針妙丸に振り回された挙句多くの人からサイン書かされた」

「氷の彫刻削りをしてきた」

「とりあえず一通り回ってきた」

「屋台の食べ歩き」

サイタマはぐつてりと疲れており、フラッシュは片手に景品、バットは変わりなし（心は晴れてる）、ゾンビマンの手には屋台の食べ物の入った袋。

「どうされますか？」

「「帰る」」

「わかりました！では出口まで案内します！」

レイセンはサイタマ達を出口まで案内する。

「またのお越しを！」

レイセン達玉兎や月の都の住民達が見送られてロケットは地上へと帰っていった。そして…

「お帰り！盟友！無事だったか？」

「無事じゃねえーよ…！」

全員ぐつてりした状態が出てきた。何故ならロケットが着地失敗したからである。

「あれ？おかしいな…」

にとりは首を傾げる。実は着地の事を計算してなかったらしい。

「ま、とりあえず！無事でよかった！」

「ひとくくりてまとめるな…！」

しかし言い返す気力もなくサイタマ達は倒れ込んでしまった。

博麗神社。

「今日、サイタマと会わなかったけどなんかいなくなった感じがするのね」

「どうせ怪物倒しにも行ったと思うぜ。お前と違って」

「あんたねえ…！」

縁側で会話をしていた博麗霊夢と霧雨魔理沙。いつもと変わったところはない。

月の都、とある宮殿。

「帰った!?!」

「ええ、ついさつき」

豊姫は妹の綿月依姫と会話をしていた。

「これなら今日は稽古を休めばよかった…!」

「あらら…そんなに会いたかったの?」

「当たり前ですよ!姉様!なんせ有名なサイタマ殿と会える貴重なチャンスだったので
すよ!それと”光速の剣士”と呼ばれる閃光のフラッシュ殿との対決できたのかもしれないの…!今日くらい休めばよかった…」

依姫は落ち込みながら去っていった。

「これなら直接月の都に来てください…って書くべきだったかしら?」

豊姫は首を傾げながら去っていった。その様子を隠れて見てたレイセンは

「依姫様に渡すべきかな…サイタマさんのサインを…」

レイセンは悩んでいた。そして今日、依姫の悲痛な叫び声を上げた事は誰もが知ることであろう…

紺珠伝編

九十撃目：月から来た兎

「サイタマ、何か音しねえか？」

「え？音？」

サイタマと金属バットは守矢神社に来ていた。近くで何か音がするのだ。

「行ってみるか」

サイタマとバットは外に出て音のする方にむかった。

博麗神社。

「霊夢！妖怪の山でなんか変な蜘蛛みたいな機械が現れたらしいぜ！」

「絶対に異変ね、今回こそ名誉挽回じゃあ！」

霊夢は気合いが入っていた。異変解決はいつもサイタマに手柄をとられている。今日こそサイタマより先に解決する為すぐ様神社から飛び出し、妖怪の山まで向かった。

「気合い入ってるなー霊夢」

「あの…私もいいですか？」

「あれ？永琳とこの兎じゃん。此処に来るなんて珍しいな」

声がしたので魔理沙は顔を向ける。其処には八意永琳の弟子である鈴仙・優曇華院・イナバがいた。

「お前も気になるのか？」

「何か見覚えのあるような物だったのと、師匠から出撃してこいと言われましたので」

「じゃあ行くか」

「はい！」

魔理沙と鈴仙も妖怪の山に向かった。

その蜘蛛みtainな物がある場所では

「ねえ鈴瑚、此処荒らしても大丈夫なの？」

「もぐもぐ（大丈夫じゃない？バレてないみたいだし）」

「団子食べながら話すな！」

青髪で青い服を着た兎が帽子を被り黄色の服を着ていて団子を食べてる兎を叩く。

「清蘭！杵で叩く事ないじゃないか！」

「団子食べながら話すお前が悪いのよ」

「むー」

清蘭と鈴瑚は喧嘩しつつも調査を続けた。2人は月の都出身の兎である。脱走兵であり、今は地上にいる鈴仙と顔馴染みである。

「けどこれで浄化出来るのかな…?」

「さあ?」

清蘭と鈴瑚は悩み込む。その時

「ねえ、鈴瑚、何か向かって来てない?」

「何が?………つてあれは!?!」

清蘭と鈴瑚の目の先には……ヒーローの格好をしたハゲの男と学生服を着て片手に金属バットを持った男が向かってきている。

「えっと…確かあれは…サイタマだった気がする…」

「サイタマ?!ちよつとこれはまずいんじゃない?」

「と、とにかく隠れよう!」

清蘭と鈴瑚は慌てて近くにあった低木に隠れる。

「なんか此処に兎2匹いなかったか?」

「いた気がする。てかなんだこれ?」

サイタマが気になったのは蜘蛛みたいな物だった。そして周りは荒れ果てている。

「おそらくこの馬鹿でかい蜘蛛みたいな物が荒らしたんだろうな」

「そうだな………つて、なんだあれ」

「サイタマ、何か見つけたか？」

「あれ」

サイタマが指指す方にバットは顔を向ける。其処には……なにやら怪しいウサ耳と帽子が

「なんか怪しいな……」

「とりあえずこれ投げてみるわ」

「それ何処で捕まえてきた……？」

サイタマの手には蛇が1匹。道中で捕まえてきたらしい。そしてサイタマは怪しいウサ耳と帽子のいる低木に蛇を投げ込む。すると

「へ、蛇い〜!？」

怪しいウサ耳と帽子の正体、清蘭と鈴瑚が飛び出した。何故か2人は抱き合ってる。

「誰？」

「私達は月の都の兵士！幻想郷を浄化する為に此処にやってきた！邪魔をするなら……い

ざー！尋常に勝負！」

「やるか！」

「おう！」

サイタマとバットは清蘭、鈴瑚と激突した。

守矢神社。

「あれ？神奈子様、サイタマさんとバットさんは？」

守矢神社の巫女、東風谷早苗はサイタマとバットがいない事に気づいた。其処で一緒にいた八坂神奈子に聞く事にした。

「あの2人かい？さっき変な蜘蛛みたいな物の所に行つたよ」

「そうですか、私も行ってきます！」

早苗は神社を飛び出してその変な蜘蛛みたいな物の所に向かった。

「あの子は本当に好奇心旺盛だね」

「早苗もまだまだ子供だな」

神奈子の隣にはいつの間にか洩矢諏訪子がいた。

「諏訪子、アンタも子供だろ？」

「私は子供じゃない！」

諏訪子は反発する。子供扱いされたからだ。

「テールブルにジュース置いたからそれでも飲んで落ち着きな」

「本当か！ありがとな！」

諏訪子はテールブルにあつたジュースを飲む。

「ほら見ろ！やっぱり子供じゃないか！面白いね！」

神奈子は笑う。しかも涙流しながら（いわゆる笑い泣き）。

「ふざけるなー！」

更に子供扱いされた諏訪子が神奈子に飛びかかる。やっぱり騒がしかった守矢神社であった。

九十一撃目：夢の支配者

「大した事ないな」

サイタマとバットは当たり前かのように余裕で立っていた。彼らの前には倒れている清蘭と鈴瑚。こてんぱんにやられたらしい。

「で、どうする?」

「俺に聞くな」

しかし、ここからどうすればいいのかわからない。と、其処に

「ありや?もう終わってたか」

「来るのが遅すぎたみたいですね…」

魔理沙と鈴仙が到着した。

「また先に越された…」

霊夢も到着。しかし落ち込む。

「おー!これですか!」

早苗も。しかし彼女は蜘蛛みたいな物に興味津々である。

「色々と来たな…!人知らん奴いるけど」

「え？誰の事？」

「あのウサ耳の女だよ」

「あれは…誰だっけ？」

バットが指を指したのは鈴仙である。彼は鈴仙と一度もあつた事がない。

「鈴仙です！てかサイタマさんとは一度会ってますよね!？」

「そうだっけ？」

サイタマは一度鈴仙と会つてゐるが忘れていた。忘れられた事に鈴仙は落ち込む。と、その時、足に何か掴まれてる感じがした。

「あの…月で何か起きてると聞いたので…代わりに行つてもらえませんか…?」

鈴瑚がサイタマの足を掴みながら言う。

「え…けどいいか別に。行くか」

「ありがとうございます…」

「サイタマが行くなら俺も行くぜ」

「私もだぜ！」

「私も行きますー！」

「サイタマよりも先に異変解決するんじゃああああ!!」

サイタマは一度断ろうとしたが仕方が無く行くことにした。そしてバットも。更に

霊夢、魔理沙、早苗、鈴仙も行く。

「で、どうやって行くの?」

「これ押して下さい…」

清蘭が僅かな力を振り絞ってサイタマに怪しいボタンを渡す。

「それを押せば月の都まで移動できます…同行する人はボタン押す人の周りにいて下さい…」

という訳でボタンを持つサイタマの周りに集まる。そして

「ポチツとな」

ボタンを押す。すると…目にも止まらぬ速さで月まで向かっていった。

「のあああああああ!!」

全員が叫び声を上げて月まで飛ばされていった。

とある空間

「暇だ…」

ナイトキャップを被り、白と黒の服を着（服には白と黒と玉みたいな物が付いている）、片手には本とスライムみたいな物、そして尻尾が生えた人が寝転がっていた。獺の

妖怪で夢の支配者であるドレミー・スイートである。

「サグメさんに言われて月の都の人達避難させたけど…あれでよかつ!」

突然ドレミーの背中に衝撃が走った。それは…月の都まで飛ばされた筈のサイタマ達である。そしてドレミーは気を失った。

「いつてーな…で、此処が月の都か?」

「絶対違うだろ…」

辺りを見渡す。紫色の禍々しい空間である。とても月の都とは思えない。と、ドレミーが意識を取り戻し

「ちよつと!ぶつかつたのに謝りもしないのですか!」

「あ、すまん。で、誰?」

「私はドレミー・スイート! 獺の妖怪で夢の支配者です!」

ドレミーは怒り気味で自己紹介をする。

「え?じゃあ…此処は?」

「私が創り上げた夢の空間です」

「どおりで変な場所だと思つた」

ドレミーの発言で月の都ではない事に気づいた。というよりサイタマ達は月の都に行つた事はないが。

「何の目的で来たかは知りませんが…月の都には行かせませんよ。私に勝てたら行かせてあげますが」

「そうか、ならばっ飛ば「俺が相手してやるよ」」

バットが前に出た。

「猥かなんだか知らねーが…俺は負けねーぞ」

「貴方の事は聞いてますよ、”鬼や竜等が恐れる不良”の…金属バットさんでしたよね？」

「根は真面目だ、お前は俺が倒す！」

「それができるといいです…ね！」

こうしてドレミー・スイートと金属バットの対決が始まった。

月の都。

とある人物がドレミーの夢の空間を見ていた。

「ドレミー…何をしているのやら…」

その人は呆れていた。と、その時

「あれは…サイタマ？」

夢の空間にサイタマがいる事に気づく。

「うむ…彼になら任せてもいいかもな」

そう行つてその場を去つた。

九十二撃目：月の賢者

「1発1発が痛い！」

「もろにくらうお前が悪いんだよ」

夢の空間ではドレミーとバットの勝負が続いている。共にボロボロではあるがバットの方が若干有利である。

「次で仕留める！」

「そう言ってますけど貴方の身体はボロボロですよ？」

「うるせえ…気合いがあれば大抵どうにかなるんだよ！」

そして2人は再びぶつかり合う。一方霊夢達は

「霊夢さん、バットさんの援護するのはどうでしょうか？」

「その手段もあるけど…乱入するタイミングがわからない…」

霊夢と早苗はいつ乱入するかタイミングを図っていた。

「あのー魔理沙さん？」

「鈴仙どうした？」

「サイタマさんの姿が見当たらないのですが…」

「そんなわけ……つていない!？」

魔理沙は辺りを見る。サイタマの姿がないのだ。

「アイツ! 何処に行きやがった!」

「まさか逃げたのでは!？」

「いや、サイタマはそんな奴じゃない」

「けどいないのはおかしくないですか!？」

魔理沙、鈴仙だけでなけ靈夢、早苗もサイタマを探す。(ちなみにドレミーとバットには聞こえてない)

一方サイタマは…

「此処は何処だ……?」

サイタマは1人知らない場所にいた。夢の空間の禍々しい場所ではない。

「確か……ドレミーとか言う獺は”私に勝たないと出れない”とか言ってた気がするが……」

「私が出してあげたのだ」

サイタマは声がある方に向ける。其処には銀髪で口に手を当てており、薄橙の服の下

に紫の服を着ており、背中には翼が1つある。

「え？誰？」

「私は稀神サグメ。月の民であり、月の賢者でもある。……君がサイタマ君かな？」

「そうだが……此処は？」

「月の都だ」

「はあ!？」

サイタマは驚く。なんと自分だけ月の都に来ていたのだ。何故か。

「いや待て！俺はドレミーの夢の空間にいた筈だぞ!?!しかもアイツに勝たないと出れないって聞いてたのになんでいるの俺!？」

「それは私の能力で君を夢の空間から出してあげたのだ」

「あ、そうか」

サイタマは納得する。サグメの能力は「口に出すと事態を逆転させる程度の能力」である。その為サグメ本人はなるべく喋らないようにしてる。

「その時私はドレミーの夢の空間の様子を見ていてね、その時に”サイタマ君はドレミーに勝たないと夢の空間から出られない”と言い、逆転させたのだよ」

「それでか、けど結構便利だなその能力」

「便利？何を言ってるのかな？この能力は危険だから私はあまり喋らないようにしてる

んだよ」

「そう言ってるけど…そんなに喋って大丈夫なの？」

サイタマは恐る恐る聞く。サグメ本人があまり喋らないようにしていると喋ってる割に喋ってるからだ。

「大丈夫だ、問題ない」

「いや…大有りだから」

サグメの発言にサイタマは背筋を凍らせる。

「サイタマ君、先に行くならこれだけを言わせてもらおう。………」
月の都を幻想郷に遷都する計画は成功し、嫦娥に怨みを持つ者達の侵略も成功する」

「そうか」

サイタマは気にすることもなく先へと進む。

「サイタマ君…頼んだぞ」

サグメはサイタマを見送った後、去っていった。

夢の空間では…

「どおりでないと思った…！」

霊夢達は未だ夢の空間にいた。そして唯一月の都にいるサイタマの様子を見ていた。

「おい！勝ったから此処から出しやがれ！」

「だ、出しますから首締めないで！」

勝負の結果、バットがかるうじて勝利した。ドレミーは首を締められながら夢の空間から出し、月の都に送った。

「此処が月の都か……」

辺りを見渡す。何やら昔を感じさせる場所だった。

「サイタマも行ってる筈だ、行くぞ！」

バットが先頭に進み、霊夢、魔理沙、早苗、鈴仙も後を追う。

九十三撃目：地獄の妖精

「そこをどけ！」

「悪いが…此処を通す別には行かない」

バット、霊夢、魔理沙、早苗、鈴仙はサグメに足止めされていた。

「サイタマはこの先にいるんだろ!？」

「確かに、サイタマ君はこの先に行った。だがお前達を通す…ん?」

サグメは何かに気づいた。

” おい、そのウサ耳”

「え? 私?」

鈴仙はサグメに呼びかけられた事に気づく。サグメの手には何故かスケッチブックが。余りに喋りすぎたからであろう。

” 覚えているか? サグメだ”

「さ、サグメ様!？」

鈴仙は驚く。久しぶりにサグメと会ったからである。

「サグメ様! 大変ご無沙汰しております! 私は師匠から月に何かが起きてると聞かされ

て来たのです!」

” 八意様から!?!…鈴仙、お前だけは通つてもよい。行け、サイタマ君はこの先だ”
「あ、ありがとうございます!」

サグメは通す事を許可した。彼女自身も永琳を尊敬している。永琳から出撃を受けて月の都に来たから鈴仙だけ通行許可を与えたのだ。鈴仙は深く礼をし、先へと進んだ。

「じゃあ私達は?!」

” ダメだ”

「何故?!」

やはり霊夢達は通してもらう事は出来なかつた。

「だったら仕方がねえ…お前を倒して進むしかなさそうだな…」

” 戦闘か、面白い。よかろう、私に勝てたら此処を通してやる”

「上等だ…一切手加減なしで行くからな!」

こうして残された者達とサグメの勝負が始まった。

一方サイタマは…

「てか姉娥つて誰だ？それと侵略してる奴らつてなんだ？」

そう思いながら先へと進行していた。と、其処に

「そこのお兄さん！ストップ！」

突然前に少女が現れた。何やらアメリカンなピエロの格好をしていて、片手には松明がある。そして背中には羽が生えている。

「お前が姉娥か？」

「違う！その人は私のご主人様とご友人様が怨みを持つ人！あたいはクラウンピース！地獄の妖精だよ！」

「妖精か…フツ」

サイタマは鼻で笑った。妖精なんて大した事ないだろうと思っっているからだ。

「あー！いま笑った！あたいの事馬鹿にしてるでしょ!!」

「喋り方がチルノとほぼ一緒だ…」

サイタマは呆れる。確かにチルノは挑発に乘せられやすい上に喋り方がほぼ子供っぽい。それでクラウンピースもチルノと同類と思っっているのだろう。

「あたいを馬鹿にした罰だ！それに「ご主人様から」月の都から出てくる者がいたら何をしても構わない」って言ってたし、覚悟しろ！」

「めんどくせえ…けどやるしかないか…」

サイタマはゆるーく構えてクラウンピースとの勝負に挑む。

そしてサグメに足止めされている者達は…

”まだ動けるのか”

「当たり前だ…！」

無傷のサグメに対し、バットはポロポロである。服が破けており、所々血が流れている。後ろでは霊夢、魔理沙、早苗が倒れている。

”無理はしない方がいいぞ?”

「うるせえ…気合があれば大抵どうにかなるんだよ！」

バットは金属バットを振りかざす。しかし避けられてしまい、逆に飛ばされてしまった。

「まだだ…！」

バットは再び立ち上がる。と、その時

「夢想封印！」

「マスタースパーク！」

霊夢と魔理沙が立ち上がり、自身の得意のスペルカードを放つ。あまりの突然だった

のかサグメは避ける事が出来ず当たってしまった。

「よし…これで進めるな！」

霊夢と魔理沙は先へと進んだ。やっと意識を取り戻した早苗も先へと進む。一方瓦礫の中では…

「アイツら…覚えておけよ…！」

巻き添えになったバットが埋まっていた。

九十四撃目：道を聞き出そう

瓦礫の中……其処には金属バットが閉じこめられている。脱出したいものの彼の身体はポロポロである為自力では抜け出す事は出来ない。と、その時

”彼は此処から脱出する事はできない”

サグメがそう呟くと瓦礫の中からバットが出てきた。

”大丈夫か?”

「当たり前だ……気合いがあれば大抵どうにかなるんでね」

”そうか。他の者達は先に言ったぞ”

「なら急がねえとな」

バットは霊夢達を追いかけた。それをサグメは見送る。

その頃サイタマは

「まさか妖精が……まで強いとは……」

サイタマは前で気を失ってるクラウンピースを見ながら言う。クラウンピースが

放った弾幕は避けづらく当たってしまいう事が多かった。しかし強靱な肉体を持つサイタマには何ともなかった。隙を見てサイタマは弾幕を掴み、クラウンピースに当てた事が勝利の決め手である（とよりサイタマは数回クラウンピースに普通のパンチを当ててたが）。

「とりあえず目が覚めたら何かしてきそうだし、縄で縛っておくか」

サイタマはそこら辺に落ちてた縄でクラウンピースを柱に縛り付けた。

「あれ？あたい…負けちゃったの…？」

クラウンピースが目を覚ました。しかし縄で縛られてる為自由に動けない。

「所でお前に聞きたい事がある。嫦娥に怨みを持つお前のご主人様とそのご友人様は何処にいるのか教えろ」

「やだ！お兄さんに絶対教えないもん！」

サイタマは嫦娥に怨みを持つ者の居場所を聞き出すがクラウンピースは答えようとしない。

「じゃあ殴らせろ」

「え？」

サイタマの右手は震えていた。殴る前提であろう。その時クラウンピースは背筋が震えた。そして…

「や、た、や、た、ー、！、た、つ、て、お、兄、さ、ん、の、ハ、ン、チ、痛、い、も、ん、！、！」

クラウンピースは泣いてしまった。地獄の妖精ではあるのだがまだ子供である（精神年齢は）。更に勝負の際にサイタマに数回普通のパンチをくらっている為その痛みを思い出したのだ。

「じゃあ教えろ」

「……………あつち」

クラウンピースは泣き止んで道を教えた。サイタマはその道へと進んでいく。しかし

「そのまま道に迷っちゃえ！」

クラウンピースは舌を出しながら言う。実はサイタマに教えた道は嘘である。と、其処に

「広いとこね…」

霊夢達が到着した。魔理沙、早苗、鈴仙もいる。

「道が幾つもあるぜ…」

「どれが本物なんでしょうか…?」

「彼処にいる妖精に聞いてみましようか」

4人はサイタマに縛られたクラウンピースに道を聞こうとした。

「お姉さん達何？」

「なあ嬢ちゃん、道を教え「嘘じゃねえーか!!」はい!？」

魔理沙は驚く。それは突然サイタマが現れてクラウンピースを殴ったからである。

「嘘ついた!お兄さん道教えたら殴らないって言つてたじゃん!」

クラウンピースが反撥する。しかしサイタマの耳には入っておらず…

「うるせえ!間違えた道を教えたお前が悪い!さあ本物の道を教えろ…また嘘ついたらマジ殴りくらわすからな!」

サイタマは嘘の道を教えられたか怒りを顕にしていた。

「そ、れ、た、け、は、や、だ、ー!、た、つ、て、そ、れ、痛、い、も、ん、!」

クラウンピースはまた泣いてしまった。実はあの勝負でサイタマはクラウンピースにマジ殴りをしていたので。それをモロにくらったクラウンピースはトラウマを植え付けてしまったのだ。

「じゃあ教えろ」

「あっち」

「本当か？」

「本当だもん！お兄さんにパンチされたくないもん！」

クラウンピースはサイタマに本物の道を教えた。その道をサイタマは行く。取り残された霊夢達は唾然していた。

「「酷すぎる……」」

霊夢、魔理沙、早苗が口を揃えて言う。もはや脅迫に近かったからだ。

「けど私達も道を聞けたからいいのでは……？」

しかし結果的には道はわかつたので霊夢達も進む。

「此処は何処だ？」

一方、霊夢達を追いかけてたバットは……道に迷っていた。

九十五撃目：無名の存在の神霊

静かな海…

其処に1人の神霊がいた。見た目で言うと金髪でウエーブのかかったような長髪。装いは満州族の袍服のようで黒のロングスカートを穿き、頭には冕冠(?)を被っている。背後には7本の紫色の尻尾みたいな物がある。その正体は…嫦娥に怨みを持ち、月の都を度々襲撃していた今回の異変の黒幕、純孤だった。

「どうしたものか…」

純孤はそう呟いた。と、其処に

「何だ(ハハ)?」

サイタマがやって来た。彼の目の前には海が広がっている。

「月の都に海がなんてあったのか」

サイタマが不思議そうに見ている。

「あれは…確か…」

純孤がサイタマの存在に気づいた。

「ちよつと其処の者」

「あ？」

純孤がサイタマに近づく。

「誰だお前」

「私は純孤。嫦娥に怨みを持つ神霊なり」

「あ！お前がクラウンピースが言つてた嫦娥に怨みを持つご友人様か！」

サイタマは一瞬考え込んだが直ぐに思い出した。

「その通りです。しかしあの妖精を倒すとは……」

「中々厄介だったけどな」

「それもそうです。あの子は地獄の妖精の中でも最凶と呼ばれる者……更に私の”純化させる程度の能力”で覚醒して鬼神を超える實力にした……そんな彼女に勝てるとは……最強とは伊達ではないですね」

「当たり前だ、そんな奴に負ける程俺は柔じゃねーよ」

サイタマは当たり前のように言う。

「そうですか……ならば私と勝負しません？」

「いいけど……お前クラウンピースより強いのか？」

「勿論、あの子は最凶と呼ばれてるが精神年齢はまだ子供。實力は私よりかは下です（多分）。強き者を好む貴方には不快がないでしょう」

「なら期待するわ」

「そうしてくれないと困ります」

サイタマはゆるーく構える。そして、

「尋常に勝負!!」

サイタマと純孤の対決が始まった。

一方霊夢達は…

「何これ」

クラウンピースに教えてもらった（というより聞いてた）道を進行中、大量の妖精が倒れているのを見つけた。

「なんか…気味悪いぜ…」

「これもあの妖精と同じなんでしょうか…?」

「それ以外考えつかない。けどこれをやったのは…」

「「「サイタマ（さん）だ」」」

全員が息揃えて言う。そう、この妖精達を倒したのはサイタマである。

「けどこの先にサイタマがいる事が想定できるわね」

「いや霊夢…絶対いるだろ…」

「けどすつごい距離ですよ…これ」

早苗が指さす。今自分達がいる場所から出口までは相当な距離である。

「のんびり行くとサイタマさんに手柄とられますね」

鈴仙の発言に霊夢と早苗は

「行くぞおおおお!!」

人間とは思えない速さで出口まで向かって走った。

「私達も急ぐか」

「…はい」

魔理沙、鈴仙も霊夢と早苗の後を追う。そして…

「ちよつとタンマ…休ませて…」

「最近動いてなかったから身体が言う事聞かない…」

割と早く霊夢と早苗に追いついた。しかし2人は疲れ果ててた。

「自分の体力の事考えろよ…サイタマじゃあるまいし」

「少しは考えて行動しません？」

その2人に呆れた魔理沙と鈴仙であった。

一方その頃金属バットは…

「広い所だな…」

やっと大広間に出た。だが幾つもの道がある。

「どれが本物か………何だあれ？」

バットが見つけたのは……未だに縛られているクラウンピースだった。

「何してんだお前」

「助けて…」

「？」

クラウンピースは助けを求めたが声が小さく聞き取れない。

「ほどいて…縄を…ほどい…て…」

「縄解けばいいのか？」

聞き取れたのかバットが聞き返す。それにクラウンピースは頷く。

「ちよつと待つてろ…」

バットは縄を解こうとする。しかし中々解けない。そして…

「よつとー！」

縄は解けてクラウンピースは自由の身になった。

「お兄さんありがとう…お札に道を教えるね」

クラウンピースはお礼として正解の道を教えてくれた。

「ありがとな」

「待って！」

バットが正解の道に行こうとした時、クラウンピースが呼び止める。

「あたいも連れてって…」

「……………一緒に来い」

バットは断ること無くクラウンピースと一緒に同行させた。

九十六撃目：地獄の女神

「流石最強と呼ばれし者…見事なり…」

「お前も結構強かったぜ」

純孤はボロボロの状態で倒れており、サイタマは服が汚れる程度の状態で立っている。当たり前かのようにサイタマの勝利で終わった。だがサイタマにとっては強い敵だったらしい。

「けどサイタマさん…まだ勝ったとは思わないで下さいね？」

「は？何でだよ」

純孤の発言にサイタマは不思議に思う。

「奴は私と同じく嫦娥に怨みを持つ…そして奴は月、地球、異界のそれぞれの地獄に司る女神………そう、私の友人である…ヘカーティア・ラピスラズリだった」

と、その時

「純孤に勝利した人間はお前かあ!!」

そう言っただけ現れたのは…赤髪で黒いロシア帽みたいな物を被っており、白い文字で

Welcome Hell”と書かれた黒のTシャツを着ている。そして赤、青、緑の

スカートを着ている。彼女こそが純孤が言う“地獄の女神”ヘカーティア・ラピスラズリだった。

「そちが”趣味でヒーローをやってる最強の男”サイタマだな？」

「如何にもそうだ。お前が純孤が言ってたヘカーティア・ラピスラ…なんだっけ？」

「そこまで言えるならちやんと言え！私が月、地球、異界にそれぞれある地獄を司る女神、ヘカーティア・ラピスラズリだ！」

「あ、はい」

ヘカーティアは長々と自己紹介をするがサイタマはそっけなく返す。

「ちやんと聞いてたのか…？」

「いやだってお前の紹介長いんだよ。それと何だそのダサイTシャツは」

「なっ!？」

ヘカーティアは一瞬傷ついた。彼女自身は気に入ってるこの“Welcome Hee!”と書かれたTシャツ。しかし一部からみればダサイ。というよりも壊滅的な私服のサイタマも人の事を言えてないが。

「今どきそんなの着てるのはお前だけだぞ、ヘカーなんとか」

それでもサイタマは言い続ける。しかも名前をちやんとかわずに。

「ついに名前をちやんとかわらなくなったか…だがサイタマ…お前は私に暴言を吐いた…」

それだけでお前を地獄に墮とす！」

「おう、望むところだ」

サイタマはゆるーく構える。

「ほう…そうか、ならば望み通り地獄に墮とす！そしてさつきも言ったが私は異界だけでなく月と地球にある地獄にもいる！だから3人同時に挑む！」

ヘカーティアがそう言うと2人のヘカーティアが現れた。1人は黄色の髪でロシア帽の上に月、もう1人は青い髪でロシア帽の上に地球。

「はーい！私が月の地獄の女神、ヘカーティア・ラピスラズリだよー！宜しくねー！」
「私は地球の地獄の女神のヘカーティア・ラピスラズリです…宜しくお願ひします…」

2人は自己紹介する。どうやら性格が異なるらしい。そして

「そして私こそが異界の地獄の女神！ヘカーティア・ラピスラズリだ！」

そして異界の地獄の女神のヘカーティア・ラピスラズリが堂々と胸をはっていう。

「「さあ！最強と呼ばれし者サイタマ！我ら3人同時の攻撃を避けられらかな？」」

「おいおい…3人とかマジかよ…けど、やるしかないな!!」

サイタマは目つきが変わり、3人のヘカーティア・ラピスラズリとの勝負が始まった。

一方金属バットとクラウンピースは…

「おい、本当にあつてんのか？」

「本当！」

バットはクラウンピースを担ぎながら出口に向かっていた。しかし不思議な事に霊夢達とは会ってない。

「（てか博麗の巫女とかもこの道だよな…何で会わないんだ？）」
バットはそう疑問に思いながらも進む。

一方霊夢達は…

「「あと少し…！」」

出口まであと少しだった。

九十七撃目：異変の解決と迫られる決断

「流石に3人はきつかった…」

サイタマは疲れていた。なんせサイタマは3人のヘカーティアといっぺんに勝負したからである。その為3人同時の弾幕は避けるのに精一杯だった。しかし勝利したのだ。流石、趣味でヒーローをやってる最強の男。

「地獄の女神と呼ばれし私が…負けるなど…」

ヘカーティアは絶望していた。自分が負けるとは思ってたからである。そして立ち上がり

「サイタマ…お主との勝負…中々楽しめたぞ」

「俺もだ」

互いに賞賛した。その時

「夢想封印！」

「マスタースパーク！」

突然弾幕が飛んできた。2人は左右それぞれに避ける。が、その先に…

純孤がいた。

「え？」

純孤は理解していなかった。弾幕が近くまで来るといふのに。

「よつと」

咄嗟に気づいたサイタマが純孤を担ぎ安全な場所に持つていく。

「まさか…ヘカーティアにも勝つなんて…貴方は只者ではありませんね」

「そう言ってくれると嬉しいぜ」

滅多に褒められないのかサイタマは照れる。その時

「え？終わってたの…？」

「あ、霊夢。それと…誰だっけ？」

「霧雨魔理沙だ！」

「あ、そうそう。これやったのお前ら？」

「それ以外誰が思いつくのよ」

「けど避けられたのは心外だったなー」

あの弾幕を放ったのはやはり霊夢と魔理沙だった。その時は早苗と鈴仙が止めたものの結局止める事が出来なかったのだ。

「すみません…」

遅れてきた早苗と鈴仙が謝る。しかし誰も気にはなかった。

「けど、貴女、いいスペルカードを持ってるわね」

「え？そうか？」

横から入ってきたヘカーティアが魔理沙に興味をいだく。

「名前は…魔理沙だっけ？気に入った！一緒に地獄巡りしましょう♪」

「悪いが遠慮し「遠慮せずに！さ、行きましょ♪」助けてくれえええ！」

魔理沙はヘカーティアに強引に地獄巡りに連れていかれた。魔理沙の悲痛な叫びが響き渡る。

「あ？終わってたのか」

「あれ？ご主人様は…？」

遅れながらも金属バットとクラウンピースが到着する。クラウンピースは辺りを見るが主人であるヘカーティアの姿がない。

「あ、ヘカーティアなら魔理沙連れてあっちに行っただぞ」

「本当!?ご主人様〜！待って下さ〜い！」

クラウンピースは急いでヘカーティアの元に行った。

「で、お前は どうするの？」

「もう…負けを認めます。そして月の都を襲撃するのを辞めます」

「そうか」

純孤は負けを認めた。そして2度と月の都を襲撃しない事にした。こうして異変は解決となった。

サイタマの家

「師匠！おいてくなんて酷いです！」

「すまん……」

サイタマは針妙丸に怒られていた。何故なら針妙丸を連れていくのを忘れたからである。

「相変わらずね、貴方は」

「あ、紫か」

スキマから八雲紫が現れた。

「何の用で来たの？」

「貴方に決めてもらいたい事があってね」

「決めてもらいたい事？」

「そう……じゃあ言うわね。……………」

貴方は、
一生幻想郷で過ごすか、
元の世界に戻るか
かを決めてほしいの」

幻想郷に一生を決めた者達編

九十八撃目：サイタマ、決断の時

「師匠…どうするんですか？」

「どうするって言われてもなあ…」

サイタマは悩んだ。前回（紺珠伝編）の異変解決後、紫から言われた事に。

数時間前…

「どういう事だ？」

サイタマが聞き返す。内容をあまり理解していないからである。

「まあ…簡単に言う」と、幻想郷で一生を過ごすかを幻想郷という存在を記憶から消して貴方のいた元の世界に還すかを決めてもらいたいのだよ」

紫が改めて説明する。すると理解出来たのか

「つまり幻想郷で一生を過ごす場合はジェノスと会うことが出来ず、元の世界に帰れば幻想郷には2度と来れないって事か？」

「ま、そうなるわね。けど決まらないのなら翌日でもいいわよ」

「いきなり言われても困るからな、考えさせてくれ」

「幻想郷はいい所だが…ジエノスは大切な弟子だし…」

サイタマは悩む。幻想郷に一生を過ごすとすればジエノスとは会えなくなる。だが元の世界に帰れば幻想郷に2度と行けなくなる。

「師匠…」

苦渋の決断を迫られるサイタマを心配する針妙丸。と、その時

「ジエノスに電話するか」

サイタマはスマホを取り出しジエノスに電話をかける。

「もしもし…ジエノスか？」

「先生！お久しぶりです！幻想郷での活動はどうですか？」

「ああ、上手くいってるよ。お前が帰ってからも異変はあったよ」

「やはりそうですか…けど全て先生が解決したのですね」

「うん」

この時サイタマとジエノスは久しぶりの感じがあった。あの異変（地霊殿編）以降、会話をする暇がなかったからである。

「じゃあジエノス、本題にはいる。俺は今、紫から“幻想郷で一生を過ごす”か“幻想郷

という存在を記憶から消して元の世界に還す」という決断がある。その事でお前に相談があるんだ」

「!!」

ジェノスは驚く。サイタマが相談してきたからである。

「幻想郷はいい所だが…お前は大切な弟子だ。だから俺は元の世界に…」その事は先生が決めて下さいい」な!？」

サイタマは驚く。それはジェノスが予想外の発言をしたからである。

「ジェノス!?!お前何を!?!」

流石のサイタマも慌てる。

「俺は先生に頼りすぎてたかも知れませんが…なので俺は自分の力だけで生きてみせませす。サイタマ先生…貴方から教えてもらった事を忘れません!俺の故郷を壊した暴走サイボーグを倒し、S級10位内を目指します!だから…!先生は…!幻想郷での活動を頑張ってください!」

ジェノスは泣きながらサイタマに話した。ジェノス自身はサイタマと別れるのは嫌なのだが、サイタマに頼りすぎていたのか今度は自分の力だけでヒーロー活動をする決めたのだ。

「ジェノス…!」

これにサイタマの目から涙が流れた。そして何故か針妙丸までもが泣いていた。

翌日…

「それが貴方の答えなのね」

「ああ、昨日ジェノスと話し合って決めた事だ」

「貴方がそれでいいならいいわ。幻想郷で一生を過ごし、元の世界には帰れない。…後悔はしないでね」

「するわけねえだろ」

「フフフ…貴方は変わってるね」

こうして、サイタマは幻想郷で一生を過ごす事にした。

それから数日後…

あれから紫は他のヒーロー達にもあの事を決めさせた。結果は…ゾンビマン以外全員元の世界に帰ったそうだ。そして命蓮寺…縁側でサイタマとゾンビマンが会話をしていた。

「お前は帰らなくてよかったのか？」

「幻想郷だと住み心地がよくて…ね」

ゾンビマンは照れながら話す。

「俺はジェノスと相談して此処にいと決めたましな」

「鬼サイボーグと相談してか…」

2人は（ある意味）楽しげだった。その様子を遠くから見てる者がいた。

「師匠…！幻想郷に残ってくれてよかった…！」

「妹紅…君は泣きすぎだ。私もサイタマさんが残ってくれてよかったけどな」

隠れながら藤原妹紅と豊聡耳神子が見ていた。隣には…

「響子ちゃんがいなかったらゾンビマンさんは元の世界に帰ってたかもしれないね」

「だって帰ってほしくなかったんですよ！」

「あれ？響子ちゃん泣いてるの？」

「泣いてません！」

聖白蓮、幽谷響子、封獣ぬえも見ていた。

九十九撃目：元S級の格闘家

「此処が幻想郷か」

幻想郷のとある森の中。そこに1人の老人がいた。どうやら外の世界の者らしい。

「さて、道場を建てる為の土地を探すかの」

老人は歩き出した。その老人の正体は…元S級3位のシルバーファンングことバングだった。また流水岩碎拳の師範でもある。

数時間前…

「此処が博麗神社か」

バングは博麗神社に訪れていた。

「此処に来れば幻想郷に行けると聞いたのが…」

「あら、幻想郷に行く事をお希望ですか？」

突然声がしたのでそちらに振り向く。其処には紫がいた。

「貴方は…確か…S級のシルバーファンングさんでしたよね…？」

「僕はヒーローを引退した。今はただの老いぼれた格闘家のバングじゃ」

そう、バングはヒーローを引退していた。ガロウの件で引退をしたのだ。

「そうですか…では本題に戻します。幻想郷に行く事を望んでるのですね」

「そうじゃ、幻想郷で生涯を過ごそうと思つてな。後儂の”流水岩碎拳”の復興しようも思つてる」

「自ら幻想郷に行く人間は久しぶりに見ました。では、此処のスキマからどうぞ」

紫はスキマを開ける。お年寄りであるバングに気を使ったのだ。

「では失礼」

バングはスキマの中に入った。

「確かサイタマ君とゾンビマンもいると聞いたな。まずはその2人に会つてからにするか」

バングはまずサイタマとゾンビマンに会うことにした。そして歩く事5分、人里に着いた。

「賑やかな所じゃな」

バングは辺りを見ながら歩いていた。その様子がある人物が見ていた。

「あれって…バング？」

「師匠、知ってる人ですか？」

人里に買い物をしていた。趣味でヒーローをやってる最強の男。サイタマだった。肩には針妙丸が乗っている。そして近づき…

「バング？」

「お！サイタマ君！」

サイタマの声にバングは直ぐに気づいた。

「本当に幻想郷にいたんじゃない？」

「俺は幻想郷に住むことにしたからな。てかバングは何しに幻想郷に来たの？」

「ああ、それはな…」

バングはサイタマに説明した。幻想郷に来た理由を。

「まさかバングお前も幻想郷に住むことにしたのか」

「そうじゃ、それと”流水岩碎拳”も広めようと思ってな」

「あ、そう…」

サイタマとバングは近くの団子屋で話をしていた。

「ところでサイタマ君、その小さいのは何じゃ？」

バングはもくもくと団子を食べる針妙丸の事が気になった。

「あ、これ？小人の針妙丸」

「小人か！幻想郷は侮れないな…」

バングは針妙丸を掴み眺める。針妙丸は全く動じず団子を食べ続ける。そして下ろす。

「じゃあ僕は行くわ。ゾンビマンの所に行くからな」

「そうか、ゾンビマンなら命蓮寺にいるぞ。あとこれ地図な」

「ありがとな」

バングはサイタマから地図を受け取り命蓮寺に向かう。

「針妙丸、掴まれても動じないって…慣れたの？」

「はい！」

サイタマはバングに掴まれたのにも限らず動じなかった針妙丸に話す。どうやら針妙丸は慣れたらしい。

命蓮寺。

「此処にゾンビマンがいるのか」

バングは命蓮寺の門の前にいた。入ろうとした時

「おつはよーございまーす!!」

大きな声で挨拶をしていた。山彦の幽谷響子である。

「うむ! 元気があつてよろし!」

「ありがとうございます!」

バングに褒められたか響子はお礼を言う。と、そこに

「おい、響子、誰がき…つてシルバーファンク?!」

「おお、ゾンビマン、久しぶりじゃな」

「え? 知り合いですか!」

ゾンビマンは驚く。そしてゾンビマンとバングが互いに知つた事に響子も驚く。

「とりあえずシルバーファンク、中に入れ。其処から話を聞く」

「悪いな」

ゾンビマンがバングを本堂に案内する。

「成程な、ヒーローを辞めて幻想郷に住む事にしたつて事か」

「そう考えてくれればいい」

バングは茶を飲みながら言う。ゾンビマンはバングがヒーローを辞めた事について

は知らず驚いたが直ぐに冷静差を取り戻す。其処に

「あら、お客様ですか？」

「お主は？」

「あ、私は住職の聖白蓮です。宜しくお願いします」

命蓮寺の住職、聖白蓮が入ってきて挨拶をする。

「ところでバングさんは何をされてるのですか？」

「儂は格闘家じゃ。」流水岩碎拳”という流派でやっておる」

「格闘家ですか！ぜひそれを見せて下さい！サンドバッグなら沢山いますので！」

「聖…サンドバッグってまさか…」

聖は目を輝かせながら言う。しかし言ってる事が酷い。ゾンビマンは嫌な予感しかない。

「ええ、命蓮寺にいる妖怪の事です！」

「しかしお主は人と妖怪の共存を望むと聞いておったが…ましては儂にやられた妖怪が怨みを持つんじゃないのか？」

「大丈夫です！その時は私が制裁をくらわしますので！」

「そうか…なら見せようか…儂の”流水岩碎拳”をな！」

納得したのかバングは流水岩碎拳を見せる事にした。だが聖の言ってる事はやはり酷かった。その結果、多くの妖怪が犠牲となってしまった（中には何故か雲居一輪と村

紗水蜜等もいた。ましてはゾンビマンも)。

「ありがとうございます♪」

「久しぶりに動かしたから鈍かったの…やっぱり歳はとりたくないもんじゃ」

「バングは帰り、再び道場を建ててゐる為の土地を探しに行つた。」

「格闘技つて良いものですね…」

「聖は呟いた。一方後ろでは…ゾンビマンと多くの妖怪達が倒れていた。」

「おい、聖…何で俺まで…」

「ノリです♪」

「お前…!」

ゾンビマンは聖を睨むが聞き返す気力はなかった。

百撃目：いつもと変わらない（はずの）日常

人里、此処は多くの人間達が住む場所である。年中問わず毎日賑やかである。が、しかしいつも平和ではない。時には…

「おい！何か現れたぞ?!」

「とにかく逃げろ!!」

こんな平和な人里にも怪物が現れる。怪物が出たと同時に人々は逃げ出す。と、その時

「おい！あれを見てみる…!」

「何立ち止まって…?ってあの人は!？」

人々は立ち止まった。その視線には…

「何人里で暴れてんだよ、買い物できねえじゃねえかよ」

怪物の前にハゲた男が現れた。黄色のヒーロースーツに白いマント、手には赤い手袋をしてある。

「あれってまさか…!」

”趣味でヒーローをやってる最強の男”!サイタマだ!」

「妬ましい……！」

「落ち着け」

その正体は博麗神社の巫女である博麗霊夢と霊夢を落ち着かせようとしているのが魔法使いの霧雨魔理沙である。

「何でサイタマばかりなのよ！博麗の巫女の私にも物資とかよこさないよ！」

「と言つても霊夢、お前何もしてないだろ」

「してるわよ！」

「例えば？」

「それは……えつと……」

霊夢は言葉が詰まってしまった。基本何もしてないからである。

「ほらな。……で、何で早苗までいんの？」

魔理沙は霊夢の隣にいる東風谷早苗に気づく。

「神奈子様から”人里で怪物が暴れてる”と言われましたので来たのです！」

早苗は八坂神奈子に言われて人里に来た。しかし肝心の怪物はサイタマが倒した為悔しがっていた。

「神奈子に言われる前に行けば間に合ってたんじゃね？」

「あ！確かに！」

「お前根本的に馬鹿だろ…」

早苗は納得したかのように言う。しかし魔理沙は呆れている。

「けど…サイタマのお陰で幻想郷は平和なのかもな」

魔理沙はそう言っただけで帰っていった。なお霊夢と早苗は依然サイタマを妬みながら見ている。

「今回はいつも以上に手こずってしまったな…」

とある森の中、1人の男が疲れ果てながら言う。前には怪物の死骸が。

「けど久しぶりだったからな。腕が鈍ってたかもしれん…」

男は座り込んで言う。その正体は…サイタマと同じ外来人であり、S級8位のヒーロー、”ある意味不死の戦士”ゾンビマンである。

「さて、命蓮寺に帰るか。ぬえと響子が待ってるだろうし」

ゾンビマンは立ち上がり、命蓮寺へと帰って行った。

命蓮寺…

「遅い！」

「遅いです！」

帰ったと同時に幽谷響子と封獣ぬえに怒られたゾンビマンだった。

「すまん、ちよつと怪物に襲われててね」

ゾンビマンは謝るが怒りは収まってない。

「言い訳はいい！」

「そうです！待たせた罰として今日はいつもより長めでやります！」

「わかったわかった」

響子とぬえはゾンビマンを引っ張って行った。その様子を

「大変そうですね」

命蓮寺の住職、聖白蓮が見ていた。

「大丈夫。もう慣れたから」

「まるでその子達のお父さんですね」

「種族は違うけどな」

ゾンビマンと聖は笑いながら言う。その後ゾンビマンは長い時間、命蓮寺の妖怪達に

いじられてしまった。

「まさか…弟子入り志願がこんなにも届くとは…！」

とある山の頂上にある道場。中には一人の老人が弟子入り志願の手紙を見ていた。S級3位のシルバーファンングことバングだ。しかし今はヒーローを引退している。

「此処に住んで正解じゃったな…！」

バングは喜びを隠せなかった。沢山の弟子と共に歩んだ時期を思い出したからである。

そして翌日…

「バング先生！おはようございます！」

多くの弟子入り志願者がバングの道場に來た。大半が男性だが中には子供もいた。

「お主達、覚悟は出来てるだろうな？儂の流水岩碎拳を習得するには厳しい修行をする必要がある。逃げるなら今の内じゃよ」

「いえ！逃げるつもりはありません！どんな修行にも耐えます！だから…お願いします！」

誰一人、逃げ出す者はいなかった。

「成程な…よかろう！お主達を弟子と認める！着替えて早速修行に取り掛かるぞ！」

「はい！」

朝から活気のいい声が響きわたる。バングの流水岩砕拳の復活はそう遠くないかも
しれない。

百一撃目：地上最強（？）の男

「サイタマ氏は此処にいるのか？」

幻想郷の森の中に1人の大男が。服装はフード付きのジャケットに長ズボンである。金髪で顔は強面で片目には3本の傷がついている。どうやら外の世界の人間のようだ。「だが…此処って確か怪物とかいるよな…？八雲紫氏が”貴方なら大丈夫”とか言ってたけど此処で通用するのかが不安だ…」

見た目とは裏腹に結構ビビっている。そして彼の特徴とも言える異常に大きい心臓音（外の世界では”キングエンジン”と言われてる）が鳴り響く。彼の正体は…S級7位で地上最強の男と言われているキングだった。

「あれ？誰も来ない…？」

キングは辺りを見渡すが誰もいない。キング自身は誰かがいると思ったからだ。だが本当に何かがある。しかしキングの異常に大きい心臓音と強面の顔で近づく事が出来ないのだ。

「と、とりあえず…サイタマ氏を探すか…」

キングは周りを気にしながらサイタマを探す事にした。そして人里に来た。

「ウオオオオオアアアアアーンツ!!」

怪物はキングを襲う。が、しかし

「ウ…ウウウ…!」

怪物はキングを喰わなかった。何故なら怯えているからである。そして怪物は逃げた。逃げた。

「まさか…此処でも通用するとは…」

キング自身は驚いていた。まさか”キングエンジン”が通用したからだ。そしてキングはその場から去った。逃げていた人々は啞然とした。

「やばい…!」

キングは頭を抱え込む。これで自分は狙いの的になったかもしれないと思ったからだ。と、その時

「キング?」

「!?!」

キングは振り向く。其処には…探していた人、サイタマだった。

「サイタマ氏!？」

「何やってんのお前」

「えっと…それは…」

キングはサイタマに話した。幻想郷に来た理由を。

「へーキングも此処に住むことにしたのか」

「うん、此処の方がひっそりと暮らせるって八雲紫氏が言ってたから」

キングはサイタマと一緒にいるのか普通に会話をしていた。

「ところでサイタマ氏、肩に乗ってるのは？」

「あ、これ？小人の針妙丸」

「小人!？」

キングは驚く。小人は初めて見たからだ。針妙丸を掴み、手に乗せる。

「小人が普通にいるって…幻想郷は変わってるところなんだな」

「まあな、此処は全てを受け入れるし」

キングとサイタマの会話は続いた。

翌日

「キング…お前…」

サイタマは新聞を広げた。其処にキングの事が書かれていたからである。

「超能力ですかね…?」

「アイツの戦闘シーン見た事ないからわからないんだよな」

サイタマと針妙丸は考え込む。一方キングは…

「こんなに目立ってる…！狙われる…！」

キングは新聞を見て震える。キングエンジンを鳴らしながら。

「け…けど…大丈夫かな。キングエンジンが通用するから…多分」

しかし幻想郷でもキングエンジンが通用したから大丈夫だと思った（少し不安だが）。

こうして幻想郷で一生を過ごす組みにキングは加わった。これで4人目である。

なお、この事はサイタマ以外のヒーローにも知れ渡った。

「キング…アイツも来たのか…」

命蓮寺、ゾンビマンは新聞を見ながら言う。

「ねーねーこの人と知り合いなの?」

「一応な」

横からぬえが聞いてきたので答える。

「会いに行つてみるか?」

「うん!」

ゾンビマンはぬえを連れてキングの所へ行つた。

「キング君も来たか…」

道場、バングも新聞を見てキングが幻想郷に来たことに気づいた。

「お主達」

「はい!」

「儂はちよつと散歩してくる。だが儂がいらないからといって修行をサボるでないぞ」

「はい!ではお気おつけて!」

バングは弟子達にそう伝えて道場から出た。弟子には散歩と伝えたが本当はキングに会いに行ったのだ。

百二撃目：男4人による雑談

人里のとある居酒屋。其処に幻想郷で一生を過ごすと決めた男4人がいた。

「何で此処でやんの？」

壊滅的な私服のハゲた男が言う。

「集まれる場所が此処しかないからだ」

顔が白くゾンビみたいな男が言う。

「で、何の話をするんじゃ？」

銀髪（というより白髪）の老人が言う。

「……………」

強面の顔をした大男は無言だった。だが彼の心臓音が鳴り響く。その男達の正体は

…

” 趣味でヒーローをやってる最強の男” サイタマ

” ある意味不死の戦士” ゾンビマン

” 銀牙のファイター” バング

” 百獣の王” キング

そしてオマケに針妙丸とぬえ。

「針妙丸、あんまり食べんなよ?」

「わかってましゅ!」

サイタマは必死に食べてる針妙丸に言う。

「ぬえ、暴れるなよ」

ゾンビマンはぬえに忠告する。ぬえは「大丈夫!」と言い張るが心配である。

「さて…何から話す?」

「それよりサイタマ氏…周りを見て。何か見られてる気がするんだけど…」

今まで口を開かなかったキングが喋る。確かに周りを見てみると視線がこちらに集まっている。中には変装をした射命丸文と犬走椋の他、相変わらずサイタマに嫉妬して
る霊夢と早苗、ぬえが心配で来た聖もいた。

「霊夢と早苗からの嫉妬感がヤバいんだが…」

「あのストーカー並の記者もいるしな」

「じゃあ農の道場で話すか?」

「いや…とりあえず…店から出よう…」

男4人は仕方が無く店から出た。結局サイタマの家で行う事にした。そして雑談らしきものが始まった。

「率直に聞くけどヒーロー協会から脱退したの？」

サイタマから思わぬ事を聞かれた。

「俺はガロウの件で引退したからな。ゾンビマンとキング君は？」

バングは直ぐに答え、ゾンビマンとキングに向ける。

「俺は命蓮寺の奴らが寝てる隙に協会に脱退するって伝えた」

「俺は博麗神社に向かう前に協会に行つて引退すると言つてきた」

ゾンビマン、キングもヒーロー協会から脱退していたのだ。本来ならば協会に登録してないヒーローは、妄言を吐く変態にしか見られないのだが、幻想郷にはヒーロー協会というものすら存在しない為その事は言われる事はない。

「ところでサイタマはヒーロー協会から脱退したのか？」

「え？俺？俺は…ちよつと待て」

サイタマはスマホを取り出しジェノスに電話をかける。数分後：

「俺、ヒーロー協会から脱退してたわ…ジェノスがしてくれてたらしい」

「そうか」

サイタマもヒーロー協会から脱退していた。しかし当の本人は知らなかった。しかしサイタマは「クビになつても構わない」や「フリーの方が気楽でいい」という気持ちでやってた為、サイタマにとっては良かったかもしれない。

「つまり全員…：ヒーロー引退した事になるな…」

「ああ」

全員一致で頷く。

「ま、別にいいか。俺は元々趣味でやってたし」

「幻想郷で活動するからヒーロー協会に縛られる事もないしな」

「俺も格闘家一筋でやれるようになったからな」

「ゾンビマン氏と同じく、幻想郷の方が活動しやすいからな」

全員元の世界に戻れない上に一生を幻想郷で過ごす為、ヒーロー協会は必要なかった。それで開放感が溢れている。

「で、次どうする？」

「俺はいい。ぬえが心配してると思うしな」

「俺もじゃ。弟子達が待つておるからな」

「俺もだ」

「そうか、じゃあな」

男4人による雑談は終わった。ゾンビマン、バング、キングが帰ったのを確認して

「風呂に入るか」

「待つて下さい！師匠！」

風呂場に向かおうとした時針妙丸に呼び止められた。

「なんだ」

「師匠…ヒーローを引退したって本当ですか…？」

「本当だけどなんだ？」

「確か師匠って子供の頃からの夢でしたよね…？引退して良かったのですか？」

「いいんだよ別に。俺は元々趣味でやってたから」

「師匠…」

「けどな針妙丸、周りから何を言われ用が俺は趣味でヒーローを続ける」

「師匠…！一生着いていきます！」

「泣くなよお前…」

何で感動したのかわからないが大粒の涙が溢れる針妙丸にサイタマは呆れたものの涙を拭き、針妙丸を肩に乗せた。

「共に頑張ろうな」

「はい！」

こうしてサイタマと針妙丸に新たな絆が生まれた…らしい。

夏日和編

百三撃目：いざ、常夏の島へ

博麗神社：今回の夜は一段と騒がしい。何故なら宴会が行われているからである。その縁側で誰かがいる。

「サイタマ、無理しすぎだ」

「悪い……」

サイタマとゾンビマンである。彼らも宴会に参加していた。しかしサイタマは幻想郷で親しくなった神奈子に無理矢理酒を飲まされた為気分が悪くなって縁側に来たのだ。しかし1人では歩けない状況だったのでゾンビマンに支えられた。

「師匠、大丈夫ですか？」

「サイタマ大丈夫？」

ついてきた針妙丸とぬえが心配そうに声をかける。サイタマは「大丈夫だ……」と答えるがその途端に吐いてしまった。その時

「ん？誰だ？」

スマホが鳴り出したので電話に出る。ぐっ तरीとしていた為針妙丸にスマホを支え

てもらってる。

「もしもしサイタマ氏？」

「あ、キングか」

電話の主はキングだった。キングは宴会には参加しておらず家にいた。

「何の用？」

「それはだな……」

「は？バカンス？」

「そう、なんか紫氏が海に行くとか言ってた。俺も誘われたからサイタマ氏も誘おうと思ってる」

「てか幻想郷に海ないだろ」

「いや、元々俺らがいた世界とは別の世界に行くって」

「何だそれ……」

サイタマは呆れる。

「で、場所は？」

「常夏の島”サマーアイランド”だって」

「何だそこ?」

サイタマは聞き返す。聞いたことの無い島だからだ。

「聞いた話では年中夏らしいって」

「そうか。出発はいつ?」

「3日後で集合場所はサイタマ氏の家の前だって」

「何で俺の家の前なんだよ…わかったわ。じゃあな」

電話を切る。と、同時に

「海行くの!?!」

ぬえが目を輝かせながら言う。

「そうか、お前ら海見た事ないもんな」

幻想郷で海というものは存在しない。元々外の世界の者であるサイタマとゾンビマンくらいである（他に守矢神社の神々等）。

「ゾンビマン、お前は どうする?」

「ぬえが行きたそうだし、俺も行くわ」

ゾンビマンも行く事にした。そうと決まればサイタマ、ゾンビマン、ぬえ、針妙丸は先に帰ることにした。

3日後…

「あ、ゾンビマン氏も行くの?」

「ああ」

サイタマの家の前に集まった。

この時の服装

- ・サイタマ↓アロハシャツに短パン
- ・ゾンビマン↓サイタマ同じくアロハシャツに短パン（柄は微妙に違う）
- ・キング↓上の2人と同じ。柄は違うが。
- ・針妙丸↓麦わら帽子に白のワンピース
- ・ぬえ↓いつもの服（Summer）

そして…

「何でいんの?」

サイタマは何故かいる霊夢、魔理沙、早苗、アリス、妖夢、幽々子、文、椛、聖、響子、神子に気づく。

「偶然です」

全員が口揃えて言う。しかし服装から見るとあらかじめ知ってたようにしか見えな

い。

「サイタマ氏、大勢いる方が楽しいと思うよ？」

「ま、そうだな」

「これで全員かしら？」

スキマから誘った本人である紫が登場した。

「何か誘った覚えがない人もいるけどいいとしましょう♪」

紫はスキマを広げる。と、その時

「ま、間に合った……！」

息を切らしながら現れたのは妹紅と慧音である。

「師匠！私も誘って下さいよー！」

「すまん、忘れてた」

全力で走ったのか妹紅は疲れ果ててる（慧音も）。

「これで全員かしら？じゃあ……スキマの中に飛び込んで！」

紫が一番先にスキマに飛び込む。サイタマ達も飛び込んだ。

「てか紫、着場所は？」

「あ、忘れてた……」

「忘れんなよ！」

此処で大きな誤算が。実は着地場所を考えてなかったのだ。もしかしたら海に落ちるかもしれない…

「そーいやお前らつて泳げたけ？」

「俺は泳げる」

「俺は…一応」

ゾンビマンとキングは率直に答える。しかし霊夢らは…黙ったままだった。

「あ！私も泳げます！」

「早苗！裏切りやがったな!!」

サイタマらと同じく外の世界出身である早苗が答える。しかし裏切られた感があつたのか魔理沙が早苗を掴む。そうやってく内に目的地のサマーアイランドに到着した。

百四撃目：常夏島で満喫

「着いたか？」

「それ以前に頭抜け」

「おう」

砂浜に頭から刺さっていたサイタマは自力で抜け出す。隣には針妙丸が全体的に埋まっていたがサイタマに救出された。

「此処がサマーアイランドか？」

「そうらしいな」

辺りを見渡す。前方には透明感のある青い海が広がっている。

「てか…キングは…？」

「え？確かアイツは………キング!？」

ゾンビマンの目の先には岩の上で気絶したキングがいた。どうやら落ちた衝撃で気絶したらしい。

「どうする？」

「とりあえず…ホテルまで運ぶか」

（移動中）

「はっ！此処は!!」

目を覚ましたキングが辺りを見渡す。リゾート感溢れる部屋だった。

「サマーアイランドのホテルの部屋だよ」

「サイタマ氏!?!」

目の前にサイタマがいた。キングは気絶してたとこサイタマに運ばれてベッドの上に置かれたのだ。

「ところで他の人は?」

「皆ホテルにいるよ」

「そ…そうか」

キングは一安心した。サイタマの話によると砂浜に落ちたのはサイタマ、ゾンビマン、針妙丸、ぬえ、キングだけらしく他は海に落ちたのだが紫に救出されたのだ。そして今は全員がホテルにいる。

ちなみに部屋の分担はこれ←

101号室：霊夢、早苗、紫

102号室：魔理沙、アリス

103号室：妖夢、幽々子

104号室：文、楯

201号室：聖、響子、ぬえ、ゾンビマン

202号室：サイタマ、神子、針妙丸

203号室：妹紅、慧音

204号室：キング

「キング、お前1人でよかったのか？」

「1人の方が満喫できるからな」

「そうか」

サイタマは疑問に持ったがキングは「1人の方がいい」との事で納得した。

「じゃ、海行くか」

サイタマとキングは海へと向かった。

海、幻想郷の住人達にとつてはまず見る事の出来ない光景である。その大半（特に文）はカメラに収めようと写真を撮る。

「久しぶりだな、海は」

「ああ、幻想郷にいる頃は見れなかったからな」

サイタマとゾンビマンは懐かしんでいた。海を見たのはヒーロー協会の旅行以来だ（S級ヒーロー＋サイタマ）。2人は当たり前前の事水着姿である（サイタマは水泳選手が履いてそうな海水パンツでゾンビマンは膝までとどく海水パンツ）。そして幻想郷住人達も水着姿である。だが…

「聖…その格好はなんだ…？」

「え？水着ですけど？」

ゾンビマンは聖と合流した。しかし聖の格好が結構ヤバかった。

「通販で間違えてしまったのですが…捨てるのが勿体なかったので着ました☆」

「自分の歳の事考えろよ…」

どうやら聖は水着を持ってなかったらしく、（つい最近幻想入りした）通販で注文したのだが注文する物を間違えてしまった。しかし捨てるのが勿体なかった為着たのだ。※噂によると弟子からは「やめた方がいい」と言われたらしい。

「では！楽しんできますー！」

聖は楽しげに行った。その姿を見て硬直していた響子とぬえに

「いつまで見とれてんだ、俺らも行くぞ」

「おうー！」

ゾンビマンは響子とぬえを連れて海へ向かった。

一方サイタマは神子と針妙丸と合流した。

「神子…それは…？」

「…これしかなかつたんですよ!!」

神子は顔を赤くしながら言う。フリル付きの水着だったからだ（しかも子供が着そうな）。どうやらこれしかなかつたらしい。

「けど別にいいか」

サイタマは全く気にしてなかった。しかし

「師匠…すごく恥ずかしいです…」

肩にいた針妙丸が顔を赤くして言う。格好がスク水だからだ。しかも名前は平仮名で。

「仕方が無いだろ、これしかないんだしよ」

「むー」

冷めた返事で返すサイタマに針妙丸は頬を膨らませる。そして3人は海に向かった。

百五撃目：それぞれの満喫

「サイタマさん…早すぎます…!」

「そうか?」

ボートには神子と針妙丸が乗っていて何故かサイタマがそれを引っ張っている。理由はボートが手動式だから。

「けど…爽快感があります!」

「どつちだよ…」

怖いのか楽しいのかわからない神子に呆れるサイタマだがボートを引っ張り続ける。なお、針妙丸は神子に抱かれたままである。

浜辺では…スイカ割りをしていた。キングが周辺を歩いてた所スイカを見つけたのだ。そのスイカを割るのがゾンビマン。しかし彼の手には…

「何で斧なの…?」

「え?いや…スイカ割りだから…」

キングの問いに首を傾げるゾンビマン。そう、彼の手には自身の武器である斧。しかも怪物の返り血の後あり。

「それ…洗ったの？」

「一応洗ったが…汚れが頑固で中々取れないんだよ」

ゾンビマンは溜め息をつきながら言う。

「変わりに剣にするか？」

ゾンビマンは剣を取り出す。しかしこれも…

「それも返り血ついてるじゃん…」

「これも洗ったが…落ちないんだよな…」

剣にも怪物の返り血の後が……行き先真つ暗なスイカ割りである。

一方、文と椀は…

「こんなもんですかね」

「文さん…疲れましたよ…」

文はサマーアイランドを撮影して新聞の記事にしようとしていた。椀はその付き添い（無理矢理）。

「これを記事に出来れば此処の観光客も増えて私の新聞は大いに売れますね！」

文は笑う。しかし顔がゲスい。

「けど文さん、此処、幻想郷とは別世界ですよ？記事にしても意味ないのでは…？」
椛の思いがけない発言に…

「そうだった…！」

文は落ち込んでしまった。しかし椛の言ってる事は正論。サマーアイランドは幻想郷にはなく別世界にある島である。その為記事にしても意味がない。

「私の苦労って一体…！」

文はしばらく立ち直れなかった。

そして霊夢と早苗は壮絶な戦いを繰り広げていた。それは…

「さーなーええええ!!待てやゴラァ！」

「霊夢さん落ち着いて!顔が怖いです!」

霊夢が鬼の人相で早苗を追いかけていた。早苗の目には涙が零れている。2人がやっているのは…頭にスイカを乗せ、紐で縛り、手には棒を持って先に相手のスイカを割った方が勝ちであるという遊び(というより戦い)である。その様子を見ていた魔理

沙とアリスは…

「霊夢…余程早苗に怨みでもあんのかな」

「魔理沙安心して！魔理沙に怨み持つ奴らは片っ端から倒すから！」

「うん、一回死ね（ニッコリ）」

魔理沙は笑顔でアリスに言う。内容は酷い。しかしアリスは魔理沙に弄られたのか快感溢れる表情だった。

「進めえええ！」

浅瀬では響子とぬえが膨らませて乗れる浮き輪に乗っていた。後ろでは聖が押している。

「2人子供っぽくていいですね…」

聖は笑顔だった。其処へ

「お前から其処にいたのか」

サイタマがボートを引っ張りながら現れた。ボートには神子と針妙丸が乗っている。

「サイタマさんは何をしてたのですか…？」

「え、何って…ボートを引っ張りながら泳いでただけけど？」

話によるとサイタマは神子と針妙丸が乗ったボートを引つ張りながら泳いでたのと。途中鮫に追いかけられたが身体能力の高さで振り切った。

「すごい……私も連れてって！」

響子とぬえがボートに飛び移った。おまけに聖も。

「また行くのかよ……」

サイタマは呆れるも渋々と行く事にした。その様子を見ていた妹紅と慧音は……

「妹紅、お前は行かないのか？」

「いや別に、落ちたらヤバイし」

妹紅は行く気がなかった。というより彼女は泳げないのだ。

「なら、私が泳ぎ方を教えようか？」

「遠慮しとく」

「(・・・)」

あつさり断られた慧音は落ち込んでしまった。その頃サイタマらは……

「てか何で紫までいんだよー！」

「いいじゃない別に」

ボートはいつの間にか紫がいた。そして幽々子と妖夢も。

「はあ……延長か、これ」

サイタマは項垂れる。それに影から妖夢が謝る。バカンスはまだ終わりそうでな
かった。

百六撃目：サマーアイランドで起きた殺人事件？

夜、ホテルの浜辺近くでBBQが行われた。しかしその後いつもと変わらぬ宴会と
なってしまった。その後…誰も想定していなかった事件が起きる…

翌朝…事件が起きた。すぐさま皆が駆けつける。其処にあったのは…ゾンビマンの
死体だった。背中には刀が刺さっている。

「誰がこんな事を…？ひどい！」

ぬえは愕然とした。自分にとってゾンビマンはいつも遊び相手にしてくれてたから
だ。

「フフフ…此処は私が解決しましょう！」

突然入口から声がしたので皆が入口に顔を向ける。其処にいたのは…探偵の格好を
した文だった。

「文さん…コスプレですか？」

「違います！探偵になりきっただけです！」

文はコスプレではないと言い切る。しかし本来は新聞記者である為、周りから見ればコスプレにしか見えない。

「まず！ゾンビマンさんを殺した凶器は…この刀ですね！」

文はゾンビマンに刺さってる刀を指す。

「刀使う人といえば…」

全員が一斉に指す。それは…妖夢だった。

「ちよつと待って下さい！何で私なんですか!?!」

「いや…剣使いつて…お前しかいないだろ」

「だからっておかしくないですか!?!」

確かにこの中で剣使いは妖夢だけである。妖夢は「自分じゃないと」反論する。

「妖夢…私は貴女をそんな風に育てた覚えはないわ…!」

「何保護者面してんのアンタ!?!」

何故かいきなり保護者になった幽々子に妖夢は突っ込む。

「まあまあ落ち着いて下さい。まだ妖夢さんが犯人と決まった訳ではないですから…」

文が2人を落ち着かせる。そこに…

「そういえば…紫、貴女ゾンビマンを見ていたわよね？」

霊夢が紫に聞く。実は紫は土産コーナーを見ていたゾンビマンを柱に隠れて見てい

た。それに霊夢は気づいたのだ。

「いや…ちよつと…いいなあつて思つて」

「何が!？」

照れながら話す紫に対し霊夢は突つ込む。

「それに…私は寝てる時しか襲わないわよ!」

「お前が原因かあ!」

霊夢がいきなり紫に飛び蹴りをくらわす。実は霊夢は何度か寝てる時に紫に襲われていた。

「いたたた…けど皆も寝てる人の寝顔見るの楽しいでしょ!？」

起き上がつて紫が皆に聞く。しかし誰も「そう思わない」と答えて落ち込む。

「とりあえず紫さんは犯人じゃないですよね…私的にはサイタマさんが犯人だと思ふですけどね…」

「何故!？」

文は何故かサイタマを犯人扱いした。それが気に入らなかつたのか

「おい貴様…サイタマさんを犯人扱いするのか…?」

サイタマの隣にいた神子が反論する。しかも口調がいつも以上に違う。

「違います、これは先入観です」

「第一サイタマさんは武器を使わなくても…待てよ!？」

神子は突然考え出した。「確かサイタマさんはゾンビマンが死なない事を知っててやったのかもしれない!？」と思つた。そして

「サイタマさん、たとえ世間が貴方を敵にまわしたとしても、私は貴方の味方です。それと…裁判になつたとしたら…私が弁護側につきます」

「やつてねえつて!!」

神子はある意味名言らしき事をサイタマに言つた。しかしサイタマは「自分はやつてない」と言う。

「疑つてすみません…けどもう一つ思いました。第一発見者は誰なんでしょうか?」

文はサイタマに謝つた。そして誰もが気にしてる事を言つた。まず第一発見者は誰なのか?その時

「俺だ」

「え?」

声の主は…キングだつた。

「百獣の王…キングさんですね?今まで何処にいたのですか?」
「ずっと此処にいた。だが誰も声をかけなかった…それだけだ」

どうやらキングは最初からいたのだが気づいてもらえなかつたの事。

「いつ見つけたのですか？」

「飲み物を買おうと自販機に行った時にゾンビマンが倒れてるのを見て係員に報告した」

キングはいつゾンビマンが倒れていたのかを言う。

「まさか…貴方が犯人じゃないですよね…？」

「何故そうなる」

キングは文を睨む。

「よくあるのですよ、第一発見者が犯人だつて事が」

「成程…だが俺は見つけただけで殺してはいない」

「よく言えますね…その”キングエンジン”を鳴らしながら」

今の状況、キングは自身の心臓音、キングエンジンを鳴らしながら。

「確かそれは…怪物を戦意喪失させたり気絶させたり出来ますよね…？したがって貴方は戦闘態勢と見させていただけきます」

「ここまで言われてしまつては…仕方が無いな!!」

文とキングは互いに睨む。その時だった！

「ん…」

ゾンビマンが動いたのだ。誰もが驚く。

「くっ……！サイタマ……これ抜いてくれ……」

ゾンビマンにそう言われサイタマは剣を抜く。と、同時に

「ゾンビマン、ヒママー……！……！」

ぬえがゾンビマンに抱きつく。

「一体誰がゾンビマンさんを刺したのでしょ……？」

「いや……あの時……俺も相当酔ってたから覚えてない……」

どうやらゾンビマンは覚えてなかった。前日、アルコールの強い酒を飲んでいた為
はつきりと覚えていなかったのだ。

「だ……俺は気にしてない。宴会ではよくある事だからな」

ゾンビマンは照れながら話す。しかし一同（サイタマとキング以外）は唾然する。

「ま、けどゾンビマンは生きてたし一件落着だな。神子、風呂行くぞ」

「はい……」

サイタマは温泉に向かった。そして他の人も向かう。

「一体誰がゾンビマンさんを刺したのか……？」

その場に残った文は考え込む。

そして数時間後、犯人がわかった。それは早苗だった。前日の夜、慣れてない酒を霊夢に上げようとした時にゾンビマンに取られた拳銃に馬鹿にされた事に怒り、アルコールの強い酒を飲み、妖夢から剣を奪ってゾンビマンを刺したのだ。しかし早苗自身も覚えてなかったのだがその時の映像が監視カメラに映っていた事が解決の導きだ。そして幻想郷に帰った直後、神奈子と諏訪子にこっぴどく叱られたそうだ。

これで幻想郷の夏日和は終わった。

潜入！謎の骨格塔編

百七撃目：緊急集会

「おい、神子、今俺の手札見たろ」

「見るわけないじゃないですか。私は正々堂々と勝負したいのです」

「てか、針妙丸君…重くないの？」

「お…重たいです…！」

4人は今、トランプをしていた。全員が険しい顔でしている。その時、

「サイタマ様!!」

玄関から突然サイタマを呼ぶ声がした。その時何故かキングが驚いた。

「何だいきなり…てか誰？」

其処にいたのは白と青の服に白の帽子を被った女性がいた。しかし耳があり尻尾が9本あった。どこからどう見ても狐である。

「私は紫様の式神、八雲藍でございます。以後おみを知りを」

女性は八雲藍と名乗った。紫の式神だそうだ。

「で、何の用？」

「はい、紫様が緊急集会を開きましたのでサイタマ様も呼んで来なさいと言われましたので来ました。どうか参加お願いします」

「いいぜ、暇だから」

サイタマは普段見せない凛々しい顔で言う。

「ありがとうございます。では案内しますのでこちらに」

藍が緊急集会が開かれてる場所にサイタマを案内する。

「あ、お前らも来る?」

「勿論行きます! キングさんも行きますよね!」

「え? あ…うん」

神子、針妙丸、キングも行く事にした。

とある場所

「こちらです。では」

藍は案内し終わるとその場を去った。サイタマが戸を開ける。

「お! サイタマ君も来たのか」

「よっ、爺さん」

前にはバングがいた。隣に見知らぬ女性がいる。
「隣誰だっけ……？」

「茨木華扇です！ 忘れないで下さい！」

思い出していたどころ、仙人の茨木華扇である。

「ああ、この子はい最近弟子入りをしたんじゃ」
「だからか」

サイタマは納得した。

「さて、もう皆揃ってるそうだし、儂らも行くか」
バングに言われ入口にいた全員が先へと進む。

とある場所の奥……其処に集まっていたのは……

” 楽園の巫女 ” 博麗霊夢

” 普通の魔法使い ” 霧雨魔理沙

” 完全で瀟洒な従者 ” 十六夜咲夜

” 永遠に紅い幼き月 ” レミリア・スカーレット

” 幽人の庭師” 魂魄妖夢

” 幽冥楼閣の亡霊少女” 西行寺幽々子

” 山に住む奇跡の現人神” 東風谷早苗

” 山坂と湖の権化” 八坂神奈子

” 封印された大魔法使い” 聖白蓮

” ある意味不死の戦士” ゾンビマン

” 銀牙のファイター” バング

” 片腕有角の仙人” 茨木華扇

” 聖徳道士” 豊聡耳神子

” 百獣の王” キング

” 輝く針のリリパット” 少名針妙丸（椅子に座ってない）

” 趣味でヒーローをやってる最強の男” サイタマである。

場は緊張感に包まれている。しかしこの男は：

「ぬるっ」

サイタマは相変わらず緊張感がなかった。しかも茶を飲みながら。其処に

「これだけかしらっ？」

集会を開いた張本人、八雲紫が来た。隣には八雲藍がいる。

「じゃあ…始めるわね」

「その前に1つ言わせてもらおうわ、態々私達を呼び出したって事は相当大事な事でしょうね？もしくだらない内容だったら此処を壊すわよ！」

レミリアが紫に対して怒り（？）をぶつける。

「くだらない内容だったらあなた方は呼ばないわよ」

「……でしようね」

紫がはつきりと言ったためレミリアは納得する。

「じゃあ本題に入るわ、藍、データを」

「はい」

藍は紫に紙を渡す。其処に書かれていたのは…

” 謎の骨格塔、 現る！”と書かれていた。

「これは今日の烏天狗の新聞の見出しに書かれていた…調べによるとつい先日突如現れたって話よ」

「其処に潜入しろって事か？」

ついさつきまで茶を飲んでたサイタマが言う。

「……………そうです」

紫は落ち込みながら言う。自分が言う事をサイタマに言われたからである（というよ

り落ち込んでる)。

「紫様は立ち直れなさそうなので私が変わりに言います。サイタマ様の言う通り、此処に潜入してもらいます。話によると骨格塔の中には怪物や怪人が潜んでいる模様です」

紫は落ち込んでしまっているので変わりに藍が説明した。

「で、場所は？」

「この建物の隣です」

「隣か…え!?!」

全員が驚いた。急いで外に出る。確かに隣に怪しい骨格塔があった。

「ま、とりあえず、潜入して下さい」

藍は忙しく去った。

「じゃあ、行くか!」

サイタマはいち早く骨格塔に入ってしまった。それに釣られるかのように霊夢達も入る。

百八撃目：幻想郷住人と元ヒーローの進撃①

妖夢・幽々子 side

「なあ兄貴、侵入者はアイツらか？」

「そうらしいな」

其処にいたのは囚人服を着、サングラスをしており、肌の黒い男が2人いた。片方がごくつく、もう片方はひよろひよろである。骨格塔に住む怪人“ラップ兄弟ゴウ&ヨウ”である。

「此処が入口みたいですね」

妖夢が骨格塔の入口の扉を開ける。

「おや…？ヨウ、これは大物が来てくれたぞ！」

「マジか兄貴！」

ゴウは驚く。妖夢の隣に幽々子がいたからである。

「お前らは確か…」 幽冥楼閣の亡霊少女”の西行寺幽々子と” 幽人の庭師”の魂魄妖夢で間違いないな？」

「ええ、そうよ」

「はい、そうです」

妖夢と幽々子が返事をする。と、その時

「噂では聞いてるぜ！お前らはコンピネーションがすごいって事にな！俺達はラップ兄弟のゴウ&ヨウ！俺達の兄弟愛を見せてやるぜ！」

ゴウとヨウが襲ってきた。しかし

「のああああ!？」

「ヨウ!？」

ヨウは妖夢に斬られてしまった。

「すみませんが雑魚に相手している暇はありませんので」

「おのれよくも弟を……許さん!!魂魄妖夢！俺の剛力を思い知るがいい！」

ゴウが弟の仇にと妖夢に拳をくらわそうとする。

「あら？貴方の相手は私よ」

突然横から幽々子が入ってきてゴウの間近で弾幕を放つ。

「え？」

ゴウは何が起きたのか理解できずに爆発して倒れてしまった。

「私は妖夢とのコンピネーションはする気ないけどね」

「幽々子様……酷いです……」

幽々子の発言に妖夢は傷ついてしまった。

魔理沙 side

「何も出てこないな…」

魔理沙は注意深く進んでいる。しかし何も出てこない。その時

「待ちな！侵入者よ！」

魔理沙の目の前に貴族みたいな男が現れた。

「私は怪人王子、青薔薇の貴公子だ！貴女は”普通の魔法使い”の霧雨魔理沙だな？」

「何だコイツ…」

あまりにキザな性格に引いてしまった。

「私の華麗なる剣術で貴女は私の虜だ！」

青薔薇の貴公子はレイピアを取り出し振る舞う。

「めんどくさ…」

魔理沙は魔法瓶を取り出し、蓋を開けて放つ。

「な!?!うわあああ!?!」

青薔薇の貴公子は爆発した。

「悪いけど…私はアンタの虜にならんだわ」

魔理沙は呆れながらも先へと進んだ。

聖・ゾンビマン side

「口程にもならんな、”ある意味不死の戦士”よ」

骨格塔の怪人、ヴァンパイア（血統書付き）が口を拭きながら言う。前にはゾンビマンが倒れている。

「さて…次は”封印された大魔法使い”の番だ」

「望むところですよ！」

聖は構える。ヴァンパイア（血統書付き）も構える。と、その時

「誰が口程にもならないって？」

倒れていた筈のゾンビマンが立ち上がって聖の隣に来た。

「成程…その再生力は本当だったんだな。しかし意味はないと思うぞ？」

「そんなもんやってみないとわからないだろ、聖、行くぞ」

「はい！」

ゾンビマンは拳銃を持ち、聖と共にヴァンパイア（血統書付き）と激突した。

30分後…

「何故だ…？我は確か…何度も…殺した…はず…」

ヴァンパイア（血統書付き）の身体はバラバラになっていた。

「ゾンビマンさん…流石です…！」

「いや…俺もこういう相手と戦うのは久しぶりだったからな…」

ゾンビマンも血だらけで傷だらけなのだ。直ぐに元通りになった。彼は戦闘力は高くないものの、その異常な再生力で持久戦に持ち込むという戦闘スタイルである。聖が気に入るのも当たり前だ。

「けど聖…足でまといになるが許してくれよな？」

「大丈夫です！」

ゾンビマンの発言を聖は気にしてなかった。そして2人も先へと進む。

一方サイタマは…単独で突き進んでいた。

百九撃目：幻想郷住人と元ヒーローの進撃②

早苗・神奈子 side

「……………どうした？何故動かない？」

怪人は問いたただすが神奈子は動かない。今戦っているのはカミキリムシ、クワガタ、カブトムシ、アリ等の蟲が合わさったような怪人、インセクト・バグである。

「しかし…お前のところの巫女は頑張っているのに何故お前は動かない…マゾなのか？」山坂と湖の権化”八坂神奈子”

早苗はインセクト・バグが出した蟲達を相手するのに精一杯である。しかし神奈子は腕をクロスして攻撃を受け続けている。

「それはお前の弱さにガツカリしたからだよ」

今まで黙っていた神奈子が喋り出した。

「何だと…？俺が弱い…？よかろう！俺の本気を見せてやる！」

インセクト・バグは”弱い”と言われ怒りに震えた。手が6本になり、腹筋が割れ、肌も黒くなり目つきが変わった。

「我が下僕の餌となれ！」

インセクト・バグは神奈子に向かって無数の拳を放つ。しかし

「残念だったね、あたしは肉弾戦の方が好みなんでね」

神奈子のパンチでインセクト・バグの上半身が粉々に砕けた。と、同時に早苗が懸命に相手していた蟲も消えてなくなった。

「さて…早苗！行くよ！」

「はい！神奈子様！」

神奈子と早苗は奥へと進む。

霊夢 side

「ガーハツハツハ！俺様はガマグチ！お前を丸呑みにしてやらあ！」

霊夢の前にガマ口の男が現れた。怪人のガマグチである。

「煩い、死ね」

「ぐわあああ!？」

霊夢は無数の弾幕を放つ。ガマグチはあとかなもなく消えた。

「消えて地獄に堕ちろ」

霊夢はそう言つて先へと進む。

バング・華扇 side

「華扇！避ける！」

バングに言われ、華扇は避ける。しかし怪物の攻撃は止まない。骨格塔で飼われていると思われるペット、ジャイアントケルベロスである。

「ケルベロスは地獄にいるはずなのに！何故地上にいる！」

「考えても無駄じゃ！あやつを倒す事が最優先！」

「はい！」

バングと華扇はジャイアントケルベロスの横に入る。そして

「奥義！龍牙の爪！」

華扇の右手が龍の鉤爪となり、ジャイアントケルベロスを切り裂く。しかし

「無傷!？」

ジャイアントケルベロスは何事もなかった。華扇に気づいたかそちらに向かって氷弾を放つ。その時

「流水岩碎拳！」

バングが流水岩碎拳を放つ。その目にも止まらぬ速さで放たれる拳はジャイアント

ケルベロスの身体にヒットする。

「すごい……！」

華扇はバングの手捌きにみとれた。だが

「何じゃと!?!これだけやつても平気というのか!?!」

バングの流水岩碎拳でもジャイアントケルベロスは無傷だった。

「バング先生の攻撃も通じないなんて! 此処でおすわりしてなさい!」

するとジャイアントケルベロスはおすわりした。

「座った……?」

バングと華扇は一瞬戸惑うが座っている隙に先へと進む。

キング・神子・針妙丸 side

「流石です……！」

「すごい……！」

神子と針妙丸は唾然していた。何故ならキングが遭遇した怪人を戦意喪失させたり、気絶させたりしたからだ。

「まさか此処の怪人や怪物にも通用するとは…自分が怖い」
しかし内面では結構びびっている。

「よし…これならキングさんを盾にして進めば行けるかもしれません！」
「なんでそうなるの!?!」

神子は無理矢理キングを盾にして進んだ。

「(もう此処で死ぬかもな…俺)」
キングは死を覚悟していた。

「百十撃目：上級怪人、現る①」

レミリア side

「おいおい…挨拶なしで攻撃してくるとか…オイラを舐めてるのか？」

「アンタみたいな雑魚に挨拶なんて必要ないわよ」

レミリアは黒い子供のような怪人と接した。怪人のカゲノコだ。

「そうか…オイラを舐めてるんだな！」

カゲノコは右手を巨大化させた。だが

「はつきり言うけど私は長年生きる吸血鬼、身分の差を教えてあげるわ」

レミリアはカゲノコの右手を切る。しかし切れた右手はカゲノコになった。

「まったく…分裂するパターンか、「面倒ね」

「面倒？いつまで勝ってる気でいんの嬢ちゃん？オイラは無数の影で出来た怪人。したがって影が尽きるまでオイラは倒せないよ？」

カゲノコは更に増やした。どうやら自分でも増やせるようだ。

「だったら影が尽きるまでよ！」

レミリアはカゲノコに対して攻撃を続ける。これがいつまで続くのか…

咲夜 side

「お嬢様とはぐれてしまった…」

咲夜は1人通路を歩いていった。レミリアとはぐれたからである。

「だが私1人でも大丈夫か」

そう呟いたその時後ろから何かが咲夜を丸呑みした。怪人の底無し大口だ。しかし「モガア!？」

底無し大口の腹が暴れ始めた。痛みに耐えれなかったのかさつき飲み込んだ咲夜を吐き出す。

「いきなり食べるなんて卑怯ですね、正面から正々堂々と勝負です!」

「うがあああ!!」

咲夜と底無し大口の勝負が始まった。

魔理沙 side

魔理沙は警戒しながら通路を進む。しかし誰とも出会わない。

「本当に誰かいるのか？」

「なら私が相手してやろうか？」

声が出たためそちらに向ける。其処には銀髪で鉄のマスクをしている男がいた。服装は魔導師のローブである。

「お前いつのまに…!？」

その魔導師は魔理沙に向けてエネルギー弾を放った。爆発し、魔理沙は瓦礫に埋まつてしまった。

「抵抗する間もなく…死…か。大いにガツカリさせてもらったよ、”普通の魔法使い”よ」

「勝手に決めつけるな…!」

瓦礫から魔理沙が出てきた。魔法瓶を取り出し蓋を開けて放つ。

「ほう」

しかし魔導師はエネルギー弾で消す。だが

「まだ終わりじゃないぜ!!」

八卦路を取り出し”マスタースパーク”を放つ。これは効いたのかシャドウのローブは少しボロボロになった。

「素晴らしい…! 其方を疑っていたよ。私は魔導師シャドウ! 元人間の魔導師だ」

魔導師はシャドウと名乗った。

「魔導師がなんで此処にいる…それとそのエネルギー弾はなんだ」

「其方に話す必要等ない。だがエネルギー弾の正体は教えよう、これは闇魔法だ」

シャドウは自分が骨格塔にいる理由は話さなかったが、エネルギー弾の正体は教えてくれた。

「魔法使いでは禁じられてる闇魔法か…どういう手段で手に入れたか教えてほしいな」

「よかろう！教えてやろう…私が闇魔法を手に入れた手段を！」

シャドウは語った。闇魔法を手に入れた理由を。

シャドウは元々人間であり、教祖であった。多くの信者に支持されていて、”世界平和”を実現する為に日々民衆の前で呼びかけていた。しかし…妖怪の襲撃でそれは崩壊した。シャドウのいた町は壊滅的な状態になった。自分を支持してくれた信者は全員妖怪に喰い殺されてしまった。そして聖母であり、尊敬していた母も…

シャドウは運良く生き延びたものの、何一つ守れなかった自分の愚かさに絶望し、自殺しようとした時に目の前に黒いローブを着た人物が現れた。

「貴方は死ぬ必要はない…貴方に魔法使いでは禁じられてる闇魔法を差し上げます。それで世界平和を実現しなさい…」

「その者から私は闇魔法を手に入れた！私を支持してくれた信者や母を殺した妖怪達に復讐する為に！そして戦争を起こす人間達を消すために！その妖怪と人間をこの世から消せば！私が望む”世界平和”が実現するのだ！」

「なんてとばつちりだ…それで本当にお前がやる事はあつていいのか？」

「あつてるかあつてないかは私自身が決める事だ。邪魔するのならばお前から消そう！霧雨よ！」

「望むところだ……！」

魔理沙とシャドウの魔法使い同士の勝負が始まった。

百十一 撃目：上級怪人、現る②

早苗・神奈子 side

「何か強い気を感じる…」

「え？」

早苗と神奈子は通路を進んでいる。その時神奈子が何やら強い気を感じた。と、次の瞬間

「ひゃひゃひゃー！」

突然前から高速で何かが襲ってきた。

「間違いない！奴だ！」

神奈子は拳を放つが避けられてしまう。早苗も弾幕を放つがこれも避けられる。

「おいおいどうした？インセクト・バグを倒した時の威勢はどうしたんだよおい？」

と、言いながら歩いてきた。髪はボサボサで暗い印象の顔で、オレンジのマフラーに白い服装の男だった。

「ん？てかお前ら東風谷早苗と八坂神奈子だろ？信仰で人気集めてるんだろ？ぶっ殺す」

「は？」

早苗と神奈子はキョトンとした。何故なら前にいる男がとんでも発言をしたからだ。「殺すつて…どういうことだい？」

「あ？あたりめえだろ、人気があるからだよ！俺は生まれた時から嫌われててな、だから人気と強さは比例しねえ事を証明してやんだよこの子供騙しみたいな信仰してる馬鹿どもが！」

その男の正体は怪人のケガレである。彼は幼い頃から嫌われていて、人気のある者に対しての嫉妬や憎しみが増幅し怪人となったのだ。

「信仰が子供騙し…ふざけんのも程々にしな！」

神奈子は馬鹿にされた事に怒り、ケガレと激突した。

霊夢 side

「何よこれ…」

霊夢は何かを見つけた。それは藁で出来たボロボロの人形だった。王様の格好をしている。

「まさかこれも怪人じゃ…」

「そのまさかです」

「やっぱり……ってえ!？」

霊夢は驚く。それは藁人形が喋った上に剣を振りかざしたからである。

「僕を怪人だと気づくのはお見事です。博麗の巫女」

「やっぱり怪人か……名前は？」

「僕はドールキング。骨格塔に住む人形型の怪人です」

人形はドールキングと名乗った。元々は大事にされてた人形だったので捨てられて怪人化したのだ。

「見た目弱そうね……」

「見た目で判断は困ります。実力で勝負していただかないと」

「まあいいわ、怪人は討つべき!」

霊夢とドールキングの勝負が始まった。

聖・ゾンビマン・バング・華扇side

「おお、ゾンビマン!」

「バング!」

バングと華扇は聖とゾンビマンと合流して。

「怪人と遭遇しなかったか？」

「いや…ヴァンパイア（血統書付き）を倒してから全く遭遇してはない」

「そうか……ん？」

バングは何かに気づく。

「先生…どうかしましたか？」

「近くに何かがおる……避ける!!」

バングに言われて聖、ゾンビマン、華扇は避ける。

「まさか怪人の仕業か!？」

「間違いないな、あれじゃ」

バングの指さす先にはスライムのような怪物がいた。骨格塔の怪物イビルスライムだ。

「あれが私達に攻撃してきたのですね…」

「見た目雑魚にしか見えないが…」

「見た目で判断するな、奴は強敵じゃ」

「これは…4人で一齐攻撃ですね」

4人はイビルスライムと激突した。

キング・神子・針妙丸 side

「何か嫌な予感がする…」

キングを盾にして進んでいる神子が言う。

「それ以前に俺を盾にして進むのやめてくれないかな…」

キングがそう言ったその時

ガン!!

「な、何?!」

突然音がした。しかも揺れている。

「まさかこれって…」

「これ崩れるな…」

「なら早く出口を見つけないと!」

キング、神子、針妙丸は急いで出口を探す。

この揺れの正体は…

「お前が親玉か」

「いかにも、俺は竜崎。この骨格塔の主であり、怪人組の会長だ」

サイタマは骨格塔の主であり、怪人組の会長、竜崎真一と接していた。

”趣味でヒーローをやってる最強の男” …噂では聞いている…俺を思う存分に楽しませてく「馬鹿か?!?!」

サイタマは竜崎を普通のパンチで竜崎を飛ばした。

「楽しませろって…ふざけてんのか?」

サイタマは呆れる。

百十二撃目：崩れた骨格塔

「いきなり殴るとは無礼だな…」

「お前が楽しませてくれとか言うからだろうが」

竜崎はまだ動ける。そして黒い龍に変化した。

「サイタマよ…お前の力を我にぶつけてみよ！」

「じゃあそうさせてもらうわ」

サイタマは普通のパンチを竜崎に放つ。と、その時

「え？何？」

突然骨格塔が揺れだした。さつきよりも揺れが大きい。

「まずい…崩れる！サイタマ！私の尾を掴め！」

「え？わかったわ」

サイタマは竜崎の尾を掴み骨格塔から脱出した。

キング・神子・針妙丸 side

「これは本当にヤバイ！」

「出口は!？」

キングと神子は急いで出口をみつけようとしていた。しかし一向に見つからない。

「あれじゃないですか!？」

針妙丸の指さす先には光が見えた。

「あれが出口か!飛び込めええ!!」

キング・神子は光のある場所に飛び込んだ。だが

「え?…ああああああああ!!」

なんとそれは窓だった。キングと神子はありえない速さで落ちていった。

そして骨格塔が完全に崩れてしまった。脱出したサイタマと竜崎は

「あ、霊夢達もいるんだった…」

「俺も怪人組の奴らもだ…」

その時

「まさか骨格塔が崩れてしまうとはな…」

カゲノコが現れた。そして底無し大口、魔導師シャドウ、ケガレ、イビルスライム、

ドールキングも瓦礫から出てきた。

「おお！生きていたか！」

竜崎はすぐ様にカゲノコ達の場所へと向かった。

「当オイラ達はそう簡単には死なないよ。けど厄介なのがいるな……」

「ウルル……！」

”趣味でヒーローをやってる最強の男”か……とんだ大物だな”

「彼奴がサイタマか……！絶対にぶっ殺してやる……！」

「……………」

「僕の剣が疼いてますねえ！」

全員がサイタマの存在に気づく。

「奴は強敵だ、全員で協力して……あれ？」

竜崎は辺りを見る。カゲノコ達がいらない。

「まさか……!?!」

竜崎の予感はずたつていた。カゲノコ達はサイタマに向かって行ったのだ。

「ゴポ……ゴポ……ピチューン！」

イビルスライムが口を開けてレーザーを放つ。

「レーザーか」

サイタマは何事もなかったように避ける。その時

「顔面崩壊。パンチ!!」

ケガレの拳が命中した。サイタマは飛ばされる。

「サイタマ……! お前はいいよな……人間や妖怪達から人気があつてな! だが俺は卑屈に成程強くなる! 嫌われるに嫌われまくつて人格が最底辺まで折れた最凶で最悪の暴力を見せてやる……!?!」

ケガレの前に飛ばされたサイタマが現れた。そして普通のパンチを放つ。今度はケガレが飛ばされた。

「嘘だろ……!?! 俺の暴力は鬼を超えろというのに……!」

ケガレは愕然した。

「何だ?」

サイタマが振り向くとエネルギー弾が。シャドウの闇魔法だ。そして爆発した。

「おや……終わってしまったのか? これくらいなら耐えられると思つたのだが……」

シャドウは勝つたかのように言う。しかし

「お前からそんなに死にたいのか?」

「無傷だと……!?!」

シャドウの闇魔法をくらつたのだがサイタマは何ともなかった。

「余所見してると大怪我するぜ！」

カゲノコが後ろから攻めてきた。右手が巨大化している。

「普通のパンチ」

サイタマは全く動揺せずに普通のパンチを放つ。

「なっ!?!」

カゲノコの巨大化した右手は消えてなくなつた。

「今度は僕ですよ!!」

横からドールキングが剣を振りかざす。が、サイタマはドールキングの剣を掴み折つた。

「僕の剣が…!?!」

ドールキングは自身の剣が折れてショックを受ける。

「んがああああ!!」

次の瞬間、底無し大口が地中から現れてサイタマを丸呑みにしようとした。

「何だコイツ」

サイタマは底無し大口を殴り飛ばした。吹き飛ばされた底無し大口は爆発して跡形も無く無くなった。

「底無し大口!?!コイツヤベエよ…!」

「我々の攻撃が効かないとは……！」

「絶対に許さねえ……！」

「……………!!」

「これは厄介ですねえ……!!」

底無し大口がやられたのかカゲノコ、シャドウ、ケガレ、イビルスライム、ドールキングは怯える。其処に

「待て、もういい。サイタマは俺が相手する」

「やっとお前の出番か、竜崎」

「サイタマ……正々堂々と勝負しようじゃないか!!」

「そうだな!!」

サイタマと竜崎は激突した。

「シャドウどうする……?」

「落ち着けカゲノコ。瓦礫の下にはまだ誰かがいる。奴等は只者ではないから這い上がってくるだろう。サイタマは竜崎に任せればいい」

シャドウの予感はずたっていた。瓦礫から霊夢達が現れた。

「あの人形……!まだ生きてたのね……!」

「あの影法師も……!」

「底無し大口の姿がありませんが…サイタマさんが倒したのかしら?」

「あの嫌われ野郎もまだいるのか…!」

「まだこんなにいるのですか…!」

霊夢、レミリア、咲夜、神奈子、早苗はボロボロでありながらもまだ戦える状態である。しかし魔理沙、バング、ゾンビマン、聖、華扇、の姿が見当たらない。

「まだこんなにいるのか…私の闇魔法で…!」

シャドウは突然首を占められた。

「やっと思つけたぜ」

魔理沙が瓦礫の下から現れた。

「霧雨!?まだ生きてたのか!」

「当たり前だ、私はそう簡単に死ぬ程やわじやないぜ?」

魔理沙はシャドウを地面に叩きつけた。

「さあお前の闇魔法を放ってみろ!お前の身体も吹き飛ばはずだ」

「くっ!卑怯な!」

「卑怯なのはアンタの闇魔法だと思うぜ?」

「カゲノコ!ケガレ!ドールキング!私を助ける!」

「悪いがオイラはあの吸血鬼の嬢ちゃんを倒す必要があるんでね」

「俺はあの餓鬼巫女と神様がいるからな、ソイツ等を倒してからだ」

「僕は博麗の巫女がいるんでね」

しかし全員無視して標的のところまで向かった。

「味方にまで見捨てられるなんて悲惨だな」

「おのれ…!!」

再び魔理沙とシャドウの勝負が始まった。

一方キング・神子・針妙丸は…

「何か見えます?」

キングと神子、針妙丸は偶然立っていた瓦礫に隠れて様子を見ていた。その時

「おお! キング君!」

「バング氏!? それとゾンビマン氏も!」

「聖に華扇!」

瓦礫からバングが出てきた。ゾンビマン、聖、華扇も一緒だ。

「さーて戦況は…」

バングが戦況を確認する。

「成程…怪物5人に怪物1体じゃな」

「まだそんなにいるのですか!？」

「だが怪人の1人はサイタマ君と戦っているな」

「私達も急ぎましょう!!」

バング、ゾンビマン、聖、華扇はその場所へと向かった。

「……………とりあえず俺達は様子を見よう」

「……………そうしましょう」

キング、神子、針妙丸は再び様子を伺う事にした。

百十三撃目：怪人との決着①

早苗&神奈子vsケガレ

「人気者への裁きのパンチ!!」

神奈子はケガレの拳を再び当てられた。本来ならどうつてことないのだが、ケガレの腕力は鬼を遙かに超えている為致命傷ではすまない。

「神奈子様!!」

早苗は倒れた神奈子に声をかけるが返事はない。

「次はお前だぜえ?山の巫女」

早苗を殴ろうとしたその時、ケガレの顔に衝撃が

「誰だ?」

ケガレの目先には華扇がいた。

「まさか倒れないとは…貴方はそうとう強いのですね…」

「てめえか…俺の顔を殴ったのは?今で標的はお前になったぞ…!」

ケガレは華扇を標的にした。そしてケガレは身体を変化させていった。

「細胞を変化できるというのか…!」

「寝言言つてられるのは今だけだぜえ〜!」

華扇の目の前には変わり果てたケガレがいた。

「お前は好奇心を知ってるか？好奇心は破壊と結びつくと最低で最悪な結果になる!!」片腕有角の仙人!おめえのその包帯巻の右手がどうなってるか気になるからな!!」

その時、ケガレの腹部分に衝撃が走る。

「つたく…!まだ残っていたのか」

「バング先生!」

目の前にバングが現れた。

「あ?!おめえは、銀牙のファイター」だな?お前も其処の仙人と一緒に天国行きにしてやるよ!!」

ケガレはバングに目掛けて右手を振り下ろす。

「隙だらけじゃお主」

バングはすぐに避けてケガレに向かって「流水岩碎拳」を放った。ケガレは粉々になつて消えて無くなった。

「お見事です…!」

「じゃが華扇、お主もまだまだじゃな」

結果、乱入したバングと華扇の勝利。

霊夢 vs ドールキング

「まだ動けるといいうのですか…」

「当たり前よ!!」

霊夢はボロボロでありながらもまだ動ける。ドールキングは限りなくボロボロに近い。

「つまり次の攻撃で決着ですね…人形剣技! マリオネットピュア!」

「夢想封印!!」

ドールキングと霊夢は同時に攻撃を仕掛けた。結果は…

「これが運命なのですね…!」

ドールキングは倒れた。そして消えて無くなった。

「危なかった…まさか幻想郷にこんなにも強い奴がいるなんて…紫と先代の巫女様に頼んで修行しないとね…」

結果、苦戦のゆえ…霊夢の勝利。

魔理沙 v s シヤドウ

「くっ……！」

「どうした霧雨!?! 私から離れなければ傷が増えるだけだぞ?!」

シヤドウは闇魔法で作り上げた手で魔理沙に攻撃をしていた。魔理沙はシヤドウを抑えるのに精一杯の為半減ができない。

「シヤドウ……お前はこの魔法を知ってるか?」

魔理沙は左手を空に向けて上げる。すると魔法陣が発生した。

「なっ!?! 私の闇魔法が!?!」

シヤドウが作り上げた手は消えた。再び作り出すがすぐに消滅してしまう。

「其方!?!何を……!?!」

「これは闇魔法に対抗している光魔法だ。アリスから教えてもらったんだ。これでお前の闇魔法は使えないぞ?」

「おのれ……!」

魔法陣の中、シヤドウは無力である。

「そしてお前に聞きたい事がある。お前に闇魔法をさずけたローブの者は誰なんだ?」

「何……?」

その時、シャドウは不思議な空間に包まれた。

「もういいです、没収します」

「何故だ!?! 私はまだ”世界平和”を実現できてはいない!」

「貴方にはどう必要ないと判断したからですよ、シャドウ」
「!?!」

シャドウは驚く。ロープの者が自分の名前を知っていたからだ。

「何故私の名を!?!」

「当たり前です。貴方の事は知っています」

ロープの者はフードをとった。

「其方は…!?!」

「お久しぶりですね、シャドウ」

なんとそれは妖怪に殺された筈のシャドウの母だった。

「母さん…!!」

シャドウは母に近づく。

「母さん…あの時は申し訳ない…何一つ守れなくて…」

「大丈夫ですよ、貴方が無事ならそれでいいのです」

「母さん…」

「どうした？泣いているのか？」

魔理沙は不信に思った。何故ならシャドウの目から涙が溢れてたからだ。

「闇魔法をくれたのは…」

” 貴方における闇魔法と貴方の命を…没収します”

「私の…母だった…」

” 行きましよう、私達のいる場所へ”

シャドウは光に包まれて消えた。

「消えた…闇魔法をくれたのはお前の母さんだったのか…？」

魔理沙は立ち尽くした。そして空を見上げる。

百十四撃目：怪人との決着②

ケガレ、ドールキング、シャドウがやられ、残る怪人はカゲノコ、イビルスライム、竜崎となった。

「よくもオイラの同胞を消してくれたな嬢ちゃん……！」

「アンタのその同胞の数が多いのが気に食わないわね……」

レミリアはカゲノコと激戦していた。この勝負でカゲノコの同胞は半分程失っている。

「こうなれば……オイラの残る同胞を全部使って作り上げた影法師を見せてやる！（1人だけ念の為に残しておこう……）」

カゲノコは1人だけ瓦礫に残して分裂し、合わさっていた。そして

「これぞ最終形態！多細胞影法師！爆誕!!」

カゲノコの最終形態である多細胞影法師と変化した。カゲノコより一回り大きく、目つきも変わっていた。

「さっきと何が違うっていうのよ」

「え？あ、ちよつと失礼」

「え……？」

と、次の瞬間、レミリアに衝撃がはしる。多細胞影法師が目にも見えぬ速さで乱打したからだ。

「何……!？」

「これが俺の力だ。レミリア・スカレットよ。だがまだ動けるようだな？」

多細胞影法師は口調も変わっていた。レミリアは今のでポロポロになったがまだ動ける。

「神槍! スピア・ザ・グングニル!!」

レミリアは自身のスペルを発動させた。作成した紫に燃え上がる槍で多細胞影法師斬りつける。しかし

「無駄だ」

多細胞影法師はその槍を掴み叩きつけた。

「まさか……私のグングニルが……!」

レミリアは驚きを隠せない。

「これで終わりだ」

多細胞影法師が拳を当てようとしたその時

「クロックワーク・オレンジ」

咲夜が横から入り込み、時空のナイフで斬りつける。すると多細胞影法師は動けなくなった。

「貴様！何をした!?!」

「貴方の動きを止めただけです。私はワールド様とクロノス様と契約をして手に入れたこの“時空のナイフ”で。お嬢様、倒すなら今です」

「咲夜……わかったわ!」

レミリアは立ち上がり再び神槍“スピア・ザ・グングニル”を発動させる。そして多細胞影法師を斬りつけた。多細胞影法師は動けない為、反撃する事や避ける事ができずモロにくらった。

「ぬおおおおお!?!俺が負けるなど!!認めぬ!!」

多細胞影法師は消えて無くなった。

「これが、格差というものよ（苦戦したけど）」

結果、咲夜の援護ありでレミリアの勝利。しかし

「まさか多細胞影法師がやられるなんて……ここはひとまず逃げるしかねえな……」

瓦礫に隠れていたたった1つのカゲノコは逃げ出した。幸いレミリアと咲夜には気づかれなかった。

一方、キング・神子・針妙丸は

「あの…いつまで見てるのですか…?」

「乱入しようともタイミングがつかめない…」

未だに瓦礫の壁に隠れて様子を見ていた。すると

「ピチューン!」

突然後ろからレーザーが放たれた。キングと神子は慌てて避ける。

「スライム!」

2人は驚く。正体はイビルスライムだ。どうやらキング達の居場所を察知したらし

い。しかし…

「(((。))」

イビルスライムは震えてて動けない。何故なら…

「あの…キングさん?」

「……………」

キングは沈黙したままだった。しかし心の中では

「(何で効くの…?まさかこの怪物達って…俺がいた世界より弱いのか…?)」

キングはそう思っていた。

「キングさん……これは……私がトドメをさせつつて事ですぬ！」

神子は勺を光剣に変えた。そして

「詔を承けてはかならず慎め……」

その光剣をイビルスライムに斬りつけた。イビルスライムは真つ二つになった。

「よしー！」

神子はガッツポーズをする。しかし

「ゴポポポ……」

イビルスライムは真つ二つになった身体をくつつけて復活した。

「何!?!」

神子は驚く。しかしキングの異常な心臓音、キングエンジンで再び動けない。そこに

「南無三!!」

聖がイビルスライムに拳を当てた。イビルスライムは水のように砕けた。

「間に合ったか……」

ゾンビマンも駆けつける。

「ゾンビマン氏!」

「聖!」

キングと神子が声をかける。

「これでもう安心ですよ！」

聖は胸をはって言う。だが

「おい、聖…また復活したぞ」

「え!？」

聖は振り返る。其処には砕けた筈のイビルスライムが元の状態に戻っていた。

「つまり…コイツには打撃は効かないって事か…ヤバイな」

神子、聖、ゾンビマンは構える。オマケにキングの肩にいる針妙丸も。キングも一応構える。その時

「幽玄に咲く桜よ…生死を超えて咲き誇れ!!」

後ろから桜吹雪とともに光線が向かってきた。キング達は慌てて避ける。その光線はイビルスライムを貫いた。

「!？」

イビルスライムは水のように粉々に砕けて跡形もなく消えた。全員が呆然としている中…

「間に合ってよかったわね」

「はい、何とか…」

妖夢と幽々子が現れた。

「魂魄氏、西行寺氏…今まで何処にいたの…？」

「それはね…」

幽々子は話した。今まで何処にいたのかという事を。実は妖夢と幽々子は未だに瓦礫の中にいた。どうやら瓦礫を退かすのに時間がかかってしまったらしく脱出に遅れた。やっと脱出したら殆どの怪人は消えていた。しかし視力のいい幽々子はイビルスライムを発見して、光線を放つたのだ。

「あのスライムはエネルギー系に弱いのです」

「どおりで消えたって事か…」

妖夢の発言に全員が納得した。そして霊夢達の所へ向かった。これで残るは竜崎一人となった。

百十五撃目：竜崎との決着

残る怪人は竜崎一人となった。彼は今、サイタマとの激戦を繰り広げていた。

「まさか人間がここまで強いとは……」

竜崎はボロボロでありながらもまだ動ける。

「結構頑丈だな、お前」

サイタマは服が汚れる程度である。しかしダメージは背負っている。

「当たり前だ……俺は竜族の血を引く者だからな！」

竜崎は両腕を広げた。そして白く光る竜を出す。

「光り輝く竜！フラッシュドラゴン！」

白く光る竜はサイタマに向かって行つた。

「眩し……」

サイタマは右手で光を遮りながら避ける。

「くっ……これならどうだ?」

竜崎は両手を地面につける。すると蒼色の竜と水色の竜が現れた。

「双竜！ゴルディ&バルディ！」

双竜であるゴルデイとバルデイを召喚し、サイタマを襲わせた。

” 天空の彼方に吹き飛ばせ！ 海の藻屑とかせ！！”
だがサイタマは双竜を掴み、叩きつけた。

「それでもダメか……ならば！」

竜崎は自身の手を竜の爪へと変えた。

「竜牙の爪!!」

竜崎は竜の爪で攻撃する。サイタマは連続・普通のパンチで対抗する。しかし力の差か竜崎は飛ばされる。

「おのれ……！」

竜崎は立ち上がり雄叫びをあげる。そして再び竜の姿となった。

「また竜になったのか？」

「やはり人間体ではどうも本気を出せなくてな、サイタマ、お前も本気を見せてみよ」
「おう、じゃあこつから本気でやらせてもらおうわ」

サイタマはマジになった。再び竜になった竜崎と激突した。結果は…

「竜になっても勝てぬ…とは…」

竜崎は再び人間の姿になり無残な姿で倒れていた。

「でも結構強かったぜ」

サイタマは竜崎の強さを褒める。何故こうなったかというところ：最初の方は竜崎の方が有利だった。しかしサイタマは隙をついて反撃をした。危険と思つた竜崎は竜族に纏わる奥義「竜牙波動砲」を放った。これにサイタマはHEROパンチで跳ね返した。その跳ね返された波動砲は竜崎に当たつたのが勝敗の決め手だ。

「じゃあ聞きたいことがある。どういう目的でこの骨格塔を建てたんだ？」

「その事は…お前だけに言つても意味は無い。ほかの奴らがいる時に話そう」

「そうか、けど霊夢とかはあっちにいるしな、連れてくわ」

サイタマは竜崎を肩に乗せて霊夢達の所へ向かった。

博麗神社…其処で竜崎は語つた。

竜崎は竜の里出身で竜族の血を引いた人間である。平穩に暮らしていたがある日、力

が暴走してしまい故郷を壊滅的な状態にしてしまった。これが原因で里から追放されて人里で暮らす事にした。しかし竜族の血を引いている為、角や尻尾がある。それが原因で迫害や差別をくらった。いつしか竜崎は人間に怨みを持つようになり怪人となった。そして癖のある怪人、怪物を集めて怪人組を結成。骨格塔を拠点とした人間を滅ぼそうとしていた。しかしサイタマから元ヒーロー組みと幻想郷住人により、それは阻止された。今は怪人ではなく竜族の血を引いた人間である。紫からは人間と関わらないように暮らせばいいと言ったが竜崎は「俺は此処にいる価値はない」と言い、何処かへ去った。そして数ヶ月が経ったある日：

「師匠、手紙がきてます」

「え？誰から？」

サイタマは針妙丸から手紙を受け取り、中を見る。手紙にはこう書かれていた。

『拝啓 サイタマへ』

考えてみれば人間はそんなにも非道な奴ではなかった。だが中には俺を殺そうとした奴もいた。しかしお前を見て確信した。"お前みたいに強くていい奴もいるんだなって"。しかしお前と会うことは二度と無い。俺は幻想郷ではなく遠い異国の地で1人で暮らしている。だがもし会えるのならばまた勝負がしたい。そして…ありがと

う！ 竜崎真一』

「竜崎からか…あいつ元気にしてるのかな」

「師匠も手紙書いたらどうです？」

「そうするか」

サイタマは竜崎へと手紙を書いた。届くかはわからないが。こうして骨格塔の事件は終を告げた。

激震！ヒーロー協会編

百十六撃目：やはりヒーローは支持される。

「先生、ヒーロー協会がS級として再びヒーロー名簿に登録してくれと言っていますがどうしますか？」

サイタマはジェノスと電話で話をしていた。何やらサイタマをヒーロー名簿に登録するかどうかの話のようだ。

「断ると言っとけ」

「わかりました」

そう言つて電話を切る。そしてため息をつく。

「これどーすつかない…」

サイタマの前には沢山のダンボール箱とサイタマに対する手紙の山でいっぱいである。物資とファンレターやお礼の手紙である。

「クローゼットには入るスペースないしな…捨てるのもあれだし…」

サイタマは物資の処理に悩んでいた。幻想郷に来てから数々の異変や事件を解決している為種族関係なく支持されている。その為物資が届く事が多い。

「とりあえず聖とかにやるか」

サイタマは物資をまとめた。そしたらある程度スペースが出来た。

「さて、手紙も処理しておくか」

サイタマは手紙を広げて読み始めた。読んでいく内に黄色い封筒の手紙に目がついた。

『おいハゲ野郎！お前のせいでこっち（守矢神社）の信仰が減ってんだよ！活動も程々にしやがれバーカ!! 諏訪子』

「神奈子とは大違いだな、この餓鬼は」

サイタマは呆れる。第一サイタマに悪口の手紙を書くのは諏訪子だけである。諏訪子自身は早苗同様サイタマの人気に嫉妬している。神奈子も信仰の足りなさを気にしているがサイタマの人気に対しては何も思っていない。

「ま、とりあえず命蓮寺に行くか」

サイタマは物資を持って命蓮寺へと向かった。ダンボール箱の上にいた針妙丸もサイタマの肩に飛び乗った。また、茂みの中には：

「妬ましい……!」

「だから落ち着け」

相変わらずサイタマに嫉妬している霊夢と早苗であった。隣には魔理沙がいる。

「いい加減嫉妬するのやめたらどうだ？」

「やめるわけねえだろ……」

「ダメだコイツら」

サイタマを妬むのをやめようとしないう霊夢と早苗に魔理沙は呆れる。

「とりあえず異変が起きたらサイタマよりも早く解決させる事ね……」

「そうですね……だから情報収集が重要ですね！」

「ま、頑張れよ」

魔理沙はそう言って帰った。霊夢と早苗も帰った。

命蓮寺

「また持ってきたのか？」

「おう、邪魔なんぞね」

サイタマと話しているのは命蓮寺に居候している元S級8位のゾンビマンである。

「もしかしていらなかつたりする？」

「いや、寧ろ有難い。命蓮寺には弟子以外の妖怪も頻繁に来るから食糧が底つく事が多

いんだ」

ゾンビマンは照れくさそうに言う。

「(てかこの寺って肉とか酒は禁止だったよな…何で食糧が底つくの?)」

サイタマは内面では疑問に思っていた。と、其処に

「あ、サイタマさん来てたのですか」

住職の聖が来た。

「おう」

「いつもありがとうございます。よければお話したい事があるのですが宜しいでしょうか？」

「おう、いいぜ」

「では、本堂へ」

聖はサイタマを本堂に案内する。ゾンビマンもついて行く。

「あ、サイタマを本堂に案内する。ゾンビマンもついて行く。」

守矢神社

「あのハゲ野郎の人気を下げるには…」

「どうしたらいいでしょうか…」

早苗と諏訪子は悩んでいた。何故ならサイタマの人気をどう墮とすかで悩んでいるのである。

「またそれかい？」

「あ、神奈子様」

神奈子がその会議に入ってきた。

「いい加減諦めたらどうだい？」

「諦める訳ねーだろ!!第一なんで神奈子はあのハゲ野郎と仲がいいんだよ!」

「サイタマと仲良くなるのはあたしの勝手だよ、それに、前回で守矢信者減ったの忘れていたのかい？」

「あ…」

早苗と諏訪子は思い出した。そう、これに関しては何度も失敗している。

例1) 文に頼んでサイタマに対するデマや嘘の事を記事にしてほしいの頼んだ。↓結果、誰1人信じず失敗。

例2) 散歩しているサイタマを捕まえて見世物にしようした。↓結果、返り討ちにあう。

「「そうだった…」」

「いい加減信仰集めに集中しなよ」

神奈子は奥の部屋へ行った。早苗と諏訪子は落ち込んでいた。

百十七撃目：流れ込むヒーロー達

「えつと…買う物はこれだけか？」

サイタマは人里で買い物をしていた。肩に針妙丸を乗せて。

「師匠、あつちら辺何か騒がしいです」

「ほんとだ、行つてみるか」

サイタマは針妙丸に言われて人混みの所へ行き、目に付いた青年に話しかける。

「何があつたのか？」

「あ、サイタマさん！あれですよ」

青年の指さす先にはゴリラみたいな怪物が暴れていた。地面には人が倒れている。

「怪物か…」

サイタマはそう呟いて人混みの中に入り、抜け出して怪物のいる場所まで行つた。

「がああああ!!」

サイタマに気づいたか怪物は拳を振り下ろした。

「暴れるなら別の場所で行れ」

サイタマの普通のパンチで怪物に風穴が空き、倒れた。それを見ていた人達が声援を

送った。

「コイツらC級だな…無免は…いないな。よかった」

サイタマは倒れている者達がヒーロー協会のC級だとわかった。また、友人である無免ライダーがいないことに安心した。

命蓮寺

「この寺に何の用だ？」

ゾンビマンの前には無数のヒーローがいた。こちらもC級である。

「此処に沢山の妖怪がいると聞いたんでね、それを倒しに来たのです」

「やめとけ、C級のお前らじゃ勝てんよ」

ゾンビマンは忠告するがC級ヒーロー達は退こうとはしない。

「ランキング上位にくい込む為に妖怪退治にいき参る！」

C級ヒーローはゾンビマンを退かし命蓮寺の敷地内に入った。

「アイツら…絶対後悔するな」

ゾンビマンの予感は的中した。それは…全滅し、誰一人生き残った者はいない。な

お、命蓮寺の妖怪達は無傷である。

「どうだった？」

「口程にもありませんね、この方達は弱いのによくヒーローと名乗れましたね」

「やっぱりな、コイツらは世間では役に立たないとされてるC級だしな」

「C級……？」

全員が首を傾げる。

「ああ、俺が元々登録していたヒーロー協会の1番ランクの低いヒーローの事だ。詳しい事は後で話すよ」

ゾンビマンはそう言って本堂に入った。

太陽の畑

「風見氏、何があったの？」

水やりをしていたキングが幽香に話しかける。

「ちよつと私の敷地内に無断で入った人達に制裁を与えたところよ」

キングはその場所を見る。其処には…無残な姿で倒れていたヒーロー協会のヒー

ローである。C級だけでなくB級もいた。

「ヒーロー協会のヒーローか。それにB級とC級…」

「ヒーロー協会…?」

「俺が元々ヒーロー登録をしていた協会だ」

「その話、聞かせてもらえないかしら? ヒーロー協会について」

「いいよ」

キングは幽香にヒーロー協会の事を話す事になった。

※ちなみにこの時のキングの服装は白いワイシャツに黒のズボン。麦わら帽子を被りタオルを首にかけている。

バングの道場

「この道場に何の用かな?」

バングの弟子の門下生達の前にいるヒーロー達に聞く。B級とA級である。

「此処に妖怪がいると聞いて来たのだ!」

「妖怪? 何の事だ? 我々はバング先生の弟子である人間だが?」

「見えすいた嘘をつくくな！」

門下生は妖怪ではないと言うがヒーロー達は聞く耳を持たない。

「こうなれば勝負するしかないですね」

「華扇様！」

門下生の前に仙人の華扇が現れた。

「さあ、貴方達、バング先生が帰ってくるまでに道場を守りきりましょう！」

「はい！」

「やはり妖怪か！この勝負に勝って協会に報告すれば昇格間違いなしだ！」

華扇&門下生 vs A級B級のヒーロー達との勝負が始まった。結果は…

「肩慣らしにもならなかったな」

ヒーロー達は無残な姿で倒れていた。華扇と門下生達の圧倒的な勝利である。其処

へ

「何の騒ぎじゃ？」

「バング先生！」

用事があつて出掛けていたバングが帰ってきた。そして

「こやつらは…ヒーロー協会の奴等じゃな」

「ヒーロー協会…？」

全員が首を傾げる。

「その事は道場で話そう」

バングは道場の中へと入っていった。華扇達も中へ入る。

百十八撃目：危うし!?ヒーロー協会

ヒーロー協会

「何という事か……!」

職員達は驚きを隠せなかった。何故なら幻想郷に送り込んだヒーローの大半が息絶たえたからである。運良く帰れた者でも深手を負っている。

「調べによると亡くなったヒーローの大半がC級ヒーローです。無免ライダー以外幻想郷に送り込みましたが残ったのは僅かに5人です」

「B級はほぼ全員が生き残ったな、しかし大半は深手を負っている」

「A級は全員無事だった。だが1位のアマイマスクまでもが苦戦するとはな……」

「こうなればS級に調査してもらうしかありませんね」

職員達の会議が続いた。

「先生、送り込まれたヒーローの状況はどうでしょうか?」

「永琳によると大半死んでたって、生き残った奴全員元の世界に戻したってよ」

「わかりました」

とある喫茶店。ジェノスはサイタマに電話していた。また、横にはジェノスと同じS級の童帝、超合金クロビカリ、タンクトップマスターもいる。

「つまり、生き残ったのは僅か数人って事だね」

「幻想郷の住人はそんなに強いのか…」

「俺らでも危ういかも知らないな」

4人はその事で話し合っていた。

「そういえばジェノス君、君は幻想郷に一時期いたって言ってたよね？また行く事はできないのか？」

クロビカリがジェノスに問う。この中で唯一幻想郷に行った事があるのはジェノスだけである。

「行く事は可能だ。俺は事情ありで帰ってきたからな。サイタマ先生及びバング、ゾンビマン、キングは幻想郷に住むことに決めて元の世界には帰れなくなっている」

「じゃあ八雲紫さんの所に行けば行けるって事？」

「ああ、博麗神社に行けばな」

「そうと決まれば行くしかないな」

こうしてジェノス、童帝、クロビカリ、タンクトップマスターは幻想郷に行く事にし

た。

幻想郷、サイタマの家

「随分と酷い事書かれてるな…」

サイタマは自分の家で新聞を見ていた。見出しには…

『ヒーロー協会所属のヒーロー、無残に敗北！役立たずとしか言いようがないのか？』

内容はかなり酷かった。しかしサイタマはヒーロー協会を脱退している為に関係ない。

「てか神子、俺の評判下がったりしてないよな？」

「大丈夫ですよ。サイタマさんの人気に変わりはありませんので」

「よかった。ま、気にしてないけどな」

サイタマは安心した。たとえ趣味でやってたとしてもヒーローとして見られなかったら活動しづらかったのだ。

命蓮寺

本堂ではゾンビマンはヒーロー協会の事を話していた。

「酷すぎませんかね…」

「ああ、今のヒーロー協会は信用されてないっていうからな」

ゾンビマンの言う通り、今のヒーロー協会は信用されていない。理由は「沢山の人材を雇っていながら大した偉業を成し遂げてない」や「ヒーロー自身が被害を及ぼしている」等である。

「ま、一番の原因はタツマキだがな」

「タツマキ…?」

全員が首を傾げる。第一ヒーロー協会は幻想郷に無いためどういうヒーローがいるのか知らないのだ。

「階級が1番上のS級2位のヒーローだ。ヒーロー協会を代表するヒーローでもある。だが1部からは「彼女自身が災害の原因になる」と言われ、危険視されている」

この事に聖達は背筋が凍る。しかしタツマキは幻想郷入りする際に紫にやられていて、幻想郷住人の前では無力なのかもしれない。

「だが俺はもう協会から脱退している。気にする事はなにもない」

ゾンビマンはそう言って自身の部屋へと帰った。

太陽の畑、風見幽香の家

「よくそんな所に入ろうと思ったわね」

「俺が入った時はまだ信用されていたからな」

キングもヒーロー協会の事を幽香に話していた。

「けど…貴方は脱退したのでしょ？」

「幻想郷に行く際にな。俺は此処で平穩に暮らしたい」

「だけどそのオーラじゃ難しいそうね」

「…はい」

幽香の言ったことにキングは落ち込む。キング自身は平穩に暮らしたいと思っ
てい
るのだが強面な見た目と自身の異常に大きい心臓音（キングエンジン）、更に強者のオー
ラのおかげで強者から狙われるハメになっている。

「安心して、もし危なくなったら私を呼んでね」

「すまない…」

幽香は普段、人間との交友関係が最悪なのだがキングには好意的だった。

バングの道場

「ヒーロー協会のヒーローはそんなにも欲深いのですか!？」

「大半がそうじゃ、自分の業績を上げる為には手段を選ばない輩が多いからな」

バングも弟子達にヒーロー協会の事を話していた。

「だから”昇格間違いなしだ”とか言ってたのか!」

「それと、ヒーロー協会は問題児も多く、更には人助け等をしない薄情なものもある」

「ええ…」

この発言に弟子は引いた。

「さて、話はここまでじゃ。明日も早いから早めに帰るように!」

「はい!ではまた!」

弟子達は全員帰っていった。なお、華扇は道場に住み込みでいる為残っている。

「華扇」

「何でしょうか?」

「お主だけにヒーロー協会の事を更に教える」

「あ…はい!」

バングは華扇だけにヒーロー協会の事を更に教えた。

百十九撃目：師弟…再び再開果たす

「久しいな幻想郷は」

「なんか…僕らがいた世界と同じ気がするんだけど…」

「確かに…幻想郷に来てる気がしない…」

「……………」

幻想郷のとある森の中、其処にジェノス、童帝、超合金クロビカリ、タンクトップマ
スターがいた。

「とりあえず八雲紫から貰った地図でサイタマ先生の家を探すか」

ジェノス達は紫から貰った地図でサイタマの家を探す事にした。

くヒーロー移動中く

4人は白く四角い（少し出っ張りのある所あるが）建物に着いた。サイタマの家であ

る。

「さつそく入ろう」

「ちよつと待てジエノス君」

ドアノブに触れようとした時にクロビカリに止められた。

「何故止める」

「第一サイタマ君は家にいるのか？」

クロビカリの言ったことにジエノスは考え込む。「もしかしたらいないかもしれないかもしれない」と。

「とりあえずインターホンを鳴らせばサイタマがいるかわかるだろう」

タンクトップマスターに言われジエノスはインターホンを鳴らす。するとドアが開き人が現れた。しかしサイタマではなかった。

「誰かな君たちは」

「貴様こそ誰だ」

ドアから現れたこは豊聡耳神子だった。

「我は豊聡耳神子だ」

「何故先生の家にいる」

ジエノスは右手を神子の顔に向けながら問う。

「その事か、サイタマさんに留守番を頼まれているからだ」

「先生はいないのだな？」

「ああ、そうだ「嘘つくなよ」」

「すみません、見知らぬ人に貴方を合わせたくなかったので」

後ろから声がした。声のした方に神子は謝る。

「先生！」

「ジエノス!?!」

声の主はサイタマだった。そしてジエノスの姿を見て驚いた。

「サイタマさん…知り合いですか？」

「ジエノスは俺の弟子だ」

「!?!」

神子は驚いた。サイタマの弟子は妹紅しかいないと思っていたからだ。

「てか後ろの3人誰？」

「「1度会ったことあるよな!?!」」

童帝、クロビカリ、タンクトップマスターは口を揃えて言う。しかしサイタマからは忘れられていた。

「とりあえず、上がれ」

サイタマ言われ、4人は上がる。

「幻想郷を調査？」

「はい」

サイタマは茶を飲みながら聞く。

「ヒーロー協会から調査を頼まれましたので童帝、超合金クロビカリ、タンクトップマス
ターと共に幻想郷に来たのです」

「そうか」

ジェノス達が幻想郷に来た理由を聞いて納得した。

「幻想郷を調査か…サイタマさんも協力したらどうですか？」

「いや俺ヒーロー協会から脱退してるし…」

「私もついて行きますから！」

「わかった…」

神子に言われサイタマも協力する事になった。

「ありがとうございます！では早速行きましょう！」

「今から行くの…?」

「はい! 早め早めに言った方が効率的ですので!」

「なら支度するか」

サイタマはすぐ様にヒーロースーツに着替えた。

「じゃあ…行くか!」

「待て、俺から聞きたい事がある」

タンクトップマスターがサイタマを止めた。

「なんだ?」

「お前はヒーロー協会から脱退してよかったのか? ヒーロー狩りをしていたガロウの暴走を止めて信頼されるようになったというのに…」

「いいよ、俺は元々趣味でやってたし、それともう元の世界には帰れないからヒーロー協会も必要ないからな」

「そうか…決心が硬いならそれでいい」

タンクトップマスターは納得した。

「じゃあ…行くか」

サイタマは家から出た。それにジェノス、童帝、クロビカリ、タンクトップマスターもついて行く。おまけに神子も。

百二十撃目：再び、地下の世界へ

あれから数日がたった。ジェノスらS級ヒーロー達はサイタマと神子の協力があつて多くの場所の情報収集に成功した。中には命懸けの所もあつたりしたが。残るは…

「旧都…地霊殿の2つか…」

地図を確認する。大半の場所がチェックされているがこの2つだけ印をつけていなかった。

「旧都か…」

「え？サイタマ君…何か知ってるのか？」

ふと喋つたサイタマにクロビカリが問う。

「ああ、ちよつと其処に用事があつてな」

「どんな用事が…？」

「勇儀がまた力比べをしてくれてさつきLINEで来た」

「此処でLINE出来るの!？」

驚愕の事実全員が驚く（神子を除く）。何でLINEが出来たようになったかと言ふと…紫が外の世界に散歩に来た際、LINEしている人を見て”幻想郷でもそれをし

たい!”と思い、LINEを幻想入りさせた。今ではほぼ全員が使いこなせている。

「先生、LINE見せてもらいませんか？」

「いいけど」

サイタマはスマホを取り出しLINEを見せる。

プロフィール

サイタマ

ともだち（21人）

八雲紫

豊聡耳神子

星熊勇儀

風見幽香

聖白蓮

ゾンビマン

バング

キング

茨城華扇

八坂神奈子

東風谷早苗

博麗靈夢

霧雨魔理沙

八意永琳

稀神サグメ

古明地さとり

藤原妹紅

上白沢慧音

綿月豊姫

純狐

竜崎真一

「先生…地味に公式アカウントなんですね…」

「知らぬ間にそうなった」

サイタマはため息をつく。公式垢になったせいで多くの人がサイタマと友達登録している。しかしサイタマは自身と顔見知りもしくは仲がいい人以外とはならない。

「それと、星熊勇儀とのトークを見せて下さい」

「おう」

サイタマは勇儀とのトークを見せる。

「サイタマ、今暇かい？」

「勇儀か、暇だけど？」

「暇ならまたあたしと力比べしない？」

「いいよ」

「わかった！なら此処の場所にいるからなるべく早く来な！」

写真には城壁に囲まれた四角い場所の画像が

「じゃあ俺、行くわ」

「ちよつと待て！」

クロビカリとタンクトップマスターがサイタマを止めた。

「何？」

「俺も行つていいかな？その人に俺の筋肉をぶつけてみたい」

「俺もだ」

「別にいいけど」

「ありがとう！なら急ごう！勇儀さんも待ちくたびれてる筈だ！」

クロビカリはサイタマを掴み旧都に続く穴がある、妖怪の山まで走った。タンクトップマスターが後を追う。

「調べてみたけど…勇儀さんの種族”鬼”だよね…？」

「ああ、星熊勇儀は鬼の中でも最強と言われている。本来から人間とは無縁なのだが…先生とは気があつてるらしい」

ジェノスの言う通り勇儀は人間とは無縁である上、危険度が非常に高い。だが間欠泉（詳しくは地霊殿編を）の事件で旧都に行ったサイタマの実力と強さを知り、サイタマと仲良くなったのだ（今では親友に近い）。

「とりあえずクロビカリさんとタンクトップマスターさんを追いかけようか」

「その方がいい」

「君達！置いていかないでくれ！」

ジェノスと童帝は先に行った3人の後を追う。神子も2人の後を追う。

妖怪の山頂上

「此処が旧都に繋がる穴か」

「うん」

サイタマ、クロビカリ、タンクトップマスターは旧都に繋がる穴に着いた。

「他に行く手段はないのか？」

「ないよ」

そう言ってサイタマは穴に落ちた。クロビカリとタンクトップマスターも追う。

「先生達は行ったか？」

「もしかして…此処に入るの？」

「当たり前だ、地下の世界に行くには此処しかない。行くぞ」

ジェノス、童帝、神子も穴に落ちた。

「よつと」

サイタマは着地する。クロビカリ、タンクトップマスターも。

「おかしいな…いつもならヤマメがいたはずなのに」

「ヤマメって…誰？」

「土蜘蛛の妖怪。いつもは糸張ってるは…ん？」

サイタマは何かに気づいた。それは…桶だった。

「あ、キスメ」

「サイタマ久しぶり」

その正体はキスメだった。サイタマと会うのは半月ぶりである。

「まさかこの子も妖怪なのか…？」

「うん。私はキスメ、釣瓶落しの妖怪」

「俺は超合金クロビカリだ。宜しくな！キスメちゃん！」

しかし…キスメは返さずに「へっへっへっへっ」と笑う。

「何かおかしい所あった!？」

「お前の名前に笑ったんだろ。それと俺はタンクトップマスターだ」

「宜しく」

タンクトップマスターには返事を返した。

「あ、それとサイタマ、勇儀さんが”まだ来ないのか!?”って言ってたよ」

「マジか!! 急がねえと!」

サイタマは人間思えない速さで勇儀のいる場所へと向かった。それにクロビカリとタンクトップマスターも追う。

「ありやりや…先に言いつちやってたか」

ジェノス、童帝、神子も着地した。そして3人の後を追う。

百二十一 撃目：山の四天王 v s S級ヒーロー

「遅かったじゃないかサイタマ」

「すまん……」

サイタマは申し訳なさそうに謝る。勇儀が長く待たせてしまったからである。

「仏の顔も3度までと言うが鬼は1度までだって言ったはずだよ？」

「忘れてた……」

サイタマは再び謝る。しかし許してもらえない筈がない。と思っていたが

「けど……今回は許すよ。じゃあ早速やろうか！」

「そうだな！（よかった……）」

勇儀は許してくれた。サイタマは心の中で安心する。そして構える。その時

「待て！」

突然クロビカリが乱入してきた。

「誰だお前さんは？」

「俺は超合金クロビカリ！アンタに俺の筋肉をぶつけたくてサイタマ君についてきたのだ！」

クロビカリは自慢の肉体美を見せながら言う。

「ほう…余程自信があるんだね？なら先にお前さんと勝負しようじゃないか！」

「望む所だ！」

勇儀は急遽クロビカリと対決する事になった。そして2人は激突した。

「おかしい…先生が言うには土蜘蛛の黒谷ヤマメがいると聞いたのだが…」

ジェノスはサイタマと同じ事を思っていた。普段はヤマメに足止めされるのだが今回は何故かいなかった。

「考えている暇はないよ、早く行こう」

童帝に言われジェノスは進む。気絶した神子を抱えて。

旧都では勇儀とクロビカリの激戦が繰り広げている。

「どうした!?!お前さんの実力はそんなものか!?!」

「くっ…!」

戦況は勇儀の方が断然有利である。クロビカリの筋肉は打撃をも防ぐ程の強靱な肉

体である。しかし相手は”鬼”である勇儀。ガロウや災害レベル”竜”の怪人怪物よりも遥かに腕力等を上回る。その為クロビカリの拳は全く通じない上にダメージは増える一方だ。

「(おかしい…俺の攻撃が全く通じてない!何故だ!?俺はタンクトップマスターやぷりぷりプリズナーよりも鍛えているというのに!-)」

クロビカリはそう思いながら殴り続ける。しかし勇儀は平気である。その様子をタンクトップマスターは

「サイタマ、勇儀の力はどれくらいなんだ?」

「勇儀の力は人間とは比べ物にはなんねえよ、昔は”絶対無敵の四天王”とか”神も恐れる鬼神”とも言われてたし」

「どおりでクロビカリが押されてる訳か…」

サイタマの言う事に納得した。

「それと今の勇儀は本気じゃねえよ」

「!?!」

タンクトップマスターは驚いた。クロビカリを苦しめている勇儀が本気で戦って無い事に。

「あれで本気じゃないのか!?!」

「ああ、アイツが本気出すと色々ヤバいからな。だから手加減してやってるんだよ。けど対等に戦える相手なら本気出すけどな」

「それでもクロビカリはあれなのか…」

タンクトップマスターは怯えた。しかし直ぐに立て直す。その時

「俺も本気を出すぞ!!超合金バズーカ!!」

クロビカリはフルパワーでパンチをした。自身の得意技の”超合金バズーカ”である。だが

「効かねえよ…あたしは”鬼”だよ?人間との力の差があるんだよ!!」

勇儀はクロビカリの左手を片手で受け止めた。クロビカリは外そうとするが外れない。そして

「そおい!!」

勇儀はクロビカリを地面に叩きつけた。

「ガッ!?!」

その時クロビカリは何が起きたのかわからなかった。

「お前さん…まだ立てるだろ?」

「当たり前だ!!」

クロビカリは辛うじて立った。しかし今ので限界がきていた。

「俺は昔弱かった…だが鍛えるに鍛えてここまで強靱な肉体となった！星熊勇儀！俺の完全なるフルパワーを見よ！」

クロビカリは両手の拳をぶつけ、突進した。

「超合金ラリアット!!」

クロビカリは自身の限界をぶつけた。しかし

「それで完全なるフルパワーかい？」

勇儀はまたもや片手で受け止めた。

「嘘…だ…ろ…?」

クロビカリはショックだった。再び相手にぶつけられるようになったのにガロウみたいになるのかと。

「悪いがあたしはサイタマ以外の人間には本気出たくないんでね」

そう言つてクロビカリを地面に叩きつた。

”鬼殴り!!”

追い打ちをかけるかのようにクロビカリに拳をぶつけた。

「これで終わりだね」

勇儀はクロビカリは担ぎタンクトップマスターに渡した。

「サイタマ、今度はアンタだよ」

「おう」

勇儀に言われサイタマは出る。そして激突した。

百二十二 撃目：再び地霊殿へ

「だいぶ遅れた…」

ジエノス、童帝、神子はやつと旧都に着いた。途中、橋でパルスィに捕まってしまつてたからである。

「タンクトップマスターさん、サイタマさんは？」

「サイタマなら勇儀と戦っている」

タンクトップマスターは童帝にどういふ状況か教えた。見てみるとサイタマと勇儀が互角に拳をぶつけあっている。

「今、録音してみたけど何か言つてみたい」

「よく録音出来たな…」

童帝はいつの間にかサイタマと勇儀の声を録音していた。再生すると…

「サイタマ、本気出してないだろ？」

「そういうお前もだろ」

「やっぱりわかったか（笑）じゃあ…「本気出すか」」

というやり取りだった。つまりサイタマと勇儀は本気で激戦を繰り広げているの事。俺に対しては本気じゃなかったのか…」

その事を聞いたクロビカリが落ち込む。彼は既にメンタル崩壊している。

「何があつたの…?」

「クロビカリは勇儀に大差で負けてあなつたのだが…落ち込みすぎじゃないか?」

「プリズナーさんから聞いたけど…ガロウの時もあなつたつて…」

童帝は説明する。実はクロビカリはガロウに負けた時もああいふ風に落ち込んだのだ。あれ以降クロビカリは次の闘いを恐れるようになった。しかしプリズナーやタンクトップマスターの励ましもあり元に戻った。だが勇儀に大差で負けてしまいまた落ち込んでしまった。

「俺はその時入院してたからわからな「ドカーン!!」!?」

その時、大きな爆音が響いた。見てみると…

「ハハハ! やっぱりお前さんじゃないと本気出せないね!」

「俺もだ。本気出せるのはお前くらいだわ、勇儀」

サイタマと勇儀が楽しげに話していた。しかしこれがクロビカリを更に落ち込ませた。

「あーそれとサイタマ、地霊殿の主がお前さんに用があるって」

「え？さとりが？」

「ああ、そうだ。詳しくは主に聞きな。それと…また力比べやろうな！」

「ああ!!」

サイタマと勇儀は互いに拳を当てた。

「あ、ジエノス、来てたの？」

「はい、つい先程」

「てか童帝…あのおっさんに何があったの…？」

サイタマは落ち込んでるクロビカリに気づく。

「あ…いや…ちよつとね…とりあえず地霊殿まで行こう」

童帝は苦笑いしながら地霊殿まで向かう。サイタマは疑問に思いながらもついて行

く。ほかの人も。

地霊殿

「サイタマさん！お久しぶりです！」

「お…久しぶり…（何でこんなにテンション高いの？）」

何故かテンションの高いさとりに戸惑うサイタマ。

「サイタマさんとお話出来るのが楽しみだからです！」

「あ、そう…（何か怖い）」

「そう言ってくれると嬉しいです♪」

あまりにテンションの高いさとりにサイタマは思わず引いてしまう。

「あ、ちなみに貴方方5人はいりません」

「「「え?」」」

ジェノス、童帝、タンクトップマスター、神子は聞き返す。クロビカリは依然と落ち込んだままである。

「何故だ?理由を教えろ」

ジェノスは右手をさとりの顔に向けて言う。

「私が呼んだのはサイタマさんだけです。入れないと撃つ?構いませんけど?ペットの餌食になる覚悟があるなら」

「!?!」

ジェノスは驚く。さとりはさとり妖怪である為、人の心が読める。だがそれが原因で嫌われ者である。その為地霊殿に引きこもっている。

「てかお前のペットって大半が妖怪だろ」

「そんな事はありません！犬猫ハムスターもいますよ！」

「それも妖怪だろ。特に猫が」

「お隣はいいんです！早く行きましょう！」

さとりはサイタマを引つ張り地霊殿の中に入った。取り残された人達は…

「弱つたな…これでは地霊殿が調査出来ない…」

「大丈夫、万が一の為にサイタマさんに付けておいたから」

実は童帝はサイタマに監視カメラらしき物を背中に付けたのだ。小型の為気づかれない。

「これで何とかなるよ」

何か調査出来ると安心する。

百二十三撃目：しよーもない姉妹喧嘩

「流石です…!」

「お…おう」

目を輝かせながら言うさとりにサイタマは引く。周りを見てみると何処で手に入れたのかと疑いたくなるサイタマの写真が飾られている。

その時

「痛ッ!?!」

サイタマに何かが噛み付いた。ペットのハムスターだ。

「あつ! コラ! やめなさい!」

さとりはサイタマに噛み付いているハムスターを外す。

「大丈夫ですか…?」

「大丈夫。気にしてないから（このハムスターは妖怪じゃないよな…?）」

「ハムスターはお憐が拾った普通のハムスターですので安心して下さい」

「拾ったの!?!」

さとりから予想外の事を言われ驚く。サイタマに噛み付いたハムスターは捨てられ

たペットだった。それをお隣が偶然見つけ飼ったのだ。

「ん？誰だ？」

突然スマホが鳴り出したので見てみる。メールだった。

「竜崎からか」

宛主は竜崎からだった。サイタマとはかつて激戦を繰り広げた相手で怪人組の元会長である。今は幻想郷とは別の地で豊かに暮らしているの事。

「えつと…なにになに…？」

サイタマは竜崎のメールを見た。さとりが後ろから覗く。

『サイタマへ 久しぶりだな。俺は相変わらず1人で暮らしているよ。だが仲間が増えた。元々怪人組で飼っていたジャイアントケルベロスが見つかったんだよ、けど今は小さいけどな(笑) 竜崎』写真には竜崎と小さくなったジャイアントケルベロスの姿が。

「ケルベロスって飼えるんですか!？」

「竜崎も飼ってたから飼えるんじゃない？」

「ですよね」

2人の会話はまだ終わりそうでない。

地霊殿の外…

「此処の主さんは動物好きなのかな？」

「いや、能力上ペットに好まれてるだけかもしれない」

ジェノスと童帝はサイタマに付けた監視カメラらしき物とリンクした機械で地霊殿の様子を見ていた。

「あれ？ところでタンクトップマスターさんとクロビカリさんは？」

「あの2人か？先に帰ったよ」

童帝の間に神子が答えた。実はタンクトップマスターと超合金クロビカリは先に帰ったのだ。未だ落ち込んでいるクロビカリをほっとけないとタンクトップマスターが連れて帰ったのだ。再び相手に立ち向かえるよう慰める為なんだとか。

「てか…いつまで続くんだろうね…」

地霊殿、さとりの部屋

「お兄さん久しぶり〜♪」

「あ、こいし」

さとりと妹こいしが現れた。サイタマと会うのは幻想郷格闘大会以降である。

「ねえねえ1つ聞きたい事あるけどいい?」

「何だ?」

「私を弟子にして!」

「ヤダ」

サイタマはきつぱりと断った。だが

「何でダメなの!?!」

こいしはサイタマの肩を掴み揺らす。こいしは1度サイタマに弟子入りする事を諦めたのだが再び弟子にしてみらおうとしていた。

「いやだつてお前充分強いじゃん」

「弱いもん!強くなりたいから弟子にして!」

こいしは諦める気がない。流石にサイタマもうんざりする。

「こいし、諦めなさい」

「ヤダ!」

「諦めなさい!」

「ヤダヤダヤダー!!」

こいしは泣きながらさとりをポカポカと叩いた、それに怒ったのかさとりも反撃する。姉妹喧嘩が始まった。しかしサイタマや地霊殿で飼われているペットから見ればいちやついてる様にしか見えない。

「お姉ちゃんの悪魔! 鬼! 人でなし! まな板! サティスト!」

「まな板」はこいしの方よ!」

「お姉ちゃんの方がまな板だもん! 悪魔で鬼でサティストの馬鹿姉!」

「なんですつて!?! もう許さない!」

遂にさとりの堪忍袋の尾が切れた。顔が真っ赤になったさとりは弾幕を放つ。こいしも負けずと弾幕を放つ。それを見ているサイタマは完全に呆れていた。ペットを守りながら。

結果。さとりの勝ちで終わった。だがこいしは弟子になる事を諦めていない。それでもサイタマは断り続けた。結果、こいしは完全に諦めた。

こうして幻想郷の調査は終わり、ジェノスと童帝は元の世界へと帰った。

サグメの幻想郷訪問編

百二十四撃目：今日も平和？

人里のとある居酒屋、此処は夜の時間帯だと非常に騒がしい。その騒がしい空間の中で静かな席があつた。それは…

「ヒーロー協会の信頼ガタ落ちだつてさ」

「当たり前だろうな」

サイタマとゾンビマンである。おまけに針妙丸とぬえ。

「ヒーロー協会から脱退した俺らには関係の無い事だが、元の世界でも何か起きたらしくそれで信頼が更に落ちたつて聞いた」

「それつて何だ？」

「それは…「ねーねー！ジュースおかわりしてもいいー？」ちよつと待て」

サイタマとゾンビマンの会話にぬえが乱入してきた。

「いいけどあまり頼むなよ？」

「うん！」

ぬえは元氣よく返事した。しかしゾンビマンは心配だつた。

「あ、悪い、その話何だが…お前の友人の星熊勇儀が俺らがいた世界に行った事だ」
「そうか……………え？」

サイタマは耳を疑った。「え？今、ゾンビマンなって言った？」と

「勇儀…現代入りしてたの？」

「聞いてなかったのか？」

「いや…連絡来なかった」

「そうか、なら話すよ」

実はサイタマは勇儀が一時現代入りした事を知らなかった。そしてゾンビマンは説明した。

勇儀は紫に頼み、サイタマらがいた世界に行った。しかし其処で怪人と間違われて手柄狙いのヒーロー達に狙われたのだが返り討ちにした。その結果、災害レベルが鬼になりS級までもが出動するハメになった。しかし勇儀は怯む事なく大差で勝利した。S級の上位のタツマキやアトミック侍、普段は非協力的なメタルナイトですら勇儀には勝てなかった。S級でも勝てなかったから災害レベルは竜になった。最後は無免ライダーと激突しようとした時に紫に幻想郷に連れ戻されてしまったの事。これでヒーロー協会の信頼を更に失った。

「アイツあんな事してたのかよ……」

サイタマは呆れた。更に話を聞くと勇儀は幻想郷に戻る際に”ヒーロー協会の奴らは弱すぎて話にならない”と言ったそうだ。

「ま、俺らには関係の無い事だ」

「だよな「テレン♪」ん？メールか？」

サイタマはスマホを見た。メールの宛主は……サグメだった。

『サイタマ君へ 私は今、サイタマ君の家の前にいる。早く来てくれ サグメ』

「ゾンビマン……俺の分のお代は此処に置いておくから……先に帰る。行くぞ、針妙丸」

「はい！師匠！」

針妙丸はサイタマの肩に飛びつき、座った。そして居酒屋から出た。

「アイツ……何か思い出したのか？」

ゾンビマンは首を傾げた（ぬえも）。

サイタマの家

「サグメ…何しに来たの…？」

”遊びにきた。だから幻想郷にいる間はサイタマ君の家で寝泊りさせてもらうよ”

「それ迷惑なんだけど…」

サイタマは肩を下ろす。呆れたのだろうか。

”という訳でサイタマ君、少しの間頼むよ”

サグメはそう言ってサイタマの家の中に入って荷物を置いた。サイタマも家の中に入った。

百二十五撃目：サグメ散歩①

「で、何しに来たの？」

” さつきも言ったろ、遊びに来たって”

サイタマは茶を飲みながらサグメに幻想郷に来た理由を話した。サグメは能力のせいなのかスケッチブックで話している。

「本当は？」

” 散歩”

「だろうな」

サグメの目的は幻想郷各地を散歩する事だった。サイタマの予感は当たっていた。

「永琳の所に行かなくていいの？」

” 今回は八意様には用がないから行かない。じゃ、散歩してくる”

「そうか」

サイタマは納得する。するとサグメはその場から立ち上がった。

「散歩か……え？」

サイタマが気づいた。しかし遅すぎた。何故なら……サグメが外にいたからである。

サイタマは頭をフル回転させて考えた。

「確かサグメの能力って…」 口に出すと事態を逆転させる能力”だっけ…？それだとしたら…ヤベェ!!」

サイタマはすぐ様にヒーロースーツに着替えた。そして針妙丸を肩に乗せて

「絶対口止めしてやる!!」

サイタマは家から出てサグメの後を追った。しかし言ってる事がフラグに近い。

サグメの能力である”口に出すと事態を逆転させる程度の能力”をある意味簡潔に説明します。 b y T r i p 辻上

・ 何らかの事態に対して口に出るとその事態が逆に進み始める。

・ 何かを成そうとしているのならそれは尽く失敗し、悪い事が起きているのなら何らかの打破が見られる能力である。

・ 但し使う条件がややこしい上に”言ったことと正反対の事が起きる能力ではない。

・ なお、サグメ本人が事象の当事者に対してその事象を語らなければならない。

「お、いた」

サイタマは茂みに隠れながらサグメの後を追った。しかしやってる事がストーカーに近い。と、その時

「川を汚すな!!」

「変なガラクタ作るな!!」

サイタマは声のする方を見た。其処には…喧嘩をしているヤマメにとりがいた。

「ちよつと土蜘蛛さあん? 川汚すとやめれくれへんかえ? 我々河童達が困ってるんですけど?」

「それを言わせてもらおうならアンタら河童達もガラクタ作るのやめてくれませんかぁ?」

どうやらにとりは川を汚される事に、ヤマメは河童の発明品(※ヤマメから見ればガラクタ)で喧嘩しているらしい。其処にサグメは近づいたが2人は気づいていない。

「これってまさか…」

サイタマは嫌な予感がした。

「口で駄目なら実力で勝負だな! ちよつと新しい発明品があるから試してみたいと思つてたんだわさ!!」

「どうせ使い物にならないガラクタだろ!?!」

「そんな訳なからうぞ! 見よ! この河童の新発明品を! くらえ! モチモチバズーカ!!」

にとりはバズーカ砲を構えて放とうとした。その時

「成程…見た目も性能も良さそうだな…」

サグメが口にした。そしてバズーカ砲が変な音を出して爆発した。その結果…

「何故?!何故なんだ!?!」

にとりは餅に包まれて動けなかった。

「m9（ハハ）ザマア!やつぱりガラクタじゃねえーか!!」

ヤマメが泣きながら笑う。しかも馬鹿にしてるように。

「動けない所悪いが私のこの頑丈な蜘蛛糸を利用してドロップキックをお見舞いしようじゃないか!!」

ヤマメはそこら辺にあった木の枝に糸を巻いてその反動を利用してにとりに向かってキックをした。だが

「ほう…頑丈な糸をだな」

その時、ヤマメの蜘蛛糸がプツンと切れた。

「え?」

ヤマメはそのまま川に落ちてしまった。しかも溺れている。

「あーあ…やつちまったか…しかも笑ってるし…」

サイタマは頭を抱えている。サグメ本人は笑ってる。そしてサグメはその場を去っ

た。動けないにとりと溺れているヤマメを無視して。

「誰か助けて!! (泣)」

「ちよつと待つてろ」

サイタマが茂みから出て、溺れているヤマメを助けた。そしてにとりを包んでいる餅も取った。

「盟友!」「サイタマ!」

「お前ら大丈夫か?」

「何かバズーカ砲がいきなり爆発して…」

「私は蜘蛛糸が外れて…」

「そうゆう事じゃない。大丈夫なのか?」

「大丈夫!!」

にとりとヤマメは大丈夫だった。

「そうか、ならよかった。…あ! ヤベエ!」

サイタマはサグメを追うことを思い出し、再び茂みに隠れてサグメの後を追う。

百二十六撃目：サグメ散歩②

「師匠、どうするのですか？」

「んな事言われてもタイミングがつかめないんだよ……」

サイタマと針妙丸は茂みに隠れながらサグメを追っている。出来れば早く口止めしたいのだが下手に出れば良からぬ事が起きるのか中々それが出来ない。

「これ以上誰もサグメに近づかないでくれ……」

サイタマは神頼みしかなかった。針妙丸もする。しかし……

「貴女が月の賢者ですな！」

「まさか幻想郷にいるとはね」

サグメの目の前に2人の烏天狗が現れた。射命丸文と姫海棠はたてである。

「何でサグメと関わろうとするんだよ……！てか文の隣は誰だ？」

サイタマはまた頭を抱えて言う。だがはたての事は知らなかった。第一文以外の烏天狗とは会った事がないからである。

” 何の用かな？ ”

「貴女を取材しに来たのです……！」

「私もよ！」

文はカメラをはたてはガラケーを構えて言う。

「では早速！」

「あつ！」

文は迅速な速さでサグメの写真を撮った。はたては出遅れてしまった。だがその時
：

「ほう、”そんな速く動いても写真が撮れるのか”」

サグメは口にした。茂みに隠れているサイタマは”まさか…”と嫌な予感がした。それも的中した。

「なんじゃこりゃー!?!」

文は撮った写真を見て驚いた。それは…ピンぼけや目や口等の写真や何故か森に隠れていた椀の写真が。後ろではたてが笑う。

「これじゃあ新聞の写真に使えない!!」

「ふふ残念だったわね文、この方の記事は私がいただくわ!!」

はたてはガラケーにキーワードを打ち込んだ。彼女の能力は”念写をする程度の能力”である。

「へえ〜”念写で写真撮るんだ。それで成功するつてすごいね”」

「また喋りやがった!!」

サイタマは絶句した。しかしバレそうになったのか直ぐに隠れた。

「え…?」

はたては愕然した。何故なら…写っていたのがサグメらしき棒人間だからである。再度試すが今度は雑な絵のサグメだった。

「これで私の”花果子念報”の人氣が出ると思ったのに…」

はたては落ち込んでしまった。オマケに文も。

”じゃあ、失礼するわ”

サグメは去った。そして茂みからサイタマが現れる。

「お前大丈夫か?」

「あ、サイタマさん…」

「これやるよ」

「え?」

サイタマは文にある物を渡した。それは…紺珠伝編で異変解決した際にサグメから貰ったサグメ本人の写真である。

「ありがとうございます!!」

文はお礼を言って去った。

「あの…趣味でヒーローやってるサイタマさん…私にも…」

「ごめん、1枚しかない」

「なっ!!? ……文あああ!!」

はたてはサグメの写真を持った文を追いかけた。

「さて、サグメは…あっ!!?」

サイタマの目の先には…サグメとキングの姿が

”君がキング君か?”

「いかにも、月の賢者の稀神サグメ氏だな?’」

サグメとキングは普通に会話をしていた。木に隠れているサイタマは不安でいっぱいだった。

「俺に何の用だ」

”ちよつと話しかけた。それだけだ”

「そうか、なら話が早い。俺は風見氏の所に行かないといけないからな」

「そうか、”間に合うといいな”」

「ならば急ぐ…ん?」

キングは懐中時計を見た。

「なっ!!?急がないと!!」

キングは慌てて幽香の所まで向かった。実は待ち合わせの時間があと少しだったからだ。

「さて、行くか」

サグメはまた何処かへ歩き出した。サイタマは見つからないよう追いかける。

一方キングは…

「ギリギリよ」

「危なかった…」

キングはギリギリ間に合った。しかし走ったのか息を切らしている。

「メデイも待ってるだろうし、急ぎましょ」

「うん（てか少し休ませて…）」

キングは休みたいのだが急がないと幽香に怒られる恐怖感から幽香の後を追う。

百二十七撃目：叱られサグメ

「ヤベエぞ……」

サイタマはサグメの後を追いながら思う。「これ以上サグメを野放しにしれいれば被害者が増える」との事に。そしてサグメは今…命蓮寺にいた。

「また…何かする気か…?」

サイタマは不安そうに見る。しかし此処で予想外の出来事が。

「留守か…」

何と住職の聖が留守だったのだ。そのまま去るサグメにサイタマは胸を撫で下ろす。
だが

「あれは…?」

サグメは何かに気づいた。

「まさか…」

サイタマはドキツとする。気づかれたのかもしれないなかったからだ。

「……………気のせいかな。ま、”サイタマ君が此処にいる筈も無いし”」

「いやいるわ!!」

サイタマは茂みから出てサグメの前まで行く。

「師匠……！」

「え？………あ!？」

針妙丸に言われた時には遅かった。サイタマは自分からサグメの前に現れたのだ。だが時は既に遅し。サグメに気づかれてしまった。

「ついて来てたのか？」

「いや……その……」

サイタマは必死に言い訳を考える。しかし思いつかない。第一自分がやった事はどう考えてもストーカー行為に近い。”隠れながらお前（サグメ）の様子を見ていた”と言えど何て言われるかがわからない。

「サイタマ君、黙りはダメだ。ちゃんとやってくれ。私について来てたのか？」

「……………はい」

サイタマはあつさり認めた。サグメに責められたからである。

「ヒーローである君がある意味ストーカー行為のするのは良くないと思うがな」

「それを言うならお前もペラペラと喋るなよ……」

「安心しろ。私の能力は対象の相手に言わないと効果がないからな。例えば……あの”豪族がバレないように寺に火をつけてる”」

次の瞬間、命蓮寺に火をつけようとしていたサグメが言う豪族、物部布都に「何しとんじやてめえはああああ!!」

それに気づいた村紗水蜜が偶然隣にあった宝塔投げつける。布都は気絶してしまった。そして立て続けにゾンビマンと遊んでいた封獣ぬえの弾幕に当たり飛ばされてしまった。そして情けない事に地面に頭から刺さってしまった。

「ほらな」

「お前…」

ドヤ顔をしたサグメにサイタマは呆れる。と、その時

「びろびろりん♪」

サイタマのスマホが鳴り出した。

「もしもし?」

「サイタマさんですか!?!鈴仙です!」

電話の主は鈴仙だった。何か慌ただしい。

「永琳所の兎か、何の用?」

「サグメ様が幻想郷に来てると新聞に載ってましたので師匠が連れてきなさいと…!」

「わかった。今そつちに…ってサグメ、逃げるなよ?」

サイタマは睨む。何故ならサグメが逃げようとしていたからだ。サグメは抵抗する

暇もなくサイタマに永遠亭まで連れて行かれた。

その後、サグメは永琳に酷く叱られた。自分の能力の危険性について等で。改心したのか翌日サグメは被害者達に謝罪をし、月の都へと帰って行った。

「もう来ないでほしい…」

サイタマは疲れたのか家で寝転ぶ。オマケに針妙丸も。

数日後

「サグメからメールだ」

サグメからメールが届いた。内容は…

『サイタマ君へ この前は済まなかった。八意様に叱られてから安易に能力を使わない事にしたよ（そのつもりはない）。それと、君にどうしても会いたい人がいる。だから月の都まで来てくれ。ある玉兔を出陣されたから。 サグメ』

「アイツ反省色あつたのか？」

サグメの反省色のないメールに呆れたサイタマ。その時

「お久しぶりです！サイタマさん！」

「あ、レイセン」

玉兔のレイセンが来た。

「では早速月の都へ行きましょう！」

「え？ちよつと待て……」

レイセンはサイタマを強引に連れ出しロケットに乗せて月の都まで向かった。※ちなみにサイタマの服装はヒーロースーツ。

百二十八撃目：再び月の都に

「久しぶりだな、月の都は」

月の都へと到着した。サイタマは紺珠伝編以来である。

「さあ早く行きますしよう！」

レイセンに引つ張られて奥まで行かれる。そして

「よく来たな、サイタマ君」

サグメが待っていた。いつものポーズで。

「お前ちゃんとは反省したのか？」

「ちっちゃい事は気にするな」

「でかいわ」

やはりサグメに反省色はなかった。

「さあ、ついて参れ。奥にサイタマ君と会いたい者がいるからな」

「何でアイツあんなに偉そうなの？」

「そういうサイタマさんはサグメさんに対して態度でかいと思えますが……」

サイタマは偉そうなサグメに気が食わないらしい。しかしレイセンからは「月の賢

者であるサグメに対して態度がでかいと言われてしまったる為、実質人の事は言えてない。

「何をしている？早く来いや」

「マジで殴りたくなつた……！」

「サイタマさん！落ち着いて！」

サイタマは右手を震えている。それを見たレイセンが落ち着かせる。サイタマは我慢し、ついて行く事にした。

「お久しぶりです、サイタマさん」

「久しぶり」

宮殿には綿月豊姫がいた。サイタマと会うのは“月のテーマパーク”（詳しくは番外編 part 2で）以来である。

「すみません、急に呼び出してしまって」

「いいよ別に、暇だったから」

「君は毎日暇だろ？」

「うるせえ……！」

サグメの発言に切れかけたサイタマだった。

「サグメちゃん結構フリーダムですので気にしないで下さい。まあ、少々邪魔でウザイですけどね（笑）」

「がっ!？」

サグメは心に棘が刺さった。豊姫自身は悪気はないのだが言ってる事は酷い。サグメは傷ついたのか自身の部屋へと戻って行った。

「さ、気を取り直しましょうか」

「……怖え……」

サイタマとレイセンは背筋が凍った。

「実はですね……妹が貴方に会いたがっているのです」

「妹？妹なんていたのか？」

「はい。依姫という名の妹が、貴方に興味あるのです」

「え？まさか……変な方向じゃないよな……？」

「よっちゃんはそのうのは嫌ってますので安心して下さい。私は大歓迎ですけど」

「ええー……」

この事にサイタマは引いてしまった。

「簡単に言いますと貴方と勝負したいのと事です」

「ならいいぜ」

サイタマは直ぐに受け入れた。その時

「依姫様を連れてきました！」

モブ玉兔が依姫を連れてきた。

「あ、よつちゃん来たの？」

「姉様…その呼び方やめて下さい…あ、申し遅れました、私が綿月豊姫の妹であり月の使者のリーダー格である綿月依姫と言います。」趣味でヒーローをやつてる最強の男

サイタマ殿、お会い出来て光栄です」

「おう、宜しくな」

サイタマと依姫は共に握手をした。

「ん？何だ？」

サイタマが何かに気づいた。何やら大衆がこちらに近づいて来ている。

「まさか…」

レイセンは嫌な予感がした。その通り、向かつて来たのは…大量の玉兔であったからだ。

「おー！本物だ！」

「サイン下さい！」

「おい！ちょっと待て！何だコイツら!!」

玉兎達はサイタマにサインを求めた。どうやらサイタマの人気は予想以上だった。サイタマは玉兎に埋もれてしまった。

「おい、貴様ら修行はどうした？サイタマ殿のサインは終わってからにしろや」
「すみませんでした!!」

依姫の鬼の人相に玉兎は怯え撤退した。

「では早速お手合わせお願いします。場所を変えますので」

「お……おう」

依姫は対決の場所を変えて行こうそうだ。この時、サイタマはこう思っていた。

”豊姫も依姫ももしかしてフリーダム?”と

百二十九撃目：依姫 V S サイタマ

「何か現れたぞ?!」

「に、逃げる!!」

月の民達は慌てていた。何故なら龍らしき怪物が突如現れ、月の都で暴れていたからである。

「があああああ!!」

龍は雄叫びを上げながら破壊を続ける。その時

「貴様…余程死にたいから此処で暴れているのだな?」

「よ、依姫様!」

龍が暴れていると聞きつけて、依姫が現れた。そして

「月の都と月の民を守るが我が使命…いざ!参る!」

依姫は剣を抜き、龍を斬りつけた。龍の首は飛び、戸惑う身体を更に斬りつけた。龍の身体は粉々になり消えた。月の民達は依姫に声援を送った。

”あの頃の私は月の都では一番強かった…その強さに魅力された玉兔達は私みたいに強くなりたいと言ってきた。私は玉兔達に厳しく過酷な修行をさせた。その結果多

くの者達が立派な兵士となった。その時は私は嬉しかった。自身の修行を元にしただけなのにこんなにも強い兵士ができた事に。だが……

「く……」

私は剣を振りかざす。だが前にいる男は何事も無いように避ける。

「ならばー」

男の隙を見て”火雷神”を放った。これは避けられぬ！と思った。しかし……

「危ね……服が燃える所だった……」

これも避けられてしまった。私は再び剣を振りかざす。だがこの時私は怒りに震え、斬撃が無残なものだった。当たる筈がない。

「はあ……はあ……これならどうだ!？」

息を切らしてしまったが直ぐに冷静さを取り戻し”建御雷”を放つ。無数の雷を男目掛けて撃った。だがこれも当たり前のように避けられた。この時私は思った。”今までの修行は何だったのか？自分が1番強いのではなかったのか？”と思い始めた。今まで私に勝った者は1人もいなかった。実質自分が最強だと信じていた。だが前にい

る男が原因でそれは全て消えてなくなつた。その男の正体は…外来人であり人間でありながら圧倒的な力、強靱な肉体の持ち主…”趣味でヒーローをやつてる最強の男”サイタマだつた。

「おい、もう終わりか？」

疲れているのか息を切らしている依姫にサイタマが言う。

「貴方は何故反撃をせずに避けてばかりいるのですか…？」

依姫は問う、確かにサイタマは攻撃もせずに避けてばかりいる。

「簡単に言うとな、お前の実力が知りたいだけだ」

「そうですね…ならば質問があります。何故貴方は強い…何か秘訣でもあるのでしょうか…？」

依姫はサイタマに強さの秘訣を聞き出そうとした。これにサイタマは…

「秘訣か…ヒーロー目指そうと思つた時は、腕立て伏せ、上体起こし、スクワット100回、ランニング10km、1日3食必ず食べる、夏冬は暖房冷房器具は使わない”を3年間続けただけだからな…それと武術剣術とかもやってない。それだけ、参考になつた？」

「貴様はふざけているのか…!?それだけで強くなれるなら私の長年の修行は何だつたというのだ？」

「人の事情なんて知るかよ。それと俺からも聞きたい事がある」
「？」

依姫は怒りを見せたがサイタマからの質問にキョトンとした。

「お前：月の都から出た事あるのか？」

「なっ!？」

凶星だった。依姫は月の都から1度も出た事がない。

「例え此処から出なくても戦える奴らはいる！」

「それはお前が1番強いと思ってるからじゃないのか？または月の都の強い奴らはお前にとつては”口程にもならない”レベルじゃないのか？」

「そ、それは…」

依姫は口が詰まってしまった。月の都から出た事が無い為、同じ奴らに勝ちまくって”自分が1番強い”と思ってるのだ。というより月の民で実力のある者は大半依姫と同じ考えだが。

「そういうのを”井の中の蛙大海を知らず”って言うんだぜ」

「黙れ！それを言うなら貴様はどうなんだ!？」

依姫はサイタマに剣を向けて言う。

「俺が元々いた世界は怪人怪物が毎日のように出没する。俺はそいつら会う度に倒して

きた。けど大半が一撃で倒れてつまらなかつたよ。けどな、俺が本気を出せる奴は沢山いたよ。時には苦戦する事もあったが全て勝利で収めた。幻想郷に来た時もそうだ。俺と対等に戦える奴がいて感動したよ。お前みたいに”同じ奴らしか戦ってないのに一番強いと気取っている奴”とは違ってな!”

サイタマは依姫に普通のパンチを放った。だが寸止めした為依姫にはダメージは無く、逆に後ろにあつた岩が破壊された。

「お前よりも遥かに強い奴らは沢山いる。自分で強いと思う思想を消せ」

サイタマは普段は見せない凛々しい顔で言った。

「そうか……口で言ってもわからぬ奴には力でねじ伏せる必要があるそうだな……?」

依姫は完全に怒り狂っていた。サイタマにバカにされたからである。事実だが。

”愛宕様の火!!”

依姫の手が燃え盛る炎となった。それは剣にも及んだ。

「この炎は地上にはない熱さだ、燃えてなくなれ!」

燃え盛る炎をまとして依姫をサイタマを斬りつけた。その時

「マジシリーズ”マジ扇ぎ団扇!!”

サイタマは右手を左右に振った。その風はすぎましく、依姫にまとつた炎を一瞬で消した。

「なに!？」

依姫は戸惑った。だが直ぐに立て直す。

「もう許さぬ!! 灰と…」

依姫の顔に衝撃が走った。何故ならサイタマは目にも留まらぬ速さで普通のパンチをしたからである。依姫は地面に叩きつけられて気を失った。

「マジシリーズ使ったが…やっぱりお前みたいなの自称最強には本気出せねえわ」

サイタマは気を失った依姫を肩に乗せ、豊姫とレイセンのいる場所まで向かった。

百三十撃目：豊姫と依姫、幻想郷に行く。

「で、どうだったの？」

「見てわかるだろ」

勝敗を聞く豊姫に対しサイタマはまだ気を失ってる依姫を指す。

「やっぱり（笑）。ま、わかってましたけどね。よっちゃんは自信過剰の上に”私は最強だ！”って言ってましたからねwww」

「お前結構フリーダムなんだな…」

こいし以上にフリーダムな豊姫に思わず引いてしまったサイタマだった。その時

「は！此処は!?!」

「宮殿内だよ」

「宮殿か…けど…サイタマ殿、降ろして下さい…恥ずかしいです…」

依姫は顔を赤くした。サイタマに担がれたままだからである。

「結構お似合いだと思うけどね♪」

豊姫はニッコリ笑って言う。しかも両手でハートマークにして。

「姉様!!」

依姫はあまりの恥ずかしさに両手で顔を隠してしまった。当のサイタマはと言うと……いつも通りだった。

「なあ、此処の奴らって依姫と同じ考え方してんの？」

「はい、大半がそうです」

サイタマはおにぎりを食べながら豊姫に聞く。

「よつちゃんを含めた力のある人達は月の都から出た事が無い為、自分が一番最強だと思ってしまうんですね、これを”井の中の蛙大海を知らず”って言うのです」

「姉様まで……けど姉様も月の都から出た事ありませんよね？」

「私出る気ないもん」

豊姫は桃を食べながら言う。本人曰く月の都から出る気は無いの事。

「だってさあく此処から桃食べれなくなるじゃんか」

「桃なら地上にもありますが……」

「嫌です（ ??? ）」

「姉様……」

どうしても月の都から出る気の無い豊姫に依姫は頭を抱えて呆れる。そこにサイタマが

「豊姫、幻想郷俺が案内するよ、それならいいだろ?」

「サイタマ殿…姉様は月の都から出な」サイタマさんなら行きます!!「ええ!」

依姫は驚いた。あれ程出たくないと言つてた豊姫がサイタマが幻想郷案内するので行くと言つたからだ。

「姉様!?!さつき此処から出たくないと言つてましたよね!?!」

「最強のサイタマさんなら私を守ってくれる筈です!!だから…私、幻想郷に行きます!」

「今から行く?」

「行きましょう!!」

「何でこんなに説得力あるの!?!」

何故か意気投合したサイタマと豊姫に依姫は呆れ驚く。そして…

「では…行つてまいります!!」

「お気を付けて!!」

結果、豊姫はサイタマに案内してもらおうという形で幻想郷に行く事にした。

幻想郷

「此処が幻想郷ですか!!」

「その前に降りろ…」

「あ、すみません」

サイタマを踏んでいた豊姫が降りる。

「まずは……つて豊姫!?!」

サイタマは辺りを見回す。豊姫の姿がない。まさか…と思つた瞬間

「月の都から来たのかい!?!」

「ええ、そうです♪」

豊姫は人里の人と普通に話をしていた。

「お前勝手に動くなよ…」

「ルールに縛られてはいけません!!フリーダムに生きる!!…つて作者が言つてました!」

「お前は充分にフリーダムだろ!」

真顔である意味名言を言つた豊姫にサイタマは突つ込む。(※作者↓T r i p 辻上)

「まずは博麗神社からだ」

「了解です!」

サイタマと豊姫は博麗神社へと向かった。

博麗神社

「おーい！ 霊夢ー！ いないのかー？」

サイタマは叫ぶが霊夢の声は帰ってこない。

「留守なのかアイツは？………とりあえず賽銭入れとこ」

サイタマは財布を取り出し賽銭を入れた。豊姫も賽銭を入れて帰った。その時

「賽銭キタコレ!!」

障子が開き、霊夢が現れた。

「3カ月振りのお賽銭……いくらだ!？」

霊夢はワクワクしながら開ける。だが……

「何故じゃああああああああああああああああああああああああああああ!!」

霊夢は悲痛な叫びを上げた。何故なら入っていた金額が………60円だったからである。

「何だ今の声は？」

「気のせいだと思います」

2人は霊夢の悲痛な叫びに気づいたが無視して別の場所へと進んだ。こうして、サイタマは幻想郷各地を案内した。その結果、ぐつてりと疲れてしまった。豊姫は嬉しそうに帰って行った。

「お疲れ様です」

「豊姫は想像以上にフリーダムすぎて疲れた…」

サイタマはぐつてりとしていた。神子に膝枕をしてもらっていた。

数日後…

「何でいるの…?」

サイタマは呆然と見ていた。何故なら前に依姫がいるからである。何やらデカイ荷物を持って。

「幻想郷で強い人達と会うことにしたのです。だからサイタマ殿の家を拠点にしようと思ってます。いいでしょうか?」

「うん、絶対にダメ」

サイタマは断った。その時

「これ、あげますので」

依姫は机にサイタマの好物である白菜を置いた。何でも月の都の白菜は格別らしい。それを見たサイタマは…

「ちゃんと歯ブラシ持つてきたか？」

「勿論です！」

サイタマは認めた。こうして依姫は1週間程幻想郷に滞在し、幻想郷にいる実力のあ
る者達と対決した、これの影響で”他の世界ではこんなにも強い人がいるのか！”と実感
した。月の都へと帰った時、サイタマは

「これで性格とか変わったのかな」

と、言った。

番外編 part 3

百三十一撃目：歯なしにならない日和（前編）

永遠亭、幻想郷で唯一の診療所である（らしい）。其処には多くの患者が来る。そして今流行っているのが…虫歯である。

「お願いだからクラピちゃん！口を開けて！」

地獄の女神であるヘカーティア・ラピスラズリが部下である妖精、クラウンピースに言う。しかしクラウンピースは口を開けようとしなない。

「クラピさん！これじゃ治療できないわよ！」

永琳は怒り口調で言う。これでもクラウンピースは口を開けない。

「私がいるから安心して！」

ヘカーティアはクラウンピースは落ち着かせる。落ち着いたかクラウンピースは目を開く。しかし口は開かない。

「直ぐに終わるからねー口を開けて」

永琳が歯科医の人が歯の治療に使うつぽいドリルを向ける。それを見たクラウンピースは…

!!

レミリアの悲痛な叫びは永遠亭所か迷いの竹林までも響いた。それは虫歯の治療を待つ人達を震え上げた。その中には

「師匠…帰つてもいいですか？」

「ダメ」

「ですよね…」

サイタマと針妙丸もいた。虫歯なのは針妙丸の方である。その時

「死ぬかと思つ…た」

治療を終えたレミリアは出てきた。だがぐつてりと倒れている。それを見た人達は

（歯の治療つて…そんなにも痛いのか？）

と、心の中で思っていた。それと同時にフランも出てきた。

「お姉様、甘い物ばかり食べたのが報いなのよ！」

「フランも私と一緒に食べてたじゃない！」

「大丈夫！パーフェクトフランちゃんと呼ばれる私の辞書に虫歯という言葉はないのよ！」

そう言うとフランは歯を見せた。白く輝く歯である。それを見た人は驚きをあげた（サイタマ除く）。

「今に見てなさい……!」

レミリアは小声でそういった。

夜、紅魔館

「お姉様ーお休みー」

「フラン!ちゃんと歯磨いたの!?!」

「虫歯になったお姉様に言われたくない」

「な!?!」

レミリアは愕然した。しかし事実上事実である。虫歯になった人に言われたくないのはなんかわかる。フランは自身の部屋に行った。

「はあ……あれ絶対虫歯になるわ……小悪魔みたいな奴でも歯磨くのに」

「私の扱い酷くないですか!?!」

偶然レミリアの独り言を聞いてた小悪魔が突っ込む。

命蓮寺

「ごちそうさまー！」

夜ご飯を食べ終えたぬえが自分の部屋に戻ろうとした時

「ぬえ、歯磨けよ」

「ヤダ！」

ゾンビマンから歯磨きしろと言われるがぬえは断った。

「虫歯なつても知らないからな」

「大丈夫！」

ぬえは胸をはって言う。しかしゾンビマンを含んだ全員は不安である。結果、ぬえは歯磨きせずに自分の部屋に戻ってしまった。

「アイツ絶対後悔するな」

ゾンビマンはそう言って洗面所に行った。

サイタマの家

「針妙丸大丈夫か？」

「なん…とか…」

針妙丸は永遠亭で治療してもらったがまだ痛む。

「歯磨きサボるからそうなったんだぞ」

「すみません…」

呆れるサイタマに針妙丸は謝る。

百三十二撃目：歯なしにならない日和（中編）

朝、紅魔館

「……………」

フランは黙り込んでいた。右頬を当てながら。

「フラン、どうしたの？」

レミリアが問う。

「何でもない！」

「まさか虫歯じゃないでしょうねー？」

レミリアは笑みを浮かべながら言う。

「そんな事ないもん！」

フランはそう言つて牛乳を飲む。すると

「痛いー！痛い痛い！歯にしみる！」

フランは飛び上がり床に落ちて暴れる。それをレミリアは「ざまあみる」という気持ちで笑う。同じ頃、命蓮寺では…

「痛いよー！」

ぬえが右頬を当てながら言う。こちらも虫歯だ。

「だから言つたら、歯磨けって」

「なら言つてよ！」

「言つたけどしなかつたのは何処の誰で？」

ゾンビマンの一言に言葉は詰まつたぬえ。確かに言われたがしなかつたので単なる自業自得とか言いようがない。

「仕方が無い、永遠亭行くぞ」

「え!？」

「永遠亭!？」

「それいか無いわよ！」

「やだ!絶対に行かないもん！」

フランは自身のベッドに張り付く。レミリアはそれを引っ張る。これもぬえと同じだった。

「ぬえ、行くぞ……！」

「やだやだー！」

ぬえは柱しがみつく（しかも泣いてる）。ゾンビマンがそれを引っ張る。

「嫌でも行くぞ！」

「絶対に行かない！」

「ほっとくと余計に痛くなるぞ!!」

「歯医者の方が痛い！」

「どんな理屈だよ…」

ぬえの言ったことにゾンビマンは呆れる。と、そこに聖が

「ぬえちゃん、もし永遠亭に行ったら欲しい物買ってあげますよ」

「聖本当!? ヤッター！」

その時、ぬえが柱から手を離れた。すかさずゾンビマンと聖が

「その代わり」

「永遠亭ね」

「え…?」

ぬえは逃げ出そうとするががちり掴まれている為逃げる事ができずそのまま永遠亭に連行された。

「行くわよフラン」

「うう…やっぱり行かない！」

フランは逃げ出してしまった。

「あー本当に意気地無しね…」

レミリアは追いかける。何やら怪しい物を持つて。

「やだやだー！……あ！何するの!？」

レミリアはにとりから貰った特注のアームでフランを掴む。

「お姉様！それでも私の姉なの!？」

「はい!!」

レミリアは率直に答え、フランをアームと一緒に付いた筒に入れる。

「お姉様のバカ！バカー!!」

フランは抵抗するもなく永遠亭に連行された。それを見ていた美鈴は苦笑いで手を振るしかなかった。

永遠亭

「いゝたゝいゝー！ゝいゝたゝいゝよー！ゝ！」

治療室ではクラウンピースが悲痛な叫びを上げていた。それを聞いたぬえは

「やっぱり帰る！」

「おい！ぬえ！」

ぬえは出口から出ようとする。すると

「いた！」

ぬえは何かとぶつかった。フランだ。

「あら、妖怪寺の子も虫歯なの？」

「ああ、そうだ。俺と聖はコイツの付き添いだ」

ゾンビマンはぬえを掴む。

「あら、奇遇ね。私の妹も虫歯なのよ」

レミリアもフランを掴む。しかも笑いながら。

「ぬえちゃん！先に行ってもいいよ？」

「いやいやフランちゃんが先でいいよ？」

ゾンビマンとレミリアから開放されたフランとぬえは治療室のドアの前で譲り合っていた。だがどちらも入る気がない。その時

「何してるの2人共、席は空いてるわよ？」

「「ヒイヒイヒイヒイ!!」」

フランとぬえは永琳により、強制的に治療室に入れられて椅子に座らされた。治療室からはヘカーティアとクラウンピースが出ていく。虫歯は治ったもののクラウンピースの目には涙が。

治療室

「鈴仙、その子頼んだわよ」

「はい！師匠！」

永琳はフラン、鈴仙はぬえを担当した。

「じゃあ、始めますね」

鈴仙がドリルのスイッチを明日と回転し始めた。それを見た2人は震えてしまった。

「わ…私は…大丈夫…もう痛くないから…」

フランは逃げ出そうとしたその時…

「あれ…？動けない…」

フランは逃げ出せなかった。

「言う事を聞かない悪い子には拘束させるわよ？」

「鬼!!」

実は永琳は逃げ出す患者対策にとりに頼んで椅子を改造してもらっていたのだ。

「フランにとつてはいいかもね（笑）」

笑うレミリアにフランは睨む。一方ぬえは

「あががが…！」

鈴仙に虫歯の治療をされていた。

「はい！嗽して！」

「痛いよ…！」

「まだ始めたばかりですよ」

「まだ続くの!?もうヤダ!!」

そう言うとなぬえは逃げ出して薬棚を荒らす。

「あつた！」

「それは師匠の薬！触っては…あ！」

ぬえは歯の痛みを止める薬を見つけて飲む。鈴仙は止めようとしたが時は遅し。す
ると…

「痛くない！やったー！治った！」

ぬえは喜んで永遠亭から出て帰った。

「じゃあ私も！」

フランもぬえが飲んだ薬を取って帰った。

「仕方が無い子ね…これは虫歯の怖さを思い知らせるしかないわね…」
永琳は呆れて言う。

一方サイタマは…

「今回、俺の出番なくね？」

「作者（※Trip辻上）に訴えますか？」

「やめろ」

神子は訴えようとしたがサイタマに止められた。

百三十三撃目：歯なしにならない日和（後編）

命蓮寺

夜ご飯、ぬえは薬のお陰なのか何事も無いように食べている。

「痛くも痒くもなーいーい！」

そんなぬえの姿に聖は喜ぶがゾンビマンは睨みながら食べる。その時
「!?」

ぬえは急に青ざめた。顔から汗が流れている。そして

「いたーいーいーい！」

再び虫歯の痛みが再開した。ぬえはジタバタと暴れる。それを見た聖は戸惑う。そこにゾンビマンが

「そろそろ薬の効果が切れた頃だ」

「え？」

「ぬえは治療から逃げ出して薬で痛みを誤魔化してした。それだけだ」

「ぬえちゃん？本当ですか？」

聖の間にぬえは首を振る。同じ頃…紅魔館では

「痛い…痛いよ…」

フランが自身のベッドでモゾモゾと動いている。

「薬で治る訳ないでしょ！」

「だって…」

「こうなれば…あ、そうだ！」

レミリアは何か思いついたのかフランをいきなり頬を抓る。

「何するの!？」

「どう?少しは楽になったでしょ?」

レミリアは他の場所を痛くすれば歯の痛みは和らげると言うのだ。だがフランは

「もうヤダ！」

「あ、待ちなさい！」

フランは逃げ出してしまった。レミリアは追う。

「もうほつといてよ!!」

「それくらい我慢しなさい！」

「お姉様!私に怨みとかあるでしょ！」

「はい！」

レミリアは率直に答えた。てかフランに対して怨みなんてあんの?その時

ゴツン!!

何かにぶつかった。フランと同じ逆療法していたぬえだ。

「いたた……あれ？痛くない……？治った!!」

フランとぬえは手を繋ぎ喜んだ。しかし数秒後

「痛い！いつもより痛い！」

再び虫歯の痛みが始まった。痛みは虫歯になってからよりも酷くなっていた。

「あの時ちゃんと治療を受けなかったからだ」

「自業自得ね」

ゾンビマンとレミリアは呆れる。其処に

「何してんだお前ら？」

散歩していたサイタマが現れた。

「サイタマか、これ見ればわかるだろ」

「え？あ、虫歯か」

流石のサイタマもフランとぬえがどういう状況かわかった。

「そーいや竜崎が知り合いに”神の手”を持つ医者がいるって言ってたな」

サイタマの発言に全員が興味をしめす。

「その人は何処にいるの!？」

「待つてろ、今呼び出す」

サイタマはスマホを取り、竜崎の知り合いの医者を呼ぶ。サイタマは3分で来ると言つてたが僅か3秒で来た。

「コイツが竜崎の知り合いのDr. エゴだ」

「Dr. エゴ!?!」

レミリアが驚きをあげた。

「え? 知つてるの?」

「当たり前よ! Dr. エゴつて言つたら”神の手”を持つ医学界のスペシャリストじゃない! その人が竜崎の知り合いなの!」

「本当だ。…で、患者は?」

「これです」

ゾンビマンはぬえをレミリアはフランを見せる。

「この2人か…虫歯だな。しかし酷い…!」

エゴが驚愕した。何故ならフランとぬえの虫歯が余りにも酷かったからだ。

「治せないの…?」

「安心しなさい、私に治せないものなどない」

フランとぬえは涙ぐるいで言う。しかしエゴの発言で安心する。

「虫歯は酷い状況だが……1分で終わらせる。麻醉無しでな」

「麻醉なし!?それは嫌だ!!」

麻醉なしと聞いた途端、フランとぬえは逃げ出した。

「ぬえ!!」

「フラン!!」

ゾンビマンとレミリアが追いかけてようとする。その時

「患者は1人たりとも逃しはせん!」

するとエゴの後ろから透明の手が現れ、ぬえとフランを掴んだ。

「何アレ!?!」

「そーいや竜崎が言つてた。エゴは”人と妖怪のハーフ”だつて」

「ハーフなの!?!」

レミリアは驚く。エゴが人と妖怪のハーフだつて事に。

「離してー!」

フランとぬえは逃げようとするが逃げる事ができない。

「1分で終わらせる!それまで我慢していてくれ!」

エゴは治療を始めた。しかし周りから見れば無理矢理にしか見えない。1分後…

「完了」

フランとぬえは開放された。

「ぬえ、大丈夫か!？」

「フラン、大丈夫!？」

ゾンビマンとレミリアの間にフランとぬえは「大丈夫」と首を振る。そして

「あれ…? 痛くない…? 治った!! やったー!!」

「本当だ! 痛くない!」

フランとぬえは手を繋ぎ喜びあった。

「流石だな」

「あれくらいは朝飯前だ。私は失礼するよ。それとサイタマ君」

「何だ?」

「あの子達に言ってくれ、私の治療は無料とな」

「ああ、わかった」

サイタマにそう伝えてくれとエゴは去っていった。

数日後、命蓮寺の洗面所

「何でゾンビマンにやってもらおうの？」

「お前は歯磨くの下手だろ」

ぬえはゾンビマンに歯を磨かれていた。

「1人でできるもん！」

「そうか、なら1人でやれ、磨き終えたら俺に見せろ」

「うん!!」

ぬえは頷き自分で歯を磨いた。（※フランは自分でできる）

S級ヒーロー、幻想郷に参る!!編

百三十四撃目：竜の血を引く者、再び幻想郷に参る。

「久しいな…：幻想郷は」

幻想郷のとある森、青年が1人いた。外の世界にありそうな黒のブレザーを着ている。しかし彼はただの人間ではない。黒い角と尻尾が生えていた。その男の正体は…かつては怪人組の会長であり、サイタマとの激戦を繰り広げた竜族の血を引く人間、竜崎真一だった。

「さて、サイタマの家を探すか!」

竜崎はサイタマの家を探す為に歩いた。

一方、サイタマは

「どーすんだこれ…」

相変わらずダンボールの処理に悩まされていた。だがこれは人里の人からのではな

い。それは…

「ジェノス…あの野郎…」

そう、サイタマの弟子でありS級11位（※原作及び村田版は14位）の”鬼サイボーグ”であるジェノスからである。だが部屋を埋め尽くしている。

「アイツも程々にしてほしいわ」

サイタマが溜息をついたその時、

ピンポーン

インターホンが鳴った。サイタマはある程度退かしながら玄関まで行った。

「よっ、サイタマ」

「竜崎！久しぶりだな！」

サイタマは竜崎との久しぶりの再開に握手する。

「とりあえず上げれ」

「悪いね」

「何の用で来たの？」

サイタマは竜崎に茶を出す。

「それ以前に聞きたいが………これ何？」

竜崎は辺りを見る。ダンボール箱で溢れているからだ。

「ジェノスから貰った物資」

「そういやお前のいた世界に弟子がいるって本当だったんだな」

「そうだよ」「ピピピ……」失礼

サイタマはスマホが鳴り出したので出る。電話の主はジェノスだった。

「先生！お久しぶりです！」

「久しぶり。で、何の用？」

「それはですね……八雲紫に頼んで幻想郷に行く事にしました。S級を連れて！」

「そうか………え？」

サイタマは耳を疑った。 ” 幻想郷に行く？、S級ヒーロー連れて??”

「ジェノス……今何て？」

「S級を連れて幻想郷に行くんですけど……何か問題でもありませんか？」

「大ありだよ！幻想郷でもヒーロー協会は役立たずにされてんだぞ!!」

「別に問題はありません。後、星熊勇儀にも用がありますので」

「まさか勇儀と闘うんじゃない？」

「無論そのつもりです」

「やめろ！お前らじゃ勝ち目は…切れた…」

電話は途切れてしまった。

「お？サイタマのお弟子さんが来るのか？」

「ああ、数人連れてな。けど勇儀とは…」

「星熊さんと闘わせればいいじゃん、別に」

「まあそれでもいいんだけどね…」

サイタマは頭を抱えた。「勇儀は俺以外にも本気出さねえのに…！」と思いながら。

「まーまー、サイタマ元気出しなよ」

「それが出来たら苦労はしない…！」

サイタマと竜崎は人里の団子屋にいた。ジェノスから貰った物資を売り捌く為、その時に怪物に会ったのだがいつものようにワンパンチで終わった為、項垂れていた。

「けど、結果的にお弟子さんの物資が全部売れて良かったじゃん♪」

「竜崎お前…!!」

お気楽すぎる竜崎にサイタマは苛立ちを見せる。

その頃、博麗神社前では

「参拝のつもりで来たのかしら？」

博麗の巫女、霊夢が前にいる集団に聞いたです。霊夢と話しているのはジェノスである。

「いや、サイタマ先生の居場所を聞きに来た、それだけだ」

「サイタマ？アイツなら竜崎と一緒に人里に行っただけど？」

「何だ?!」

ジェノスは驚きを上げて人里に向かった。一緒にいた奴もついて行く。

「アイツら…サイタマに何の用があるんだるか」

霊夢は再びの神社に帰った。さっきの集団は…ヒーロー協会における最高峰のランク、S級ヒーロー達だった。

百三十五撃目：新人のS級

「で、サイタマ、本当にお弟子さんを星熊さんに会わせるつもりでいんの？」

「それしかないだろ…」

竜崎の問いにサイタマは再び頭を抱える。その時

「先生!!」

「ジェノス…来たのか…」

サイタマとジェノス、再び再開する。

「後は…アトミック侍とクロビカリ…後は誰？」

サイタマはヒーロー協会を脱退しているがアトミック侍と超合金クロビカリは知っていた。だが他の2人は知らない。

「最近S級になったシリユウとぐるぐるサイクロンです。元々C級だったヒーローです」

「はじめまして、サイタマ殿」

「サイタマさん、宜しく頼むぜ」

「おう、宜しく」

サイタマはシリウとぐるぐるサイクロンに挨拶及び握手する。彼ら2人はC級の下位だったのだが実力を認められてS級になったそうさ。

「で、何の用で幻想郷に来たの？」

「俺とシリウとぐるぐるサイクロンは観光で来たのですが、アトミック侍と超合金クロビカリは星熊勇儀にリベンジに来たそうさ」

「そうか（ジェノスは闘わないんだな…よかった）」

サイタマは一安心する。其処に

「アンタがサイタマのお弟子さんのジェノス君？」

「誰だ貴様は？」

「俺は竜崎真一、竜族の血を引く人間だ」

竜崎は手を出すがジェノスは断った。

「あらら、握手なし？」

「その必要はない」

「結構無礼だな」

あまりの無礼さに竜崎は呆れる。

「所でサイタマさん、勇儀さんはどんな人ですか？」

「あ、勇儀？簡単に言うると”鬼”」

「それは災害レベルが”鬼”ですか…?」

「いや種族が”鬼”」

「ああ、そうだサイクロン、サイタマの言う通り星熊勇儀は鬼だ。災害レベルは”竜”以上だ」

サイタマとサイクロンの会話にアトミック侍が割り込む。彼は勇儀（※本人は暇つぶし）と対立した事がある。だが結果は敗北した。そのリベンジを誓うために幻想郷に来たのだ。その話を聞いたサイクロンは震えた。

「じゃあ俺はアトミック侍とクロビカリ連れて旧都に行くわ」

サイタマはアトミック侍とクロビカリを連れて妖怪の山まで向かった。

「じゃあ俺らは観光でもしますかなー」

「竜崎殿、一つ聞きたい事が」

出発しようとした時、シリユウが呼び止める。

「此処に寺は存在しますか?」

「寺? あ、そういや命蓮寺っていう寺があったな。てかシリユウさんってお坊さん?」

「いかにも、私は本職が寺の住職、副業にヒーローをしています」

「あ、通りでその格好か、じゃ命蓮寺に行こうか」

竜崎、ジェノス、シリユウ、サイクロンは命蓮寺へと向かった。

妖怪の山、

「此処しかないのか？」

「うん」

アトミック侍の問いにサイタマは頷く。旧都に繋がる場所は温泉の近くにある穴しかない。

「運が良かったらヤマメが止めてくれるし行くぞ」

サイタマはそう言つて穴に入る。

「クロビカリ…ヤマメって誰だ？」

「サイタマ君から聞いたのだが…土蜘蛛の妖怪だそうだ」

「そうか、じゃ、俺らも行くか」

アトミック侍、クロビカリもサイタマに続き穴に入る。

「着地と」

サイタマは無事着地した。遅れて来た2人も。

「今回もヤマメいなかっ「サイタマ」ん？」

何処からもなくサイタマを呼ぶ声がした。前には桶がある。まさかと思つた時、

「キスメか」

「お久」

やはりキスメだった。

「お！キスメちゃん！久しぶりだな！」

「誰？」

「俺だ！超合金クロビカリだ！この前会つたよね!？」

「超合金…クロビカリ…？あ、勇儀さんにボロ負けした人か」

「なっ!？」

キスメの発言にクロビカリは傷ついてしまった。だが事実である。

「おい、落ち込むな。…………俺はアトミック侍だ」

「宜しく」

キスメは普通に返事を返した。

「そーいやキスメ、最近ヤマメいないんだけど何か知らない？」

「ヤマメさん？あの人なら風邪で寝込んでいるけど？」

「感染症操る癖に風邪引くのかよ……」

その事にサイタマは呆れた。

「あと一つ、サイタマ、勇儀さんが用あるって」

「おう、わかった」

キスメは去っていった。

「じゃ、行くか」

サイタマ、アトミック侍、クロビカリは旧都へと向かった。

命蓮寺

「久しぶりだな、竜崎。そしてジェノス」

「久しぶり♪」

「久しぶりだな、ゾンビマン」

門の前でゾンビマンと会った。竜崎、ジェノスには久しぶりである。シリユウ、サイ

クロンは初対面である。

「はじめまして、私はシリユウです」

「俺はぐるぐるサイクロンだ」

「宜しくな、S級に新入りがいたとはな」

ゾンビマンは2人に挨拶する。ゾンビマンとヒーロー協会を脱退している為、知らなかった。其処に

「あら、お客さんですか？」

住職の聖が来た。その時

「貴方がジエノスさんですね!？」

「!？」

聖が人間とは思えない速さでジエノスに近づき手を握った。

「噂は聞いてます!サイタマさんのお弟子さんですよね!？」

「そ…そうだが？」

「やつぱり!本人に会えるなんて感謝感激です!さき!お入り下さい!」

聖は強引にジエノスを連れ込んだ。残された人は…

「お前らもこい」

ゾンビマンに言われ、竜崎、シリユウ、サイクロンも入る。

ヒーロー紹介

シリユウ

S級14位のヒーロー。元C級215位。23歳。ヒーローではあるが本業は寺の住職。礼儀正しく、目上目下関係なく常に敬語。人間離れした体技を駆使して戦う。また、お教を唱えて攻撃する事もある。

ぐるぐるサイクロン

S級15位のヒーロー。元C級258位。21歳。風をこよなく愛するヒーロー。服装は常にうずまき模様がある。基本扇風機の羽根を改造して作った武器で闘うが風も操る事ができる。

百三十六撃目：結局勝負に繋がる（笑）

旧都

「久しいな、サイタマ」

「よっ、勇儀」

サイタマは軽く挨拶する。

「しかし今回も連れがいんのかい？」

「おう、お前にリベンジしたいって言うから連れてきた」

「ハハッ！無駄な事を」

勇儀は鼻で笑う。これが気に入らなかつたのかアトミック侍とクロビカリが

「おいテメエ：俺らを馬鹿にしてるだろ」

「前回の俺と見くびるなよ！勇儀さん！」

「いや何でって…お前さん達はあたしに大差で負けたじゃないか、それなのに諦めてないのか？」

「くっ…！」

2人は言葉が詰まった。無論事実である。だが

「だが前とは同じと思わない方がいいぜ…?」

「アトミック侍さんの言う通りだ!」

「そうかい…ならば見せてもらおうじゃないの!!」

アトミック侍とクロビカリは構える。そして勇儀も構える。しかしS級の2人が言う事は本当なのだろうか…一方サイタマは

「サイタマは勇儀さんと闘わないの?」

「俺はそんなつもりじゃないしな…」

偶然来たキスメと話していた。

命蓮寺、本堂

「俺は恩師の博士からサイボーグになった。それ以降からは度々パワーアップしてもらっている。正義執行の為に」

「おお…!」

聖は目を輝かせながらジェノスと話していた。それを見たシリユウが

「ゾンビマン殿…聖殿って…」

「ああ、聖は周りの流行りにのせられやすい上に自分の年齢を気にしてないからな」

「え？」

「聖は見た目では信じられない程歳をとっている。星から聞いたが昔、妖力を手に入れて若返りの術と不老長寿の身体を手にしたって聞いたからな」

「妖力を交える事は僧侶にとっては外道行為では!？」

「ああ、理由は聖がある理由で死を恐れ「聞こえてますよ?!」!!」

その時、ゾンビマンの頭に何か刺さった。聖が何処から出したのかわからない槍だった。それにシリユウは驚く。

「聞こえていたか（笑）」

「私は地獄耳なんですよ?」

だがゾンビマンは普通に聖と話している。

「ゾンビマン殿!大丈夫なのですか!？」

「大丈夫だ、よくある事だ」

「へ？」

シリユウはキョトンとした。「え?よくある事?」と思っていた。

「シリユウ、確かゾンビマンさんは異常な程の再生力を持つてるからあれくらいで死なないぜ」

「そうでしたか…」

ぐるぐるサイクロンの説明にシリユウは納得した。その頃、竜崎は…

「ねーねーお兄さんってドラゴンなの？」

「え、まあ…ドラゴンにはなれるけど俺は竜族の血を引く人間だし…」

「なら見せて下さい！」

「此処でやるのはちよつとな…」

竜崎は苦笑いして言う。何故ならぬえと響子に質問攻めされてたからである。確かに竜崎は竜族の血を引いている為、竜に変化する事はできる。更に角と尻尾があるから色々言われるのは仕方がない。

「あのー…その前に…ぬえちゃん？尻尾触るのやめてくれないかな…？」

「なんで？」

「いや…その…」

竜崎は理由を言おうとするが思いつかない。しかしそれでもぬえは尻尾を触り続ける。それを見ていた一行（※命蓮寺の妖怪）からは…妬ましい光景にしか見えなかった。なんでか。

「ぬえちゃんが彼処まで興味持つとは珍しいですね♪」

「確かにな」

聖とゾンビマンから見れば微笑ましい光景である。

「あ、所でジェノスさん、私との勝負に付き合ってくださいませんか？」

「俺は構わない」

ジェノスは断らずに承知した、わ

「ありがとうございます、それと…シリユウさんとぐるぐるサイクロンさんもよろしいですか？」

「私も構いませんよ」

「ああ、受けて立つつすよ！」

シリユウとサイクロンも承知した。

「話が早いですね、なら最初はぐるぐるサイクロンさんから」

「俺から!?わかりました。手加減はしませんよ？」

「手加減しない方がありがたいです」

聖とサイクロンは外に出て、命蓮寺から離れた場所で行う事にした。

とある場所

「本当に手加減なしでいいんですね？」

「ええ、思う存分にやりましょう！」

聖は気合が入っていた。サイクロンは一瞬怯むが直ぐ立ち直った。

「では…尋常に勝負!!」

聖とサイクロンは激突した。ジェノス、シリユウ、ゾンビマン、竜崎、ぬえ、響子は比較的安全な場所で見守る事にした。

百三十七撃目：色々大変ですがお気に示さず

「まさかS級2人を倒すとはな」

「まあ、所詮人間ですね」

ジェノスは横を見る。其処には気絶しているシリユウとぐるぐるサイクロンが。聖に大差で負けたからである。

「だが俺は一筋縄ではいかないからな、聖白蓮」

「ええ、期待してますよ。サイタマさんの弟子と名乗るのですからね」

聖とジェノスは構えて激突した。ぬえと響子はゾンビマンの元で見ている。だが竜崎の姿はなかった。

「あれ？この人達って…」

竜崎は永遠亭にいた。其処で治療を受けたばかりのアトミック侍と超合金クロビカ리가ベッドに横たわっていた。2人は気を失っている。

「あの、医者さん、何があったのですか？」

「旧都で勇儀と対決して大敗したのよ、それがサイタマが運んでくれたのよ」
永琳は竜崎に説明した。アトミック侍とクロビカリが重症を負ってる理由を。

数時間前…

「ハッハッハ！準備体操にもならんね!!」

勇儀は腕を回しながら言う。前にはアトミック侍とクロビカリが無残な姿で倒れていた。

「勇儀、つまらなかつたろ」

「当たり前だ、けど今日はお前さんとはいいよ」

「そうか、ならこの2人を永遠亭まで運んでおくわ」

「暇な時にやろうぜ」

「おう！」

サイタマと勇儀は互いに拳をぶつけた。そしてサイタマはアトミック侍とクロビカリを肩に担いで永遠亭まで向かった。

「成程ねえくじやあ俺が元の世界に返しておきますわ」

「あら、助かるわ」

竜崎はアトミック侍とクロビカリを元の世界に返した。その時竜崎は…

「ちよつくらサイタマのいた世界覗いてみるか」

少しだけ滞在する事にした。

命蓮寺

「それだけしかできないのですか!？」

「くっ…!!」

ジェノスは反撃をする。だが聖は避け続ける。隙を見たのか聖の拳がジェノスの顔に命中し、飛ばされてしまった。

「サイタマさんとは比べられない程弱いですね（笑）」

「貴様…!」

ジエノスは立ち上がる。だがボロボロである。

「(本来は「いざと言う時に使え」とクセーノ博士が言っていたが…やむを得ない!!)」

ジエノスは両手を前に突き出し合体させる。しかし右手がボロボロの為出来なかった。だが背中や肩から砲台が現れた。

「おお…！」

「すごい!!」

聖及び、ぬえと響子は目を輝かせた。しかしゾンビマンはいつもと変わらずに見ている。

「標準固定……発射!!」

ジエノスは狙いを定めて波動砲を放った。赤、青、黄色、緑の波動は合わさり合い光り輝く色となった。それが聖に命中した。

「これで決着がついたな」

彼はそう思っていた。だが

「あらら…これが貴方の最後の悪あがきですか?」

「なっ!?!」

聖は法のシールドで守られていた。呆気にとられたジエノスに聖はすかさず首元を叩いた。

「俺は…まだまだ…実力不足なの…か…?」

ジェノスは膝を付き、倒れてしまった。

「鬼サイボーグ殿!」

「ジェノスさん!」

意識を取り戻したシリユウとサイクロンがジェノスの運ぶ。

「中々の才能でしたよ。けどまだまだですね」

聖は嬉しそうにゾンビマンのいる元に向かった。

サイタマ達がいた世界

「話にならないね…」

竜崎は溜息をつきながら言う。彼の下には…

「マサカ…俺ガ…負ケルトハ…」

ボフォイ（メタルナイト）の遠隔隔操作で動くロボットだった。

「それと…こんなお嬢さんがS級2位とはね…」

竜崎はタツマキを掴んで言う。タツマキは酷く無残な姿だった。

「貴方もそう思いませんか？もし俺が怪人だったら命はなかったですよ？」
竜崎は野次馬達に言う。何故こんな事になったかと言うと：

竜崎はアトミック侍とクロビカリを元の世界に返す為、紫に頼んでサイタマ達がい
世界に行った。竜崎は”ヒーロー協会総合病院”に向かい2人を入院させた。その帰
りの途中、怪人と間違われてしまいヒーロー達に襲われてしまったがそれを返り討ちに
した。そしてフブキ率いる”フブキ組”と対立した。フブキを倒した時にタツマキが
現れ、無残な姿で倒れていたフブキを見たのか怒りに震えたタツマキは竜崎に容赦なく
超能力を与えた。だが竜崎にそれは通じずタツマキも勇儀と同じようにやられてし
まった。そして兵器を試すために来たメタルナイトにも動けなくなる程攻撃をした。

「まあ、俺は深手の傷を負ったS級のお2人さんを返しに來ただけだし：帰るわ」
竜崎は呆れて幻想郷にへと帰った。その後ヒーロー達は病院に運ばれた。

幻想郷、サイタマの家

「ふーん、そんな事があったのか」

サイタマが茶を飲みながら言う。

「そうだよ。それとジエノス君達は帰ったってよ」

竜崎はジエノス達が帰った事を教えた。

「まあ、命蓮寺に行つて終わつただけか」

「聖さんと勝負して大敗したって」

「アイツ結局戦つたのかよ……」

竜崎の言つた事にサイタマは呆れた。

「じゃあ俺も帰るわ」

「おう、じゃあな」

竜崎は帰つた。竜崎が帰つたと同時にサイタマは床に寝転がり、こう言つた。

「また協会は信頼性失つたな」と

三月精編

百三十八撃目：光の三妖精

博麗神社近くにある大きな大木。其処には3人組の妖精が住んでいた。

「ルナ、これ本気でやるの？」

茶髪で青と白の服を着た妖精が言う。

「当たり前だよ！今度こそ博麗神社を乗っ取ってやるんだから！」

金髪で白の服（※若干焦げ茶色ある）の妖精が言う。

「まあ、いいんじゃないの？好きにすればいいんだよ」

若干オレンジ髪で赤と白の服の妖精が言う。その3人組の正体は：光の三妖精と呼ばれる、サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイアである。かつてこの3人は霊夢の神社である博麗神社を乗っ取るうとしていたが失敗に終わってしまった。しかし諦める事ができず、今度こそ成功させる為に作戦を練っているのだ。

「よしーこれでよしー早速取り組もう！」

「あいあいさー！」

サニーの合図でルナ、サファイアは準備に取り掛かった。

「本当に成功するかな……」

「大丈夫！あの巫女は結構マヌケだから！」

サファイアは心配するがルナは「大丈夫！」と言い張る。しかし顔がゲスい。※仕掛けた罠↓紐に引っかかると綱が落ちてきて宙吊りになるといふ物。その時

「あつ！掛かった！」

「よし！行こう！」

3人は仕掛けた罠に向かった。

「やい！博麗の巫女………」

「サニーどうしたのって……え!?!」

サニー、ルナが見たのは霊夢、ではなくキャベツみたいな怪物だった。遅れてきたサファイアも驚く。

「お前らか……儂を捕まえようとしたのは……？」

「……逃げろ!!」

サニーは慌てて逃げ出した。ルナ、サファイアも慌てて逃げた。そして3人は茂みに

隠れた。幸い怪物は網から出られない為追いかけては来なかった。

「ど、どうするの……？」

「いやどうしろって言われても……」

サファイアが尋ねる。サニーは戸惑う。実はこの3人、戦闘力はそんなにも高くはない。悪戯や罠を仕掛けるのはピカイチだとしても自称最強のチルノにすら勝てない程弱い。その為、1人1人の弱さを補う為に3人で行動しているのだ。

「と、とりあえず倒そう！」

「無茶だよ！ 私達じゃ勝てないよ！」

「3人寄れば文殊の知恵だっけ言うじゃん！ やろう！」

「そ……そうだね！」

3人は力を合わせて怪物を倒す為、茂みから出ようとした。その時

「やっべ……キャベツ買うの忘れた……」

ヒーロースーツを着たハゲの男が現れた。片手には袋がある。おそらく買い物帰りであろう。その男は罠に掛かって宙吊りになっている怪物に近づいた。

「何じゃ……お主は？」

「俺は趣味でヒーローをやってる者だ」

「趣味でヒーロー……お主まさかサイタマか!？」

「そうだけど?」

怪物は驚いた。男の正体がサイタマとわかったからだ。しかし驚いたのは怪物だけではない。茂みから出ようとしたサニー、ルナ、サファイアもだ。

「何であの人が!」

「これって出たら不味いんじゃない?」

「隠れていよう…」

怪物を倒すつもりだったがサイタマがいる為再び隠れた。

「わ…儂を倒しにきたのか!? 勘弁してくれ!!」

「いや俺は買物物の帰りの途中で宙吊りになってたお前が気になって寄っただけだ」

「そ…そうなのか? ならばこの網を取ってくれ!」

「そうかわりお前のキャベツを筆らせろ」

「え?」

「え、じゃねえよ。お前を開放するからキャベツ筆らせろって」

「ちよつと待ってくれ! それじゃ儂は…」

「つべこべ言うな。面倒くさいからそのまま筆るわ」

「待って……あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ!!」

怪物は悲痛な叫びを上げながらサイタマに筆られた。その結果、怪物は丸裸になり慌

てて逃げた。

「よかった、じゃ帰るか」

サイタマは自分の家へと帰って行った。その様子を見た3人は

「倒したのかな…?」

「倒しちゃったみたいだね…」

「そうだね…けどあの人の後をつけてみない?」

サファイアの提案にサニーとルナは賛成し、サイタマにバレぬよう追尾した。

サイタマの家

「あの…師匠…」

「何だ?」

針妙丸が不思議そうに尋ねる。何故なら…キャベツの色が普通のより色鮮やかだからである。

「このキャベツ何処で買いました?」

「買い物の帰りに怪物から筆り取った」

「大丈夫なんですか…?」

「問題ないだろ、俺は昔、茸や芋の怪人を倒して食べた事あるし」

「おお…!」

サイタマの昔の話に針妙丸は目を輝かせた。その様子を窓から覗いている影が3つ…あの3人組である。

「普通に食べてる…」

「雑食性なのかな…」

「美味しそう…」

サニーとルナは不安そうに見ていたがサファイアは涎を垂らしながら見ていた。

百三十九撃目：三妖精の観察日和（？）

博麗神社

「まーたやりやがったなあのお3人組!!」

「おいどうした」

怒りを顕にして叫ぶ霊夢が気になったか偶然其処を通りかかった魔理沙が尋ねる。

「見てわからないの!?!これよ!!」

「んー?」

霊夢の指さす先を見てみる。その光景は…

「竹箒が藁箒になってんのよ!!」

「は…?」

魔理沙は口をポカンの開けて啞然した。

「何それ、くだらね。プツ」

「何で笑うの!?!」

「いやだって…くだらなすぎて逆に笑える…アハハハ!!」

魔理沙は腹を抱えて笑った。しかも涙流しながら。だが霊夢の怒りが頂点に達した

のを見て笑うの辞めた。

「私にとつては致命的なのよ!」

「何処が?」

「竹箒の触り心地! チクチクとした触感! 何よりも箒としての役割を果たせるまさに万能の用具! 藁じや再現できないからよ!! わかるう!? この気持ち!」

「うわー!」

霊夢の訳の分からない力説に魔理沙は引いてしまった。その様子を見ている影が：霊夢が言う3人組、サニー、ルナ、サファイアである。しかしコイツらも霊夢の訳の分からない力説に引いていた。

とある森

「あーツマンネ」

サイタマはそこら辺にあつた岩に座り込んで欠伸をした。周りにはサイタマが倒した怪人怪物の死体が。この怪人怪物は通りかかった人を襲うのを楽しんでいた。だが彼等は運が悪かった。襲ってしまったのがサイタマだったからである。その結果返り

討ちにあつてしまった。

「ま、栗ゲツト出来たしいいか」

サイタマの手には大量の栗が入った袋が。中に栗怪人がいたからである。倒した時に栗をばらまいたからだ。

「師匠…食べるつもりですか…?」

「当たり前だろ、洗えば何とかなる」

不安になる針妙丸にサイタマは安心させた（つもりは無い）風に言う。その様子を光の三妖精が見ていた。

「またあの人怪物が落としたりのを拾ってるよ…」

「やっぱり雑食性なのかな…」

「栗…栗ご飯…ジュルリ」

3人はサイタマの後を追った。その後、サイタマの家ののぞき込んだ結果、案の定、サイタマと針妙丸は怪人がばらまいた栗を食べていた。

帰る途中…

「何かサイタマさんの見てたら栗食べたくなってきた…」

「なら栗拾おう!」

「それがいいね!!」

3人は栗拾いに山まで行った。そして…

「大量大量♪」

「これだけなら沢山栗料理が作れるね!」

「そーだね! って…」

「ルナどうしたの… ってこれ何…?」

何かを見つけて怯えるルナに疑問を持ったサニーがそれを見る。其処には…目玉だった。

「何これ…」

「怪物の目玉…かな?」

その時、目玉がこちらを見つめた。

「ギャアアアア!! 動いたあああああ!!」

サニーとルナは慌てて大木の家まで行った。一方、他の2人より遅れたサファイアは

…

「もー何処に行ったのよー!」

サファイアは栗拾いに夢中になってしまい、気がつくとサニーとルナはいなかった。その為サファイア一人である。

「どうしよ…私一人じゃ誰にも勝てないよ…」

サファイアは泣きそうになった。その時

「え？何…？」

突然音がした為驚く。音のする方を向けると…きつきサニーとルナが驚いて逃げた目玉だった。

「何…これ…？」

サファイアは恐る恐る見る。すると

「な…何!？」

サファイアの目の前で突然人が現れた。というよりそこら辺に散らばっていたパーツが組み合つたというべきか。

「か…怪人？」

「誰が怪人だ」

「しや…喋つたあああああ!？」

サファイアはあまりの恐ろしさに気を失ってしまった。泡を吹きながら。

「…妖精か？これ」

その男は疑問に思いながら見る。その男の正体は…ゾンビマンだった。

大木の家（三妖精の家）

「サファイア遅いなー」

「何やってんのかしら、あの子」

サニーとルナはサファイアの帰りを待っていた。その時、ドアを叩く音がした。

「あ、帰って来たのかな？」

サニーが玄関に行き、ドアを開ける。其処には…サファイア、ではなくゾンビマンだった。だが彼の背中にサファイアはいた。

「どちら様ですか…？」

「俺はゾンビマンだ、何かこの子が気を失ってるもんで送りに来た。此処であってるか？」

「はい…あってます」

「そうか、ならよかった」

ゾンビマンは気を失っているサファイアをサニーに渡した。

「じゃあな」

ゾンビマンは命蓮寺へと帰って行った。その夜、サニーはふと思った。

「あの目玉は何だったんだろう…？」と

百四十撃目：妖精日和だね、うん

「サファイア、あの人のなの？」

「うん！絶対！」

サニーはサファイアに対して茂みに隠れて言う。サファイアが指さしてる先には散歩しているゾンビマンの姿が

「ところでルナは？」

「あールナなら何か悪戯の為に仕掛けに行っちゃって」

「だろうね……」

サファイアが苦笑いをしたと同時にルナが帰って来た。

「今度はバツチリだ！博麗の巫女が引つかかる時を待つのみ！」

「何か疑わしい……」

自信一杯のルナにサニーは不安を見せる。前回みたいに霊夢ではなく怪物が引つかかりそうだからだ。その時

「掛かった!!行こう！」

悪戯の罠を仕掛けた方から音がした。3人は急いで向かう。

「やい！博麗の巫女！お前の神社を賭けて勝負……ってあれ!」

罨に掛かっていたのは霊夢、ではなくゾンビマンだった。

「何のつもりだ？」

「ごめんなさい……今外します……」

ゾンビマンに睨まれたのかルナは罨を外す。その時、

「あ」

ルナは外すつもりが間違えゾンビマンを刺してしまった。刺した場所から血が流れる。てかこんなミス普通せんだろ（笑）

「ご、ごめんなさーい!!」

ルナは急いで刺した物を抜き取る。そして謝る。

「大丈夫だ、よくある事だ」

「よくある事なの!?!」

ルナは驚く。ゾンビマンにとってはこれは日常らしい。刺された後の傷はたちまち戻りになった。

「あれ？さっきの傷治ってる……」

「自分でも言うのがあれだが……俺は再生力が異常なんだ」

「おお……!」

ゾンビマンは照れくさそうに言う。それにルナは目を輝かせた。まるで好奇心旺盛な子供みたいに。其処に

「ルナー！」

サニーとサファイアが遅れて来た。ルナが事情を説明して3人で謝る事にした。

「えつと…仲間がご迷惑おかけしました…ごめんなさい…」

3人はゾンビマンに謝った。

「いいよ別に、それと…中々凝った罠だな」

「「え？」」

3人はキョトンとした。ゾンビマンはそれ程気にしてない上にルナが仕掛けた罠の出来を褒めたからだ。

「ま、あの貧乏巫女が引つかかる様に頑張れよ」

「「あ、ありがとうございます！」」

3人はゾンビマンにペコペコとお辞儀する。プライドないんかコイツら。

「俺は帰る。次回は頑張れよ」

「「はい！」」

ゾンビマンは帰って行った。

「よーし！次はもっと凄い罠を作ろう！！」

「おー!!」

この時、3人の絆が更に深まった…らしい。

博麗神社

「へーくしょん!!誰か噂でもしてんのかな…」

霊夢は掃除（のふり）をしながら嚏をした。そして誰か見てるのではないかと疑いながら周りを見る。

「霊夢の嚏…結構レアだぜ」

茂みに隠れながら魔理沙が笑う。そして彼女が霊夢に見つかり何かさされる事は誰も予想しないであろう。

霧の湖付近

「今日は散歩日和だ」

サイタマは相変わらず呑気に散歩をしていた。本人は散歩日和と言うが濃い霧がある。其処に

「サイタマきーん！」

「ん？誰だ？」

サイタマは声のした方に顔を向ける。霧の中からサニーが現れた。

「どちら様ですか？」

「私はサニー！光の三妖精の1人です！隣にいるのが…」

「私はルナ！サニーと同じく光の三妖精の1人！そして」

「サファイアです！サニー、ルナと同じく光の三妖精です！」

「「3人揃って」光の三妖精!!」

3人は決めポーズを決めた。某戦隊ヒーローアニメみたい。しかしダサイ。

「あ、はい。俺は趣味でヒーローやってるサイタマです」

「「趣味!」」

サイタマは何故か敬語で自分を紹介した。だが3人が驚いたのは…

「え？俺変な事言ったか？」

「趣味って！嘘ですよね!!」

「本当だけど？」

「絶対嘘だ！」

「嘘じゃねえーし」

サイタマは趣味と言い張るがサニーとルナは聞く耳を持たない。

「サニー、ルナ落ち着いてサイタマさんの肩書きが、趣味でヒーローをやってる最強の男、だからね？」

「あ、そうか！」

サファイアの説得にサニーとルナは納得した。その時

「ついに見つけたぞ！サイタマ！」

自称最強のチルノが現れた。大妖精も一緒である。

「どちら様ですか？」

「チルノだ！あたいの事を忘れるとはいいい度胸だ！」

チルノは相変わらず偉そうに言う。隣で大妖精が謝る。

「あ、チルノか。何の用なの？」

「リベンジに来たのだ！」

「は？リベンジ？」

「そうだ！前回（詳しくは紅魔郷編）勝負に負けたからだ！ま！あの時は本気出してなかったからな！」

「てかチルノちゃんあの時本気だったよね？」

「大ちゃん！本当の事言わないで！！」

大妖精の発言にチルノはドキッとした。凶星だった様だ。

「あん時も俺は本気出してなかったからな……けどお前みたいな雑魚に本気出したくないし」

「ガッ!？」

チルノは傷ついてしまった。だが直ぐに立ち直り、

「あたいを馬鹿にするとは許せん！勝負だ！」

「別にいいけど、で、何で勝負すんの？」

「それは………次回話す!!」

チルノの次回の持ち越し手段に全員がズッコケた。

「「「次回持ち越しって……」」」」

百四十一 撃目：リベンジ悲願の⑨妖精

「で、何で勝負すんの？」

「勝負はあたいの強さを証明させる……、かけっこだ」

ズコー!! またもや全員がズッコケた。だかサイタマは直ぐに立ち上がり

「てか前回負けたろ、これで」

「あれは……その……本気じゃなかったからだ!」

「あ、はい」

サイタマは普通に返事した。何かまた言えばチルノがごちゃごちゃと煩くなりそうだからである。

「で、何処まで？」

サイタマは準備体操をしながら言う。

「彼処」

チルノはゴール地点の場所を指した。前回競争した場所である。

「あ、アイツらもう行ってんのかよ」

「え? 大ちゃんらもう行ってたの?」

「ゴール地点は遠く離れた場所にあるがサイタマは視力が美非常にいい為大妖精達が見える。だがチルノは見えない。」

「じゃあ行くよ！よーい……ドン!!」

チルノの合図でゴール地点まで向かった。一方その頃大妖精達は…

「どっちが勝つだろうね」

「最強と言われてる2人だからわからないや」

「だよね（笑）」

「絶対サイタマさんの方が速いと思う…」

4人で呑気に会話していた。すると…

「お前ら暇なの？」

「そりやそうですよ、見るだけだか………っていつの間にも!」

ルナは驚いた。何故ならサイタマがいたからである。そして連鎖するかの様にサニー、サファイア、大妖精も驚く。

「チルノさんは……?」

「あれ」

サイタマの指さす先にチルノがいた。何かバテている。

「お……おのれ……」

チルノはやつと到着した。ぐつてりとしていた。

「どういう状況だったんですか…？」

「簡単に言うとな…」

サイタマは大雑把に説明した。

かけっこが始まって数分後、状況はチルノの方が有利だ。

「やっぱ遅いな！最強のあたいが本気を出せばこんなもんよ！」

チルノは勝ち誇ったかのように言う。その時

ビュツ!! つと何かが横切った。サイタマである。

「何だと!？」

チルノは愕然した。距離は確かにサイタマよりも離れていた。だがサイタマの身体能力は人間を遥かに超えている。たとえチルノが本気を出していてもサイタマは普通に抜かせてしまう。本気を出してなくても。

「ま！待ちやがれ!!」

チルノはサイタマを追いかけた。だが距離は縮まる事なくサイタマの勝利で終わった。※サイタマは最初地面だったが途中から湖の上を走った。

「心から尊敬します!!」

「やめろ」

サニー、ルナ、サファイアは深く土下座する。これにサイタマは呆れる。

「サイタマ！まだ終わってないからな!!次は弾幕だ！」

「えー…」

「文句はなし！いくぞ！アイシクルフォール!!」

チルノは容赦なく弾幕を放った。

「涼しー」

サイタマは全く怯んでなかった。逆に涼んでいた。

「あれ…?当たってない…」

「いやあれは避けてる…恐ろしいくらいの速さで」

サファイアの言う通りサイタマは涼みながら避けていた。だが速すぎる為わからな

い。これに怒ったチルノは

「おのれ!!これならどうだ!?パーフェクトフリーズ!!」

「寒っ!!」

チルノは切り札（※本人曰く最強の技）である。パーフェクトフリーズ”を放った。あまりの寒さにサイタマは震える。それを見ていた妖 大妖精達も寒がる。

「ハツハツハ！ どうだ！ あたいの強さに震え挫けたか!？」

チルノはまた勝ち誇ったかのように言う！ その時、

「「「あっ」」」

大妖精達は同時に口を開いた。それを見たチルノは首を傾げる。だが本人は気付いていない。後ろにサイタマがいる事に。

「はい終わり」

サイタマはチョップをした。チルノは真下に急落下し、地面にめり込んだ。

「やっぱりつまんねーわ」

サイタマはがっかりした。だがそれを見ていたサニー、ルナ、サファイアは目を輝かせていた。大妖精は地面にめり込んだチルノを助けに行った。

百四十二撃目：蛙に喰われた人々

その後もチルノはサイタマに勝負を挑んだ。結果は：圧倒的な差で敗北。だがチルノは諦めていない。

「まだやんの？」

「当たり前だ！あたいがりベンジ達成するまでだ！」

この時、サイタマはウンザリしていた。その時

「モガアアア!!」

突然濁った叫び声が鳴り響いた。

「な、なんだ!？」

叫び声と同時に地面が揺れ始めた。その場にいた全員が慌てる（※サイタマはいつも通り）。そして

「妖精はいねえか!？」

叫び声と地響きの正体が現れた。牛と蛙が合わさったような怪物だった。

「何あれ!？」

「確かあれは……暴れ牛蛙!!冬に活動する蛙なのに何で!？」

「いや普通、春だろ」

「あの蛙は異質なんですよ！それと……妖精が大好物!!」

「じゃあお前ら……」

「「「「あ」」」」

チルノ、大妖精、サニー、ルナ、サファイアは気づいた。自分達が妖精だって事に。すると暴れ牛蛙が

「ほう……妖精が5人もいるのか、全て頂こうか!!」

暴れ牛蛙は舌を伸ばしチルノ達を舌で巻き、口に放り込んだ。だが

「あぶなかつた……」

チルノは間一髪避けた。そして

「よくも大ちゃん達を！アイシクルフオール!!」

チルノは得意のアイシクルフオールを放った。しかし

「愚か者め！儂に効くものか!!」

だが冬に活動する暴れ牛蛙には全く効いてなかった。

「なん……だと……?」

「さあお前も儂の胃袋の中で仲間の妖精と共に消えるがよい!!」

チルノは抵抗する間もなく暴れ牛蛙に喰われてしまった。その時

「よっと」

サイタマが飛び出し暴れ牛蛙の中に入っていった。

「ん？何かが入った気がするが……気のせいかな？」

暴れ牛蛙は違和感を感じたが気にする事もなく歩き始めた。

暴れ牛蛙、胃袋の中

「此処は……何処？」

サニーが目を覚ました。辺りを見渡すと其処は暗くジメジメした場所だった。

「暴れ牛蛙の胃の中だよ！私達食べられちゃたんだよ!!」

サファイアが泣きながら言う。それにサニー、目を覚ましたルナと大妖精は驚く。だがこの男は

「へー胃の中ってこんなんだな」

サイタマは相変わらず呑気だった。

「とりあえず脱出しないと………ん？」

サニーは何かに気づいた。何か嫌な予感がする。

「何か…ジューって音しない？」

「もしかして…溶け始めている!？」

嫌な予感の的中した。溶け始めたからである。何故なら…

「あれ？チルノちゃん、小さくなってるじゃない？」

大妖精は気づいた。チルノが小さくなってる事に

「あれれ？何でだ？」

「何でじゃないです！胃液で溶けているんですよ！」

「え!？」

サファイアの言う通り、チルノは胃液で溶け始めていた。

「そしてこのまま私達も溶けて…一環の終わり…」

サファイアは絶望した。まさか此処で死ぬとは思ってないからである。その時

「フフフ…こんな時もあるうかとちゃんと用意したよ！」

「え？」

ルナがそう言うのと何かを取り出した。自作の爆弾だった。

「備えあれば嬉しいな!!」

ルナはこの爆弾で脱出しようと考えた。周りは希望の光だと目を輝かせた。だが

「馬鹿言わないでよ！」

「え？何で？」

「それ使ったら私達諸共吹き飛んじやうよ!!もう!!」

サファイアの言った事にルナは自作の爆弾を見つめる。そして

「あー!!」

「もーこの餓鬼全くわっけわからんのだからもー!!」

ルナの遅すぎる気づきに全員が絶望する。その時

「サイタマさん…?」

サイタマが腕をならしている事にサファイアは気づいた。

「俺もまだ死にたくないし、コイツの身体に穴あければ脱出できるんじゃないか?」

「「その手があったか!!」」

サイタマの提案に全員が納得する。だがチルノは…

「あたいうもう限界…」

「チルノちゃん!!サイタマさん早く!」

チルノは既に限界が来ていた。大妖精に急かされてサイタマは壁に向かつて

「普通のパンチ」

壁に拳を当てた。その時暴れ牛蛙が悲鳴を上げた。そう、身体が破裂したからであ

る。そして

「脱出と」

全員ある意味無事に脱出できた。妖精は喜び合う。その時

「誰だー！暴れ牛蛙倒したのは!？」

突然の叫び声に全員が其方に顔を向ける。其処にいたのは…守矢神社の神様、洩矢諏訪子だった。

「誰?」

「洩矢諏訪子だ！忘れんじゃねーよ！ポケエ!!」

「諏訪子…? あ！神奈子の孫の…」

「誰があのBBAの孫だ!」

諏訪子は忘れられて上に子供扱いされた為なのかキレる。だが周りから見れば子供にしか見えない。

「で、何の用?」

「あーそうだった!この暴れ牛蛙倒したのは誰だつて聞きに来たんだよ!!」

諏訪子はバラバラに破裂した暴れ牛蛙の死骸を指さす。

「あーそれか?俺だけど?」

「やっばりお前か!許さーん!!」

諏訪子はサイタマが倒したと知った途端に怒りが爆発した。

「おのれえ…私の友を…絶対に許さんからな!!」

「あっそ」

怒りをあらわにする諏訪子に対してサイタマは全く動じなかった。その時

「あの人なんですか？」

「諏訪子か？神様だけど餓鬼」

「あれで神様とか世の末ですね」

大妖精はサイタマの大雑把すぎる説明に呆れた。

「誰が餓鬼だ！私は神様だぞ！」

聞こえたのか諏訪子が更に怒る。

「こうなったら……ハゲ野郎！コイツがこうなってもいいのか？」

「え？……あー！」

サイタマは気づいた。諏訪子の手には……サイタマがよく知る人物がいた。

「師匠ー！助けてー！」

百四十三撃目：人質の小人

「針妙丸!!」

諏訪子の手には何と針妙丸がいた。しかし此処でふと疑問が

「え?てかいつ俺の家侵入したの?」

「ギク!そ…それは…:…そんな事はどうだっていいだろバーカ!!」

「何でキレるんだよ…」

逆ギレした諏訪子にサイタマは呆れる。(※この時、チルノ達は引いていた)

「師匠助けてー!!!(涙)」

「おー待つてろ、いま助けるからな」

サイタマは諏訪子に近づこうとした時、

「待て!ハゲ野郎!一歩でも踏み入れてみる!この小人の身体が吹き飛ばすぞ!いいの?!」

諏訪子は一歩でも踏み入れたら針妙丸を吹き飛ばすと言いつけた。だが

「どれどれ…?」

「師匠!」

「試すなー！本当にやるぞ?!」

試しに踏み入れたサイタマに流石に諏訪子は慌てる。しかし一番慌てたのは針妙丸だった。

「師匠！助ける気あるのですか!?!」

「あるよ」

サイタマはそう言いながら諏訪子に近づいて行つた。

「おい！ハゲ野郎！忠告を忘れたのか!?!本当にコイツの身体が吹き飛ばすぞ!?!いいのか!?!」

「いいよ別に」

「「え?」」

諏訪子と針妙丸はキョトンとした。第一サイタマは本当に針妙丸を助ける気はあるのだろうか。

「ちよつと待て！助けたいと思わないのか!?!」

「いや考えてみたら針妙丸はもう”死ぬ覚悟”出来てるんじゃないかと思うんだよな」

「出来てませんよ!?!」

サイタマのそつけない発言に2人は慌てる。

「もういい！見ておけ！今からコイツの………つてあれ!?!」

諏訪子は針妙丸を持っていた手を見る。だが其処には針妙丸はいなかった。まさかと思つた瞬間

「師匠!! (涙)」

「怪我はないみたいだな」

いつの間にかサイタマの肩に針妙丸がいた。

「いつ取つたんだ!?!」

「いや普通に」

実はあの時、サイタマは諏訪子に気づかれない程の速さで針妙丸を取り返したのだ。

「じゃあな」

サイタマはチルノ達のいる場所に戻つた。諏訪子は呆然と立ち尽くしていた。

数日後

「いやー今日も面白い物が省けたわ」

サイタマは嬉しそうに袋の中を見る。中には大量のジャガイモが。散歩の途中にジャガイモの怪人と偶然会い、倒した時にジャガイモをばら撒き、拾つたのだ。

「師匠…それ食べるんですか…?」

「まだ不安残ってんのかよ。洗って芽の所取れば問題ないって」

サイタマは安心させた（つもりは無い）風に針妙丸に言うが何か不安である。その様子を見ていた3人…サニー、ルナ、サファイアである。

「やっぱり雑食性だよあの人…」

「怪人の落としたのを食べるってん…ある意味勇者だよね…」

「ジャガイモ料理って結構美味しいよね」

3人はサイタマについて行った。やはりサイタマと針妙丸は怪人がばら撒いたジャガイモを食べていた。

一方人里では

「信仰は我が博麗神社に！」

「いや守矢神社にどうぞ！」

人里で相変わらず霊夢と早苗が信者獲得の為、信仰を呼びかけていた。だが…

「早苗！別の所でやりなさいよ！私の声が届かないじゃない!!」

「そういう霊夢さんこそ別の所でやって下さいよ！何も無いくせに!!」

「アンタの所の胡散臭い神様よりかは何かしらご利益はあるわよ！多分！」

「神奈子様と諏訪子様を馬鹿にするなんて……許さーん!!」

早苗は激怒し、霊夢に弾幕を浴びさせた。

「口でなく弾幕で勝負しかけるなんて本当頭悪いわね!!」

「またそれかあゝ!!」

霊夢と早苗は激突してしまった。しかも民衆の前で。皆が呆れる中、早苗に同行してきた神奈子は……

「全く……早苗は何であんなにも口車に載せられやすいのやらか……」

完全に呆れ果てていた。

未来編

百四十四撃目：間違えて未来へ

「幻想郷は久しぶりだ………な!?!」

ジェノスは驚いた。久しぶりの幻想郷かと思えば近代的な街並みだったからだ。

「これはどういう事だ…!?!八雲紫が間違えたと言うのか!?!」

ジェノスは困惑する。妖怪の賢者とも言われ、結界のスペシャリストの紫が間違えるとはまずありえない。と、その時

「メール……先生からか?」

ジェノスは携帯電話を開きメールを確認する。其処に書かれていたのは…

『ちよつとした間違いで貴方のいた世界とは別の世界に送っちゃいました☆ 幻想郷に繋がるまで其処の世界で満喫していてね♪ ゆかりん』

「……………後で排除しておくか」

メールの主は紫だった、内容があれなのかジェノスはそのメールを削除した。

「仕方が無い、しばらく此処にいるしかないな」

ジェノスは歩き始めた。

しばらくして…

「唯一の救いは…俺が元々いた世界と今いる世界ではお金が共通している事だな」

ジェノスはとあるカフェで考え込んでいた。奇跡的な事にジェノスがいた世界と今いる世界ではお金が共通していた事だ。

「だが此処で何をすれば…」

それが一番の悩みである。此処の世界では怪人は現れない。すなわちヒーロー活動が曖昧である。とはいえ人の平和を脅かす犯罪はあるはず。そう思いこんだジェノスは怪しい奴はいないか調べに行った。その結果……………

「ご協力ありがとうございました」

「俺は単に正義執行しただけだ」

10件以上の犯罪行為をした者達を捕まえる事ができた。警察の方や被害者の方から感謝されたがジェノスの態度は相変わらず無礼だった。

「この世界でも事件はあるものなんだな…」

ジェノスは辺りを見渡しながら言う。それを見る怪しい影が…知る人は知る秘封倶楽部の宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーン（愛称はメリー）である。

「あの人って確か”ワンパンマン”のジェノスじゃない？」

「確かに似てるけど…コスプレじゃないの？」

「いや絶対に本物だよ！メリーも見たでしょ？犯罪者に捕まえる時に使った技！漫画と同じだったよ！」

「蓮子落ち着いて…わかったから」

「じゃあ早速話しかけよう！」

「いやちよつと待って！」

ジェノスに近づこうとする蓮子にメリーは追う。

「で、どうするの？」

「どうするって言われても…」

蓮子とメリーはジェノスに近づけなかった。理由は…逃走中の犯罪者グループに人

質として捕まってしまったからである。しかも頭に銃をつけられて。

「警察共！近づいたらこの2人の命はないからな!!」

犯罪者は近づけば蓮子とメリーの命は無いと言いつける。これに警察側は考え込む。近づけば蓮子とメリーの命はない、逆に近づかなったら決着はつかない。場は緊張が走る。その時

「マシガンブロー」

人混みからジエノスが現れて犯罪者グループの仲間を殴り飛ばした。

「誰だ!？」

仲間が飛ばされたのかりーダーらしき人物が動揺する。前には…

「俺は単独で正義活動をしている者だ」

「正義活動…!?警察と関係あんのかテメエ!!」

「警察とは全く無関係だ」

「なら何で正義活動してんだよ!!」

「誰に言われようがそれは人の勝手だ。ソイツを離せ」

ジエノスは捕まってる蓮子とメリーに指を指しながら言う。

「お前の命令に聞く筋合いはねえ!!だつたらお前もs…ヌゴ!？」

リーダーは首に違和感を感じた。何故なら…ジエノスに首を掴まれていたからであ

る。

「聞く気は無いのか。ならばいい」

「ちよつと待て！何で…首を…!?!」

「これからお前に2つの選択肢を言う。1つ目は、その2人を開放し警察に自首するか、もう1つは、そのまま俺に首を握られ続けてもがき苦しんで死ぬ”さあどちらか選べ”」

ジェノスはリーダーに対して2つの選択肢を言い渡した。1つは自首でもう1つは…酷い。

「ま…待つてくれ！殺さないでくれ！俺は…俺は単に生活が苦しくて犯罪に手を初めてしまったんだ！この2人は開放する！だから見逃してくれ！」

リーダーはさつききの威勢は何処に行つたのかと疑いたくなる程弱気になっていた。そして犯罪に手を初めた動機も言った。

「なら警察に自首するのか？」

「そのつもりだ！」

ジェノスはリーダーを警察側に向けて投げ飛ばした。最初は動揺したがすぐ様に拘束した。残された仲間達も自首をした。

「た…助かつた〜」

蓮子とメリーは開放されたのかぐつてりとした。

「大丈夫か？」

「はい…ありがとうございます」

「俺は正義執行を尽くしたただけだ。礼を言われる筋合いは無い」

蓮子とメリーはお礼を言うがジェノスはやはり無礼だった。そしてその場を去ろうとした時…

「待って下さい！」

「？」

「あの…話したい事があるけどいいでしょうか？」

「構わないが？」

「ありがとうございます！」

蓮子はジェノスを呼び止めて用件を言った。ジェノスはそれを受け入れてとある場所に移動した。

百四十五撃目：しばらくいるしかない

「未来日本なのか!？」

「はい、そうです」

とある喫茶店、蓮子から未来日本だと言われてジエノスは驚く。

「けど作者（※T r i p 辻上）のいる日本とは違って首都は京都です」

「京都か…つまり此処が京都なのか？」

ジエノスの間に蓮子とメリーはこくこくと頷く。その時

「失礼」

携帯電話から着信音が鳴り出しジエノスが出る。

「俺だ」

「ジエノス、今何処にいんの？」

「先生!？」

電話の主はサイタマだった。幻想郷にジエノスがいつまで経っても来ない為、サイタマ自ら電話をかけたのだ。

「驚く事無いだろ。で、何処にいんの？」

「それは…その…」

ジェノスは言葉が詰まってしまった。自分は未来日本にいる。しかしそれがサイタマが信じるかどうかである。不安もあるが黙っておくわけにはいかないため話す事にした。

「……………未来日本です」

「やっぱりな」

「先生!!驚かないんですか!?!」

「驚くわけないだろ、紫から聞いたし」

「そうですか…」

予想外だった。サイタマはジェノスが未来日本にいる事は紫から聞いていた為驚かなかった。逆に驚いたのはジェノスだった(笑)。

「まー紫は結構気まぐれだしなw」

「笑い事じゃありません!八雲紫に頼んで幻想郷に送らせて下さいよ!」

「落ち着け、紫に頼んどくからそれまで其処で満喫していてくれ」

「わかりました!」

そう言って電話をきった。と、同時に

「幻想郷に行けるの!?!」

蓮子が目を輝かせながら言う。メリーは冷めた目で見ている。

「ああ、八雲紫に頼めばな」

「ついに憧れの”東方Project”の世界に……!」

蓮子は一人興奮していた。メリーは蓮子を哀れみな目で見ていた。

「知らせは先生が教えてくれるだろう。それまで此処を案内してくれないか?」

「勿論です! さあ行きましょう!」

蓮子はジェノスを引つ張り店から出てそのまま走って行った。メリーはヤレヤレ顔で後を追った。

一方幻想郷……

「誠に申し訳ございません、紫様は留守です」

「マジかよ……」

サイタマは紫の屋敷にいた。だがいなかった……という事を式神の八雲藍が教えてくれた。

「とりあえず”ジェノスを幻想郷に送っておいてくれ”と伝えておいてくれ」

「承知しました」

サイタマは紫に伝える伝言を言う。藍は承諾した。

「そーいや気になつてんだけど、後ろの猫なに？」

サイタマは藍の後ろにいる猫らしき少女が気になつてた。

「私と同じ式神の橙です。まだ未熟ですけどね」

「未熟じゃないもん！」

サイタマの前に橙が現れた。自分は未熟じゃないと言う。

「私とは立派な式神だから猫じゃありません！」

「へーそうか」

サイタマはそう言うのと猫じやらしを取り出して降る。

「にゃーん♪」

橙は如何にも猫らしい仕草を見せた。

「猫じやん」

「（。ヅ）ハッ！」

橙は気づいた。猫仕草をしてしまった事に。慌ててサイタマと藍を見る。2人とも笑いを堪えていた。

「私をからかわないで「お手」にゃん」

サイタマはお手をすると橙はつられてサイタマの手をタッチしてしまった。

「お座り」

「にゃん」

サイタマに言われ橙は座る。猫だ。

「3回回って決めポーズ」

サイタマに言われ橙は3回回った後決めポーズを決めた。しかもドヤ顔で。

「やっぱり猫だろコイツ」

「!!」

サイタマの発言に橙は吾を振り返る。そして顔を赤め：

「私をからかうなー!!」

「猫の仕草をしたお前が悪いんだろぅが!!」

橙は怒りサイタマを追いかける。それを見ていた藍は：

「懐かしいな…私も久しぶりにからかつてみるか」

藍もサイタマと同じ事をするみたいだ。

百四十六撃目：ついに幻想郷へ

未来日本

紫のミスで未来日本に来てしまったジエノスは其処で出会った蓮子とメリーに首都、京都を案内してもらっていた。色々な事を体験し、事件に巻き込まれてしまったり、そして蓮子とメリーが通う大学に行ってトラブルに巻き込まれたり勝負を挑まれたり等をした。そして…

「先生、本当ですか!？」

「おう、紫が今から幻想郷に送るって」

「わかりました!」

ジエノスはサイタマと電話で話していた、紫がジエノスを幻想郷に送るという事だ。

「ついに幻想郷に行けるのね!」

「ああ、其処で先生と会って幻想郷を案内してもらおうといい」

「何か不安ね…」

幻想郷に行ける事に興奮している蓮子と不安を見せるメリー、そしてサイタマに会い、幻想郷を案内してもらおうジエノス。その時

「な、何これ!？」

蓮子の足元にスキマが現れた。そしてメリー、ジェノスの足元にも。

「これが幻想郷に繋がるスキマだ」

「何で足元なの!？」

「サイタマ先生が言うかぎり八雲紫は気まぐれな奴で幻想入りする者の大半は足元にスキマを広げ、其処から幻想郷に連れて行かれるそうだ」

「怪我とかは…しないよね…?」

「それは保証できない」

「いやそれはないんじゃない?」

メリーが言いきる前にスキマに吸い込まれてしまった。無論ジェノス、蓮子もそうである。だが幻想郷に行ったのは3人だけではなかった…

幻想郷、サイタマの家

サイタマは弟子の妹紅と保護している針妙丸と神経衰弱をしていた。どちらかと言うとサイタマが有利である。記憶力悪いのに。

「師匠って確か記憶力悪いですよ、何でそんなに持つてるんすか」

「余計なお世話だ。場所さえ覚えていれば嫌でも頭に残るわ」
「お見事です」

サイタマの大雑把な説明に妹紅は納得した。その時

「ピンポン」とインターホンが鳴った。サイタマは玄関に向かう。其処には
「先生！遅くなつてすみません！」

「いいよ別に、それと後ろの奴は誰だ」

「宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーンです」

「いやそいつ等じゃなくて後ろにいる大群の事聞いてんだよ」

「その2人だけで……!?!」

ジェノスは振り向いた。其処には蓮子とメリー、だけでなく大人数の群集がいた。ど
うやら蓮子とメリーのクラスメイトらしい。

「これはどういう事だ？」

「いや…何で…だろうね…」

「仕方無いわよ、スキマが現れた場所が大学だったし」

メリーの言う通り、スキマが現れたのは蓮子とメリーが通う大学だった。それを偶然
見た者達がスキマが消える前に入ったの事。流石にそれはわかるはずもない。

「まさか予想外だったな…あ、先生、後で排除しときますので」

「何も言つてねーだろ！それとやめろ!!」

ジェノスはサイタマに酷い事を言い、それにサイタマは突つ込む。其処へ

「師匠、お客つすか？」

「あ、弟子のジェノスと後は：知らん奴」

「アンタがジェノスか、私は師匠の弟子の妹紅だ宜しくな」

妹紅は自己紹介をし、握手をしようとした。だが

「貴様とは握手する必要性はない」

ジェノスはそれを断った。

「師匠：ジェノスっていつもあんな感じつすか？」

「俺とジェノスの恩師の博士以外にはな」

何度も言わせてもらいますがジェノスはサイタマとクセーノ博士以外の人物に対しては非常に無礼であり、態度がデカい。また、目上の人にも敬語を使わない程である。

「ま、とりあえず：幻想郷案内するか」

「その前にあの無駄な奴らはどう処分しましょうか」

「言い方変えろ」

「宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーン以外の群集はどうしましょうか？」

「ほつとく訳にもいかんしな…」

サイタマは考え込む。ジェノスは再び後ろを振り向く。其処にいた群集は元の世界にいた感じだった。

「先生、この考えはどうでしょうか？」

ジェノスはサイタマの耳元で何かを伝えた。

「へへへ……それはいいかもな！」

サイタマはジェノスの案に賛成した。だが顔が何故かゲスい。

「俺は無d……迷い込んだ者達を案内してかえ帰ります。先生は宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーンをお願いします」

「おーわかった」

ジェノスは知らぬ間についてきた群集と、サイタマは蓮子、メリー、妹紅と共に幻想郷を案内する事にした。

百四十七撃目：執念深い忍者

「後は…命蓮寺だけかな」

サイタマは地図を見ながら確認をしていた。蓮子とメリーに幻想郷を案内していた。これまでに博麗神社、紅魔館、白玉楼、永遠亭、守矢神社を案内した（※地霊殿は危険という事で行かなかった）。

「妹紅、命蓮寺ってどっちだっけ？」

「あっちの方っす」

「おう」

サイタマをサポートするかの様に妹紅が道を教える。その時

「何だこれ？」

サイタマに目掛けて何かが飛んできた。だが反射神経が異常にいいサイタマはそれをキヤツチする。それは…

「クナイ…」

忍者が使用するクナイだった。それを見たのか蓮子が駆け寄り…

「クナイ!? 本物だ! 資料に使おうかな!」

「蓮子…誰のかわからないのに盗むつもりじゃないよね？」

「そそそそんな事はしないよ？」

蓮子は盗むつもりは無いと言う。だが目が泳いでいる上に囁んでしまっている。それにメリーは心の中で”絶対盗む気だ”と思っていた。その時

「その反射神経は…間違いないな！」

前に長い髪を結び、紫のマフラーをし、黒い服を着た男が現れた。

「久しぶりだな、サイタマ」

その男はサイタマを知っていた。

「どちら様でしたっけ？」

「俺だ！何回も会ったことあるだろうが!？」

だがサイタマはその男を覚えてなかった。考え込む。

「えっと…確か………あ！関節のパニック！」

「音速のソニックだ！後それはや・め・ろ!!」

思い出していただこう。暗殺から用心棒まで何でもこなす自称”最強の忍者”でサイタマを一方的にライバル視している関節の…じゃなくて音速のソニックである。

「そうだ×2。まだ諦めてないのかよ」

「当たり前だ、俺はお前に勝つまで諦めないからな！」

ソニックはサイタマに指差しながら言う。だがサイタマは正直ウンザリしていた。

「妹紅、覚えているか？」

「いや、知らないっす」

サイタマは念の為妹紅に聞いた。結果…覚えてなかった。

「何故だ!!何で覚えてないんだ!？」

「いやだっってお前さん…六十六撃目以降から出てないじゃん…」

「なっ!？」

妹紅から衝撃的な事を言われソニックは愕然した。確かにソニックは神霊廟編が完結してから全くと言っていい程出番がなかった。その為、ソニックの登場は81話ぶりである（笑）。

「時間無いから後でな」

「待ってくれ!」

サイタマ達はめんどくさいのか命蓮寺に向かおうとするがソニックに止められた。

「何だよ」

「ちよつと待て!俺よりも全く登場していない奴はいるだろ!？」

「確かにそうだな…けどお前よりインパクトあるから嫌でも覚えてしまうんだよな…レミリアとか幽々子とかは」

「俺はレギュラーキャラだろ!？」

「それ原作の方のだろ?」

「確かに原作ではレギュラーだ!だがこの小説でもレギュラーキャラだろ!？」

「んな事辻上に聞けよ」

「それが出来たら苦勞はしない!もういい!サイタマ!今日が貴様の命が尽きる場所だ!」

「ついにキレたか」

ソニックは攻撃を仕掛けた。一方のサイタマはヤレヤレ顔をしながらソニックを見た。なお、妹紅は巻き込まれない様に蓮子とメリーを連れて隠れた。

「妖怪の山にこもり…白狼天狗達と修行をし身につけた技!逃れられぬ破滅を!与えてくれる!」

ソニックは爆速でサイタマに近づいた。しかし

「ぐっおっ!」

ソニックの顔に衝撃が走った。サイタマが殴ったからである。バランスを崩したソニックは地面に当たりながら木にぶつかり失神してしまった。

「師匠、コイツどうします?」

「とりあえず永遠亭に送っとけ」

「うっす」

妹紅はソニックを肩に担ぎ永遠亭に向かった。

「俺らは命蓮寺に行くか」

「おう！」

サイタマは蓮子とメリーを連れて命蓮寺に向かった。

一方ジエノス達は

「キング!？」

「あ、ジエノス氏久しぶり」

ジエノスと群集は太陽の畑にいた。其処で元S級の“百獣の王”キングと会った。群集は壮大な向日葵畑に驚いていた。

「此処で何をしている」

「風見氏に頼まれて水やりをしているだけだか？」

そう言うキングの右手にはジョウロが

「風見幽香は人間とは交友関係は最悪だが…どういう事だ？」

「風見氏は俺には好意的なんだ、それで俺は直々此処に来て手伝いをしている」
「そうか、失礼した」

ジェノスは珍しく謝り、群集を連れて去った。キングは再び水やりの続きをした。

百四十八撃目：年齢無視服装の演説

サイタマ、蓮子、メリーは命蓮寺に着いた。だが

「え？聖いないの？」

「ああ、そうだ。聖は星を（無理矢理）連れて人里に行った」

命蓮寺に聖はいなかった。：事をゾンビマンが教えてくれた。

「無駄足だったか…」

「ま、その内に帰って…!？」

「ん？どした？」

ゾンビマンは何かを見て驚いたのかサイタマ達は首を傾げる。それは…

「これは聖の服…まさか!？」

廊下に聖がいつも来ている服が置いたあった。隣には何やら怪しい袋。外の世界にありそうな女学生の制服が入ってた袋だった。

「サイタマ…ちよつと人里に行つてくる」

ゾンビマンはやけに険しい顔をして人里に向かった。

「俺らもついて行くこうぜ」

「おう！」

サイタマ、蓮子、メリーもゾンビマンの後を追った。

人里

「皆さん、妖怪は人を襲ったり、害悪なイメージがあるかもしれませんが。しかし全ての妖怪がそんな訳ではありません、中には善意の心を持った妖怪も数多くいます。その為、見た目で判断せずに勇気を持って話しかけましょう。もし悪意があったりするならば…私をお呼びになってください。…けど私が望むのは、人と妖怪が共存できる世界”です”」

聖は人里に住む民衆の前で演説をしていた。聖の演説に涙を流す者もいた。しかし大半は…

「聖様の服装が何かおかしい…」

「中二病の巫女が来てそんな服だな…」

と、思っていた。何故なら…聖の服装が外の世界にありそうな女学生の制服だったからだ。

「聖…私もする必要があるのですか…?」

隣から星が顔を赤めながら言う。彼女も制服である。

「1人だと寂しいからです」

「なら着ないで下さいよ…」

星はでこに手を当ててため息をつく。聖は自分の歳を全くと言っていい程気にしてない。その為、若者が着てそうな服をお構い無しで着ていたり、アニメキャラの真似する程である。ゾンビマンおよび命蓮寺にいる妖怪や、聖の弟子は心配をしている。だが聖はやめる気は一切ない。

「これで私と同じ考えを持つ人がいるはずですよ!」

「絶対いないと思うな…年取ったおばさんが制服でいる時点でおかしいと思うんだよな」

「あ?」

「何でもありません!」

星は聖に聞こえない様に愚痴を言ったのだが聴覚がいい聖には聞こえていた。それを見る影が4つ…

「ゾンビマン、いつまで隠れてんの?」

「近づき難いんだよ…」

「あの人が聖白蓮…私が知ってる聖とは違う…!？」

「当たり前でしょ、二次設定なんだからさ」

サイタマ、ゾンビマン、蓮子、メリーは隠れながら様子を見ていた（※というより近づけない）

ジェノスと愉快な群集は…

「ジェノスさん！今日こそは貴方に勝ちますよ！」

「まだ諦めないのか、東風谷早苗」

彼らは守矢神社にいた。神社に着いたと同時に早苗からリベンジを申された。

「まあいい、所詮貴様は雑魚。早めに終わらせるようにしましょう」

「また雑魚って…絶対に許早苗！前回とは違うです！」

早苗は燃えていた。いつかはジェノスにリベンジを果たすために密かに修行をした、本人曰く強くなったらしい。

「見せてあげましょう！守矢代々受け継いだ力を！」

「雑魚は雑魚のままだ。早め早めに決着をつけよう」

こうしてジエノスと早苗は激突した。

百四十九撃目：帰ろう、未来日本へ

その後、サイタマ達は何とか聖と対面する事に成功した。

「聖、いい加減それやめろ」

「イヤです☆」

ゾンビマンは忠告するが聖はやめる気がない。しかもピースして。

「お前も若くないんだからな。弟子達も心配してるし俺も心配してるから……聖聞いてんのか？」

「むにゅ？」

この時、聖は寝ていた。ゾンビマンの”この話”は何度も聞いている。次第に飽きていたのだ。

「その話、飽きました」

「お前がやめる気ないからだ」

「何でやめる必要性があるのですか」

「聖、お前が”お婆ちゃん”だからだろうが」

「……………は？」

聖は固まった。ポカーンとした顔で。そして…

「私は…私は…！まだ若いもん!!」

聖はゾンビマンを殴り飛ばした、周りにいた人達は唾然としていた（※サイタマはいつも通り）。

「聖！落ち着いて！」

「ゾンビマンさんが悪いんですよ！誰がお婆ちゃんですか！私はまだ少女だもん!!」

泣いて暴れる聖を星が抑えようとするが力の差なのか、星は吹き飛ばされてしまい、近くにあつた建物に突き刺さってしまった。聖は自分の歳を全く気にしないのだが、老人扱いされるのを極端に嫌っている。その為聖に対して”お婆さん”や”お婆ちゃん”は禁句である。

「これが…二次設定なんだね」

「何か…闇を見てしまったわね…」

蓮子とメリーは死んだ目で見ていた、サイタマは相変わらず動じなかった。その後、聖はゾンビマンと同じく命蓮寺に居候していた黄泉に強制連行されてしまった。

「全く…聖、貴様は自分の立場がわかっているのか？」

「む…」

「僕がいなかったら里は崩壊しかけていた。だから反省しろ」

「はい…（この人嫌い！）」

聖は黄泉に担がれて連行されていた。

帰り道…

「これで一通り案内したけど…どうだった？」

「楽しかった！」

「為になった」

蓮子は心が晴れており、メリーは幻想郷に来た時と同じだった。だが思い出はあるようだ。

「後は紫に頼んで帰してもらうのだが…やり残した事ある？」

「ありません！」

「そうか、じゃあ紫に言っとくぞ」

「サイタマは紫に”2人を元の世界に帰らせて”と伝え、数日後…蓮子とメリーは元の世界へと帰って行った。」

未来日本

「あのー…何でいるのですか？」

「それはコッチが聞きたい」

とある大学の食堂、蓮子とメリー、そして何故かジェノスがいた。実は紫がまた間違えてジェノスを再び未来日本に戻してしまったのだ。

「クラスメイトの人は全員無事だった…のですね」

「ああ、何度か襲われそうになつたが無事守りきれた」

「お見事です」

ジェノスにメリーが拍手を送る。

「だが八雲紫はまたこの世界で満喫しろと言われた…帰りたい」

「あー…」

珍しく項垂れるジェノスに蓮子とメリーは思わず同情してしまった。その後、ジェノスは無事に元の世界に帰ることができた。

外の世界（サイタマやジェノスが元々いた世界）

博麗神社手前、其処にある男がいた。外見はサイボーグだった、だがジェノスとは違
い、完全なるサイボーグだった。外見は黒く、赤い目があった。

「此処に行けば辞めたS級と鬼サイボーグ君の師匠がいる幻想郷に行けるのだな」
黒いサイボーグはそう言い、博麗神社に近づいた。

人物紹介

黄泉

黄泉軍（ヨモツイクサ）を率いる冷酷なる軍人。一人称は“僕（やつがれ）”。死者
の魂を誘導したり、監視したり等をしている。その為死神や閻魔とは縁がある。現在は
休暇で幻想郷に来ており、命蓮寺に居候している。なお、聖が最も嫌う人物である。

幻想郷に一生を過ごす者とヒーロー再び編

百五十撃目：漆黒のサイボーグ

黒いサイボーグは赤い目で辺りを見渡す。神社以外怪しい場所はない。その時
「この神社に何の用かしら？」

外の世界の博麗神社を管理する八雲紫が現れた。

「お前は誰だ？」

「私な八雲紫。幻想郷と此処の博麗神社を管理してる者よ」

「俺は駆動騎士だ」

黒いサイボーグは駆動騎士と名乗った。

「確か…ヒーロー協会における最高峰のランク、S級6位のヒーローね」

「元々はな、今は辞めた」

「あら、どういう事かしら？」

駆動騎士の発言に紫は首を傾げる。

「過去に起きた事件でヒーロー協会の信頼が下がった。信頼のない場所で活動はしなくないからな」

実は駆動騎士はヒーロー協会から脱退していた。過去に起きた事件が原因で信頼を無くしており、此処では活動出来ないと言ったのだ。

「そう…で、用件は？」

「そうだ、此処に行けば幻想郷に行けると言っていたが本当か？」

「本当よ、行くつもりで？」

「ああ、活動拠点を幻想郷にしようと思っただけ。後俺と同じ元S級のシルバーファング、キング、ゾンビマン。そして鬼サイボーグ君の師匠にも用があるからだ」

駆動騎士は幻想郷を拠点に活動するつもりで博麗神社に来たの事。それに紫は

「成程ね…つまり、幻想郷で一生を過ごすつもりなのね」

「その通り、早く幻想郷に行かせてくれ」

「わかったわ…」

紫は承諾すると駆動騎士の足元に幻想郷に繋がるスキマを広げた。

「!？」

「ごめんなさいね、これしか手段はないの」

駆動騎士は戸惑うが抵抗できずにスキマに吸い込まれた。

幻想郷

「随分と荒い手段だったな……」

駆動騎士は幻想郷のある森の中にいた。サイボーグなのだが所々痛みがある。

「此処が幻想郷か……さて、探すとしよう」

駆動騎士はある人物を探しに歩いた。

人里

「俺がいた世界とは違うな」

駆動騎士は色々と周りを見ながら歩いていた。人里の者達は彼の姿につい目が行く。

その中……

「アイツは……確か……駆動騎士？」

「知ってる人なのですか？」

人里で買い物をしていたサイタマと一緒に同行していた豊聡耳神子が気づいた。

「ジェノスと同じS級ヒーロー、戦闘態勢はわからんがな」

「お弟子さんと同じく階級の人ですか、実力をみて…」

その時、突然爆発音が響いた。そして、巨人が現れた。

「怪人か!? サイタマさん!」

「待て、此処は駆動騎士の実力を見よう」

「わかりました」

サイタマと神子は隠れて様子を見る事にした。

「ニンゲンハ…シゼンハカイノゲンイン…ホロボスベキ」

そう言い巨人は建物を破壊する。その時

「暴れるのは其処までにしてもらおうか」

巨人の前に駆動騎士が現れた。

「ロボツトカ…タイシヨウガイダガ…ホロボスベキ!」

巨人は駆動騎士に向かって拳を振り下ろした。その時、駆動騎士はある行動をした。

「戦術変形”銀”」

すると駆動騎士の横に黒い四角い物が現れ、変形し、剣になった。それを振り下ろす。

「ワレガ…マケルトハ…」

巨人は真つ二つになり、消滅した。

「災害レベルは”鬼”か”虎”だな」

駆動騎士は剣を元の形に戻した。それを見ていた者達は哑然していた。其処へサイ
タマと神子が

「駆動騎士！」

「誰だ？…君が鬼サイボーグ君の師匠だな？」

「そうだ、ジェノスは俺の弟子だ」

「なら話が早い。其処の店で話そう」

駆動騎士はサイタマと神子を連れて近くの店に入って行った。

百五十一 撃目：駆動騎士の散歩①

「え？ヒーロー協会から脱退したの？」

サイタマは驚く。駆動騎士がヒーロー協会を脱退した事を知ったからだ。

「そうだ、信用を失った場所では活動しにくいからな」

「そうか…で、お前も此処で暮らすのか？」

「その為に此処に来たのだ。それと他の奴らと会うのもついでにな」

「成程な…」

駆動騎士が幻想郷に来た理由を話す。それにサイタマは納得する。

「俺は幻想郷を散歩しながら他の奴らに会いに行く、じゃあな」

「駆動騎士、これ」

サイタマは去りゆく駆動騎士に向けて何かを投げつけた。それは

「地図か？」

「おう、幻想郷の地図だ。参考にしてくれ」

「ありがとう」

そして駆動騎士は店から出た。

「サイタマさん、大丈夫なのですか？」

「大丈夫なんじゃね？」

「ですね」

サイタマと神子は大丈夫と思い、帰って行った。

霧の湖

「此処を超えれば紅魔館か」

駆動騎士は地図を見ながら紅魔館を目指していた。その時

「おい！其処のお前!!」

「ん？」

何処からもなく声がした為そちらに向く。其処にいたのはチルノだった。今回は珍しく1人である。

「何だ君は」

「あたいはチルノ！最強の妖精だ！」

「最強か、ならばその力を見せてもらおうか」

「ふふふ…あたいの力に恐れるがいい！アイシクルフォール!!」

チルノは得意のアイシクルフォールを放つ。それは駆動騎士に命中した。

「どうだ!!」

チルノは勝ち誇ったかのように言う。だが

「成程、矛盾してるな」

駆動騎士は何ともなかった。というより戦術変形で守ったのだ。

「なに!?これなら…」

「戦術変形”銀”」

駆動騎士は黒の物体を剣に変更し、チルノが何かを言いきる前に斬りつけた。

「あ…危なかった…」

「これくらいは避けるか…」

チルノは間一髪避けた。駆動騎士は全く動じてなかった。そして剣を元に戻す。

「今度はあたいの番だ!!パーフェク「戦術変形”銃”」ゴッ!」

チルノの身体を何かが貫いた。駆動騎士が放った波動砲である。

「そんな…最強のあたいが負けるなん…て」

チルノは地面にぶつかって気絶した。

「災害レベルはせいぜい”虎”だな。……さて、日が暮れる前に向かうか」

駆動騎士は銃を元に戻し、紅魔館へと向かって行った。

「本当に幻想郷にいたんだ」

とある森の中、S級4位（原作及び村田版は5位）である童帝が駆動騎士に付けてお
い探知機で様子を伺っていた。

「けど僕1人じゃ心細いからサイタマさんの家まで向かおうと」

童帝はまず、サイタマの家まで向かった。サイタマと共に行動すれば安全性が上がる
かと思ったからだ。

百五十二 撃目：駆動騎士の散歩②

サイタマの家

「成程な、駆動騎士を追って幻想郷に来たのか」

「そう、駆動騎士さんがヒーロー協会から脱退したって聞いてね」

童帝はサイタマの家にいた。そして幻想郷に来た理由を言った（※ちなみに童帝は2回目である）。なお、駆動騎士がヒーロー協会を脱退したのは紫から聞くまでわからなかった事。

「紫さんに頼んで駆動騎士さんの背中あたりに探知機を装着させたんだ。本人は気づいてないけどね」

「流石だな。てかお前はヒーロー協会から脱退しないの？」

「僕は脱退する気はないよ、仮に脱退しても塾の講師があるからね」

「その歳で講師はすげえな……」

サイタマは珍しく驚く。実は童帝は10歳でありながら塾の講師をしている。更にIQも大人顔負けである。そして2人はパソコンで駆動騎士の様子を見た。

妖怪の山

「此処の頂上に神社があるのか」

駆動騎士は妖怪の山の入口付近にいた。これまでに紅魔館、白玉楼、永遠亭、太陽の畑に行った。

「だが会った奴らは全員個性的だったな」

駆動騎士は振り返った。今までに会った幻想郷の住人達が個性溢れる人物だった事に。吸血鬼や亡霊、更には元月の民とその近くに住む兔、そして長年生きる妖怪……どれも元の世界にいた怪人とは比べ物にはならなかった。ジエノス以上にサイボーグである駆動騎士に興味を持つ者もいた。

「しかし……四季のフラワーマスター」とキングが仲が良いとはな……」

太陽の畑で幽香と話しているキングを目撃した駆動騎士は不審に思った。聞いた話では幽香は人間との交友関係は最悪で邪魔する者は容赦なく潰すと聞いていたからだ。キング1人になった時に駆動騎士は話しかけた。

太陽の畑

「あ、駆動騎士」

「久しぶりだな、キング」

2人は共にヒーロー協会から脱退した者。しかしキングの方が先に幻想郷にいる。その為会うのは大変久しぶりである。

「キング、何故“フラワーマスター”と仲が良いんだ？」

「その事か、風見氏は俺に対しては好意的なんだ。俺に危機が迫った時は助けに来てくれた事があつた。そして俺が太陽の畑に来てからは誰も（※一部除く）近づかなくなつた」

「やはりその“キングエンジン”は今も健在か」

「そうだ」

駆動騎士の間にキングは頷く。キングは自身の異常に大きい心臓音、キングエンジン”は見た者を戦意喪失させたり、気絶させたりする事ができる（※一部除く）。更にキングの強面の顔と合わせば効果てきめんだ。

「俺は失礼する。用事があるからな」

駆動騎士はそう言って去って行つた。キングも水やりの続きをする。

「さて、此処の頂上の神社に向かうとするか」

駆動騎士は守矢神社に向けて妖怪の山を登り始めた。

「意外に生い茂っているな…」

登り始めて10分、駆動騎士は生い茂った草木に苦戦していた。だが戦術変形ですこまで苦戦していた訳では無い。

「しかし…此処の道で会っているのか…?」

駆動騎士は疑問に思う。サイタマから貰った地図には妖怪の山の見取り図は何処にも描いていない。その為勘が頼りになる。

「あれは滝か?」

駆動騎士は滝を発見した。河童達が住む場所だ。

「此処に誰かいるかもしれないな、聞いてみるか」

駆動騎士は誰かいると思いつき、滝の裏側に向かった。すると

「これは…?」

前に現れたのは河童達の工房だった。扉の横にインターホンがあったので押す。するとドアが開き、河城にとりが現れた。

「どちら様ですか？」

「俺は駆動騎士、突然だが神社への道のりを教えてくれないか？」

「守矢神社の事？それなら彼処の獣道を進むと行けるよ」

「そうか、ありがとう」

にとりは親切に守矢神社までの道のりを教えてくれた。駆動騎士は教えてもらった道に行こうとした時…

「けど盟友って人間なの？」

「俺はサイボーグだ」

「サイボーグ!!」

駆動騎士からサイボーグと聞いた途端にとりは電気ショックを受けた感じにキョトンとした。

「盟友！ちよつといいかな…？頼みたい事があるんだけど…」

「俺は別に構わないが？」

「本当!!なら話が早い!さあ工房に!」

にとりは駆動騎士を強引に引っ張って工房に連れ込んだ。

百五十三撃目：駆動騎士の散歩③

河童工房

「俺はこの”戦術変形”を用いて怪人等を倒してきた。レパトリーは豊富だ」

「(*。D。*)オオオ…」

駆動騎士の戦術変形の説明にとりは目を輝かせながら聞いていた。また、モブ河童達も目を輝かせていた。

「盟友！私のメカ造りに参考にしてもいいかな…？」

「別に構わないが悪い目的ではないだろうな？」

「も…：勿論！」

怪しいと思い込んだ駆動騎士が赤い目を細くして睨む。にとりは背筋が震えるが嘴まずに言う。だが目が泳いでいる。

「それ以前に”川の中のエンジンニア”、俺の周りにいる奴らはどうにかできないのか？」
「え？」

駆動騎士の周りには沢山のモブ河童がいた。なんせ完全なるサイボーグである駆動騎士が珍しく、メカ造りの参考にしようとして調べていたのだ。だが駆動騎士本人なウンザ

りしていた。そして数時間後…

「失礼したな、” エンジニア」

「ありがとう！盟友！」

駆動騎士はにとり達に見送られながら守矢神社まで向かって歩いた。

サイタマの家

「今の所、変化は無しか…」

童帝がパソコンを見ながら駆動騎士の様子を見ていた。サイタマは1人漫画を読みながら駆動騎士の様子を見ている。

「やっぱり、河童が興味もったか」

「え？どういう事？」

サイタマの興味深い発言に童帝は耳を傾ける。

「河童は手先が器用で色んなメカを造っててな、その為か、駆動騎士みたいな奴には目がないらしい。後ジェノスの時もそうだった」

「だから駆動騎士さんに対して目を輝かせてたんだ…」

サイタマの説明に童帝は納得する。にとり含む河童は人とも交友関係は高いが（※本

当は中くらい)、ジェノスや駆動騎士に対してはかなり好意的である(※ただし、2人にとつては迷惑なんだとか)。

妖怪の山

「もうそろそろか?」

駆動騎士は守矢神社を目指して山を登っていた。途中、白狼天狗に勝負を挑まれたが余裕で勝ち越した。更に負傷もしてはない。そして

「此処か…」

目的の守矢神社に到着した。その時

「待ちなさい」

後ろから声があったので振り向く。其処には…緑色の髪で赤と白のゴシック調の服を着た者がいた。

「誰だ?」

「私は鍵山雛、疫病神よ」

その者は鍵山雛と名乗った。

「疫病神が俺に何か用か?」

「ええ、貴方の周りから厄オーラが放たれていてね。それを集めに来たの」

「そうか、だが俺は急いでいる。なるべく早くしてくれ」

「わかったわ」

駆動騎士に言われ雛は厄を集めた。そして前に一つの人形が現れた。

「人形……？」

「これは雛人形、貴方の厄がこの人形に詰まっている。これを川に流せば儀式は終了、では」

雛はそう残してその場を去った。駆動騎士は自身の厄が詰まった雛人形をこのまま持つとくわけにはいかないのか川まで行く事にした。

「まさか神と会うとはな……」

駆動騎士はそう呟いた。だが雛は神様でも疫病神であり、人に悪影響を及ぼしたりする事がある。

「深く考える暇はない。早く済ませよう」

駆動騎士は急いで川のある場所まで向かった

百五十四撃目：駆動騎士の散歩④（戦闘あり）

「此処辺でいいな」

妖怪の山の川の近くに駆動騎士がいた。雛から貰った（？）自分の厄が集まってできた人形を川に流す為にだ。その人形を拾ってきた箆に乗せて流そうとした時：

「待って」

後ろから声がしたので振り向く。其処には少女が1人居た。

「誰かな君は？」

「私はメデイスン・メランコリー、メデイって呼んで」

「メデイ、俺に何の用だ」

「その人形を解放したくて来たの」

メデイが指さすのは駆動騎士が持つてる厄が詰まった雛人形である。

「この人形を解放……？どういう事だ」

駆動騎士はメデイが言う「人形を解放する」がイマイチわからなかった。

「私は鈴蘭畑に捨てられた人形なの、毒を吸収し続けた結果妖怪になった。だから私みたいに捨てられたり、七色の魔法使い”のように人形をこき使う人が許せないの」

「ほう…それでこの人形も解放するのか？」

駆動騎士の問いにメデイは頷く。

「だがこの人形は鍵山雛という疫病神から、川に流せば儀式は終了する」と言われているから解放はできないな」

「そう…」

駆動騎士は断った。それにメデイはしゅんとし目から涙が。それを見た駆動騎士は「ならばメデイ、お前が流すか？」

「いいの？」

「俺は構わない。それと、俺にはまだ用事があるからな」

駆動騎士はメデイに自身の厄が詰まった雛人形を渡した。

「さて、俺は守矢神社に向かうか」

駆動騎士は再び守矢神社に向かった。残ったメデイは

「人形を流せば儀式は終了する…バイバイ」

メデイは雛人形を箆に乗せて川に流して手を振った。そして鈴蘭畑へと帰っていった。その様子を茂みに隠れて雛が見ていた。

「小さい子には優しいのね…クスッ」

雛は嬉しそうだった。

守矢神社

「出ましたね！妖怪！」

守矢神社の巫女、東風谷早苗が駆動騎士に対して指を指しながら言う。

「見た目で判断するのはよくないな」

「いいえ！その姿はまさしく妖怪！騙されませんよ！」

「聞く耳をもたないか…」

聞く耳をもたない早苗に呆れる駆動騎士。そして

「仕方が無い、黙らせるか」

「やる気ですか？（・・ω・）」カカッテコイヤ!!」

駆動騎士と早苗は勝負をする事になった。

「戦術変形”銀”」

駆動騎士は黒い四角の物体を出現させ、右手に装着し剣の形にし、前を斬りつけた。

「おわわ!!」

早苗は間一髪避けた。が、着地が出来ずコケる。

「これくらいは避けらるか」

「あ、当たり前です！」

早苗は起き上がり言う。だが鼻血が出ている。駆動騎士は剣を元に戻す。

「今度はこつちです！」秘術 グレイソーマタージ！」

早苗は星の形をした弾幕を駆動騎士目掛けて放った。そして爆発した。

「やりましたか!？」

早苗は勝ったと思いい込みガッツポーズをする。だが

「成程、これが”弾幕、スペルカード”か」

「何ッ!？」

駆動騎士は無傷だった。というより”戦術変形 盾（シールド）”で防いでいた。そして再び元に戻した。

「むー！何ですかそのインチキな技は!!」

「インチキとは酷い言い方だな、俺は戦術変形を用いてやるのが俺の戦闘スタイル。インチキや卑怯ではない」

「いやー！インチキです！」

駆動騎士は自身の戦術変形をインチキではないと言うが早苗は聞いていない。

「口でダメなら実力でか…戦術変形”縄”」

駆動騎士は部品を組み合わせて装着し、背中や肩から機械で出来た縄を放つ。その縄で早苗を縛り上げた。

「何ですかこれは!? 苦しいです……!」

早苗は身動きが取れなかった。動けば動く程縄は引き締まるばかり……

「さあ、負けを認めろ」

「やです!」

早苗は負けを認める気は無い。だが動けない。

「認める気はないか……ならば」

駆動騎士は縄をくいと捻る。更に締めが強くなった。

「痛い! 痛いです! …み……認めますから許して下さい!」

早苗は負けを認めた。駆動騎士は早苗を解放した。

「これが現人神の実力か」

「悔しい……!」

早苗は屈辱的だった。駆動騎士はがっかりした。

「俺は用事がある。じゃあな」

「あ、待って下さい! これだけ聞いて下さい! 守矢神社に信仰をお願いします!」
「断る」

早苗は信仰を勧誘したが駆動騎士は却下し、早苗は落ち込む。

数時間後…

「打倒！駆動騎士！打倒！駆動騎士！」

早苗は一人トレーニングをしていた。その様子を神奈子と諏訪子がこっそり見ている。

「早苗に何があったんだ…？」

「聞いた話では駆動騎士とかいう人に負けたんだってさ」

「ふーん、それは仕方が無いか。早苗は博麗の巫女より弱いし」

「聞こえてますよ！諏訪子様！」

「地獄耳かお前は!？」

諏訪子は聞こえないように言ったのだが早苗には聞こえていたようだ。その後早苗は駆動騎士にリベンジを果たす為にトレーニングを続けた。しかし翌日

「か…肩が…！腰が…！」

早苗は酷い筋肉痛に見舞われていた。それを見た神奈子と諏訪子は呆れた。

百五十五撃目：駆動騎士の散歩⑤

「これが地下に繋がる穴か…？」

駆動騎士は山の頂上（※というより守矢神社の少し離れた所）にある温泉の横にある穴の前にいた。その様子を空中から見る機械が…

「フッフ…これで盟友（※駆動騎士）を観察できるぞー！」

機械の操縦主はにとりだった。どうやら駆動騎士の事が気になりドローンに似た機械で追尾していたのだ。だが

「何だこれは？」

駆動騎士に気づかれてしまった。そして”戦術変形 銃”で壊されてしまった。

「壊されたー!?!私の旺盛な知識を個握に踏みにじられた!?!」

予想していなかった事にとりは驚き、落ち込む。

「時間がない、急ぐとしよう」

駆動騎士は穴の中に飛び込んだ。

「随分と薄暗い場所だな…」

駆動騎士は無事着地した。途中、黒谷ヤマメとキスメに足止めされてしまったが。

「サイタマ君から貰った地図を見ると…旧都の奥に地霊殿があるそうだな、急ごう」

駆動騎士はサイタマから貰った地図を見て地霊殿の場所を確認し、”戦術変形 桂馬”でケンタウロスみたいになった。そして駆け出した。

その後、駆動騎士は地霊殿にたどり着いた。途中、旧都の住人達に足止めされてしまった時間を削られてしまった(※なお、勇儀とは何故か会わなかった模様)。地霊殿に入ると主の古明地さとりが出迎えてくれた。

「この地霊殿に来るとは珍しいですね」

「俺は単に散歩に来ただけだ」

「そうですね、変わってますね」

さとりとの会話の途中、駆動騎士が周りを見渡すとサイタマの写真に目がついた。

「何故サイタマ君の写真が…？」

流石に気になったか問う。

「私はサイタマさんのファンなのです！だから写真を飾っているのです！」

さとりは目を輝かせて言う。それに駆動騎士は引いてしまった。実はさとりはサイタマのファンである。サイタマが異変や事件を解決した事が書かれている記事やいつの間にか手に入れた写真を大切に保管している程である。

その後はさとりから質問攻めをされてしまった駆動騎士であった（※特に戦術変形のことについて）。その結果完全に遅くなってしまう、地霊殿に泊まる事になった。

「駆動騎士さんは何処で寝るのですか？」

「俺は戦術変形で困いを造り、其処で就寝する」

「駆動騎士はそういつて”戦術変形 盾”で自身の周りを困い眠りについた。さとりも眠りついた。」

翌日

「俺はまだ行く所がある。じゃあな」

「駆動騎士は再び”戦術変形 馬”にし、地上に繋がる穴の場所まで向かった。さとり

と地霊殿のペット達は駆動騎士を見送った。

一方、サイタマは…命蓮寺にいた。

「駆動騎士が幻想入りしただど!？」

「うん」

ゾンビマンにその事を話したら驚いた。

「それとヒーロー協会から脱退して此処に住むんだつてさ」

「アイツも辞めたつて事は…これで五人目か」

ゾンビマンが考え込む。現地点でヒーロー協会から脱退し、幻想郷に住むと決めたの

は…サイタマ、ゾンビマン、バング、キング、駆動騎士の5人である。

ヒーロー協会から脱退した理由←

サイタマ↓ジェノスが協会の職員に”サイタマ先生はヒーロー協会から脱退する”

と伝えた（※サイタマ本人は知らなかつた模様）

ゾンビマン↓幻想郷に住むと決めてから電話で伝えた。

バング↓ガロウの件で脱退（※というより引退）

キング↓幻想郷に住むと決めてから博麗神社に向かう前にヒーロー協会本部に行き、脱退すると伝えた。

駆動騎士↓過去の騒動で信用性を失ったヒーロー協会で活動しづらいから脱退した。

「ねーねーその人と知り合いなのー？」

その話を偶然聞いていた封獣ぬえが入り込んでくる。

「ヒーロー協会にいた頃、俺と同じ階級だったヒーローだ」

「会ってみたい！」

「言うと思ってたよ、サイタマが言うには後に来るそうだ」

「今はこっちに向かっているってメールが来た」

サイタマはゾンビマンとぬえに駆動騎士からのメールを見せた。これにぬえは更に楽しみになった。

百五十六撃目：駆動騎士の散歩⑥

「久しぶりだなゾンビマン」

「まさかお前が来るとはな…」

命蓮寺本堂、其処でゾンビマンと駆動騎士が対面した（※サイタマは用事で帰った）。

「駆動騎士、ヒーロー協会から脱退したのは本当か？」

「本当だ、信頼を失った場所では活動しづらいからな」

「ヒーロー協会はそこまで信頼が落ちているのか…」

ゾンビマンは予想以上にヒーロー協会の信頼が落ちていた事に驚く。

「簡単に言うるとメタルナイトとタツマキが原因だな、それとサイタマ君の友人の”山の四天王”と”竜族の血を引く者”にヒーロー達が負けた事もだな」

「あー成程な…」

駆動騎士はヒーロー協会の信頼を落とした事件を言った（※山の四天王↓星熊勇儀、竜族の血を引く者↓竜崎真一）。ゾンビマンはメタルナイトとタツマキが起こした騒動と、勇儀にヒーロー協会が大差で負けた事は知っていたが竜崎に関してには知らなかった。

「それよりゾンビマン、この子をどうにかしてくれないか？」

駆動騎士は自身の周りをペタペタ触ってるぬえが気に食わないらしい。

「ぬえ、駆動騎士から離れる」

「ヤダ！」

ゾンビマンはぬえを剥がそうとするが、ぬえは嫌がつて離れようとしな。これに駆動騎士は

「やはり妖怪は自分勝手なんだな」

呆れていた。其処に

「あ、お客さんですか？」

住職の聖が現れた。だがいつもと違う。

「聖…その格好は…？」

「あ、これですか？乗組員の服装ですけど？」

聖の服装はアニメにありそうな乗組員の服装だった。どうやらさつきまでそれ関連のアニメ（録画したやつ）を見てたらしい。

「いい加減自分の歳を気にしろ」

「ヤです（*、ω、*）ドヤッ」

聖は何故かドヤ顔で断る。これに流石のゾンビマンも頭を抱える。

「ゾンビマン、誰だ？」

「住職の聖だ……」

駆動騎士の問いにゾンビマンは答える。だが聖がイメージ崩壊してる為それ以降の言葉が思いつかない。

「そうか、中々若々しい住職じゃないか」

「見た目はな、本当は……BB」まだ若いもん!!」

ゾンビマンが本当の事を言いそうになつた時に聖が口止めをするかの様にゾンビマンを殴り飛ばした。それを見たぬえが飛ばされたゾンビマンを追いかけた。

「あ、すみません、では話の続きをしましょうか♪」

「お……おう」

聖の内面はゲスそうな笑顔に駆動騎士は背筋が凍る。

「これでひと通り全ての場所へ行ったか……」

駆動騎士は地図を確認しながら言う。命蓮寺を出てから神霊廟、バングの道場へと行った。その道場でバング本人と会った。

「お主もヒーロー協会から脱退して来たのか」

「ああ、信賴を失った場所では活動しづらいからな」

その時バングは弟子達と一緒に鍋をしていた。駆動騎士は元々バングと同じヒーロー協会のヒーローで階級が同じだった事から入れてもらっている。その後、バングとのヒーロー協会についての会話、そして弟子達から質問攻めをくらった。

「さて…住む場所を決めるか…」

駆動騎士は地図を広げ、自身の住む場所を探しに歩きだした。

百五十七 撃目：駆動騎士のその後

「此処は住み心地がいいな」

駆動騎士は言う。彼は今、自身の家にいた。幻想郷各地を散歩した後に住む場所を決める為、探した結果：妖怪の山の頂上の使われていない場所に家を建てて住む事にした（※ちなみに許可はもらっている）。

「ヒーロー協会から脱退したのが正解だったな、元の世界よりも住み心地がいいし活動しやすい」

駆動騎士は満足そうに言う。その時

「見つけましたよ！駆動騎士さん！」

突然早苗が現れた。どうやらヤリベンジに来たらしい。

「君は……ああ、あの時の厨二病の山の巫女か」

「厨二病は余計です!!」

駆動騎士は早苗の事を思い出すが”厨二病”をつけたので早苗はそれに怒る。

「私は貴方に負けてからめいっばい修行を積んだのです！覚悟を！」

「そうか、なら見せてもらおうか」

「そのつもりです！」

早苗はリベンジ果たす為に駆動騎士と対決した。結果は…

「弱すぎだな」

「なん…で…」

大差で早苗の負けである。早苗はボロボロになりながらも守矢神社へと帰って行った。そして夜、

「許早苗！駆動騎士！許早苗！駆動騎士！」

早苗は再びトレーニングに励んだ。その様子をひっそりと見ている影が。神奈子と諏訪子である。

「早苗…またやってるのか？」

「そうみたいね…また駆動騎士に負けたみたいで…」

「いい加減諦めた方がいいのにな」

「確かにね、けど早苗は自分の弱さを理解していないからねえ…」

神奈子と諏訪子はため息をつく。翌日、早苗はまた酷い筋肉痛に見舞われていた（笑）。

数日後

人里、多くの人で賑わう場所だが今回は違う。何故なら…

「全てを破壊せよ！我が下僕達よ！」

軍人の格好をした怪人が部下に指示を出し、建物を破壊する。それに人里の者達は逃げ惑う。その怪人の正体はシャドー大佐である。

「趣味でヒーローをやってる最強の男、はいない！こんなチャンスはあつたとは夢にも思ふまい！そうだろ？下僕達よ」

「はいっすー！」

シャドー大佐は嬉しそうに言う。本来ならサイタマがいれば直ぐに解決する。だが今回はサイタマはいない。それを好奇と見たシャドー大佐は部下を連れて人里を襲つたのだ。

「本来奴がいれば我々は死んでいる！だが奴はいない！その隙に破壊せよ！」

シャドー大佐は再び指示を出す。その時

「がっ!？」

ある人物像が部下の一人が顔を掴み、シャドー大佐の横を通り抜ける。

「誰だ!?名乗れ！」

シャドー大佐に呼び止められその人物は止まる。

「お…お前は?! 漆黒の殺戮兵器 駆動騎士…?!」

シャドー大佐は驚く。その正体が駆動騎士だったからだ。

「お前が人里で暴れている怪人だな?」

駆動騎士は部下の顔を投げ捨てて言う。彼は戦術変形でケンタウロスの姿になっていた。

「ああ、そうだ。私はシャドー大佐! あの男がいない隙にこの場を破壊し我々の住処にするのだ!」

「成程、それはくだらない事だ」

シャドー大佐は人里を襲った理由を話した。それを聞いた駆動騎士は変形を解き、元の姿となった。

「あの男とはサイタマ君の事だな? だか彼がいなくてもお前らは俺1人で十分だ。戦術変形 ”銃”」

駆動騎士は右手にパーツを組み合わせ銃の形になった。そしてシャドー大佐及び部下達に向けて発砲した。シャドー大佐は持ち前の瞬発力で避けたが部下達は消えてなくなった。

「部下は ”狼” レベルだが…お前は ”鬼” レベル…少々厄介だな」

駆動騎士は変形を解いた。そして予想以上の厄介さだったのか警戒する。

「私は元軍人だ。貴様とは育ちが違う」

シャドー大佐はソルジャーナイフを手にし駆動騎士に向かって斬りつけようとした。その時

「戦術変形 ” 八つ裂き ” 」

駆動騎士は両手にパーツを組み合わせ、無数の銀の剣の形となった。そしてシャドー大佐にめがけて斬りつけた。

「がっ!!」

シャドー大佐は口から血を吐き出しその場に倒れ消滅した。

「この世界にも…怪人はいるのだな」

駆動騎士は変形を解き、帰って行った。その様子をひっそり見ていたドローンに似た機械が

「ふふふ…今度のは頑丈だぞ」

操縦主はやはりにとりだった。前回は失敗をわきまえて頑丈にしたのだ。だが

「煩い、壊れろ」

駆動騎士に気づつかれてまたもや壊されてしまった。

「また壊された!? 私の旺盛な知識を再び個握に踏みにじられた!」

にとりは再び落ち込んだ。頑丈と言っていたのだが駆動騎士にあっさり壊されてしまったからである。

番外編 part 4

百五十八撃目：寺子屋日和

人里からほんの少し離れた場所、其処には寺子屋があつた。その寺子屋で子供達に色々な事を教える人がいた。名は上白沢慧音、彼女は見た目は人間ではあるが満月の夜になるとワーハクタクというハクタクに変身する。能力は歴史を喰う（※人間時）、歴史を創る（※ハクタク時）である。ある日の事…

「寝るな!!」

慧音がチヨークを寝ているハゲの男目掛けて投げつける。それは男のどこに当たった。痛つてーな！何すんだ慧音!!」

チヨークを当てられたのか男は怒る。男の名は、趣味でヒーローをやつてる最強の男、サイタマで外の世界から来た外来人である。見た目とは裏腹に幻想郷に住む強者ですら相手にならない程の圧倒的な力、強靱な肉体の持ち主である。幻想入りしてからは様々な異変や事件を解決した為、種族関係なく支持されている（※霊夢と早苗が妬む程）。彼は今慧音の寺子屋にいる。

「寝てたサイタマ君が悪い！」

「てか何で俺必要なんだよ！」

「ヒーローの事を子供達に教える為だ！」

「俺以外に頼めよ！」

「他は空いてないんだ！それとサイタマ君は暇なんだろう？」

「うっ…」

サイタマは詰まっちゃった。だが自分は暇なのは本当の為、言い返す事ができない。その後、慧音に言われサイタマは前に出て子供達に教えた。

「お疲れ様っす」

「すまねえな、妹紅」

寺子屋のとある部屋、サイタマは弟子の藤原妹紅から茶を貰った。

「てか慧音の授業暇だったでしょ」

「うん、暇、それと寝てしまっそうだった（寝たけど）」

「やっぱりそうでしたか、けど師匠と慧音の言い争いはこっちにも聞こえました」

「聞いてたのかよ……」

妹紅の話にサイタマはため息をつく。あの時、サイタマと慧音はえらくデカイ声で言い争った。その為隣の部屋にいた妹紅は完璧に聞こえていた。

「笑わせてもらいました」

「笑える要素あつたの？」

妹紅はサイタマと慧音の言い争いが面白かったのか腹を抱えて笑っていた。だがサイタマは笑い要素が何処にあつたのかわからなかった。

「じゃ、俺帰るわ。次来たら実戦しようぜ」

「嫌です。さよなら」

サイタマはそう言つて帰つた。だが妹紅はそれを断つた。其処へ慧音が来た。

「妹紅、また断つたのか？」

「まだ死にたくないし」

「お前は死なないだろう……」

妹紅のサイタマと実戦したくない理由に慧音は呆れた。妹紅は蓬莱山輝夜が残した”蓬莱の薬”を服用した為不老不死である。だがサイタマと勝負すると生死をさまようような感じになる為サイタマと実戦したくないのだ。

「ところで妹紅、気になる事があるんだが……」

「何？結婚はやダヨ？」

「そういう事じゃない…けど…しよぼん」

慧音は妹紅に言う事は違うが思っていた事を当てられたのかよろめき、傷ついた。しかし直ぐに立ち直り

「どうしてサイタマ君の弟子になろうとしたんだ？」

「師匠の弟子になれば強くなれると思ってるね」

「そうか…けど動機は何なんだ？」

「動機ねえ…」

妹紅は少し黙る。そして…

「私はあの時…」

妹紅はサイタマの弟子になろうとした動機を話した。

百五十九撃目：弟子入り経由

この話は、地霊殿編が終わった後の話である。by Trip 辻上
迷いの竹林

此処の竹林は一度踏み入れると脱出が困難になる事で有名である。また、幻想郷で唯一の診療所、永遠亭はこの竹林の中にある。その場所から離れた場所に、一軒の小屋がある。其処に住んでいるのが：藤原妹紅である。彼女は人間である。しかしただの間ではない。不老不死なのである。犬猿の仲である蓬莱山輝夜が月の都に帰る際に残した（というより忘れた）蓬莱の薬を服用し、不老不死となった。その為人とはあまり接せずにこの迷いの竹林で小屋を建てて暮らしているのだ。また寺子屋の教師、慧音とは仲がいい。そんなある日の事：

「ヒーロー…?」

妹紅は文々。新聞を見ながら顔を顰めた。その見出しには…

『ヒーローサイタマ！妖怪の山に吹き出た間欠泉の原因を探り解決！』

と、書かれていた。そしてサイタマが写った写真も掲載されていた。

「ヒーローね…」

妹紅は興味なさそうに呟く。妹紅は慧音と違って情報や流行に乏しい上に興味事がほとんどない。その理由で慧音とは話が噛み合わない事がある。

「幻想郷も変わったもんだな。異変は博麗の巫女が解決してたのに今はヒーローのハゲが解決してんのか」

妹紅は寝転がりながら言う。その時

「へーくしょん!!」

大きなクシヤマが鳴った。サイタマである。

「誰か俺の噂でもしてんのか…?」

サイタマは辺りを見渡しながら言う。サイタマは幻想入りしてから様々な異変や事件を解決した為幻想郷中にその名が広まっている。おかげで声をかけられたり、強者から勝負をしかけられたりする。自身が元々いた世界では無かった事だ。彼は今散歩をしていた。普段ヒーロー活動時に着るヒーロースーツを着て。

「ヤツベエ…道迷った…」

サイタマは髪の毛のない頭をかく。散歩に来たのはいいものの迷いの竹林に踏み入れてしまい出られなくなったのだ。

「まだ買い物もしてねえのに……」

サイタマは愚痴を零す。その様子を見ている影が……

「あいつがサイタマか」

妹紅である。散歩しているサイタマを見つけ、隠れながら後を追っていた。

「ん？」

サイタマは振り向いた。妹紅はすかさず隠れる。

「なーんか見られている気がするけど気のせいかな？」

サイタマは立ち止まって考えるが気のせいだと思い。再び歩き出す。一方妹紅は

「危なかった……」

妹紅は胸を撫で下ろす。サイタマに気づかれたかと思ったからだ。

「けど何処へ行くつもりなんだ……？」

妹紅は再びバレないようにサイタマの後を追う。その時

「ん？」

妹紅は何かに気づいた。何やらおぞましい呻き声に……妹紅は後ろを振り返ると……案の定、怪物がいた。

「グルルル……」

怪物は妹紅に顔を近づけて唸る。その距離30cm程。

「ヤベエ!」不死「火の鳥く鳳凰天翔く」!」

妹紅は怪物に目掛けて鳳凰の形をした炎をぶつけた。だが

「キカヌ」

「何だと!」

怪物は無傷だった。動揺してしまつた妹紅の隙について怪物は拳を入れた。

「ガツ!!」

妹紅は飛ばされたい竹にぶつかつてしまつた。

「身体が…動かない…このままじゃ…殺られる…」

不老不死とはいえどもダメージは普通に通るし怪我もする。今の妹紅は怪物に殴られたのと竹にぶつかつた衝撃のダメージが蓄積されている。更に血が流れている。妹紅は逃げようとすが身体が思うように動かない。その姿の妹紅に容赦なく怪物は追い打ちをかける。その時

「なんだコイツ」

突然サイタマが怪物の目の前に現れた。

「お前…大丈夫か…?」

サイタマは心配そうに妹紅に声をかける。

「大丈夫…けどアンタも逃げないと…」

妹紅は残る力を振り絞ってサイタマの後ろにいる怪物を指を指す。

「大丈夫」

サイタマは妹紅からの“逃げる”を無視し怪物を近づく。サイタマに気づいた怪物は襲いかかる。

「煩い、寝てろ」

サイタマは怪物を殴り飛ばした。そして空中で爆発して消えた。

「また…ワンパン…か…」

一撃で終わってしまった事にサイタマは項垂れる。妹紅は半信半疑の状態だった。サイタマが去ろうとした時

「待って！」

「ん？」

妹紅がサイタマを呼びとめる。

「私はこの迷いの竹林で一人暮らしている藤原妹紅という者です！貴方の弟子にしてください！」

「はい」

妹紅はサイタマに弟子入りを志願した。サイタマはそれを許可する。その数秒後…

サイタマは“え？”と聞き返した。

数日後…

妹紅はサイタマの家の扉の前に立ち、ひと呼吸してから

「師匠！」

と呼んだ。その時扉が開きサイタマが現れた。

「マジで来やがったよコイツ…」

サイタマはウンザリしながらも妹紅を自身の家に入れた。

詳しくは四十九撃目で

百六十撃目：妹紅の変化

「てな感じ」

妹紅のサイタマに弟子入り志願した理由を慧音に話した。慧音は納得、すると思いきや……

「ちよつと単純すぎないか？」

「何処がア？」

「何処がつて……サイタマ君の強さを理解していたのか？」

「してたよ」

「ならそれでいいが……」

どうやら慧音は妹紅がサイタマの強さを理解して弟子入り志願したのだったというのに納得していなかったが妹紅が「してた」と聞いて納得した。更に

「ところでサイタマ君の弟子になってから何か変わったのか？」

「まー師匠がやってたトレーニングは続けてるんだけどね……」

「そのトレーニング法ってまさか……」

「そう、まさかのあれ」

妹紅が言った”師匠がやってたトレーニング”に慧音は引いた。まさか本当にやる奴がいたとは…という顔で。

ちなみにサイタマが実際にやって強くなったトレーニングがこれ

・腕立て伏せ100回

・上体起こし100回

・スクワット100回

・ランニング10km

これを毎日やる。

・1日3食必ず食べる。

朝はバナナだけでもいい。

・夏も冬もエアコンを使わない。

サイタマにとってはこれが精神を鍛えたんだとか。

サイタマはこれを3年間やって今の圧倒的な力と強靱な肉体を手に入れた。だが内容はあまりに一般的である為”ふざけているのか”と言われる(※本人にとっては過酷だった)。

「で、強くなれたのか？」

「試した事ないからわかんね」

トレーニングはしてたのに試した事のない妹紅に慧音はズッコケた。しかし直ぐに立ち直り

「わかった、妹紅、外に出てみる」

「何でえ？」

「いいからはよ来い！」

「うーす」

慧音に言われ妹紅は渋々外に出た。

「で、何ささんの？」

「この岩に向かって拳を当ててみる」

そういう慧音の横には何かデカイ岩があった。

「わかった」

妹紅は岩に近づき構える。そしてゆるーく拳を当てた。その時

「え？」

慧音は目を疑った。妹紅が拳を当てた場所からヒビが割れ、岩は粉々に砕けてしまった。

「嘘だろ!？」

慧音は驚く。まさかあのトレーニングで強くなったのか!?の顔で。だが一番驚いたのは妹紅だった。

「え……ええええええ……師匠ー!!」

妹紅は震えた。まさかあのトレーニングで本当に強くなれたと思わなかったからだ。心の中では”師匠の言う通り努力は必ず報われるのか!”と言っているが外は信じられなかった。妹紅はサイタマの家まで走って行った。しかしその走りも凄く速くなっていた（※だがサイタマよりは遅い）。

サイタマの家

「今日もいい天気だな」

サイタマは外に出て背伸びをする。肩にいた少名針妙丸も。その時

「師匠ー!!」

妹紅が物凄い速さで向かってきた。だがサイタマは慌てる事なく妹紅を受け止めた。

「どうした妹紅」

「師匠!聞いてください!あの……その……」

「まず落ち着け」

サイタマに言われ妹紅は深呼吸をする。落ち着いたか話した。あの事を

「マジか！俺が言ったトレーニングしてたのか！」

「はい！師匠の言った通りの事を毎日続けました！」

「結果は？」

「強くなれました！努力は必ず報われるのですね！」

「よかつたな！じゃあ実戦するか！」

「それは嫌です！」

サイタマは自身がやったトレーニングを妹紅がやってくれた事と強くなった事に喜んだ。そして実戦しようと言ったが妹紅はやはり断った。

「てか思うけど何で俺と実戦したくないの？」

「死にたくないからです」

「お前は死なんだろ」

「いや師匠の攻撃当たると生死をさまようのです」

「どんな言い訳だ……」

妹紅は無茶苦茶すぎる言い訳にサイタマは呆れる。

「まあいい、俺もそんな気分じゃなかったし」

「なら何で聞いたんですか!？」

「言ってみただけだ。それでもお前は嫌がるんだな」

サイタマは笑いながら妹紅を撫でる。

「恥ずかしいです…」

妹紅は顔を朱色に染め、照れた。

「けど、サボらずに頑張れよ」

「はい!」

妹紅は帰って行った。サイタマは自分の家へと入って行った。その様子を見ていた影が2つ…聖白蓮と豊聡耳神子である。

「師弟って…いいものですね…」

聖は涙を流しながらサイタマと妹紅のやり取りを見ていた。と、横から神子が

「君の所にも弟子の妖怪がいるだろ?」

「いますけど…大半がならず者で役立たずで迷惑かけるし(以下略)…やっぱり妖怪を弟子にするのはよくないのでしょうか…?」

「それ矛盾してないか?人と妖怪が仲良く暮らせる平和な世界を望むというのに…」

「確かにそうです。ま、ストレス発散に使える道具ですからね(???)(」

「ええ…」

聖は笑顔で内容は若干酷い事を話した事に神子は思わず引いてしまった。

次世代！博麗の巫女編

百六十一撃目：朝から騒がしい博麗神社

「相変わらずサイタマの人気はすげえな…」

魔理沙は自身の家で新聞を読んでいた。見出しにはやはり

『ヒーローサイタマ！またもや人里で暴れた怪人を撃破!!』

サイタマに関する記事だった。サイタマは圧倒的な力と強靱な肉体を持ち、人間の身体能力を遥かに超えた超人に近い人間である。その戦闘力は幻想郷に住む実力者でも相手にならない程である。彼が幻想郷に来てから様々な異変や事件を解決した為今最も幻想郷で支持されている上に人気である。

「そーいやサイタマ家行った時…」

魔理沙は思い出した。それは…

数日前

「サイタマ…相変わらずの物資の多さだな…」

「ああ、毎日の様に届くからな」

魔理沙はサイタマの家の前にある大量のダンボール箱に驚いていた。サイタマ曰くお礼で貰っているのだが毎日届く為本人は少々ウンザリしている。

「これどうしてんの？いつも」

「聖とかにやってたけど今はジェノス所に送ってんな」

「あーあの機械仕掛けの弟子か」

その事に魔理沙は納得した。サイタマは今でも聖とかに物資を分けている。しかし余りにも数が多すぎる為、自身が元々いた世界にいる弟子のジェノスに送っているの事。

「そのおかげでどんどん減っていくから助かる」

「それなら私の所にも分けて欲しいぜ…」

魔理沙がそう言った途端、サイタマは「いいけど」と言い、魔理沙は心の中でガッツポーズをした。

「さて、霊夢の所にも行つてくるか」

魔理沙は外に出て箒に跨り友人の霊夢の博麗神社まで向かった。

博麗神社

「相変わらず虚しいな…」

魔理沙は辺りを見る。誰一人おらず何か寂しい。それもその筈、博麗神社は人里から結構距離がある上に妖怪達が住み着いている為近づき難いのである。だからいつも賽銭箱は空っぽである。魔理沙が鳥居を潜ると

「あー霧雨さん！おはようございますー！」

「えっ？」

霊夢が現れた。だが何処かおかしい。普段、霊夢は魔理沙に対して結構冷たいもしくは無視である（※魔理沙以外の人物に対しても）。しかし今日の霊夢は魔理沙の事を「霧雨さん」と言い、しかも丁寧語で挨拶した。

「霊夢…何処かおかしいのか…？」

「え？私はいつも通りですけど…？」

魔理沙は明らかにおかしい。というより不自然すぎる霊夢に戸惑う。だが霊夢はいつも通りと言う為ますます頭がこんがらがった。その時

「あら、魔理沙来てたの?」

「霊夢!」

突然神社から霊夢が現れた。

「霊夢…本物か?」

魔理沙は恐る恐る問いかける。それに対し霊夢は

「本物よ、てかどうしたのよ」

「こつちが聞きたいよ!てかこの人誰!」

魔理沙は不自然すぎる霊夢に指さしながら本物の霊夢に聞く。

「あーその子?私の後継にある博麗の巫女よ」

「後継!?てか早くね!」

不自然すぎる霊夢の正体は霊夢の後継になった(というよりなってしまった)博麗の巫女だった。

「朝起きたら寝床にいたのよ。話聞いたら紫が勝手に決めてきたのよ」

「霊夢様!私は紫さんに勝手に決められたのではなく自ら志願したのです!」

「本当は?」

「勝手にです」

後継の博麗の巫女は紫に無理矢理霊夢の後継者となってしまうたの事。だが本人は嫌がってなかった。何故なら霊夢のファンだからである。其処へ

「朝からうるせーぞ、何騒いでんだ」

長身の女性が現れた。黒い巫女服を着ており、長い髪を結んでいた（※ポニーテール）。

「先代の巫女様、おはようございます」

「先代の巫女!？」

魔理沙は驚いた。何故なら現れたのがこの世にいないはずの先代の巫女だったからだ。

「何で現世にいんだよ!？」

「ちっちゃい事はキニスンナ」

「気にするわ!」

「落ち着け霧の字」

「名前で呼んでくれよ!」

魔理沙と先代の巫女の口論が始まった。霊夢と博麗の巫女後継者は生暖かい目で見守っていた。

霊夢の後継者となった人の名前と特徴←

風鈴 鈴奈

霊夢の後継者となった人。種族は当たり前の事人間である。年齢は不明。

霊夢のファンで博麗信者である。その為守矢神社を敵対しているが霊夢と違いサイタマの事は敵対しておらず仲良くしている。

程度の能力はまだない。

百六十二撃目：鈴奈の修行？

博麗神社

夜明け前、博麗神社敷地内で次期博麗の巫女、風鈴鈴奈が1人前の博麗の巫女になる為に修行をしていた。霊夢の監視の元。

「はいはい休まない！」

「や…休ませて下さい…」

鈴奈は疲れ果てていた。なんせ修行を深夜0時からしている。今は6時。休まずに6時間ぶつ通しでしている為疲れるのも当たり前である。

「てか霊夢様もこんな修行をしたのですか…？」

「してない」

「えー…」

鈴奈の間に霊夢は「自分は鈴奈みたいな修行はしなかった」と言い、鈴奈は項垂れる。

「頑張ればいずれ強くなるわよ」

「そういう霊夢様は”努力は報われない”と言っていましたよね？」

「ギクツ！凶星…」

言ってる事と自身の経験に矛盾している事を言われ汗をかく霊夢。更に追い打ちをかけるように…

「本当は生まれつき才能があったから努力する必要はないとかじゃないんですか？」

「!？」

「そっちが凶星ですか…」

霊夢の汗の量が更に増える。だが事実である。霊夢は生まれつき才能があった。その為努力はしておらず努力が報われると思っていない。まさに努力で強くなったサイタマとは正反対である。だが修行不足である為未熟である（※最近では先代の巫女により少しは進歩したらしい）。

「ななな何で知ってんのよ!!」

「紫さんがこっそりと教えてくれました」

霊夢に関しては紫がこっそりと教えてくれたの事。その事に霊夢は心の中で”あのBB A覚えておけよ…!”と誓った。

人里

「我が博麗神社に信仰をお願いします！」

「お願いしまーす!!」

信者獲得の為に霊夢と鈴奈は人里で信仰の呼びかけをしていた。博麗神社は人里から距離があり、妖怪が住み着いている為近づき難い為、信仰する者が少ないからである（※本当は鈴奈の家族くらい）。

「中々集まらないものですね………霊夢様？」

鈴奈は霊夢のいる場所に振り向く。その光景は…

「だから何で私の横でやんのよ!!」

「此処じゃないんですよ!!」

霊夢は守矢神社の巫女、早苗とまた口論をしていた。互いは信仰集めの時だけはライバル心を燃やしている。

「だから私を舐めてんじやないわよ！」

「霊夢さんには言われたくないです！」

「そんな胡散臭い能力を信仰集めに使う暇あったらもつと別のものに使いなさいよ！」

「そういう霊夢さんは誰も来てないじゃないですか！」

「黙つとれい!!頭弱い癖に!!」

「またそれかあ…!!」

早苗は怒りが爆発し、霊夢に弾幕をぶつけた、それに怒った霊夢も早苗に弾幕をぶつ
ける。くだらない理由で霊夢と早苗の喧嘩が始まった。この光景に鈴奈は呆れていた。

百六十三撃目・鈴奈の奮闘と先代の巫女の思い出話（?）

どうも、博麗の巫女次期後継者となつた風鈴鈴奈です。本名です。私は今必死に走つてます。え？何でかつて？それは…

「まてやゴラア！」

「助けてえええええええ!!」

鈴奈は必死に走る。後ろからは…先代の巫女が鬼の人相で追いかけてくる。

「オラオラ！もつと本気出せや！じゃないと私に追いつかれるぜえ？」

「これが本気です!!」

”もつと本気だぜ”という先代の巫女に対し鈴奈は”これで本気”と言り返す。だが

「嘘つくなや!!まだ出せるやろ!!」

「無理です！」

所詮鈴奈は人間。人間を超越した先代の巫女とは身体能力が遥かに違う。そして2人の距離は段々と狭くなってきた。その時、先代の巫女は何処から出したのか魔改造された（※本当は自作）お祓い棒を取り出した。

「私に追いつかれたら八つ裂きじゃけ!!」

「これなら霊夢様の方がマシだああああ!! (涙)」

鈴奈は先代の巫女に追いつかれないよう走る。しかも泣きながら。しかし先代の巫女はお祓い棒を鈴奈に目掛けて振り下ろす。鈴奈は当たらないように左右や身体を斜めに傾けて避ける。

5時間後

「つ…疲れた…」

「まだまだやのー風の字」

鈴奈は疲れ果てていた。先代の巫女は全くと言っていいほど疲れていない。

「先代の巫女様は何で疲れないのですか…」

「私はアンタと鍛えが違うからね!」

先代の巫女は笑いながら言う。鈴奈は頷く事しかできない。

「そーいやこの前、外来人と戦ったんだよね」

「外来人…?まさか!」

「ああ、”アイツ”だよ、強かったなー久しぶりに本気出せたわ」

「勝敗は…?」

「私の負け!」

「どれだけ強いのですか!?!その人!」

先代の巫女がある外来人との戦いに負けた事に驚きを隠せない鈴奈。

「名前は…?」

「確か…サイタマって言ってたな…」

先代の巫女はサイタマとの激戦を思い出し、その事を話した。

数ヶ月前…

幻想郷のとある場所。其処に先代の巫女とサイタマがいた。

「で、俺に何の用なの?」

サイタマが腕組みをしながら先代の巫女に言う。

「お前さんと戦いたいからだ」

「それって本気出さなくてもいい？」

「そーゆうのはお前さんの自由でいいよ」

先代の巫女はとにかく面倒な性格。サイタマに対して”本気を出すかは出さないかは自分で決める”と言う。それにサイタマは呆れ

「じゃあ本気出さんとくわ。お前がどれだけ強いかわからんし」

「そうか…なら…始めようか!!」

先代の巫女は合図と同時にサイタマに向かった。そして

「オラッ!!」

「え?」

サイタマは何されたのかわからず顔に衝撃が走る。先代の巫女が殴ったからである。目にも止まらぬ速さで。

「ありや?ちよつと力入れすぎたか…?」

先代の巫女は戸惑う。サイタマの返事が返ってこないからである。その時
「いや…むしろその方がありがてえわ…!」

サイタマは何事もなかったかのように起き上がる。多少汚れや傷はあるものの特に変わった所はない。

「今度はこっちから行くぞ」

「ほう…」

サイタマは力を込めて（※本気ではない）先代の巫女を殴る。

「あ…」

サイタマは力加減を間違えたか先代の巫女が地面にめり込んでしまった。サイタマは心配そうに「おーい大丈夫かー？」と呼びかける。その時

「スキあり!!」

「おわ!?!」

めり込んだ穴から先代の巫女が飛び出てきた。だが反射神経が非常にいいサイタマは避ける。先代の巫女は再び地面に着地する。

「流石”趣味でヒーローをやってる最強の男”だねえ…本気出さねえとな…」

「俺もだ…！本気でいかせてもらおうぞ!!」

サイタマと先代の巫女、共に本気を出し、連続パンチを繰り出した。どちらのパンチも破壊力はヤバイ。当たれば重症では済まない傷になる程だ。だが2人のパンチは打ち消し合うように互いの拳にぶつかっている。

「中々やるじゃねえか…!!」

「そつちこそ!!」

サイタマ、先代の巫女はお互いに褒め合いながら連続パンチを繰り出している。そし

て2人は後ろへ下がる。

「ハア…ハア…何てタフさだ…！」

「それを言うならお前もな」

人間を遥かに超えた身体能力を持つ2人の勝負は互角だった。だが先代の巫女は息を切らしている。

「このままじゃまずいな…仕方が無い！サイタマ、私の奥義を見せるよ」

「おう、見せてみろ」

先代の巫女は精神統一し、力を溜める。そして

「先祖代々博麗奥義!! 夢想博麗拳!!」

先代の巫女は右手に全ての力を注ぎサイタマに向かう。これにサイタマは

「それがお前の奥義か、なら俺も見せるぜ。必殺マジシリーズ…HEROパンチ!!」

サイタマはマジ殴りの最終形態のHEROパンチを向かってきた先代の巫女に目掛けて当てた。その時先代の巫女は夢想博麗拳をサイタマがHEROパンチを放つたと同時に放っていた。2人の拳はぶつかり大きな衝撃波が生まれた。その衝撃波は幻想郷各地に響き渡った。そして…

「いい勝負だったぜ」

「(っ)ち(っ)そ!!」

勝負の結果、サイタマの勝利に終わった。そして先代の巫女と拳を合わせた。その後サイタマとの戦いで重症を負った先代の巫女は永遠亭に行き集中治療を受けたが1週間で完全に回復した。その後、先代の巫女はサイタマと仲良くなった。

「もう1度戦いたいもんだな（笑）」

「よく呑気に言えますね…」

先代の巫女は笑いながら言う。鈴奈は話が長かったのかやつととれた疲れがまた出てきた。だが鈴奈の疲れを無視した先代の巫女は

「よし！続きやるか！」

「またですか!?!まだ疲れ取れていないですよ!」

「休憩時間が予想以上にオーバーしてんだよ、その遅れを取り戻すよ!」

「えー…」

鈴奈は嫌々な返事をするが仕方が無くまた走り出した。先代の巫女に追いつかれないうち必死に。それが原因になったか翌日、鈴奈はひどい筋肉痛をあげた。

百六十四撃目：初めての妖怪退治

鈴奈です！立派な博麗の巫女後継者になる為の修行をして数ヶ月が経ちました！そしてその朝…霊夢様から

「鈴奈、妖怪退治に行くわよ」

「え!?!」

朝食を食べてる最中に霊夢の発言で鈴奈は茶を口から吹き出そうになった。

「今…何て言いました…?」

「何って…妖怪退治よ」

「本気ですか!?!私はまだ未熟ですよ!?!」

鈴奈は慌てて言う。鈴奈は霊夢や先代の巫女からの厳しい修行を毎日休まずに続けた。だが不安である。

「けど先代の巫女様から結構鬼畜なトレーニング受けたんでしょ?大丈夫しょ」

「全然大丈夫じゃないですよ!?!」

「じゃ、行きましようか♪ほら早く支度して♪」

「顔が怖いです…」

嬉しそうに言う霊夢に対して鈴奈は背筋が凍る。何故なら霊夢の顔が結構ゲスかったからである。

道中

「あのー霊夢様…?」

「何?」

「妖怪って…:どのような感じで出るのですか…?」

鈴奈は不安しかない。第一妖怪退治をするのは初めてである。博麗の巫女、次期後継者になる前はごく普通の暮らしをしていた。更に霊夢が妖怪退治する姿を見た事が無い為参考にできない。

「普通によ、普通に」

「具体的に言っ下さい…」

霊夢の大雑費すぎる説明に鈴奈は項垂れる。その時

「シャー!!」

「な、何!?!」

突然声がした為鈴奈は首を慌ただしく振る。そしてその声の主が姿を現した。霊夢は相変わらず普通である。

「シャーシャシャシャ！お前が博麗の巫女の後継者だな？」

「あ…貴方は!!」

「俺はカマノジャク！怪人さ」

声の主はカマノジャクと名乗った。どうやら怪人らしい。

「か…怪人!?妖怪じゃないのですか!?!」

「妖怪?そいつ等とは別者だ。だが細かい事はいい！お前の命を頂戴いたす！」

戸惑う鈴奈にお構い無しにカマノジャクは鋭く尖った刃物の腕を振り下ろした。

「おわわわ!!」

「チツ…避けられたか…」

鈴奈はギリギリだが避ける。カマノジャクは舌打ちをするが再び腕を振り下ろす。

鈴奈はやはりギリギリで避ける。

「どうした!?!避けてばかりでは勝てぬぞ?」

「ぐぬぬぬ…こうなったら…」

鈴奈は覚悟を決め、カマノジャクに向かって拳にを振り下ろした。

「グワツ!?!」

「お……？」

その拳は見事命中し、カマノジャクは倒れた。鈴奈自身も信じられなかった。 ”あの数ヶ月間でこんなに強くなれたのか!!”と心の中で言う。其処に霊夢が

「やればできるじゃない」

「霊夢様！何処にいたのですか!？」

「彼処」

霊夢の指さす先には低木があつた。実は霊夢は隠れて鈴奈の様子を見ていたのだ。

「後は……私がやっておくわ」

霊夢は倒れているカマノジャクに向かいお祓い棒を変化させてカマノジャクの身体に突き刺した。血が吹き出し霊夢の顔に浴びる。

「霊夢様……？」

「まだ動いていたからトドメ刺しただけよ？」

「そ……そうです……か」

「鈴奈!?ちよつと!しつかりしなさい!」

鈴奈は気を失い倒れてしまった。霊夢が慌てて意識を取り戻そうとする。実は鈴奈は血を見たり、グロテスク系は大の苦手である。その為怪我をしないように用心深く歩いたりする。今回気絶した理由は霊夢の顔に返り血があつたからだ。

博麗神社

「まさか…血を見るのが嫌いだったとはね…」

「ごめんなさい…」

鈴奈は深く謝る。だが霊夢は「そんな深く謝らなくてもいいのに…」という目で見ていた。

「ま、とりあえず怪人を倒せた事は褒めてあげるわ」

「ありがとうございます！」

鈴奈は深くお辞儀をする。霊夢は「もうどうにでもなれ」と思っていた。

「じゃ、克服しましょうか」

「何をですか？」

「アンタの血を見るのが嫌いを克服する為に」

「遠慮しておきます…」

鈴奈は断ろうとする。だが

「逃がさないわよ？」

霊夢は結界を貼り、鈴奈を逃げれなくした。

「さあ…行きましょう♪」

「嫌だー!!」

嫌がる鈴奈をお構い無しに霊夢は奥の部屋へと連れていき、R―15向けや残酷な描写のある映像を見せて鈴奈の“血を見るのが苦手”を克服させようとした。だがあまりにアレだったのか鈴奈は翌日の朝まで気絶したまんまだった。

百六十五撃目：鈴奈：努力報われた!?

あれから鈴奈は先代の巫女による厳しく鬼畜な修行を積み重ね…ついに！（※霊夢は先代の巫女により）お前は参加しなくていい”と言われた）

「うおおおお!!」

鈴奈は岩の上に立ち、朝日に向かって叫ぶ。

「まさかこの短期間でここまで強くなれるとは…!」

先代の巫女は驚きを隠せない。自分でも鈴奈がここまで成長するとは思ってなかったからだ。

「鈴奈、”アレ”を使ってみろ」

「はい!」

鈴奈は岩から飛び降り、先代の巫女の横で”アレ”を使った。それは…

「夢想封印!!」

ご存知、霊夢が得意とするスペルカードの1つ”夢想封印”である。今まで鈴奈は当たり前の如く失敗ばかりだったが先代の巫女により鬼畜なトレーニングのお陰でちゃんと放てるようになったのだ。ちなみにバリエーションも豊富。

「は…放てるようになったああああ!!」

今までの努力が報われたのか鈴奈の目から滝のように涙が溢れた。

「やったな! (この子…霊夢より努力家だよかった…)」

先代の巫女は鈴奈の肩を叩く。心の中では「霊夢より努力家だった」と思っている。

実際、霊夢は努力が報われるとは思ってないからな (笑)。

「鈴奈! 次は…」

「次は!」

「それは……………これを飲み込め」

「え?」

先代の巫女の手には何かおぞましい物が。

「何ですか…これ?」

「先祖代々博麗の巫女にまつわる秘薬」

先代の巫女によると博麗の巫女として立派になった者の証として飲むことになる秘薬。しかし匂いがキツイ上に物凄く苦くて不味い。(※霊夢によると)。

「これ…飲むのですか?」

「うん。けど…これしかないんだよねえ」

「えー…」

呑気に言う先代の巫女に対し鈴奈は不安しかなかった。だが証なので飲むしかない。鈴奈は仕方が無く飲むことにした。口に入れた直後、全身が雷に撃たれた感じになった。

「み…水を！」

「ごめん、ない」

「ふざけんな!!」

本来、秘薬は水と飲めば苦味と不味みは消えてなくなる。だが鈴奈は水無しで飲んだ為苦味と不味さが全体に伝わり、痺れたのだ（※ちなみに霊夢も水無しで口に入れた）。その後、苦味と不味さ々に耐えて飲み込めた。

「し…死ぬかと思った…」

「よー頑張った」

危うく天国に行く寸前だった鈴奈に対し先代の巫女は相変わらず普通に肩を叩く。

数日後

「鈴奈！今回はとある人と戦ってもらおうぞ」

「それって…誰ですか…?」

幻想郷にあるとある荒野。其処に先代の巫女と鈴奈がいた。何なら鈴奈は誰かと戦うの事。

「この人だ」

先代の巫女は紹介した。その人物とは…

「君が博麗の巫女後継者の風鈴鈴奈か」

「あ…貴方は!?!」

鈴奈の前に現れたのは黒い人造人間。元ヒーロー協会S級6位（原作及び村田版は9位）、漆黒の殺戮兵器 駆動騎士だった。

「最近幻想郷に住むと決めた外来人だ」

「この人って…ヒーロー協会の駆動騎士さんですよね!?!」

「元ヒーロー協会のヒーローだ。今はフリーだ」

駆動騎士は幻想郷に行く際にヒーロー協会から脱退している（※理由は信頼を失った場所では活動しづらいから）。

「結構手強いらしいぞ、じゃ後は自由に」

「ちよつと!先代の巫女様!?!」

鈴奈は止めようとしたが先代の巫女はその場を去った。場は急に静かとなった。

「せ…先代の巫女はいないですけど！は…始めましょう！」
「そうだな」

鈴奈は若干嘔みながらも駆動騎士との勝負を始めた。

博麗神社

「何で私はダメなんですか」

霊夢が頬を膨らませながら先代の巫女に言う。

「お前じゃ宛にならんからだ」

「むー」

先代の巫女にばっさりと言われ霊夢は再び頬を膨らませる。

「可愛い…」パシヤ」

「撮らないでよー！」

あまりに可愛かったのか先代の巫女は携帯を取り出し頬を膨らませた霊夢を撮った。これに霊夢は赤くなり先代の巫女をポカポカと叩いた。なんとも微笑ましい光景ですな。

百六十六撃目：博麗の巫女後継者 v s 漆黒の殺戮兵器

「先手必勝です！」

「ほう……」

先に仕掛けたのは鈴奈だった。移動速度は人間とは思えない程速い。

「右ストレート！」

先代の巫女による鬼畜で厳しい修行で力をつけた拳は岩を破壊できる程の威力になっっている。それを駆動騎士目掛けて放った。だが

「あまい」

「え!？」

駆動騎士はそれを片手で止めた。そして鈴奈を地面に叩きつけた。

「なんで……?！」

鈴奈は理解できなかった。速さも力も駆動騎士より上だと思っていた。しかし欠点があった。それは……駆動騎士の実力や戦闘態勢を知らない事だ。

「解除」

駆動騎士は鈴奈の右ストレートを止めた腕が変化し始めた。その腕からは幾つもの

パーツが外れ四角くなり、駆動騎士の横に落ちた。

「お前の腕力は確かに修行前よりは強くなっていると先代の巫女から聞いた。当たれば硬い物でも壊せる威力だ。だが俺の戦術変形で造りあげるパーツはお前の拳では壊せない」

「くっ……それが貴方の戦闘態勢ですか……！」

鈴奈は悔しがっている。そして駆動騎士の戦闘態勢がわかった。駆動騎士は四角に収まっているパーツを組み合わせ攻撃をする。レパトリーは豊富である。更に頑丈であり破壊不可能である。

「打撃がダメなら弾幕です！」

鈴奈はスペルカードを取り出し放った。

「秘符”ソメイヨシノ”!!」

桃色で桜の形をした無数の弾幕が駆動騎士を襲う。

「これは避けられませんよ!!」

鈴奈は自信があつた。それが的中したのか駆動騎士は煙に包まれ爆発した。

「いくら貴方が強くても弾幕には勝てな「成程、オリジナルの弾幕か」へ!?!」

鈴奈は驚く。駆動騎士の声がしたからだ。何も無かったかのように。そして其処には……黒色の盾のような物が

「威力はありそうだな。遅れていれば俺は傷を背負っていた」

「戦術変形」盾 で鈴奈の弾幕を防いだのだ。しかし無傷ではない。駆動騎士の戦術変形「盾」で防げるのは前方だけである。その為後方はガラ空き。それに鈴奈が放った「秘符「ソメイヨシノ」」は前方だけでなく後方にも弾幕が行き渡る。その為駆動騎士は前方は防げて後方は防げず当たってしまったのだ。

「では俺も本気で行かせてもらおうぞ」

「望むところですよ！」

駆動騎士は本気を出した。鈴奈は構える。その時

「!？」

鈴奈の何を何かが横切った。幸い修行で反射神経の良くなった鈴奈は避ける事ができたが頬は傷つき血が流れた。

「血…？傷…？一体何を!？」

「よく避けれたな。もし避けられなかったらお前の顔は横に真つ二つだった」

駆動騎士の右手を見ると剣の形をしていた。戦術変形「銀」である。これを聞いた鈴奈は「反射神経鍛えておいてよかった…」と思った。だが

「戦術変形…解除。変形、”銃”」

駆動騎士は剣から銃の形に変えた。鈴奈に向かってマシンガンの様に放たれた。

「わわわわ!!」

鈴奈は慌てて避けた。何とか隙を掴みたいのだが駆動騎士が放つ銃に弾切れはない。中々タイミングが掴めないのだ。鈴奈は覚悟を決め、突っ込んだ。

「ぐお!!」

鈴奈のタツクルは命中した。駆動騎士はバランスを崩し倒れ込む。同時に戦術変形は解除された。

「まさか乱射していた俺に突っ込んでダメージを与えるとは…見事だ」

駆動騎士は賞賛した。これに鈴奈は照れた。

「だが鈴奈、お前はまだまだ強くなれる。先代の巫女の教えに従って鍛錬をつめ。この勝負…俺の負けだ」

鈴奈はキョトンとした。駆動騎士が負けを認めたからだ。

「俺は帰る」

「もう…ですか?」

「用事があるからだ。それと…次戦うならサイタマ君とだ」

駆動騎士は鈴奈に“次戦うならサイタマとだ”と伝え去った。鈴奈はその場で立ち尽くし

「サイタマさんとか…」

そう呟いて博麗神社へと帰って行った。

博麗神社

「お願いします！」

鈴奈は先代の巫女に再び修行を頼んだ。

「鈴奈、お前は十分強くなったのだが……」

「いや！サイタマさんと対等に戦えるようになりたいのです！」

「そうか……ならいいよ」

「ありがとうございます!!」

こうして鈴奈はまた先代の巫女の鬼畜で厳しい修行をする事になった。サイタマと対等に戦えるようになる為。

書籍の方、登場編

百六十七撃目：摩訶不思議な骨董品屋店主

とある森にある骨董品屋、「香霖堂」。その店の店主の名は森近霖之助、東方Projectのキャラ数少ない男性である。容姿は銀髪（白髪）に1本の癖毛、瞳は金色で眼鏡をかけている（※眼鏡は下だけ黒い縁がついたやや楕円型）。服装は黒と青の左右非対称のツートンカラーをした洋服と和服の特徴を持った服装である。首には黒いチヨーカーを付けている。しかし彼は普通の人間ではなく人と妖怪のハーフである。その為人間より長寿で老化等はない。そんな彼は1人でこの“香霖堂”と営業している。だが1つ欠点がある、それは…

「すまない、それは非売品だ」

霖之助は客に対してそう言った。そう、店の品物の大半が非売品である。彼は蒐集癖があり、非売品が売れる商品よりも多い。その為一部からは“商売に向いてない”や“商売人より趣味人”と言われているが本人は全く気にしてない（※本人曰く生活には困つ

てない事)。それに対し客は

「お前…本当に店主か？」

やはりそう言った。客の大半が霖之助は本当に店主なのかと疑う。その客の特徴は壊滅的な私服にハゲ頭。ご存知、”趣味でヒーローをやってる最強の男”サイタマである。

「しかし…サイタマ君、君が来るとは珍しいね」

「暇だからだ」

サイタマは単なる暇つぶしで香霖堂に来ていた。だが霖之助自身はサイタマがここに来るのが珍しいと思っていた。その時、サイタマの足に何かがぶつかった。

「え？何？」

サイタマは足の方を見てみると何やら小柄の少女が。だが人間ではない。青が混ざった白髪に赤と白の変な角、紺色（または黒か？）の服装に背中には羽が生えている。手には本が

「迷子？」

「迷子じゃない、よくこの店にくる妖怪だ。名は朱鷺子だ」

「妖怪か…この餓鬼が？」

サイタマは朱鷺子をひよいと持ち上げる。気にくわないのか朱鷺子は頬を膨らませ

持ってた本でサイタマを叩いた（しかも縦にして）。

「いた!?いきなり何すんだよ!!」

サイタマは痛かったのか手を離す。同時に朱鷺子は落ちる。そしてサイタマを再び見る。

「じー…」

「おい!何なんだコイツは!!」

サイタマは霖之助に怒りながら言う。その怒りは朱鷺子にぶつけろよ…

「朱鷺子は子供扱いされるが嫌いだね、サイタマ君のそれが嫌だったんかもね」

霖之助の言ったことに朱鷺子は頷く。同時にサイタマは朱鷺子を睨んだ。

「まーまーサイタマ君落ち着いて。その子は君のサインを欲しがっているんだ」

霖之助はそう言いながら黒の油性ペンをサイタマに渡す。

「サインか…」

サイタマはため息をつく。サイタマは幻想郷に来てから様々な異変や事件を解決した為、気が高くサインを求められる事もある。本人は「面倒だからやりたくない」と言ってるが普通にサインを書いている。サイタマは念の為に朱鷺子を見た。朱鷺子は目を輝かせながらサイタマを見ていた。

「で、何で書いてほしいの?」

「サイタマはサインを書くことにした。朱鷺子は何処に隠していたか色紙を出す。そしてサイタマは自身の名前を色紙に書いた。朱鷺子は嬉しそうに色紙を見ている。」

「人気者は大変だね」

「ああ、それで霊夢と早苗に見られている気がするんだよね……」

霖之助は関心しサイタマはまたため息をつく。しかし、その予想はあっていた。香霖堂の外では霊夢と早苗が見ていた。

「妬ましい……!」

「やめろこら」

相変わらず2人はサイタマに嫉妬していた。隣では魔理沙と鈴奈がいる。

「鈴奈、お前は嫉妬してないのか?」

「しません!ヒーローは憧れの存在ですので!」

鈴奈は胸張って言う。鈴奈は霊夢と違いサイタマを敵視していない上に嫉妬もしていない。

「鈴奈!それじゃあ博麗の巫女失格よ!」

「ダニイ!?!」

「いや信じるなよ」

霊夢から博麗の巫女失格と言われショックを受ける鈴奈。だが魔理沙は呆れて鈴奈

に”信じるなよ”と言う。それに鈴奈は安心した。

「とりあえず帰るか」

「そうしましょう…」

魔理沙と鈴奈は帰って行つた。霊夢と早苗は…まだ嫉妬しながら見ていた。

百六十八撃目：偉大なる稗田家九代目当主

人里にあるとある屋敷、其処の当主は少女である。名は稗田阿求。彼女は稗田家当主であり九代目の“御阿礼の子”。幻想郷の妖怪についてまとめた“幻想郷縁起”を編纂する為、1000年以上前から転生を繰り返しているのだ。容姿は紫色の短めの髪に花飾りを付けている（※花の種類は不明）。服装は若草色の長袖の上に袖の部分に花が描かれた黄色の着物、赤いスカートである。そんなある日の事

「名門稗田家九代目の当主は、私の事です☆」

阿求は鏡の前にそう言つてポーズを決めた。

「は…恥ずかしい…」

その途端に阿求は顔を赤めた。自分にとつても恥ずかしい事だったらしい。じゃあ何でしたんや。

「魔理沙さんが私の印象を変えるために提案してくれたけど…やっぱり無理！」

どうやらさっきのポーズは魔理沙が提案したもので、阿求の印象を変えるためにした

んだとか。だがそういうのに慣れてない阿求にとっては恥ずかしいのである。
「そしてこの事は忘れられないし…」

阿求の能力は「1度見たものを忘れない程度の能力」。その能力を生かして文献を読んで記憶する事で今世の知識を深める事は可能である。だが何故あのポーズが忘れられないのは阿求が鏡を見てポーズをしたからである。

「気分はらしに散歩にも出よ…」

阿求はどんよりした気分を消す為に散歩に出た。その数分後…

「助けてええええ!!」

阿求は妖怪に追われていた。阿求は必死で逃げるが距離は一向に縮まらない。というより妖怪との距離が縮まるばかり…

「散歩は人里付近にするんだった…」

阿求は後悔する。だが既に遅し、その時

「うぷー」

阿求は何かにぶつか。尻もちをつく。見上げてみると麦わら帽子を被り、白のワイシャツと黒のズボンを履いた男が立っていた。左目には3本の傷が。

「まさか…この人も…」

阿求は震えた。そして「此処で運命だ…」と思った。しかし

「ん？」

阿求は何かに気づいた。後ろを見ると妖怪が震えていた。そして情けない声を上げて逃げて行った。

「大丈夫？」

「は…はい！」

麦わら帽子の男から「大丈夫？」と聞かれ阿求は大丈夫と答える。

人里、甘処

「本人に会えて感謝感激です！」

「あ…うん」

阿求は目を輝かせながら言う。何故なら男の正体が「百獣の王」キングだったからだ。

「このサインは家宝にします！未来栄光の末裔まで！」

阿求はキングからのサインを持ちながら言う。だがこの時キングは「俺のよりサイタマ氏の方がいいと思うが…」と思っていた。

「そういえばまだ名前を聞いてなかったな」

「あ！私は稗田阿求と言います！」

キングから名前を聞かれたので阿求は自分の名前を言った。そして

「名門稗田家九代目の当主とは、私の事です☆」

阿求は立ってポーズを決めた。あの自身も恥ずかしいポーズを。キングの反応は薄かった。そして周りからも冷めた目で見られていた（※数人は写真撮っていたが）。あまりの恥ずかしさに阿求は

「今のは忘れてください：：！」

「それ霧雨氏もやってたけど」

「そうなんですよ：：え？」

阿求はキョトンとした。

「え？どういう事ですか？」

「この前散歩していた時に博麗神社で霧雨氏が”幻想郷一の魔法使いとは：：私の事だぜ☆”って大声でやってたから。阿求ちゃんの見てすぐにわかったよ」

「そうでしたか：：（魔理沙さんもやってたんだ：：）」

阿求は魔理沙も自分に教えたあのポーズをしていた事に驚く（※心の中では安心する）。

「で、阿求ちゃんは何してたの？」

「散歩です」

「そうか、俺も散歩してた所だ。……………な!？」

キングは驚きの顔を見せた。懐中時計を見ながら。

「ど…どうかしましたか!？」

「風見氏との約束がある事を忘れていた。これ俺の分のお代だから!じゃ!!」

キングは急ぐように甘処から出た。残された阿求は…

「風見氏って…風見幽香の事だよね…キングさん…あの人と仲良いのかな…」

阿求はその事に疑問を浮かべていた。

太陽の畑

「遅い!」

「申し訳ない…」

キングは風見幽香に怒られていた。どうやら間に合わなかったらしい。その事、キングは幽香に首をキツく絞められたのと言うまでもない。

百六十九撃目：人里の貸本屋の店番少女

人里のとある貸本屋。名は鈴奈庵。その貸本屋の店番をしているのが本居小鈴という少女である。彼女はれつきとした人間である。容姿は飴色の髪を鈴がついた髪留めでツインテールにしてある。服装は紅色と薄紅色の市松模様を着物。下は若草色でクリーム色のフリル付きのエプロンを上から身につけている（※エプロンには2つのポケットの他、右下に”鈴奈庵”で胸元に”KOSUZU”と書かれている）。靴の皮はブーツ。能力は「あらゆる文字を読める程度の能力（※ただし文字として認識できないのは読めない）」…多分（本当は「妖魔本を読む程度の能力」らしい）。そんなある日の事…

「なんじゃ、また妖魔本を読んで酷い目にあつたのか？」

「はい…そうです…」

小鈴は申し訳なさそうに答える。小鈴の性格は好奇心旺盛で駄目と言われた事をやりたくなってしまう性格である。その為妖魔本の扱いに危機感を持っておらずよく悲

惨な目に合うことが多い。だが本人は懲りずに試す為、悩みの種だったりトラブルメーカーだったりする。なお、小鈴が今話しているのは人間の姿に化けた二ツ岩マミゾウである（※小鈴はマミゾウが妖怪である事に気づいてない）。

「いい加減諦めたらどうじゃ？」

「やです！ 妖魔本を読む時のゾクゾク感がたまらないのです！」

「ダメだコイツ」

全く懲りてない上に一人で謎の興奮をしている小鈴に呆れるマミゾウ。その時

「おい、本を借りに来た」

突然、客が現れた。薄汚いコートに黒のタンクトップに灰色のズボン。正体は、ある意味不死の戦士。ゾンビマンである。

「おや、ゾンビマン」

「あ、ぬえの親友か」

ゾンビマンとマミゾウは顔見知りである。だが会話する事はほとんどない。

「あのー…どういった関係なのですか…？」

「命蓮寺に居候してる者同士」

小鈴の問いにゾンビマンとマミゾウは互いに指を指しながら答える。2人は未だ命蓮寺に居候している。その為聖白蓮の弟子ではない（※というより2人は弟子になるつ

もりはない)。

「そうですか…あ、どんな本をお借りになるのですか？」

「ぬえにでもわかる様な本だ」

ゾンビマンが借りに来た本は封獣ぬえに読み聞かせる為の本の事。ぬえは長年生きる大妖怪でありながら字だけの本が大の苦手であり、絵付きの本しか読まない。だが命運寺には字だけの本がしかない為ゾンビマンが鈴奈庵で絵付きの本を借りているのだ。

「ぬえは全く進歩してないのか…」

「そうだ」

長年付き合いのあるマミゾウはぬえの“字だけの本が嫌い”という事が治ってない事のため息をつく。それにゾンビマンは同情した。そこへ

「あ、それならこれがオススメですよ！」

小鈴は棚からある本を取り出し、ゾンビマンにそれを見せた。

「これならぬえも好みそうだな、これ借りるわ」

ゾンビマンは小鈴が薦めた本を借りる事にした。そして店から出た。

「あのぬえがゾンビマンを気に入るとはな」

マミゾウはクスツと笑いながら言った。

「ところでマミゾウさん…あの人ってどういう人なんですか…？」

「ゾンビマンの事か？ 奴は外来人じゃ」

「外の世界の人なんですか!？」

小鈴はゾンビマンが外の世界の者だとマミゾウから聞いて驚いた。ゾンビマンは元々はヒーロー協会におけるS級ヒーローだった。サイタマに用があつて幻想郷に行き、今は命蓮寺に居候している。なお、ゾンビマンの最大の特徴は異常な再生力である。その為、怪我をしたりしてもすぐに元通りになる（※ただし連続で攻撃をくらうと数分行動不能になる）。その再生力は聖が入るほどである。

「外の世界の人が妖怪と仲良いんですね…」
「そうじゃ、他の奴も仲が良いと聞いておるからな」

マミゾウはそう言つて命蓮寺へと帰つた。小鈴も店へと戻つた。

ヒーローよ、永遠に編

百七十撃目：ヒーロー協会にはもう登録しない

「先生、ヒーロー協会がS級として再度登録してくれとしつこく言ってますがどうしますか？」

「断ると言っとけ」

サイタマはジェノスと電話で会話していた。ヒーロー協会はしつこくサイタマの再度登録を求めているの事。サイタマはもうヒーロー協会に入るつもりは無いため断るとジェノスに伝えた。

「はあ…これで何回目だよ…」

サイタマ本人はウンザリしていた。ここ最近ヒーロー協会の事についての事がよくジェノスから伝えられるのだ。本来ヒーロー協会に登録していなければ、妄言を吐く変態、としか見られないのだが、幻想郷にはヒーロー協会が無いので言われる事は絶対ない。そもそもサイタマは趣味でヒーローをしている為ヒーロー協会に登録するしない関係なしである。

「まあ、サイタマさんは幻想郷で一番支持されていますからね」

「関係あんの？それ」

サイタマの家に来ていた豊聡耳神子が微笑みながら言う。神子の言う通りサイタマは幻想郷で一番支持されている。だがサイタマは「それは関係ない」と思ってる。

命蓮寺

縁側でゾンビマンがため息をつく。こちらもしつこくヒーロー協会が再度登録を言ってくるのだ。

「そろそろヒーロー協会の電話番号を消すかな…」

ゾンビマンはそう思っていた。ヒーロー協会からの電話はしつこく掛かってくる。入浴中や就寝の時間関係なく。そのせいで聖から注意されてしまっている。

「元氣ないよー？大丈夫ー？」

其処にぬえがやって来て座ってるゾンビマンの上に座る。

「いいよな、お前は。しつこく言ってくる奴がいなくて」

「？」

ゾンビマンはぬえを見ながら珍しくそう言った。ぬえは首を傾げた。

バングの道場

「はあ……これで何回目じゃ……」

バングは携帯電話を閉じ、ため息をつく。

「またヒーロー協会からですか？」

バングの弟子である茨木華扇が言う。2人は未だ将棋をしていた。

「ああ、儂はガロウの件でヒーローを引退した。だが協会はしつこく儂に再度加入を求めてくる……」

「よほど先生の力が必要なのですね……」

「そのようじゃな、しかし儂はもうヒーロー協会に入るつもりは無い。それ、王手」
「その方がいいかもしれま……って、え!?!」

華扇は将棋盤を見る。王将の近くにはバングの陣地の駒が。

「ちよつと……待って下さい!」

「将棋に”待て”は無しと言ったのはお主じゃろ?」

「うっ!!」

華扇は「待て」と申し上げたのだがバングはそれを断った。というより将棋をする前に華扇自身が「待ったは無し」と言ってしまったため言い返せない。その事、将棋はバングの勝利で終わった。

太陽の畑の敷地外にあるとある家

「ヒーロー協会に再度入ってくれ?断る」

キングはゲームをしながら電話でヒーロー協会からの再度加入を断った。

「貴方の力が必要なのです!だからもう一度お願いします!」

「博麗神社に行く前に脱退するって言ったら納得したんだろ?俺はもう登録する気はない」

「そこを何とか!!」

「断る。ヒーロー協会に登録してる方より幻想郷で平穏に暮らす方が断然いい」

キングはヒーロー協会の職員にそう伝え電源を切った。

「さて…太陽の畑に行くか」

キングは立ち上がり、着替え、太陽の畑へと向かった（※というよりすぐ隣にある）。

妖怪の山頂上にある家

「何度言ったらわかるんだ？俺はもう入るつもりはない」

駆動騎士もヒーロー協会から再度加入の件を断っていた。

「ですが……貴方がいないとヒーロー協会は信頼を失ってしまうのです！だからお願いしますー！」

「信頼を失う？何を言っているんだ？もうヒーロー協会の信頼は最底辺までに堕ちた。そんな場所ではもう活動したくはない」

駆動騎士はヒーロー協会の職員に”信頼は最底辺まで堕ちた”事を言つて電源を切った。

「相変わらずしつこい場所だ」

駆動騎士はそう言い、外に出た。その事、早苗にリベンジ勝負を挑まれて当たり前のように勝利を収めた事は言うまでもない。

百七十一撃目：さらば…大切な弟子、ジェノスよ

「先生！ご無沙汰しておりました！」

「おう」

今回は久しぶりにジェノスが幻想郷に来た。彼は今、サイタマの家にいる。

「で、ヒーロー協会は今どんな感じなの？」

「ヒーロー協会の事ですか？今は…信頼は最底辺にまで落ち…誰も協会を頼ろうとはしてはおりません…それでも俺は協会のヒーローとして活動しています。…本題入りま
すがいいでしょうか？」

「話の内容勝手に変えんなよ…いいけど別に」

勝手に話の内容を変えたジェノスに呆れるが聞くことにする。

「先生！俺は…貴方の弟子を卒業します！」

「そうか…え？」

サイタマは茶の入った湯呑み茶碗を止めた。「え？今…なんて言った？」と心で思っ
た。

「ジェノス…何の冗談だ…？」

「冗談ではありません！俺は本気です！」

「本気って…本当にやめるのか？後悔とかせんよな…？」

サイタマは信じている場合ではない。ジェノスは長年共に活動（※本当はそうでもない）してきた大切な弟子である。その為簡単に弟子を卒業するとは言うとは思ってなかった。だが

「後悔はしません！それと先生！俺と勝負して下さい！」

「……………わかった」

サイタマは仕方が無くジェノスの”弟子を卒業する”を受け入れた。後悔はしないというからだ。そして勝負する為にヒーロースーツに着替え移動をした。

「で、弟子の卒業は勝敗で決めんの？」

「勝つても負けても弟子は卒業するつもりです」

「あ、はい」

サイタマは準備体操をしながらジェノスに聞く。どうやら勝ち負け関係なしで卒業するそうだ。

「先生、本気をお願いします」

「本気か……それと」

サイタマは困惑する。そして森の方に視線を向ける。其処には神子の姿が、手には救急箱が。

「神子、なんでいんの？」

「万が一のために！です！」

神子はサイタマは怪我をした時に迅速な対応が出来るように救急箱を持ってスタンバイをしていた。だが勝負には巻き込まれたくないという理由で比較的安全な森に隠れて見ている。

「では……始めます。俺が戦闘不能になるまでをお願いします」

「おう、わかった」

サイタマは頷き、目つきが変わった。それにジェノスは

「先生の目つきが変わった……もしや……」

ジェノスはサイタマが本気を出したと思った。その時

「!?」

ジェノスの目の前にサイタマが現れた。ジェノスは蹴りを入れる。だが

「いない!?!」

前にサイタマはいなかった。ジェノスは辺りを見渡す。そして「いた!」

サイタマを見つけた。なんとジェノスの後ろにいた。ジェノスはサイタマが見ていない隙に波動砲を放った。しかしこれも避けられる。

「危ね…服が燃えるところだった」

「先生!油断大敵です!」

サイタマが服が燃えてない事を確認している隙にジェノスは不意打ちを仕掛けた。だが

「よつと」

「なっ!」

サイタマはジェノスの拳を掴み地面に叩きつけた。

「が!!」

ジェノスは大きなダメージを負ったもののまだ動ける。だが身体はボロボロである。

「まだ動けるか?」

「はい!それとーっ言いですか?」

「何だ?」

「先生は…本気で闘ってますか？」

「いや」

ジェノスはサイタマに”本気で闘っているのか”と聞いた。サイタマは本気じゃないと答えた。

「先生！貴方はいつも俺に対して手加減をするのですか…！本気で挑んでくださいよ…！もう俺は許しません！行くぞサイタマ！」

「!？」

サイタマは驚いた。何故ならジェノスが呼び捨てをしたからだ。その時、サイタマの身体中に衝撃が走った。

「マシングランブロー・改!!」

ジェノスは容赦なくサイタマに連続パンチを浴びせる。本来サイタマならすぐに避けられるか止めることができる。だが今回は何も抵抗してはいない。そして最後の一撃でサイタマは飛ばされ岩壁にめり込んだ。

「抵抗しないとはな…弟子に大切にしているからか？だが俺にはもう関係はない。さら「待て」…?」

岩壁からサイタマは出てきた。強靱な肉体を持つサイタマには平気だったが所々傷ついている。

「何勝ったと思ってるんだよ……！ジェノス……！勝負はまだ終わってねえぞ……！今ので俺のボルテージはMAXになった……本気でいかせてもらおうぞ!!」

サイタマはついに本気になった。目つきが変わり、オーラが出ている。

「サイタマさんが本気になった……！けどいつもと違う……」

神子は不審に思った。本来サイタマが本気を出した時は目つき以外は変わらない。だが今回は何か違った。

「やつと本気を出したか……俺も「マジ殴り」!?」

ジェノスの顔に衝撃が走る。サイタマがマジシリーズの“マジ殴り”をしたからだ。

「何処からこんな力が「連続・マジ殴り」ぐ!!」

サイタマは“連続・マジ殴り”をジェノスに浴びせる。ジェノスは抵抗するができない。しかしサイタマの攻撃はまだ続いた。

「マジシリーズメドレー……HEROパンチ!!」

サイタマはマジシリーズメドレーの終止符、HEROパンチをジェノスに放った。ロボロになっていたジェノスは動くことができず、モロにくらい飛ばされ、岩壁にめり込む。

「ついに……ジェノスに……本気を出してしまったか……」

サイタマはジェノスの方に向かった。岩壁にめり込んだジェノスは無残な姿だった

(※ジェノスは脳がやられない限り死なない為、生きている)。サイタマはジェノスの肩を叩くが返事はない。

「ジェノス…お前は最高の弟子だった。世間から非難され続けた俺を裏切ること無くいつもお前は俺の味方だった。幻想郷に住むと決めた時もお前は弟子をやめなかった。ジェノス…今まで…ありがと…な…」

サイタマの目から涙が溢れた。頭の中はジェノスと共にヒーロー協会のヒーローとして活動した時の事等が蘇った。膝について泣くサイタマに神子がそつと肩に手を置く。その後、ジェノスは元の世界に還り、無事、修復されたようだ。

翌日

「サイタマさん…本当によかったのですか？」

「アイツが決めた事だ、俺は後悔してないしジェノスは1人でも生きていけるだろうし」
神子は「ジェノスが弟子を卒業してよかったのか」と聞く。サイタマは「後悔はしていない、ジェノスは1人でも生きていける」と言った。

「卒業した弟子を思いやる気持ち…サイタマさんのそういうところが好きです」

「気持ち悪いからやめい」

神子はクスツと笑い言う。サイタマは…いつも通りだった（おい

百七十二撃目：幻想入りを振り返る

サイタマは自分の家でくつろいでいた。机には少名針妙丸がいる。

「師匠、師匠が幻想郷に来てから随分経ちましたね」

「そうだな、てかい加減その言い方やめろ」

確かに、サイタマは幻想郷に来てから随分経っている。しかし、サイタマは針妙丸の自分に対しての言い方に未だ納得していなかった。

幻想入りを振り返る。

1 撃目：ヒーロー協会の依頼で博麗神社へ調査に向かう。其処で八雲紫と会い、幻想郷に行く。

2 撃目：人里で暴れていた怪物を倒す。その時に上白沢慧音と会う。

3 撃目：博麗霊夢と会い、家ができるまで居候した（5日間）。

4 撃目：家が完成し、其処で住む。射命丸文と契約して”文々。新聞”を提供しても

らう事になった。

5 ～ 10 撃目：空が紅い霧に包まれた事が気になり紅魔館へ向かい、異変を解決する。そこで霧雨魔理沙と会う。

11 ～ 17 撃目：春なのに雪が溶けない。異変と思い、冥府へ行き、西行寺幽々子から春を取り戻す。此処で幻想入りした閃光のフラッシュと再開する（怪人協会編以来である）。

18 ～ 25 撃目：月の照具合がおかしいのを理由に異変解決に向かい、解決する。その時に弟子のジェノスと再開する。

26 ～ 31 撃目：季節関係なく咲き乱れる花に不思議に思うが異変でないと判断し、普通に活動した。

32 ～ 39 撃目：守矢神社へ行き、八坂神奈子と激戦を繰り広げた。この時に幻想入りした金属バットと初めて会った。

40 ～ 48 撃目：温泉を掘り当てる。ジェノスからの知らせで地下の世界へ行き、霊鳥路空の暴走を止めた。旧都で幻想入りしたゾンビマンと再開する（こちらも怪人協会編以来である）。

49 ～ 58 撃目：藤原妹紅が弟子になる。散歩の途中、星蓮船を見つけ、乗り込み、聖白蓮救出に協力する。魔界で“魔界の王”零と激戦を繰り広げた。そして、自称最強の

忍者、音速のソニックと再開する。

60～66撃目：妹紅が独立する。神霊の事が気になりゾンビマンと共に命蓮寺の墓場へ向かい、古から目覚めた太子、豊聡耳神子と仲を深めた(?)。また、ソニックが再び現れるが当たり前のように返り討ちにした。

67～75撃目：幻想郷格闘大会を開催され、シード枠で出場し、優勝する(本当は決勝で秦こころとの勝負があつたのだがところが辞退した為ある意味不戦勝)。

76～80撃目：逆さまの城が気になりその場所へ向かった。其処で鬼人正邪に利用されていた少名針妙丸を保護する事にした。なお、幻想入りした地獄のフブキと再開した。

81～87撃目：外の世界の言い伝えやオカルトボールが幻想郷に広まる。宇佐見堇子がある方法で幻想入りした(その娘は寝ると幻想郷に行けるのだという)。また、妹を追って幻想入りした戦慄のタツマキと再開する。

90～97撃目：月で事件があると言われ、月の都へ向かい、元凶の純狐とヘカーティア・ラピスラズリとの勝負に勝利する。

98～102撃目：サイタマ、ゾンビマンが幻想郷に住むと決める。のちにバングとキングも幻想入りし、住むと決めた。

…そのも色々な事があつた。常夏島で過ごしたり…怪人組の陰謀を阻止したり…ヒーロー協会のヒーロー達がなだれ込んだり…等、サイタマが幻想郷に来てから色々なことがあつた。なお、幻想郷に住むと決めたのは、サイタマ、ゾンビマン、バング、キング、駆動騎士の5人である。彼らはヒーロー協会から脱退している為、もうあの協会とは無縁である。

「色々な事がありましたねえ〜」

「いつからいたの?」

サイタマの前に妹紅と神子が茶を飲みながらサイタマが今までの事を振り返っている時に気づかれないように侵入した。

「そーいや、この小説、今日で最終回なのですがどう思います?」

「別になんとも」

「あ、わかりました」

サイタマのそつけない返事にもか触らず妹紅は納得した。

「けど、サイタマさん、お疲れ様です」

「お、悪いな」

神子が今まででお世話になったお礼にお礼品をくれた。なお、この4人の会話はまだまだ続きそうだ。

新作来るまでの日和編

百七十三撃目：謝罪のお言葉及び再び連載について

幻想郷のとある森にある少し出っ張りのある四角い家。其処には外来人であり、この作品及び原作にいる登場人物内で最強と呼ばれる男の家である。

「どうも、趣味でヒーローをやってるサイタマです」

そう、「ワンパンマン」及び「東方一撃男」の主人公、「趣味でヒーローをやってる最強の男」サイタマである。隣には…

「弟子の藤原妹紅です」

サイタマに弟子入りした”蓬菜の人の形”藤原妹紅である。そしてサイタマの肩には小人が

「同じく弟子の少名針妙丸です！」

サイタマの弟子…ではないが勝手に弟子と名乗っている”小人の末裔”少名針妙丸である。

「えー普段無気力な日々を送ってる俺らが何でこんな真剣なのかと言うと…」

「言うとは…?!」

「……………この東方一撃男が…再び再開するからだ!!」

「おお!!」

「そして……………ご迷惑をかけた!!すまん!!」

「すみませんでした!!」

サイタマは「東方一撃男」の再開及び謝罪をした。同じく妹紅と針妙丸も。しかし、な
んでこうなったかというと…

2016年12月11日

「マジか…!?!」

サイタマは針妙丸と一緒に博麗神主（※ZUNさん）が放送を行った生放送を見てい
て驚いた。何故なら…

「東方Projectシリーズ15. 5弾の「東方憑依華」！来年発表予定！」

「新作でんのか…!!」

サイタマと針妙丸は驚きを隠せなかった。なんせ新作が出るからだ。サイタマは幻想入りしてから紫からの勧めで東方シリーズのゲームをしていた(※hardまでクリアできるがlunaticはキングがいないと無理)。

「これは買わないとな!」

「でも師匠…幻想郷から出れないんじゃない?」

「そうだった…」

針妙丸の言った事にサイタマはうなだれる。サイタマは幻想郷で一生を過ごす事になっている為幻想郷から出られないのだ。なのに何で東方シリーズのゲームがサイタマの家にあるのかというところ…紫が外の世界から輸入してきたからだ。

「という事は…東方一撃男も再開されるってことか?」

「けどこの作品…完結って言い切っちゃいましたよね…」

「謝れば許してもらえるだろ」

「世の中そんなに甘くないですよ!?!」

それならこの作品にも憑依華編が書かれるかもしれない。だが前回(百七十二撃目)で完結してしまっている為、再開がどうもしづらい。

「とりあえず、謝罪しようぜ」

「師匠……」

結局、再開及び謝罪を妹紅を呼んでする事にしたのだ。

「これで許してもらえるんすかね？」

「知らん」

「師匠……」

謝罪はしたものの許してもらえるかどうか不安である。だがサイタマはそっけなく返事する。いや、謝ればいいって言ったのアンタだろ。

「とりあえず、謝ったからいいだろ」

「どんだけお気楽なんすか……」

やはりいつも通りのサイタマに妹紅は呆れかけていた。その時

「俺らを忘れてもらっては困るぜ」

突然男が4人入ってきた。その人物達は…サイタマもいる顔ぶれだった。それは…

”ある意味不死の戦士”ゾンビマン

”銀牙のファイター”バング

”百獣の王”キング

”漆黒の殺戮兵器 駆動騎士

彼らもサイタマと同じくかつてはヒーロー協会にいたヒーローである（※ただし階級は違う）。

「久しぶりだな」

「ああ…1ヶ月は経っていたな」

「完結したと思えばまた再開するののか」

「久しぶり感が溢れているな、サイタマ氏」

「俺は出番が増やしてほしいものだ」

「「なんだこの緊張感…」」

サイタマ、ゾンビマン、バング、キング、駆動騎士はごく普通に話しているのだが、妹紅と針妙丸は謎の緊張感に包まれていた。そしてサイタマの家の外からは…お馴染み

の方々が様子を見ていた。

「ハブられたから感が半端ないんだが…」

「落ち着け」

ご存知、霊夢と早苗である。そして魔理沙。

「とりあえず出れたからいいじゃねえか」

「よくねえわ」

「めんどくせえ…コイツら…」

魔理沙は出れたからいいと言うが霊夢と早苗は不満である。これに魔理沙はため息をつく。

とりあえず東方一撃男…再開します

百七十四撃目：遅すぎる初詣

白くて少し出っ張りのある家、こたつに入りながら蜜柑を食べているハゲの男がいた。ご存知、サイタマである。机には小人の針妙丸もいる。その時

「サイタマさん！」

誰かが勝手に上がり込んできた。豊聡耳神子である。だが彼女はいつもの服装ではなく華やかな着物姿で髪型も違っていた。

「何の用だ」

サイタマはいつも通りに素っ気なく返す。蜜柑を食べながら。

「折角新年を迎えたのにこたつにこもるなんて勿体ないですよ！」

「いいだろ別に」

「よくないです！だから初詣に行きましょう！」

「は？」

神子の初詣に行こうにサイタマは耳を疑う。何故なら…

「あんな、年明けて5・6日は経ってるぞ？」

「作者（※Trip上）が正月に書かなかったからサイタマさんと初詣に行けなかった

「んですよー！」

「アイツは正月の間結構忙しかったらしいぜ？」

「むー」

サイタマは作者の事情を話したが神子は頬を膨らませる。はい、正月はこれ書く暇なかつたです。

「というわけで初詣行きましょう！だから早く着替えて！」

「めんどくさ……」

神子に急かされてサイタマは渋々と壊滅的な服から袴に着替えた。

「霊夢の所と早苗の所しかねえのに初詣に行く必要性はないだろ……」

サイタマはブツブツ言いながら歩く。

「師匠、付き合つてあげましょうよ♪」

「なんでお前はそんなにも楽しそうなんだよ……！」

針妙丸はウキウキしながらサイタマに言う。だがサイタマ自身は初詣には行きたくはない。めんどくさいからである。

「で、博麗神社と守矢神社に行くのか？」

「いえ！新しく出来た神社に行くのです！」

「は？新しい神社？」

神子の謎発言にサイタマは首を傾げる。幻想郷には博麗神社と守矢神社しかない。新しい神社…？サイタマの頭の中で整理して考え込むがわからなかった。

「吉凶神社という場所です」

「聞いた事ない」

初耳だった。最近出来た神社である。

「でもとりあえず行ってみましょうよ！」

「はいはい（これ、断つたらめんどくさいパターンだな…）」

神子に言われ、行く事にした。だが本人はめんどくさがっていた。

吉凶神社

「結構人いるな」

サイタマは辺りを見渡しながら言う。沢山の人で賑わっていた。神社の外見は木造だが霊夢と早苗の所と比べれば綺麗だった。賽銭箱と鈴もあった。また、周りではお守りや破魔矢を売ってる店があつた。

「何か俺が元々いた世界の神社と似てるな」

「確かにそんな気がします！」

「なんで同調すんの」

サイタマは何処か見た事のある光景だったのか懐かしむ。だが神子がそれに同調した事に疑問が生じる。その時

「願いを込めてん……さあどうぞー」

神社の真ん中に巫女がいた。見た目は少女である。手には御神籤の筒が。少女は御神籤を引こうとする客にそう言つて、御神籤を引かせていた。

「御神籤か、引いてみるか」

「はい」

サイタマと神子も御神籤を引くことにした。その時

「あー本物のサイタマさんですか!？」

「え?」

巫女の少女が目を光らせながらサイタマに猛スピードで近づいた。流石のサイタマも戸惑う。

「私はみくもと言います!この吉凶神社の巫女さんです!」

「あ…はい…」

少女はみくもと名乗った。この吉凶神社の巫女さんらしい。

「御神籤引きにきたんですよね!」

「そう…だけど」

「ならご歓迎です!あ!隣も彼女さんも引きますか!」

「へ!?彼女!?さ…サイタマさんの彼女だなんて照れますよ…!」

「いや神子、お前と付き合った覚えはない」

神子はみくもにサイタマの彼女扱いされた事に顔を赤く染まった。だがサイタマは真つ向に否定した。

「では、どうぞ♪」

みくもはサイタマに筒を渡した。

「さて、新年運試し」

サイタマは筒を思いっきり早く振った。残像が出来るくらいに。そして

「お、出てきた。なにになに…」

御神籤の結果を見た。結果は…

『大凶』

「……………は？」

サイタマは固まってしまった。新年早々大凶を引いてしまったからだ。

「なあ…みくも…引き直しできないか…？」

「引き直しながらさせません」

サイタマは恐る恐る聞いたが、みくもは冷酷な目で断った。

「新年早々大凶とか…今年は厄年か…」

サイタマはがつくりとした。その時

「サイタマさん、これ、めくれますよ」

「え？あ、本当だ」

神子はサイタマの持つてる大凶の御籤にめくれる場所がある事に気づいた。サイタ

マはそのめくれる場所をめくった。結果は…

『大吉！おめでとうございます！』

「……………え？」

サイタマは目を凝らしてよく見た。大吉と書いてあった。

「開運招福！！おめでとうございます！！」

みくもが突然大声で言った。だが

「いやちよつと待てみくも、これってどういう事？」

サイタマはどうも信じれなかった。というよりみくもの御神籤の仕組みがよくわからなかった。

「あ、それはごく稀に混ざっているんですよ。けど確率が非常に低いんです。けど、それを引いた方がサイタマさんが初です！おめでとうございます！！」

みくもは盛大にサイタマを祝った。周りの人も祝った。

「よかったですね！」

「あ…ああ」

神子もサイタマを祝った。だがサイタマ自身は気まづかった。

帰り道

「世の中、わからないものですね」

「そうだな」

サイタマと神子はいつも通りに帰っていった。だがサイタマは頭の中では…
「どういう仕組みだったんだあの御神籤…」

と思っていた。また、吉凶神社が幻想郷各地に広まった事は言うまでもない。

キャラ紹介←

みくも

本名 吉凶 御雲（きつきよう みくも）

年齢 不明（おそらく15歳前後）

種族 巫女神（見た目は巫女なのだが巫女のまま神様になった。いわゆる現人神と同じくようで違う）

能力 吉凶を操る程度の能力

概要 吉凶神社の巫女さん。しっかり者で礼儀正しく、種族関係なく常に敬語である。だがたまに性格が拘変する事がある。霊夢と早苗は「尊敬する巫女のお姉さん」として見ている。見た目は弱そうだが甘く見ると痛い目に合うので注意。また、風鈴鈴奈と仲が良い。

百七十五撃目：強すぎるが故の孤独

とある森に建つ白い四角の家。その中である男が暇を持て余していた。その男のトリードマークは光り輝く頭をかきながら壊滅的な私服で床に寝転がっていた。その男の正体は：元A級39位のヒーロー協会に登録されていた趣味（※本人曰く）でヒーローをやっているサイタマだった。サイタマのとなりにあるテーブルには弟子と名乗っている小人、少名針妙丸が林檎に苦戦しながら食べていた。

「暇だ」

「ですね」

とにかくサイタマと針妙丸は非常に暇である。理由はこれといった異変や事件がないからである。例えば散歩に行った時に妖怪や怪人に出会ったとしてもワンパンチで仕留めてしまうためつまらなかった。

「てか師匠、いい加減私を弟子として認めてください」

「絶対に断る」

「(・_・)」

実は針妙丸はサイタマの弟子ではなくサイタマに保護されている立場である。しか

し針妙丸は勝手に弟子と名乗ってる。その為か正式な弟子である藤原妹紅とたまに喧嘩が起こることがある（ちなみに100%の確率で妹紅が勝つ）。またもや断られた針妙丸は落ち込む。

「暇だし…散歩にでも行くか。お前は どうする?」

「お供させていただきます!」

「なんでそんなに嬉しそうなの?」

サイタマは直ぐに立ち直った針妙丸に疑問を抱きながらも壊滅的な私服から普段ヒーローとして活動するスーツに着替え部屋から出ると同時に針妙丸がサイタマの肩に乗り移った。

「さーて今日こそ手応えのある奴らに合わねーかな」

サイタマは背伸びしながら外に出た。しかし…

「あーやつぱツマンネ」

やはり結果は一緒だった。確かに妖怪や怪人は襲って来たもののワンパンチで仕留めてしまった。サイタマはベンチに座りながら欠伸をする。周りには襲ってきた妖怪や怪人の残骸がある。

「もつと手応えのある奴と戦いたいな」

「旧都に行けばいいんじゃないんですか？」

「面倒くさいからヤダ」

「師匠……」

針妙丸は旧都に行けばいいと提案したが面倒くさがり屋なサイタマは行く気がなかった。今サイタマのいる場所から旧都に繋がる穴までは凄く遠い（とはいえサイタマなら直ぐに着くが）。その時

「やっぱり幻想郷はいい所だよな」

「え？」

サイタマはふと口にした。サイタマは普段いい事を口にする事がないため針妙丸は驚く。

「師匠……？」

「俺が元々いた世界では怪人が毎日嫌な程出る世界だったよ。俺は誰に何を言われようが自己満足さえ得られればよくてヒーローをやった。けど改めて考えて見ると俺って何の為に怪人とか倒してきたんだろうな……」

「それって……ヒーローだからですよ……ね？」

「それはそうなんだが……どうもそれを感じれなかった。元々俺は趣味でヒーローを始め

た、けどヒーロー協会に登録しても退屈な日々だった。なんせ強い奴らとあまり合わなかったからな。ガロウに興味を持った際には格闘技大会に出た。けど……何も得られなかった。」

サイタマは悲しそうだった。確かにサイタマが元々いた世界では毎日のように怪人が現れていた。その怪人を倒すのがヒーローの役目だ。しかしサイタマには何も感じなかった。ただ目の前に現れた怪人を倒しているだけなのに……サイタマは自己満足しきれてなかった。また、ヒーロー狩りをしていたガロウに興味を持った際には格闘技大会に出て、格闘家やゴウケツのような超一流の武術怪人と戦ったが何も感じなかった。格闘技大会に出てても何も得られなかったのだ……ガロウの時もそうだ。怪人になったガロウにも当たり前のように勝った。しかしこの際にガロウはこう言った。

「貴様に平和が作れるか？」

「その薄っぺらいマントで世界を平等に救えるか」

「目に届かぬ悲劇を止める手当てはあるのか」

「なぜ貴様をヒーローをつけている」

※他にもあります。

しかしそれでもサイタマは「ヒーローは本気の趣味」だと言い放った。それに納得いかなかったガロウはサイタマに再び襲いかかるも殴られ戦意喪失。そしては生きる気力も失い何処か姿を消した。

「師匠……」

針妙丸は心配そうにサイタマを見る。普段滅多に見せない顔だからだ。

「けど……たまには俺が満足できる奴もいた。そいつとは本気で戦えた。満足感もあった。だが……」

「？」

サイタマが言うそいつとはボロスの事である。サイタマが初めて本気を出した相手だ。普段ならばワンパンチで仕留めるのだがボロスはワンパンチで倒せなかった。これに期待したサイタマはボロスと激突した。結果サイタマが勝利した。しかしボロスから最後にこう言われた。

「嘘だな、お前には余裕があつた。まるで歯がたたなかつた…戦いすら…なつていなかった…ふふつ やはり予言などアテにならん…お前は強すぎた」

この時サイタマはあまり気にしてなかつたものの、後々考えるとそう感じてしまつた。だが

「けど…いいか。過去の話だし」

「いいんですか!？」

これまで悲しそうだったと裏腹にヘラヘラと笑うサイタマは針妙丸は驚く。しかし幻想郷で活動していく内に月日が流れているのは無論事実だが。

「けどな、針妙丸。俺は元々弱かつたんだぜ？ヒーローになろうと決めてから3年間休まずに鍛えた結果、この強さを手に入れたんだ。これが幻想郷でも通用する事に驚いた

よ。お陰様で勇儀や聖とかと対等に戦えたしな。幻想郷に来て正解だった！」

サイタマは昔、今の強さとは想像出来ない程弱かった。だが3年間のトレーニングを休まずにやった結果、この強さを得た。その強さが幻想郷にでも通じた。もし同じなかつたら星熊勇儀や聖白蓮とは対等に戦えなかつた。

「師匠……一生ついて行きます！」

「それヤメロ」

針妙丸は涙を流しながらサイタマに「一生ついて行く」と言った。だが聞き飽きたかサイタマは嫌そうな顔をした。

天空璋編

百七十六撃目：一年越しの更新

とある場所：そこに人が立っていた。だが所々おかしい部分がある。実はこの人間はサイボーグである。その人物は：ONE先生の作品である「ワンパンマン」に出てくるキャラのジエノスである。

「どうも、はじめましての方ははじめまして久しぶりの方はお久しぶりです。ジエノスです。今回、「ワンパンマンと東方Project」のコラボ小説「東方一撃男」を閲覧いただきありがとうございます。では早速…」

「何故1年も放置してた？」

ジェノスはとある人物の胸ぐらを掴んで問い詰めていた。

「人には事情つてもんがあるんだよ」

胸ぐらを掴まれてる人物は答える。どうやらこの小説をなんやかんやの事情で更新ができなかつたらしい。

「貴様は新作がきたらその章の話を投稿するつもりでいたのだから？何故1年も放置した？次の章にあたる東方天空璋が発売されたのは去年の8月11日。それなのに何故放置した？それにこの小説においては去年の6月19日から更新が止まっている。やつと更新したと思つたら最新投稿から1年2ヶ月も経つてる。なのに何故反省の色を見せない」

ジェノスは問い詰める。どうやらこの小説を更新してない事にお怒りのようだ。

「いやーだからねジェノス、こっちは就職活動やら仕事の都合上で更新する暇がなかつたんだよ？なら仕方がないでしょ」

どうやらジェノスに問い詰められているのはこの東方一撃男を書いてる作者らしい。「貴様…それで読者が納得すると思つていいのか？」

「する人はするでしょ」

「…なら仕方がない。」

ジェノスは作者に対する不満でいっばいだがここは受け止めるしかなかった。

「ではこの作品を再開しよう。後バカメガネ、次長期間投稿を怠ったら排除するからな」
「やれるもんならやってみな」

作者とジェノスは別れた。それで始まる……1年ぶりの東方一撃男が……

「先生お久しぶりです！」

「お前弟子辞めたよな？」

幻想郷にあるとある森。そこに建つ白い四角の家、ジェノスは玄関で壊滅的な服を着たハゲの男と話していた。ハゲの正体は趣味でヒーローをやっており、元ジェノスの師匠であるサイタマである。

「つーかジェノス、再開早々作者に脅迫紛いの問い詰めやめろ」

どうやらジェノスのやり方に気に食わないらしい。なんせ脅迫に近い問い詰めたつ

たから。作者は普通どうりだったが

「そうもしなければあのバカメガネも更新しないでしよう」

「まーそうだけど…あと先生って言うのやめろ」

「何故ですか」

「お前は弟子辞めたよな？だから先生って言われると違和感があるから」

「そうですか…ではまた俺を弟子として認めて下さい！」

「なんで!？」

ジェノスの開き直りに流石のサイタマも驚く。実はジェノスは弟子をやめている。これからは自分の力でヒーロー活動していくと決めたからである（詳しくは171撃目で）。なのにもた弟子入りを志願してきた。

「いやいや待て！お前はお前の口で「弟子をやめます」って言ったんだぞ!?!それを撤回するつもりか!？」

「はい！」

「はいって…」

あつさり答えるジェノスに反応に困るサイタマ。だが…

「よし！お前を改めて弟子として認める！」

「ありがとうございます！サイタマ先生！」

サイタマもあつさり認めてしまった。あの時の涙流してありがとう！と言ったお前は何処に行った。その時サイタマの肩から声がした

「ならば師匠！私も弟子に「お前はダメ」なんでですか!？」

弟子入りを断られたのか酷く落ち込んでしまった。サイタマの肩に乗っていたのは小人の少名針妙丸である。とある異変をキツカケにサイタマに保護されている。本人は弟子と名乗っているがサイタマはそれを認めていない。というより弟子入りさせるつもりはないらしい。

「師匠…酷いです…」

「お前はちっちゃいからまず役に立たないだろ」

「小さいは関係ないですよ！私だって役に立つ時ありますから！」

「あーはいはい」

針妙丸の言い分にサイタマは素っ気なくかえす。

「先生、肩に乗っているのは…」

「小人の針妙丸だ」

「少名針妙丸…貴様がサイタマ先生の弟子とはいいい度胸だな」

「いやーだからジェノス…此奴は弟子じゃないって…ただ俺が保護しているだけであつてな…」

「そうですか。まあこんな雑魚が先生の弟子には務まりませんからね」
「雑魚って言うなコラー！」

ジェノスに見下されたのか針妙丸は怒る。だが小人の針妙丸がジェノスに勝てるはずが無い。しかし喧嘩になりかねない状況だ

「お前らやめろ。とりあえずあがれ」

「では失礼します。」

サイタマに言われジェノスは家の中に入った。

サイタマの家

「で、ヒーロー協会はどうなってんだ？」

「はい、この前も言った通り信頼は最底辺にまで落ちました。先生の友人である星熊勇儀と竜崎新一に敗北、一部ヒーローの過剰な行動、そして上手く連携が取れず負け続けるヒーローに失望している人が多いようです。更に協会職員や幹部達の不祥事の発覚もあるそうです。」

ジェノスによれば協会は最悪な状況らしい（勇儀と竜崎の返り討ちはただの勘違いからだが）。

「随分と酷いザマだな」

「はい」

サイタマも珍しい同情した。サイタマ自身は協会を離脱したため関係の無い事だがジェノスの事が気になるらしく

「ジェノスお前はどうかの」

「俺は辛うじて頑張ってます。しかし世間は冷たいものです。」

ジェノスの口は重たかった。今の世間ではヒーロー協会の人間である理由に周りから冷たい目で見られているようで活動しづらい状況だと言う。

「成程な…駆動騎士がここに住むと決めた理由に納得だわ」

「やはりそうでしたか…」

かつてS級ヒーローだった駆動騎士は協会の信頼を落ちたを理由に協会から脱退し

幻想郷で暮らしている。他にもバング、キング、ゾンビマンもそうだ（ただし理由はそれぞれ違う）。

「そこですが先生」

「なんだ」

「俺も先生と同様幻想郷に住むことにしようと考えてます」

百七十七撃目：異常気象

「え？」

サイタマはキョトンとした。え？ ジェノス今何て言った？ 何？ 幻想郷に住むの？ マジなの？ 本気なの？ と思った。何故なら… ジェノスが幻想郷に住むと行ったからだ。

「言った通りです。俺も先生と同じく幻想郷に住もうと言う事です」

「いやちよつと待て」

サイタマは思わず止める。話が整理出来てないからである。しかし信頼最底辺まで落ちてしまったヒーロー協会に入ったまま活動はある意味しずらい。と頭をふと横切ったが… サイタマはある事を思い出した。

「てかジェノス… お前の目的は何だ」

「俺の目的は俺の故郷を襲った狂サイボーグ（村田版では暴走サイボーグ）を討つことです。」

「もし幻想郷に住むとしたらその狂サイボーグってやつを倒せなくなるな」
「!!」

サイタマの言った事にジェノスは驚いてしまった。というより肝心な事を思い出し

て驚いたといつたいいか。

「それにもしてお前が壊れてしまったりしたらクセーノにも直してもらえないな」

「!!」

追い打ちをかけるかのようなサイタマの言葉にまた驚く。言われてみればサイタマの言ってる事は正しい。もしサイタマらと同じく条件で幻想郷に住めばまた師弟コンビで活動ができる。たがそれでは狂サイボーグに復讐することは出来なくなる上に恩師であるクセーノ博士にも会えなくなる。そうなれば自分はなんの為に強くなつたのか検討もつかなくなる。

「そうでした…先生…俺には目的がありました」

「そうだろジェノス。だがな」

「?」

「俺に会いたくなつたらいつでも来い。お前は俺の大切な弟子だからな」

サイタマの言葉にジェノスは心を打たれた。そして…

「今の言葉…メモらせていただきます!」

「メモる部分あつたか!」

ノートとペンを取り出し猛スピードで書き始めた。それにサイタマもおもわずツツコム。

「先生、俺は全ての目的を果たしてみせます。先生がいなくとも俺は強くなってみせます！」

「おう、頑張れよ」

ジェノスは幻想郷に住む事を取り消し元の世界に帰る事にした。

「それと…物資も送らせていただきます！」

「いやそれはいい」

ジェノスはサイタマ宛に物資を送ると言ったがサイタマは断った。

「ではまた会う日まで！」

「じゃあな」

2人は拳を合わせ、ジェノスは帰った。

「さてと…」

サイタマは家に入ろうとしたその時…

「久しぶりだな、サイタマ君」

「あ、お前は…」

「思わぬ珍客が来た。」漆黒の殺戮兵器 駆動騎士だった。サイタマは駆動騎士を家に招いた。

「珍しいな、お前が来るなんて」

「君に用があつて来たんだ」

「用つて何だ」

「ああ、それはだな…」

「駆動騎士は、ある事」をサイタマに話した。

同じ頃博麗神社では…

「なによ魔理沙そんな暑苦しい格好して」

博麗神社の巫女、博麗霊夢は友人である霧雨魔理沙に対して呆れて言った。何故なら魔理沙が真冬の格好をしていたからだ。

「魔法の森では雪が積もってたんだよ。しかし暑いな此処。夏か？」

「だったら脱ぎなさいよ、こっちも暑くなるからさ」

「おう、わかった」

魔理沙は霊夢に言われるがままコートとマフラーを解いた。

「しつかしまー今年の季節はどーなってんだ？ 暦は夏なのにお前ん所の神社は桜満開だし私のいた森は雪が積もってたし…：…どういう事だ？」

「知らないわよ、だけどこの異常気象…：自然現象じゃない気がする…」

「つまり言う…？」

「これは…：異変ね」

「異変か…：一年越しの更新2回目でか…：悪くはねえな」

「メタ発言は控えめにしなさいよ。…：先越されないようにしないと」

「全部にサイタマにもってかれてるもんなw」

「笑い事じゃないわよ！」

霊夢は怒るが魔理沙は笑いつばなしである。確かにここまで起きた異変はほぼ全てサイタマが解決している。最初は気にしてなかったもののサイタマの人気っぷりに嫉妬してしまった事により、サイタマよりも早く異変を解決するように心がけている。その為…

「行くわよ魔理沙、サイタマに先越される前に」

「へいへい」

霊夢は異変解決に向けて飛び立った。魔理沙はヤレヤレ顔で箒にまたがり霊夢の後を追った。

サイタマの家

「異常気象？」

「ああそうだ。暦は夏なのだがある所では桜、ある所では雪が積もっていたりする。との事だ」

「あーそういやそんな気がする」

駆動騎士によると今の幻想郷は季節がバラバラである。しかし暦は夏である。なのに桜が満開だったり雪が積もっている場所もあるのだという。

「俺はこれを幻想郷で起こる異変だと決めた。だから異変解決の経験があるサイタマ君に頼んだんだ。俺に協力してくれないか？」

「勿論いいぜ、暇だから」

サイタマは凛々しい顔をして駆動騎士の頼みを承諾した。そうとなればすぐ様ヒーロースーツに着替え外へ出た。

「サイタマ君、俺は幻想郷の異変事に関わるのは初めてだ。基本何をすればいいのか教えてくれないか？」

「とりあえず元凶にあたる奴を倒せばいい」

「そうか」

サイタマは駆動騎士と共に異常気象の原因を探る事にした。

百七十八 撃目：真夏の蝶々妖精

異変解決の策を探し、霊夢と魔理沙は手がかりを探していた。

「手がかりゆーてもその手がかりらしきものがねえからな…どーする？」

「探せば見つかる！」

「見つかる？」

「多分！」

「多分かい！」

2人仲良く(?) 話ながら探し続ける。一方サイタマと駆動騎士は…

「ここが怪しいな」

2人は霧の湖にいた。何故なら「いつもと違う」気がしたからだ。その時

「久しぶりだなお前ら！最強のアタイが参上だ！」

サイタマと駆動騎士の前に現れたのは青髪で氷の羽が生えた少女が現れた。首元に

は向日葵のペンダントがある。えーと誰だっけ？確か…チル…何とかだった気がする。
「チルノだ！」

そうそうチルノである。自称最強の妖精である。しかし何故か肌がこんがり焼けた色になっていた。日焼けなのだろうか？いやなんで氷の妖精が日焼けすんだよ。

「今日こそアタイをバカにした罪をきっちり返してやる！」

どうやら怨みがあるらしい。そうである。チルノはサイタマと駆動騎士に負けた過去があり（しかも一方的に）、その時のリベンジを今か今待っていたのだ。だが…

「誰？」

「サイタマ君、チルノという雑魚中の雑魚だ。前にも会った事があるだろう」

「そうだったかな…悪い覚えてないわ」

サイタマは全く覚えていなかった。それもそうである。サイタマは人の名前を覚えていない事が多い（関節のパニックみたいに。てかさんな奴いたっけ？）。だがしかしチルノが登場したのは151話以来であり27話以来の登場だった気がする。気になる方は調べてね！

「ア・タ・イだよ！チルノだよ！忘れるんじゃないやねえーよ！それに雑魚つて言うなコラー！」

完全に忘れられてた事に怒るチルノ。更に駆動騎士に雑魚扱いされた事にも怒る。

確かにサイタマと駆動騎士から見れば雑魚に近いが

「あーそうだったチルノだったな。で、何？俺らになんか用？てか何で日焼けしてんだよ」

「気がついたらこうなってた！」

チルノ曰くいつの間にか日焼けしてたらしい。いかにもチルノらしい答え方だ。

「バカか」

「バカだな」

2人揃ってバカと言う。

「バカって言うんじゃねえよ！確かにバカだけど！」

「認めるんかい」

チルノは自分がバカって言われた事に怒るが自分でバカと認めてしまった為、サイタマと駆動騎士は呆れる。

「もういい！アタイの奥義を「どどどどどど！どけい！」「ごへ！」」

チルノが何かぶつかった。いやぶつけられたか。

「え？何？」

普段動じないサイタマも驚いた。倒れたチルノの横には水色の髪でアゲハ蝶のような羽をした少女がいた。この子も妖精なのだろうか？その時

「どけやあああああああああああああああああああああああああああああああ！」

アゲハ蝶の少女はサイタマ達に向かって突進してきた。が

「落ち着け」

サイタマはチョップを繰り出した。見事命中し、少女は地面にめり込んだ。

「流石だな」

「まあな、てか何だこいつ？」

サイタマは地面にめり込んだ少女を引き剥がした。

「先程の無礼行為すみませんでした！」

少女はサイタマと駆動騎士に謝る。チルノは以前と気絶したままである。

「いいよ別に。こんなん慣れっこだから」

「俺達も幾度となく怪人達が突っ込んで来る事があつたからな」

サイタマ、駆動騎士は気になかった。ヒーローと名乗っている分、怪人が奇襲してきてもとっさに対応できたのだ。

「名をなのれ」

「私はエタニティラルバ、アゲハ蝶の妖精です」

「へー蝶々の妖精」

少女はエタニティラルバと名乗った。アゲハ蝶の妖精だそうだ。

「お前って普段からこんななの？」

「そんな訳ないですよ！何か知りませんけど力が溢れ出てきて暴走してしまっただけです」

エタニティは異変の影響なのか普段出ない力が出て暴れていたらしい。だがサイタマによりその暴走は止まったのだ。

「しかしチルノの肌が濃いのは…まさか異変の元凶!？」

「いやただの日焼けだろ」

「マジで!？」

「マジだよ」

エタニティは気絶しているチルノを見て普段より肌の濃い為なのか異変の元凶だと思っただがサイタマに日焼け止めと言われ動揺する。

「いやいやおかしいですよ！チルノは氷の妖精だから日焼けはしませんよ！」

「え？そうなの？」

「そうなのかもしれないな、”氷の妖精”は太陽を浴び続けると溶けてしまうからな。この妖精の言う通り異変の影響かも知れない」

駆動騎士の推理(?)にサイタマは納得する。

「サイタマ君、他にも怪しい場所を調べよう」

「そうだな」

サイタマと駆動騎士が霧の湖から去ろうとした時

「待って下さい!」

「?」

エタニティに呼び止められ足を止める。

「あの…その…私もお手伝いをしたいのですが…貴方方の足でまといになりそうな気がして…だから…私の分も頑張ってください!」

「分かった」

エタニティの応援に2人は受け答え、怪しい場所がないか探しに行った。

妖怪の山

「なんじやいきなり…私に刀を振り下ろしよって…」

白髪の女性が言いつける。

「ほう…動けるとはね」

刀を持った男は余程自分に自信があるのだろうか避けた女性を賞賛する。

(こやつ…なんかヤバい気がするべ…)

女性は心の中で焦りがあった。その焦りを表せた男の正体は…次回明かします。

百七十九撃目：サムライは風と共に

「お前は何者だべ…」

白髪の女性が剣を持った男に名前を聞こうとする。

「俺か？俺はハードボイルドかつ人情派の侍、カミカゼ参上！」

「いや参上じゃなくて…カミカゼか…うちは坂田ネムノ。この山に住む山姥だべ」

男はカミカゼと名乗った。彼はヒーロー協会における最高峰のランク、S級ヒーローアトミック侍として活動しているヒーローだ。しかし何故彼はヒーロー名ではなく本名で名乗ったのだろうか？まあいい

女性はツツコミを入れるも自身の名を名乗った。坂田ネムノである。彼女は幻想郷に住む山姥の妖怪である（実は天空璋まで山姥のキャラは全く登場しなかった）。

「しっかしお前さん…うちにいきなり斬りつけるとは…無礼じゃなか？」

「はっはっはっヒーロー…いや侍と妖怪遭えば勝負する…当然のことだろう？」

カミカゼ曰く侍と妖怪が遭えば勝負するのが当たり前だとの事。

「ヒーロー…？もしや外の世界の人間だべな？」

「いかにも。だが今の俺はただの侍だ。俺はこの地で活動する事にしたからな。」

「どうやらカミカゼはヒーロー協会を脱退したらしい。どうやら活動拠点を幻想郷に変えたからだ。そうとしか考え用がない。」

「俺は幾度となく怪人を斬り殺していったが…山姥は初めて見たな。お前は昔から此処に住んでいたのか？」

「いやうちは此処に住み着いた者だべ。この”聖域を操る能力”で縄張りを創り種族間で不可侵条約を結んで独自に暮らしておる。天狗とは結ぶ気は無いし外の世界にも興味はない。」

ネムノは自身の能力（※詳しい内容は不明）で縄張りを創り勝手に独自に暮らしていた。

「まあなんせ、うちの縄張りに無断で入った事やし…天日天干ししたるべ！」

ネムノは怒りを表した。なんせ勝手に自分の縄張りに入って来たからだ。

「縄張りにすんならもつとわかりやすくしろ。だがその包丁を構えたという事は…俺の勝負を受け入れる事だな？」

実際縄張りの位置やら目印が無い為何処から何処までが縄張りなのか分からない。それで無断侵入だ！と言われても理不尽な気がする。

「望む所だべ、うちの力見せつけたる！」

「なんなら…いざ尋常に勝負！」

ネムノはカミカゼの勝負を受け入れ侍と山姥の勝負が始まった。

「なんか音しねえか？」

サイタマと駆動騎士は異変のてかがりを探していた。エタニテイラルバと会ってから以降何も掴めていない。その時サイタマがある音に気づいたのだ。

「あれは…妖怪の山の方だな」

「もしかすると…そっちの方なのかもな」

「いつて見るか」

サイタマと駆動騎士は妖怪の山に向けて走っていった。

一方…霊夢と魔理沙はというと

「何にもねえな」

「確かにそうね」

全く手がかりが見つからない状態だった。色々と調べたが成果はゼロ。全て無駄足だったようだ。

「だーから言つたら紅魔館やら白玉楼やら命蓮寺じゃないつて」

「そこ行こうぜつて言つたのはどこの誰だったかなー？」

「ぎく！凶星…」

この無駄足の原因は魔理沙だったようだ。2人は疲れたのか岩に座つて休む。その時

「私、登場！」

当然2人の前に何かが現れた。腰下まで伸ばした緑の髪に1本角、耳は狛犬のようであり、アロハシャツみたいな服に服と同じ色の短パン。素足に下駄を履いた少女がいた。

「お久しぶりです！ 霊夢さん！」

「え？」

霊夢はキョトンとした。何故なら前にいる少女が霊夢の事を知っていたからだ。

「霊夢…顔見知りか？」

「いや知らん」

魔理沙の問いに霊夢は「知らん」と即答。これにショックを受けたのか

「私ですよ！ わ・た・し！ 高麗野あうんですよ！」

少女は高麗野あうんと名乗った。狛犬の種族で神社や寺に居候し勝手に守護しているのだ。

「高麗野あうん…？ ああ！ あの時の！」

「思い出してくれましたか!？」

「いや分からん」

「がはっ！」

霊夢は結局分からないままだった。これにあうんはズッコケる。

「私はあの時からその時まで！ 霊夢の博麗神社を護ってたんですよ!？」

「いや知らねーし分かんねえよ。てか勝手に住み着くんじゃねえーよ、家賃くらい払えやコラ」

「霊夢：狛犬に言っても意味ねーぞそれ…」

霊夢のひねくれた発言に魔理沙は呆れる。

「思い出してくれないのなら思い出すまでです！」

散々貶されたのかあうんは戦闘態勢にはいつた。

「やめてよねそうゆうの。めんどくさいから」

霊夢はやる気なしなのかゆるーく構えた。そして

「いざ尋常に勝負（！）」

霊夢とあうんの勝負が始まった。魔理沙は…

「どうすりやええねんこれ…」

呆れながら白い目で見っていた。

百八十撃目：浮世の関を超える山姥 v s 神風なる劍豪

「お前…山姥にしてはいい動きをしてるじゃねえか。斬る価値があるぜ」

「それはこつちのセリフじゃ、うちもお前さんを斬る価値があるべ」

カミカゼとネムノは刀と包丁をぶつけ合いながら互いを賞賛した。

「（このネムノという山姥…まさか俺の剣についてこれるとは驚いたな…災害レベルは虎か鬼といった所か？俺でこれならA級でも勝てなさそうだな…だが斬れる奴なら斬り刻もうか！）」

カミカゼはそう思いながら刀持つ腕の動きを止めない。一方ネムノは

「（たかが人間と思つとたが…うちの太刀筋を刀一本で止めるとは…舐めてた…このままじゃ負け…いやそれはないべ！うちはれっきとした山姥じゃ！人間如きに負けてたまるか！）」

ネムノは心中焦っていた。様子を見る限り有利的立場はカミカゼの方である。ネムノは山姥であるため力も速さも人間よりかは上である。しかしカミカゼは幾度となく怪人を斬り殺してきたヒーローであり今更山姥に怯えを見せる訳が無い。刀と包丁がぶつかった時の力といいカミカゼの威圧感に押されていまい。危機を感じたネムノは

「うちを舐めるな…！」刃符　山姥の鬼包丁研ぎ」

ネムノは距離をとり包丁をまるで真横に振った。すると細長い白いエネルギー弾が現れ弾と化しカミカゼに向かって発射された。

「!?」

カミカゼは驚きエネルギー弾がぶつかり爆発した。煙がもくもくと湧く。

「見たか、うちの力を。まあ…これはまだ序のく「随分と卑怯な技をお持ちのようじゃねえか」なっ!?」

ネムノは驚いた。何故なら煙からカミカゼの声がしたからだ。

「何故じゃ!?うちの弾幕をくらった筈じゃ…!?」

「弾幕?そうか今の卑怯な技はそういうのか。ちよつと驚いちゃったよ。お陰様でだいぶくらったが斬りまくってなんとか持ちこたえた」

カミカゼは驚いた為か反応に遅れてネムノの弾幕をくらったが立て直し持ってた刃で残りの弾を斬りまくってダメージを抑えたのだ。

「なんだこの奴らはお前みたいな技を持つてんのか?そりゃ他のヒーローも手こずる訳だ」

「ヒーロー…お前さん以外にも来てる奴がいたのか…そうか…だがうちの弾幕を受けて生きてるのはカミカゼ…お前が初めてだべ」

「あ？今ので仕留めた輩がいんのか？」

「そうじゃ、うちの縄張りに不法侵入した奴らにはこれを放っていた…実際はこのスペルカードの威力を下げたものだけだな」

「どうやらネムノ曰く今の弾幕をモロに受けて（実際の所全部ではないが）生きていられるのはカミカゼが初めてらしい。」

「スペルカード？なんだそりゃ。今の技と関係あんのか？」

「要するに必殺技みたいなもんだべさ」

「必殺技ね…なんなら俺も見せてやろうかな」

疑問を問うカミカゼに対してネムノは簡潔に答える。実際にスペルカードは必殺技みたいなものだそうです（Wiki調べ）

「ほう…なら見せてくれ」

「わかった…目を逸らすなよ？」

「？」

ネムノは首を傾げた。カミカゼの「目を逸らすなよ」に疑問を感じたからだ。カミカゼは懐に戻ってあつた刀を取り出し…てはなく少し出しただけで止めた。そして

「よし…終わった」

カミカゼは刀を抜く事なく終わった。これに

「ん？まだ終わってないべ？」

流石にネムノも驚く。なんせカミカゼが必殺技を見せるところか刀すら抜いてないからだ。だがカミカゼは何も答えない。

「おい！何故答えない!?うちを舐めとるのか!?巫山戯るのも大概に「なんだ、気づいてないのか」え？」

ネムノは必死に問いかけた時にカミカゼから思わぬ言葉が出た。

「気づいてない？どう事だべ!？」

ネムノは理解できてない。だがその時

「!？」

ネムノの腕に傷が現れた。慌てて隠す。

「(傷!?! 一体どういう事だべ!?!まさかうちが気付かぬうちに斬ったというのか!?!信じられん!うちが人間の剣筋に気づかないなんて!?)」

実はカミカゼはネムノが気づかない程の速さで斬っていたのだ。ネムノの傷は更に現れ至る所で傷が開き血が噴き出す。

「だから言ったろ。目を逸らすなって」

カミカゼが振り向いた時にはネムノは倒れていた。周りは血だらけでありネムノ自身も血まみれだった。しかもまだ流血している。

「まさかこんなにも強い奴がいたとわな…フツ、こりやあ俺の限界を超えて…いやそれ以上に強くなれるかもしれないな」

カミカゼは元々いた世界の怪人よりも強いとわかりニヤリと笑った。この幻想郷にいる奴らに俺の剣を試してみせるのではないかと思っただからだ。その時

「あ！オッサン！」

「ん？あ、サイタマか。それと駆動騎士もか」

異変を探るべく妖怪の山に到着したサイタマと駆動騎士に遭遇した。

「何でお前らが此処に？」

「なんか音がしたから…てかさつき血まみれの奴が倒れていたけど…まさかあれやったのオッサンか？」

サイタマ（駆動騎士も）は行く途中に血まみれで倒れていたネムノを発見したのだ。

「そうだ、勝負を仕掛けてきたからな。後オッサン扱いすんじゃないやねえ。まだそんな歳じゃない」

カミカゼはサイタマの疑問に答え、オジサン扱いされたのを否定した。てかカミカゼの歳からすればオジサンに近いが本人はその扱いを嫌っている。

「アトミック侍、お前が此処にいるとは驚きだな」

「俺も此処に住むことにしたからな。だから俺をそう呼んでくれるな。次からはカミカ

ゼと呼べ」

カミカゼヒーロー協会から脱退している為アトミック侍とは呼んでほしくはないみたいだ。

「成程……この幻想郷に住むことにしたのか。カミカゼ、サイタマ君から聞いたが幻想郷に来たのは2回目だそうだな」

「2回目？俺は今日が初めてだが？」

「なに？」

カミカゼの思いがけない発言に駆動騎士はキョトンとする。サイタマから聞いた話では勇儀にリベンジするべく幻想郷に来たと聞いた（気になる人は百三十五撃目を）。しかしカミカゼは初めて来たと言ったからだ。

「いやカミカゼお前……2回目じゃないのか？」

「今日が初めてだ。」

サイタマも2回目じゃないのかと言うがカミカゼは否定する。そして

「サイタマ、駆動騎士……実はだな

幻想郷に行く前に八雲紫から初めて幻想入り記憶を抜いてもらってから幻想入りしたんだ。」

百八十一撃目＋α：魔法の森のお地蔵様

「先生……一つ聞きたい事があります」

「なんだ」

「何故“百八十一撃目”の横に＋αがあるのでしようか」

ジェノスはサイタマに問う。話数の横に“＋α”があるからだ。

「ああ、それはな、急遽番外編をやる事にしたんだよ。この作品のコメントに説明しないといけない事があるからだ」

「成程……勉強になります」

サイタマの意外とわかりやすい説明にジェノスは何処から取り出したのか今の説明をノートにメモした。この様子をサイタマは（メモる部分あったか……？）という目で見ていた。

「そのコメントとは？」

「確か……サイタマが弱過ぎるな 神だろうが鬼だろうが一撃で消し飛ばせるのに」※色々と言われると不味いのでコメント書いた人の名前は言いません。というコメントが……ジェノス？」

サイタマが説明してる途中、ジエノスを伺う。何だか様子がおかしい。

「先生、そのコメントを書いた奴を排除してよろしいでしょうか」

「絶対に辞めて。俺が恥かくから」

ジエノスはサイタマを弱い扱ったユーザーが許せないらしく排除しようというのだ。こんな行動をとられてはこの作品が終わりかねないからだ（とはいえ評価は半分以下だが）。

「わかりました。……命拾いしたな」

「誰に向かって言ってるんだ」

ジエノスは何も無い場所に向かって言い放った。多分だがそのコメントを書いた人に向かってだろう。※本当にごめんなさい。

「ま、とりあえず詳しい説明は紫にまかせるわ」

「わかりました。説明が終われば本編に入る事ですね」

「うん。じゃあ…解散！」

後の説明は紫（※八雲紫）にまかせてその場を去った。

「じゃあ説明するわね」

サイタマとジエノスがなくなったを確認して隙間から紫が現れ説明を始めた。

現状について

1. まずサイタマに勝てる者はいない。これ本当。
2. 確かに本来サイタマなら八坂神奈子や星熊勇儀も消し飛ばせるがその後の展開が面倒になるため、あえて消し飛ばさないようにした。ちなみに風見幽香や聖白蓮とかも。

3. 他に幻想郷に住む人がいる。らしい※詳しくは活動報告を

4. 幻想郷にいた時の記憶を消した時は外の世界に帰れるが二度と幻想郷には行けなくなる。ただし、記憶自体はとつとつといてあり、外の世界の博麗神社に行つて紫に頼んで記憶を戻してもらえばまた行く事が可能。ちなみに記憶を消さなくても外の世界に帰れる。ややこしいなオイ。

5. 元ヒーロー協会所属のヒーローは外の世界にいた頃より強くなっている。マジだよ（ ??? ）

6. ちなみにこの小説ではオリジナルキャラとかも今後登場予定。のはず。

7. カミカゼの様に過去に幻想郷に来て苦い思いをしてるしてる場合は紫が記憶を消す事がある。この場合は外の世界に帰ってもまた行ける。

「こんなところかしら。じゃあ本編どうぞ！キャハ☆」

紫はウインクをして隙間に戻っていった。今のでイラッとした人は震える拳を何かにぶつけて忘れましょう（???）

「記憶を消された…？紫にか？」

「そうだ」

サイタマは首を傾げた。心の中では（え？紫ってそんな事できたっけ？あ…：そういえば俺とゾンビマンは記憶を消して帰ったんだっただな）と思った。実はある異変の解決後、紫に”幻想郷に留まるか 記憶消して外の世界に戻るか”の選択された事があつ

た。サイタマはこの幻想郷に住めことにしたと答え今にいたる。ちなみにジェノスは先に帰った為この事は言われなかった（のちにサイタマに言われわかった）。

「ま、簡単に言うると幻想郷に入って数分後の出来事だからな。アイツが教えてくれるまで気づかなかったな」

カミカゼ曰く幻想郷入りしてから数分後の出来事で本人も気付かぬうちに記憶を消されていたとの事。まあ過去に勇儀に大敗した過去があるからカミカゼにとってはちようどいいのかもしれない。

「という事は…誰もオツサンの事を覚えてないって事か」
「そうなるな」

幻想郷にいた時の記憶を消されれば住人達も忘れる。すなわち初めて幻想入りした時と同じになるのだ。

「で、オツサン、これからどうすんだ？」

「俺はこの後シルバーファンク（※バング）の所に行く。お前らはお前らで頑張りな」
「そうか」

カミカゼはそう言つてバングのいる道場に向かった。残されたサイタマと駆動騎士は

「サイタマ君、モタモタしている暇はない。一刻も早く原因を探ろう」

「そうだな」

サイタマと駆動騎士は山を出て再び異変の元凶なるものを探しにいった。

一方霊夢と魔理沙は魔法の森にいた。

「頼りになるぜー！」

「ふふ、魔理沙の為ならね」

魔理沙はある人物(?)と話していた。見た目は少女で三つ編みをしていて頭に管笠を被っている。服装ら石をイメージしているのか灰色のコートで首には赤のスカーフをしている。矢田寺成美という魔法使いだ。元々はお地藏様だったが森の魔力で生命が宿ったという。ちなみに季節外れの雪に悩まされていたが調査する気はなかった模様。

「しっかし驚いたな、大人しいお前が好戦的になってるなんて」

「気づいたらこうなってたんですよ。なんか力湧くし」

元々彼女は引っ込み思案で大人しいのだが異変の影響なのか好戦的になっていた。だが魔理沙に負けて元に戻った。

「後の事は宜しくお願ひします。この雪に結構悩まされていたので」

「おう！わかった！」

成美の願いを聞いて、魔理沙は箒に跨り森からでた。霊夢を後を追う。

「魔理沙ならなんとかしてくそうだけど…あのヒーローの方が早いかもです。」

成美はクスツと笑い、帰って行った。

百八十二撃目：世にも奇妙なバックダンサーズ

「先生、あのバカを排除しに行ってください。」

「絶対にやめろ」

本編GO！

異常気象の原因を探るサイタマと駆動騎士。2人の目に入ったのはなにやら激しく踊る2人組だった。

「なんだあれ」

「迂闊に近づかない方がいいな」

2人はその茂みに身を隠して様子を見ることにした。

「さて、僕達の目的を果たすのでしょうか」

笹色のドレスの様な服を着ている少女が言う。丁礼田舞だ。

「だね、手探り次第あの方からもらった能力で仲間を増やそうぞー！」

紅色のドレスの様な服を着ている少女が言う。爾子田里乃である。

「しかしその前にヒーローと名乗る者達を消すのでしょうか」

「そうだね、彼らは僕達の目的を邪魔する者に過ぎない」

里乃と舞は言う。今回の目的を果たすのにヒーローは邪魔な存在らしい。それを聞いたサイタマと駆動騎士は

「え？何？俺らを消す？」

「そうらしいな。もしかすると異変の元凶なのかもしれないな」

「もしそれが本当なら俺らがぶっ飛ばせばいいんじゃない？」

「そうしよう」

自分達を消すとわかったとすれば手っ取り早く倒す必要がある。もし彼女たちが異変の元凶だとすれば異変解決完了だ。

「よし…行くか！」

「ああ……！」

サイタマは普段は見せない凛々しい顔で茂みから姿を現した。駆動騎士も。

「誰だ！」

里乃と舞は気づいた。いや普通気づくか。

「お前らか？この異常気象つてやつを起こしたのは」

サイタマは問いただす。それに

「さあね、でも真相を知りたいのならば：僕達を倒すがいい！」

「その通り！息のあつた私達に勝てると思わないでね！」

2人は自信ありありだ。

「僕は丁礼田舞！秘神摩多羅隱岐奈様の部下である！そして！」

「私は爾子田里乃！舞と同じく摩多羅隱岐奈様の部下である！」

「そう！2人合わせて：クレイジーバックダンサーズ！」

まさに息のあつた紹介だ。実際クレイジーバックダンサーズはテーマ曲なんだけど
ね（笑）

「だせえチーム名だな」

「なんて？」

「なんでもない」

サイタマは思わず本音を漏らしたが目を逸らして無かつたことにした。

「君達に聞く。さつき」摩多羅隱岐奈」と言ったな。一体誰なんだ？」
駆動騎士が聞く。

「隱岐奈様の事か！あの方は僕達の主人様であり！幻想郷創った賢者の一人であるのだ！」

「更に！幻想郷を外の世界から守り！生命力やら精神力をコントロールしてこの世界のバランスを保っておられる方なのだ！」

「またもや息のあったコンピネーションで摩多羅隱岐奈を紹介する。」

「そうか……ん？賢者といえは八雲紫がいるが……奴とは関係あるのか？」

「そこまでは知らないな、だけでも隱岐奈様とは知り合いだとは聞いている」

舞は隱岐奈と紫は知り合いである事では知らないという。

「舞！さつきとこのヒーロー達をやっつけようよ！隱岐奈様の計画に邪魔が入る可能性があるからさ！」

「それもそうだね。特にサイタマ、君は非常に厄介な存在だ。いくら隱岐奈様であつても最強」といわれる君も脅威だからね。」

「お？ご使用かな」

舞の発した言葉にサイタマは反応する。

「隱岐奈様だかなんだか知らないがお前らを倒せばそいつが出てくんのか？」

「そうさ。けど僕達を倒すのは本気かい？」

「いくら自分が強いからって私達には叶いやしませんよ！」

「んなもんやってみねえとわかんねえだろ」

サイタマは指を鳴らしながら言う。余程自信のある彼女たちに期待しているからだ。

「サイタマ君、ここは俺と組まないか？相手が2人ならこちらも協力して挑もうじゃないか」

「それもそうだな。俺はそういうの苦手だがやっている価値はあるな」

駆動騎士の提案にサイタマは乗った。

「見せてあげようか僕達のコンビネーションを！里乃！」

「勿論よ！舞！」

2人はポーズを決めて構える。

「手っ取り早く終わらせてしまおうか」

「ああ、時間も時間だからな」

サイタマと駆動騎士も戦闘態勢にはいる（※サイタマはゆるーく構えただけだが）。

こうしてクレイジーバックダンサーズvsヒーロー組の勝負が始まった。

一方…その頃

「何処に行けばええんじやこらあ！」

「霊夢落ち着け！」

異変探しに四苦八苦している霊夢と魔理沙。霊夢はもう当てずっぽうだった。それを魔理沙が止める。そこへ

「おいお前ら」

「ああ？」

霊夢と魔理沙の前に侍が現れた。カミカゼだ。

「えつと…誰？」

「俺はカミカゼっていう侍だ。シルバーファングの道場は何処にあるか知らないか？」
「シルバーファング…？ああ！あの爺さんか！それなら…あっちの方にあるぜ」

「そうか、ありがとな」

カミカゼはバングの道場を聞いてきた。それに魔理沙が対応した。カミカゼが行こうとした時、

「私からの話を聞いてくれ」

「なんだ？」

「カミカゼ、異変についてなんか知らないか？」

「異変？知らねえな。俺はついさっきここに来たばかりだから」

「そうか」

魔理沙はカミカゼに聞こうとしたがカミカゼは知らないと言い、この場を去った。

「手がかり無しか…霊夢行くぞ」

「OK」

振り出しに戻った感半端ないって！と思うが2人の異変探しは続く…

百八十三撃目：ヒーローとバツクダンサーズと新聞記者

「サイタマ君、君に言っておきたい事がある。」

「え？ 何急に」

「俺は君と同じヒーロー協会所属のヒーローではない。だから駆動騎士とは呼ばないでくれ」

「なんでだよ、駆動騎士って名前格好いいじゃねえかよ。俺なんてハゲマントだぞ？」

「違う、そういう問題じゃない」

「駆動騎士はいきなり「この名前で呼ぶな」と言った事に驚きつつ、自分に付けられたヒーロー名に愚痴る。：確かにサイタマに関しては見た目だけで命名されたから仕方がない。」

「じゃあ何て呼べばいいんだよ」

「俺の本名はゼロだ。そう呼んでくれればいい」

「そっちの方が覚えやすくいいわ。宜しくな、ゼロ」

「…」

サイタマはゼロと握手する。何故か。そして

「それとサイタマ君、君は何故俺の名を知ってたんだ？君とは面識がなかったはずだが？」

「そ…それは」

ゼロの質問にサイタマは言葉が詰まる。言われてみればサイタマはゼロとは全くと言っていい程面識がない。更にサイタマは基本的に人の名前を覚えてる事はほとんどなく、大体は見た目で渾名をつけてる事が多い（なお、一度で名前を憶えたのはジェノスやフブキくらい）。にもかかわらず、駆動騎士の名を言えた事には違和感がある。

「まあ…可能性があるとすればジェノス君に教えてもらったって所かな？」

「…そ、そうだ！ジェノスが教えてくれたんだよ！俺に対してもっと覚えた方が良かったな！」

サイタマはてんぱりながらも言う。しかも汗だけで。すると

「いつまで私（僕）達を無視してるの!？」

サイタマとゼロの会話に痺れを切らした爾子田里乃と丁礼田舞は怒る。

「あれ？まだ居たんだ」

「「いるわ！てか私（僕）らを無視して会話してんじゃねーよ!!」」

「あ、忘れてた。すまんすまん」

サイタマは里乃と舞をそっちのけてた事を謝る。

「つまり話の早い所、お前らを倒せば異変の原因となるボスが出てくる奴?」

「それはどうかな? まあ、君達が僕らに勝てると思わないほうが…フゴ!!」

「舞!?!」

舞の体に重い衝撃が走る。サイタマが殴ったからである。舞は結構飛ばされた。

「勝手に決めんなよ。やってみねーとわかんねえだろ?」

「サイタマ君、せめて人の話は最後まで聞いた方がいいぞ…」

サイタマの突拍子もない行動にゼロは呆れる。と、その時烏天狗が現れた。

「あれ? サイタマさん?」

「あ! 誰だっけ?」

「ズコー! 射名丸文ですよ! 前も言いましたよね!?!」

ご存じ、新聞記者の射名丸文である。しかしサイタマから名前を忘れられてたので空

中ですっこける。

「そうだったけ? てかなんで居るの?」

「四季異変の原因を探ってた所です!!」

「あつそ」

「興味なし!?!」

文は今回の異変の原因を探ってた所だった。だがサイタマに素っ気なく返されたの

でシヨックを受ける。

「いや、サイタマさんも異変の原因探ってたんですよね!？」

「あーそうだったな。ゼロもそうだったけ？」

「俺もそうだ。サイタマ君と協力して異変を探ってた所だ。」

「おお……じゃあ3人で解決しましょう！」

「そうだな、多ければ多い程解決に近づくからな」

「多ければ良いってものじゃないぞ」

文の提案にサイタマの納得する。ゼロがサイタマの考えにツッコむ。

「痛てて……流石に強いな、君のパンチは」

「舞！」

サイタマに吹っ飛ばされた舞が帰ってきた。結構ダメージを受けてた。

「やはり彼は強いな、もしかしたら僕らでも叶わないかもしれない……」

「弱気にならないでよ舞！私達ならヒーローにも勝てるよ!!」

「そうだったな、でも体勢を立て直してからだ」

「そうだね！じゃ、また！」

「おい！逃げる気か!？」

里乃と舞が場を離れそうだったのでサイタマが叫ぶ。

「逃げるんじゃないわよ！万全な状態にするだけ！特に舞は！」

「僕を強調して言う事か!?…まあ良い。次は不意打ちなんてさせないからな！」

「負け惜しみ？」

「違うわ!!」

里乃と舞をその場から去った。

「おい、消えたぞ彼奴ら」

「振り出しに戻った所か…」

「で、でも探れば分かると思いますよ!?!」

「いや当てずっぽうに探しては意味がない」

「た…確かに」

サイタマ、ゼロ、文は考える。そこに予想外の人物がやって来た。

「あのーよければ私が協力しましょうか？」

一方、霊夢達は

「どうすりやいいんじやあああああああああ
!!!」

「落ち着け霊夢」

叫ぶ霊夢に魔理沙はツッコむ。

「今回こそはサイタマより異変を解決すんのよ！」

「でも霊夢、お前そこまで異常気象の事気にしてないだろ？」

「…」

「え？凶星？」

「…」

「本当なんかいい」

実は霊夢、異常気象の事はあまり気にしておらず、単にサイタマより異変を解決する事が目的だったようだ。すると魔理沙が何かに気づいた。

「あれ？あれは成美か？」

「え？さっきのお地藏様？」

魔理沙が矢田寺成美に気づいた。どこかに向かっているようだ。

「もしかしたら…へへへ解決の手口になるかも！」

「霊夢…顔が悪いぞ」

霊夢の悪顔に魔理沙は引く。

「そうとなればあいつの後を付けるわよ！」

「おい霊夢待ってくれ！」

霊夢と魔理沙は成美の後を追いかけた。